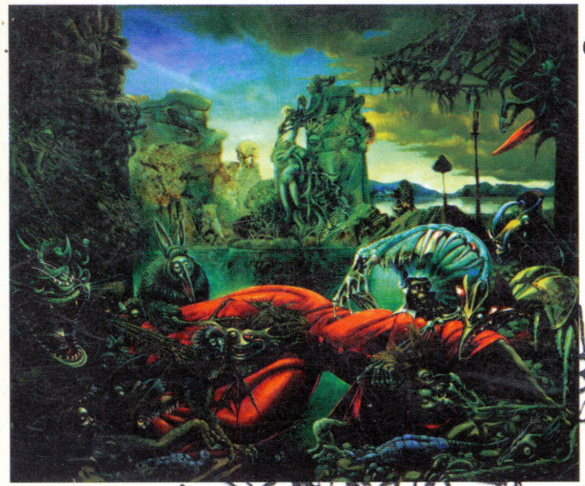
怪獣文学大全

東 雅夫 編



河出文庫

ひ 5-1
東 雅夫 編
怪獣文学大全
河出文庫

¥950

怪獣文学大全

東 雅夫 編

ひ
5-1

東 雅夫 編

怪獣文学大全

河出文庫

¥950

河出文庫 今月の新刊

大怪獣総登場、夢の饗宴!!

ゴジラ、モスラ、マタンゴ……人間の想像力が結晶した未知の生物、異形の王者たち!!

定価998円 本体950円

ISBN4-309-40545-2

C0193 ¥950E

9784309405452

1920193009507

定価 本体950円（税別）

大人から子供まで、多くの人々を熱狂させる未知の生物!!
純文学の世界をはじめ、スラプスティック・コメディ、批評エッセイなど、あらゆる分野に登場するとびきりの《怪獣》たちを集大成した、空前絶後の大アンソロジー。
寓話、メルヘン、SF、ホラー……破壊の恐怖をひき起こしながらも、どこか懐かしく、愛らしい異形の者たち。

本書収録の作家一覧

武田泰淳　福島正実　香山　滋
中村真一郎　橋本　治　光瀬　龍
福永武彦　大槻ケンヂ　小松左京
堀田善衞　花田清輝　井上雅彦
W・H・ホジスン　中沢新一

フクロウは、ギリシアの女神アテネ、ローマの女神ミネルヴァの象徴として用いられる鳥です。アテネ、ミネルヴァともに知恵と芸術をつかさどる女神です。

怪獣文学大全

花田清輝　一九〇九～一九七四。『復興期の精神』『鳥獣戯話』
香山　滋　一九〇九～一九七五。『海鰻荘奇談』『妖蝶記』等。
光瀬　龍　一九二八年生。『百億の昼と千億の夜』『喪われた都』
小松左京　一九三一年生。『復活の日』『日本沈没』等。
井上雅彦　一九六〇年生。『異形博覧会』『1001秒の恐怖』
中沢新一　一九五〇年生。『チベットのモーツァルト』『森の
東　雅夫　一九五八年生。『クトゥルー神話事典』『日本幻想

武田泰淳　一九一二～一九七六。『司馬遷』『ひかりごけ』等。
中村真一郎　一九一八～一九九七。『四季』四部作『王朝物語』
福永武彦　一九一八～一九七九。『風土』『死の島』等。
堀田善衞　一九一八年生。『広場の孤独』『祖国喪失』等。
ウィリアム・ホープ・ホジスン　一八七七～一九一八。『異次
福島正実　一九二九～一九七六。『ちがう』『未踏の時代』等
橋本　治　一九四八年生。『桃尻娘』『桃尻語訳・枕草子』等
大槻ケンヂ　一九六六年生。『リンウッド・テラスの心霊フ

怪獣文学大全

東雅夫編

河出文庫

ひ
5-1

東雅夫編

怪獣文学大全

河出文庫

¥950

ISBN4-309-40545-2
C0193 ¥950E

9784309405452

1920193009507

定価 本体950円（税別）

大人から子供まで、多くの人々を熱狂させる未知の生物!!
純文学の世界をはじめ、スラップスティック・コメディ、批評エッセイなど、あらゆる分野に登場するとびきりの《怪獣》たちを集大成した、空前絶後の大アンソロジー。
寓話、メルヘン、SF、ホラー……破壊の恐怖をひき起こしながらも、どこか懐かしく、愛らしい異形の者たち。

kawaide bunko

河出書房新社

花田清輝　一九〇九～一九七四。『復興期の精神』『鳥獣戯話』等。
香山　滋　一九〇九～一九七五。『海鰻荘奇談』『妖蝶記』等。
光瀬　龍　一九二八年生。『百億の昼と千億の夜』『喪われた都市の記録』等。
小松左京　一九三一年生。『復活の日』『日本沈没』等。
井上雅彦　一九六〇年生。『異形博覧会』『1001秒の恐怖映画』等。
中沢新一　一九五〇年生。『チベットのモーツァルト』『森のバロック』等。
東　雅夫　一九五八年生。『クトゥルー神話事典』『日本幻想作家名鑑』等。

武田泰淳　一九一二～一九七六。『司馬遷』『ひかりごけ』等。
中村真一郎　一九一八～一九九七。『四季』四部作『王朝物語』等。
福永武彦　一九一八～一九七九。『風土』『死の島』等。
堀田善衛　一九一八年生。『広場の孤独』『祖国喪失』等。
ウィリアム・ホープ・ホジスン　一八七七～一九一八。『異次元を覗く家』等。
福島正実　一九二九～一九七六。『ちがう』『未踏の時代』等。
橋本　治　一九四八年生。『桃尻娘』『桃尻語訳・枕草子』等。
大槻ケンヂ　一九六六年生。『リンウッド・テラスの心霊フィルム』等。

カバー写真　Max Ernst
Tentation de Saint-Antoine (1945)
©ADAGP, Paris & SPDA, Tokyo, 1998
カバー装幀　村上光延　　フォーマット　粟津　潔

河出文庫

怪獣文学大全

東 雅夫編

河出書房新社

怪獣文学大全

東 雅夫編

河出文庫

kawade bunko

河出文庫

怪獣文学大全

東　雅夫 編

kawade bunko

河出書房新社

怪獣文学大全　目次

「ゴジラ」の来る夜　武田泰淳　9
発光妖精とモスラ　中村真一郎・福永武彦・堀田善衞　62
闇の声　W・H・ホジスン（大門一男訳）　108
マタンゴ　福島正実　128
マタンゴを喰ったな　橋本治　175
更にマタンゴを喰ったな　橋本治　182
マタンゴ　大槻ケンヂ　188
科学小説　花田清輝　190
ガブラ――海は狂っている　香山滋　204

マグラ！　光瀬龍　231
日本漂流　小松左京　294
レッドキングの復讐　井上雅彦　309
ゴジラの来迎　もうひとつの科学史　中沢新一　319
巻末エッセイ　思い出の「マグラ！」　光瀬龍　343
収録作品解説　東雅夫　346

怪獣文学大全

「ゴジラ」の来る夜

武田泰淳

アレがやってくるまでの一週間、われわれ日本経済の中枢部に位置する大実業家が、目のまわるほど、いそがしかったのは言うまでもない。

どんな多忙でも、へたばらないのが我々の通有性であるが、我々とちがって、ろくな金も儲けられない連中までが、めいめいの多忙に、不平を言おうとはしなかったのだ。

その多忙たるや、たんにアレがやってくるがために発生した、無意味ないそがしさにすぎないのだ。だから、常ひごろ不平不満でふくれあがっている、あれらの金に縁のない国民が、なぜ自分たちの無意味ないそがしさに、あれほど熱中していられたか、不思議なのである。「恐怖」の効果たるや、まことに怖るべきものがある。などと書けば、テレビ俳優の得意な、ゴロ合せのようにきこえるだろう。

ゴジラを目撃したはずの、国民も少しはいたはずだ。しかし彼らは、ゴジラを目にしたあ

と、残らず死滅してしまっていた。したがって、現に生きている者のうち、誰一人、ゴジラの正体を見とどけた者はないのである。

目に見えない「恐怖」は、東京湾に上陸しない前から、目に見えない巨大な四足（あるいは数百本の脚）で、われわれのあいだを歩きまわっていた。

ゴジラブームがふくれあがるにつれ、かつてウォール街を襲った、あの大恐慌より、数十倍もひどいパニックで、株は暴落をはじめた。どこに上陸するか、その地点に指定された国の経済界は、いずれも、みじめなことになった。どこと「指定」することは、自由にできるのであるから、今日は、あの国、明日はその反対側の国が、指定をされた。

ゴジラの気持は、神さまのほかには推察できないのであるから、あらかじめ、どこの国の海岸へなどと予定するのは、もちろん、ばかげたことであった。

しかし「ここへは絶対に上陸しない」と、断言したところで、その保証はどこにもないのであるから、パニックは、資本主義、社会主義のいずれの国家を問わず、起りうる可能性があった。また、事実、次々と、まんべんなく、どこの国にも起ったのである。

自分以外の国、どこか他の国土へ、ゴジラが早いところ上陸してくれればいい、というのが、各国の首脳部の切なる願いであった。また、そうさせようと、あらゆる戦術がもちいられていた。そうさせようと、試みたとはいうものの、どこの深海にもぐっているのか、どこの砂漠のはずれに隠れているのか、所在さえつかめない「怪獣」を、誘導したり、逐いはら

ったりできるわけのものではない。

どこの国の映画製作者も、もはや一昔まえにはやったようなゴジラ映画は、つくらなくなっていた。あの天下泰平の時代には、スクリーンで逃げまどう群集は、たいがい、その映画のつくられた国の国民であった。ところが、ここ半年のあいだに、各国の映画陣が競って売り出したフィルムは、自分以外の国を舞台にし、自分以外の国民の、逃げまどう光景ばかりであった。

その慎重で、あくどい神経戦術が、かえって逆効果をおよぼした。と言うのは、「それほどまでお偉方が神経をつかっているからには、どこに上陸するか、先のメドはつかないにせよ、ゴジラがどこかへ上陸することは、やっぱり、まちがいがなさそうだゾ」と、誰でもが信じはじめたからだ。

ゴジラ恐慌を防ぎとめるために、「ゴジラ如きモノは存在しない」と、宣伝し教化することは、各国の政府にとって、まずい方策となった。「存在しない」と説教されれば、ますます「存在するゾ」と、思いこみたがるのが、人情だからである。

それよりも、むしろ「ゴジラは動きつつある。その身長、体重、性格、能力はかくかくである」と、ほかの国にさきがけて、くわしい「情報」を発表した方が、その国の科学力を、世界に知らせる役に立ちそうであった。そうやって、自分の国の科学力のすばらしさを、自国民にも外国人にも、よくよく心得させておけば、その国の情報局の発表や予言は、正確無

比なものであると、世界じゅうの人々に、思いこませることができるわけだ。そうしておけば、「あそこの国に上陸することは、疑うべくもありません」という、自信たっぷりな声明によって、ねらった相手国をちぢみあがらせることが、可能になる。事態がこうなると、宣伝の下手な、科学力に自信がない国は、いつ「ゴジラ」を上陸させられるか、知れたものではない。

こういう奇怪な「上陸作戦」の、どす黒い渦の中で、日本国が、はたしてうまく立ちまわったか、どうか。

ゴジラ情報を製作し提供するのは、政治家やジャーナリストの役わりで、われら経済人はひたすら、息をひそめて「日本がゴジラに好かれている」という、うわさのひろまらぬよう願っていた。

ゴジラの視覚、あるいは嗅覚、また食慾や破壊慾が、とくにアメリカ人とか、ポーランド人とか、日本人を好むということは、あり得ないはずだった。

西欧側では、

「ゴジラはもともと、アジア的混沌から生れたものであるから、未開のアジア、熱帯あるいは温帯のアジアをなつかしがるであろう」

という、ニュースを流していた。

アジア諸国では、もっぱら、

「この前代未聞の怪獣は肉食獣であるから、肉食を愛好する人種に、親しみを感ずるにちがいない。ことに、怪獣の皮膚が青黒いものと仮定すれば、自分とは、反対色である白色の生物に、興味をひかれたり、憎しみを感じたり、また奇妙な倒錯的な愛着をいだくにちがいない。彼は、原始的な性向の所有者であるはずだから、自分とは異質な、文明の匂いに、いらだったり、興奮したりして、そっちの方へ近寄って行くであろう」

と、主張していた。

両方が大量に醱酵させたり、流布させたりしている、ニュースと主張を、総合してみると、「もしかしたら、日本ではあるまいか」という不安が、早くから、私の胸中に芽ばえずにはいなかった。

日本こそ、アジア的でもあり、ヨーロッパ的でもあり、原始と文明のゴチャまぜ状態の国であったからだ。

それにしても、経済団体連合会の副会長たる私が、ゴジラ特攻隊の隊長に、こんなに早くえらばれようとは、予想してもいなかったのである。

警視総監の来訪をうけたとき、彼のただごとならぬ顔つきで、私は、社長室の椅子をきしませて、起ち上った。

ゴジラ関係だナと、すばやく私は見てとった。

「ゴの字ですね」

「そうです」

警視総監は、沈痛なおももちで言った。

彼は、うつむきかげんに、椅子に腰をおろす前に、まぶしそうに花山嬢の方を見やった。社長室に入った客は、きまって、あまりにもなまめかしいミス花山（私の秘書）の方を、そんな目つきで、チラリと見ないではいられないのだ。

「では、極秘の用件ですな」

「そうです」

「それじゃ、花山君、だれもここへ入れないようにして。それから君も、しばらく遠慮して下さい」

「ハイ。承知いたしました」

タイトスカート、ナイロン靴下、靴下どめ、海水着、コルセット、Gストリング、ハイヒールなど。女の肉をしめつける服装を発明した先覚者に、祝福あれ。

タイトスカートの彼女が胸をかがめて、一礼し、脚と脚をこすりあわせて歩み去る姿を、私はいつもながらの、ほれぼれとした感嘆の念をもって、見送った。

「あなたが、おいでになったのでは、経済総動員計画の方の、お話じゃありませんね。大蔵省や、通産省や、運輸省の連中とは、毎にち毎ばん、うんざりするほど会ってますからね」

「経済界のゴジラ対策で、お骨折をねがって、おいそがしいことは、よく承知していますが、

今日は、あなたの専門外のことで、どうしても引受けていただきたいことがあって……」
「おっかない話ですか」
「まあ、そうでしょう」
私が、十代で有名になったのは、上海（シャンハイ）の工場で、二千人の職工が暴動を起したさい、ワンワンする中へ一人で入って行き、騒ぎを取りしずめたおかげだ。それいらい、ストライキでも、工場占拠でも、デモの乱闘でも、殺気だった現場には、いつも派遣され、弾圧屋のあだ名まで、つけられている。
「はてな。ゴジラに関するかぎり、今のところ組合の指導者も、ぼくら資本家に協力してくれていますし、不穏の形勢は、どこにも見えないんだが」
「いや、いや」
と、総監は、あわてて手をふった。
「ゴジラ様のおかげで、不穏分子の取りしまりは、すっかりらくになっています。その方は、大いにありがたいんですが、問題は、ゴジラそのものなんです」
「ゴジラそのもの？　しかし、ゴジラを弾圧するのは、いくらぼくでも」
「いや、弾圧は、できるものではありません。そんな相手では、ありませんからね。弾圧されるのは、ゴジラではなくて、我々なんです」
「まあ、そうなるかも知れない。しかし、あなた方までが、そう弱気じゃ、困るじゃありま

せんか」

「そうです、そこで、特攻隊を組織することに決めたんです」

「特攻隊って、あんまり悲壮なのは、ぼくは好きませんな」

「そう、そう。悲壮な特攻隊などは、時代おくれです。地雷を抱いて戦車の下にとびこむ、勇気。そんなものでは、ゴジラに刃向えない。また剛勇無双の大力とか、射撃の名人、戦術のうまい参謀、そんなものも無意味です。何より必要なのは、物に動じない人物、いかなる事態が発生しても、沈着に事に処せる頭脳なんです」

「さあね。ぼくなんかも、おちつきはらって腰をぬかす方じゃないかな」

「いや、いや。今までの御経歴から言って、あなたこそ最適任の人物なんです」

ゴジラの襲来は、空襲とはちがうから、どこにいれば安全と、きまった地点はないはずだった。それに、いざ上陸したとなったら、大東京のみならず全国の経済の動脈も神経も、いっせいにストップするのは、わかり切っていた。そうなったら、社長も会長も、あったものではないのだ。万が一、生きのこったとすれば、最前戦で、とっぱなにゴジラの実物にお目にかかっていた方が、有利だった。都内各所の、堅固な高層ビルの一室に、「特攻隊」は、それぞれ第一班、第二班といった具合に、配置されるという話だった。

「特攻隊は、女ッ気ぬきですか」

「いえ、いえ、とんでもない。その点はこちらも、充分に配慮します」

こんな質問を私がしたのには、理由があった。

私は、小学生のときから「人身御供」の話が、大好きだった。怪獣に要求されて、美しい女を、さしあげる物語だ。岩見重太郎の「ヒヒ退治」、スサノオノミコトと八岐の大蛇の武勇談。それにアメリカでは、キング・コング。いずれも、肌もあらわな女性の肉体を、縛ったり、とじこめたりして、怪獣の好きなようにさせる。結局は、犯される寸前に英雄が助けてくれるのだが、私に快感をおぼえさせるのは、縛られた女の、悲鳴、カッと見ひらかれた両眼、ねじあげられた腕や脚、つまり身もだえであった。インディアンの根拠地に連行された白人の女、アフリカの魔術師の掌中におち入った女探検家など、おなじ趣向である。キリシタンの殉教悲劇だって、若い女が十字架にくくりつけられるから、スリルがあるので、あれが爺さん婆さんの逮捕や処刑だけだったら、おもしろくも、おかしくもない。

ゴジラは、大蛇やヒヒよりも、はるかに巨大で機械のような動きをするであろうが、現在の常識では、メスオスの区別のある「けだもの」の一種ということに、なっている。無機物ではない。また、単殖細胞でもない。いちおう、怒ったり喜んだりする「怪物」と、予想されている。

ゴジラにとって、人間の女性はあまりに小さすぎるから、彼がこれに「性慾」を感ずることはまずあるまい。しかし、われら人間の男どもにとって、「ゴジラ」の来る夜の女体ほど、なまめかしく、魅惑的なものはないであろう。

「この女性は、いかがですか」
総監は、一葉の写真を私にわたした。
それは、かずかずのゴジラ映画で有名になった、一女優の写真だった。
「ふうん、これだったら、専門家だから、もってこいではあるだろうが。しかし、恐がるのが専門の恐怖女優が、ホンモノの恐怖の突角陣地に泊りこみを志願するかな」
「実は、この光光子（ひかりみつこ）と申す映画俳優は、現在、ゴジラノイローゼで、精神病院に入院中なのです」
「精神病院？　それじゃ、だめじゃないか、気ちがいじゃア」
「いや、まだ、精神病者と確定したわけではありません。あまりムリに恐がって、その過労のため、ドック入りをしただけです。光さんにしてみれば、今まで急に、ゴジラで有名になり、ゴジラで大もうけしたところへ、ゴジラ上陸説がだんだん猛烈になってきたので、それだけでもショックをうける。もしも、ゴジラに情報網があり、スパイ組織があるとすれば、光光子こそ、かつての東京ローズのような『もっとも悪質なお人形』として、ねらわれていることになります」
「ゴジラに、人間なみの愛憎の念があればね」
「そうです。東大のM博士の御話によれば、ゴジラは無機的な有機物、有機的な無機物ということです。しかし、そんなわかったような、わからないような学説は、一ぱん民衆にとっ

ては、どうでもいいことで、国民にとっては、ゴジラはあくまで『怪獣』でなければならんのです。国民がそうと決定したら、そうなるのが、民主主義国のモットーなのです」

「映画会社が、宣伝に使おうとしてるのと、ちがうかな」

「それもあるでしょうが、本人の希望ですし、院長も逆療法で効くかもしれないと、賛成してるそうですから」

そんな調子で、内定している第一班のメンバーは、次の如くだった。

ゴジラ側に内通したり、寝がえりを打つ人間がいるはずはないが、それでも人選は、思想健全、班の任務に役立つ者、組合せの妙など、なかなか苦心してあった。最上の待遇をあたえると言ったところで、この危険な任務につきたがる志願者が、こうまで殺到しているとは、いかなる心理によるものであろうか。

大鞭聖人。五十歳。

これは、宗教家。戦闘的な新興宗教の教祖だ。

「わしはかならず、ゴジラを教化してみせる」と、かねがね豪語していたから、教徒百万の衆望をになって、出馬したのか。それとも、大鞭の日ごろの傲慢をにくむ反対派が、わざとかつぎ出して、一敗地にまみれさせようとしたのか。なにしろ、武力で対抗できない相手であるから、こうした心臓男の、あるのか無いのか不明な、精神力を動員したくなるのであろう。

熊沢大五郎。二十七歳。

これは、天才的な脱獄囚である。彼が脱獄できない刑務所は、日本に存在しないそうである。熊沢大五郎とは、名前もすさまじいし、牢破りのために生れてきたような男ときいて、胸毛の濃い、鬼の如き兇悪漢を想像したが、これが案外、貴公子風の美青年であった。彼ならゴジラの鉄壁をも、ことによったら乗りこえるかも知れないと、その才能を買われたのであろう。

もう一人、ずばぬけてタフな男。

その男の名をきかされたとき、さすがの私もうんざりした。だが、資本家の代表者として私をえらんだとすれば、同じ班員として、労働者側の代表も選定するのが、公平だったにちがいない。河下委員長といえば、これまで何回となく歯をむき出して激突した、敵側の総大将である。いよいよ、人類を抹殺しようとするゴジラが出現する瞬間に、兄弟よりも戦友よりも密接な、運命を彼と共にするのは、これまた一興かも知れなかった。

「で、どうなんですか。河下君は、ぼくといっしょでも、さしつかえないんですか」

「河下さんも、のぞむところだと、張切っていますから」

「けっこうです。いずれも、ひとくせあるメンバーだから、楽しみだ。そのほかには？」

「それは、籠城していただく当日までに決定します」

かつて、帝国大学の建築学科の卒業論文に「廃墟」という題が、あったそうだ。のちに有名な詩人になった学生であるから、建物を立てる学科のくせに、そんな皮肉な題目をえらんだのである。

だが、人気（ひとけ）のない深夜の大都会を眺めていると、その学生の気持もわからないことはない。ことに、一千万の大人口のほとんどすべてが、退避してしまったあとの東京都は、破壊される前に、すでに「廃墟」なのだ。

十五年ばかり前、私は一兵卒として、中国大陸に侵入した。はてしもない農耕地をよこ切って、進軍をつづけ、やがて一つの町につく。疲れ切って、城門をくぐると、住民は誰もいない。城壁も、家々の土塀や石壁も、石だたみも、そっくりそのまま残っているが、人影も人声もない。ささやかな農村でも、住民の逃げ去ったあとは、不思議な感じがするものだが、商業などさかんな町だと、無気味さは、ひとしおだ。

まして、東京駅にちかい国立病院の、十三階の一室から、見わたした街は、全く荒涼そのものであった。

防衛司令室は、都民の強制疎開を、命令しはしなかった。脱出するかふみとどまるかは、都民の自由意志にまかせてあった。

ゴジラにおびえたとあっては、末代までの恥辱だと、ムリをした男たちもいた。国会議事堂の地下室には、代議士たちが、首をあつめて、ちぢかまっているはずだった。次期の選挙

をひかえて、投票を失いたくないばっかりに、彼らはヤセがまんして、残留せねばならなくなった。郷土を守るためだと、逃げ口上をこしらえて、東京をはなれた代議士は、すぐ東京へ逐いかえされた。

ゴジラ献金は、大へんな額に達していたから、残留者は、自分のマネーは一文もつかわず、ぜいたくな暮しができそうだった。

献金は、国債を買うかたちで、行われた。総天然色の債券には、ゴジラを踏んづけたアマテラスオオミカミの姿が、印刷されてあった。

大鞭聖人の教団は、献金に於ても、おどろくべき成績をあげていたから、やがて、債券の図がらは、オオミカミから聖人そのひとに変るだろうなどと、うわさされていた。

予定された日、私は花山嬢の運転する、スポーツカーで、国立病院にでかけた。

正門前には、二組の壮行祝賀団体が、たむろして殺気だっていた。

一組は、言うまでもなく、大鞭をホンモノの聖人と信じこんでいる、教徒の青年行動隊であった。

もう一組は、河下委員長を見送る労組員、これも威せいのいい若者たちであった。

白はちまき、白だすきの聖人組は、ラッパ隊までかり出して「悪獣ゴジラ、なにものぞ」と軍歌調の合唱をやっていた。

赤旗をひるがえした労組側は、

「きけ万国の労働者。とどろきわたる反ゴジラ。反ファシストの歌声を」

と、白だすき組をにらみながら、歌っていた。

白はちまきが、

「赤色魔獣、おそるるな。来るなら来てみろ、アカトカゲ」

と、歌うと、もう一方はすぐさま、

「帝国主義の怪物は、やがてほどなく消えゆかん」

と、歌いかえしていた。

つんぼになりそうな大騒ぎを通りぬけて、内部へ入ると、そこは冷蔵庫か屍体置場のように、しずかで、ひんやりしていた。

もちろん、患者も医師も一人のこらず、よそへ移されていた。守衛も、エレヴェーター係もいない。最上階へのぼると、そこで、美しい白衣の看護婦がたった一人、出むかえてくれた。

それが、われらの班員、光光子嬢であった。

ほほえむばかりで、口かずの少い、マリリン・モンロー型の光子嬢が、包帯のまき方を知っているか否か、まことに疑わしいが、彼女は救護係という名目だった。

名目といえば、私の要求で班員に加えられた花山嬢は、通信連絡係ということになっていた。

そのため花山嬢は、ひとまず南極観測隊員そっくりの、アノラックにズボンの、男のような服装で入場したのである。

私も河下氏も、自動車競争の選手のように、革ジャンパーを着こんでいた。服装といい、かっぷくといい、この二人は、見わけがつかないほどよく似ていたので、お互いに顔見あわせて、苦笑したものである。

教祖さんは、スサノオノミコトを思わせる「神代服」を、身にまとっていた。三種の神器も、忘れなかった。すなわち、悪魔をてらす鏡を胸にさげ、クサナギの剣を腰につるし、右手には、ウラン鉱石でこしらえた玉をにぎっていた。

「さあ、みなさん。くつろいで下さい。来襲までには、まだ時間がありますし、三日間は、ここで寝起きしなくちゃ、なりませんから」

愛想よく隊員をねぎらう、隊長の私までがいささか、緊張していたのだから、到着した隊員たちが、こわばって居たのは申すまでもない。それにしても、これ以上、快適な第一線陣地は、いまだかつて無かったであろう。

地下室の倉庫まで降りないでも、最上階の食堂には、五百人ぶん、一週間の食料がつまっていた。どんな一流ホテルにも負けぬ、献立をも組むことができる。とび切り上等のビフテキも、これ以上はない葡萄酒やウィスキーも、とりそろえてあった。どんな異常な手術をした重病人でも、安らかに睡れるように考案された、大小さまざまの、型のちがうベッドを、

自由に使用することができた。

睡りたければ、死刑台を眼前にしても一分間で睡ってしまう薬。三日三晩たてつづけに女性とたわむれても、疲れをおぼえぬ薬。笑うための注射薬。泣くための塗りぐすり。何でも、あった。

さしあたっての仕事は、「待つこと」だけであった。

熊沢大五郎くんはなかなか現われなかった。

「これを保管してもらう、金庫はあるじゃろうか」

おもむろに、三種の神器を取りおろした教祖が、私にたずねた。

光さんが「まあ、きれい」と、マガ玉にさわろうとすると、大鞭は「シッ、シッ。さわることは許しませんぞ」と、逐いはらった。

「そんな大切なものを、こんな場所にもちこむのが、大体まちがってるよ」

と、委員長がひやかした。

「失礼をば、申上げるな。さがりおれ」

と、教祖が長い袖でふり向いたので、卓上の神剣は、もう少しで落っこちそうになった。

「宮中にも、三種の神器があるそうだけれどね。それと、これと、どっちがほんものなの」

「唯物論者には、精神の尊さがわからんから、話すだけムダじゃよ。卑しきやからに、尊いものごとが、理解できるはずないわい」

「とにかく、一致団結してもらわないと、困ります」

と、私は二人をなだめてやった。

「そこで、みなさんの御意見を、隊長として、いろいろ伺っておきたいのですが。まず、この場所はいかがですか。隊長としては、申しぶんのない根拠地であると、一おう満足しているわけですが」

「場所は、わるくないですよ。ただ、仲間が感心できないけど」と、河下さん。

「国立病院て、すばらしいわ。これなら、一生住んでいたくなった」と、光さん。

仕事熱心な花山嬢は、しきりに、最新式の無線電話器をいじったり、各所の電気やガスのスイッチをひねっていた。このインテリ女性は、めまぐるしく立ちはたらいていると、実に可愛らしく見える。坐って考えこんだりすると、年よりふけて見える。それを自分でも、よく知っているので、コマネズミのように、うごきまわるのが好きだ。その点、ぼんやりとして、身うごきの少い光嬢とは、正反対である。ミス花山は、硬い美人。ミス光は、やわらかい美人。この二種類の美女を、はべらすことのできた我らに、文句を言う余地があるだろうか。

しかるに、大鞭さんの意見は、おそろしく否定的であった。

「国立病院なんて、こんな役にもたたぬ、でかい設備が、わしはもともと気に入らんのじゃ」

と、彼は意地わるく言った。

「病は気から、と言われる。大切なのは『気』である。精神である。『気』をよくしなければ、たとえ鉄の心臓が発明されようが、出血しないメスが生れようが、病人は、いくらでも出てくる。こういう馬鹿大きい病院を、国民の税金で建てなくちゃならんという現実が、そもそも唯物論的な医学の行きづまりを、示しとるのじゃ」

彼は、女ふたりをおびやかすように、自まんの腕をのばし、神秘の「掌」をひろげた。両肩をすくめ、腰をうしろにつき出し、眼をカッと見ひらいて、首をさしのばした。

「マア、そうやると、ゴジラみたい」

と、ミス光が叫んだのも、もっともであった。

「ハッハア。全く、そうだよ。結局、ゴジラなんて、大鞭さんみたいな存在なんだ」

と、委員長が、光さんのそばへ寄って、親しそうに肩を叩いた。

「今にわかる。今に、わしの有難みがわかるんじゃ。おぬしらのように、フワついた人間に何ができる。わしのほかの誰に、ゴジラとやらを調伏する力があるか」

「まあ、まあ、まあ、まあ」

と、私は言った。

「とにかく、我々は、どうごまかそうったって、ごまかせないところへ来てしまっている。そりゃあ、相手がアメリカやロシアだったら、手をにぎるか、手を切るか、人さまざまで、

もみあったり反対しあったりするでしょうが。相手が、なにしろゴジラなんだからね、ゴジラと手をにぎろうなんてことを、主張するものはいやしない。つまり、我々は最初っから意見が一致している。いやおうなく、団結するようにできているんだ。そうでしょう。ぼくは何も隊長ぶって、各員一ソウ奮レイ努力セヨなんて、号令しません。だって、号令するまでもないことなんだから。これぱっかりは、三つの子供でも八十の婆さんでも、自発的に抵抗しようとする敵なんだから。ですから隊長といたしましては、あなた方の自発的な意志、賞讃すべき勇気、たっぷりしたエネルギー、立派な才能を、あますところなく発揮できるように、あなた方をはげまし、あなた方におねがいするより方法はありません。かつての中国民衆が、抗日統一戦線をつくったとき『金ある者は、金を出す。力あるものは、力を出す』と主張した、あの偉大なる精神でやりましょう。ゴジラは、やってくる。まちがいなく、やってくる。これが我々の当面する、もっとも重大な事実であります。我々の眼の玉に焼きついてくる、我々の耳の孔にもぐりこんでくる、我々の鼻と口におおいかぶさって息の根までとめようとする、この重大事実にくらべれば、小っぽけなもめごとや、けちくさい心配ごとなどは、みんな雲散霧散してしまうはずであります」

女二人は、そろって拍手してくれた。

男ふたりは、不機嫌にだまっていた。

私の命令に服従するのが、イヤだからだ。イヤではあるが、どうやって反抗していいか、

わからないのだ。私の命令といったところで、要するに腰を低くした、相談にすぎないのだから。

「この種の特攻隊が、滑稽に見えるのはあたりまえなことですよ」

と、私は、なおも言った。

「隊長ともなれば、なおさらなことだ。できもしない『任務』をかかえて、何をまごまごしているのかと、恰好も、歩き方も、しゃべることの一言一句、ばかばかしく見えるのも、やむを得ない。しかし、これは誰がやっても、結局はおなじことなんで。弁解するわけじゃないが、事実、そうなんです。我々はつまり、選抜された代表者、えりすぐった選手であると同時に、もっとも道化た道化役者なんだ。冷静に、合理的に考えると、どうしても、そうならざるを得ない。お互いさまに、かつて十八や二十の若さで、桜の花のごとくパッと散ったああいう航空隊の青年将校とはちがうんだから。彼らのように、ああ単純に、死ぬわけにはいかない」

「そうだ。君の命令で死ぬのは、ごめんだ」

「そうじゃ。わしが何も、この男の命令で死ななきゃならん理くつは、ないわい」

と、委員長と教祖の意見は、その点で一致していた。

「それで、よろしい。ぼくだって、ぼくのために死んでくれなんて、あなた方にたのんでいやしない。しかし、河下さんは日本の労働階級のためなら、喜びいさんで死ななきゃならん

でしょう。また、大鞭さんは、教徒信者諸君のためなら、みずからすすんで死ぬ覚悟でしょう。ぼくだって、日本経済を破壊から守るためなら、この命一つは、あっさり棄てる決心なんだ。ほかの奴ならとにかく、ゴジラに好き勝手なマネをさせたら、労働者も信徒も経済人も、みなごろしになる。目的はそれぞれ、多少ちがっていても、決死の勇者であることにかわりはない」

「まア、どうしましょう。死ぬんですの」

と、光嬢は悲しそうに言った。

「そうよ。社長さんのおっしゃる通りよ。私だって、その覚悟で、参加したんですもの」

と、花山嬢は、怒ったように言った。

「まあ、ちっとも知らなかったわ。何とか死なないですむ方法は、ありませんの」

そう言ってみんなを見まわす光嬢の目つきが、あまりに可憐で色っぽかったので、男たちは、めいめいのとげとげしさをやわらげて、くつろいだ気分になった。

「あの女優、アタマは大丈夫なのかね」

彼女が化粧室へ去ると、河下が私に耳うちした。

「精神病院から、出たばかりだそうじゃないか。チトおかしいんじゃないかね」

「少しおかしい方が、適してるんじゃないか。心配なら、質問して試してみようか」

「今さら心配したって、どうしようもないが。おれには、ああいうマスコミで人気のある、

芸能人の心理が、まるでわからないんだ。ほんとに白痴化しているのか。それとも、狡猾で、人気を利用しているのか。バカが利用されて、いい気になっているのか。それとも、相当の才能があって、それを悪用しているのか。とにかく、ぼくら、まじめに生産に従事している労働者から見ると、ひどくあぶなっかしい、根のない存在に見えるからなあ」

「彼女に、質問してみようじゃないか。我々みんな、ゴジラのあたえる影響については、詳しいけれど、ゴジラの本体については、無知なんだし、彼女は今まで、とにかく、幻想のゴジラ、でっちあげたゴジラ、ニセのゴジラにはちがいないにせよ、ゴジラらしき物とつきあいがあったたった一人の隊員だろう」

化粧室で、看護婦の白服を、イブニング・ドレスに着かえて来た彼女は、ますます、あでやかになった。

「光さん。隊長として、あなたにおたずねしたいんですが」

と、私は切りだした。

「あなたの観察し、研究したゴジラについてですな。そのオ、何でもよろしいですから、お話しねがえませんか」

「ハイ」

ソファに腰をおろした彼女は、実におとなしかった。きっと警視総監から「行儀よくしなくちゃいかんぞ」と、申しつかって来たのであろう。

「精神病院の院長さんもおんなじ質問をなさったわ。わたくし、ゴジラ映画には、十五回出演しました。でも、いつでも、ゴジラとわたくしが、別々に撮影されて、あとでフィルムをつなぎ合せるやり方ですから。わたくしが、悲鳴をあげるのは、実さいは、ゴジラを見ないで悲鳴をあげるんです。ソラ、来ましたよ。あっちから来ましたよ。ソウ、ソウ。そっちを見つめて、と監督さんが指図すると、わたくし、そっちを見つめるんです。ホラ、ゴジラの掌が、光さんの首のうしろに伸びてきたぞ。ホラ、もうちょっとで、あんたの首に大きな大きな爪の先が、ひっかかるんだ、と言われると、わたくし、キャアアアッと……」

と、彼女は真に迫った表情で、起ちあがった。

「なるほど、なるほど。ああ、そうですか」

と、私は感心したように、うなずいた。

「で、ゴジラの掌など、ぜんぜん見えないわけですか」

「ええ。でも、わたくしが恐がらないとダメなので、ほんとに掌を出してくれることもあります。でも、わたくし、あのゴジラの掌は、きらいですわ。なんだか、ペンキみたいな、とてもなまぐさい匂いがするんですの」

「ふうん。ペンキみたいな、なまぐさい匂いがね」

「わたくし、あの匂いだったら、いつでも嗅ぎわけられますわ。人間の掌とまるでちがって、ほんとに厭な匂いがするんです」

「で、ゴジラに対する、光さんの恐怖ですね。ゴジラ・ノイローゼで入院なすったくらいだから、そうとうの恐怖だと思うんですが。その恐怖の程度は、どんなものですか」
「ハア。その点は、院長さんからもくりかえし、質問されたんですけど」
彼女は、恥ずかしげに腰をくねらせて、下うつむいた。
「わたくし、恐がらなくちゃ、恐がらなくちゃ、と年中思いつめていますでしょ。ですから、うまく恐がれなかったら心配だもんで、それでノイローゼになりましたのよ。ほんとに恐ければ、よろしいんですが。ゴジラって、要するに単純なものでございましょ。ただ大きな怪物で、気味のわるい恰好をしている。そのほかは、別だん複雑な好みとか、下心はありませんのよ。それに、最後はかならず、人間の知恵で退治されてしまうんです。ですから、今度だって、きっとそうなると思っていますの。ただ、わたくしの役割は、怪獣が退治されるまで、できるだけ上手に、大げさに、恐がったり、騒いだりすれば、よろしいんでしょ」
「ええ、まあ、たぶん、そういうことになるでしょうが。それにしても……」
「ねえ、隊長さま。どうぞ、わたくしを逐い返したりしないで下さいまし。わたくしは決して、ミスキャストじゃありませんもの。わたくしほど、巧みに恐がれる女優なんて、他にいるはずがないじゃありませんの」
「あんまり巧みすぎて、どうなることやら、先が思いやられる」
と、委員長は皮肉をこめて言った。

ものの十分もたたぬうちに、彼女の演技が、いかにすばらしいか立証された。

彼女が突然、キャアアッと叫び声をあげたとき、我々ぜんぶが、彼女と同じゴジラ映画にうつされている「恐怖せる群集」に、なったみたいだった。

熊沢大五郎さんは、エレヴェーターを使用せずに、屋上から、縄でぶらさがって出現した。縄のきしみ一つたてずに、かるがると降下した大五郎青年は、彼女に発見されるまで、窓ガラスの外で、なかをうかがっていたらしかった。花山嬢が駈けよって、迎え入れる前に、彼は自分で窓をひらいて、入ってきた。

繊細な感じのする、清潔な美青年は、どちらかと言えばハムレット型だった。街の不良少年の、あの無神経で粗野なところは、少しもなかった。

「おそくなりまして」

と、隊長に挨拶する彼の、スマートで上品な態度を見たとき、私は、

「入社試験、合格！」

と、胸の中で、つぶやいたほどだ。

光さんも、理想的な勇士の到来に「ハアアーッ」と、感嘆のため息をもらした。

物に動じない、理知的な花山さんまで、かなりの性的ショックを受けたらしいと、私は見てとった。彼女は、キビキビした調子で、本部へ無電の連絡をした。それも、青年の注意をひくために、特にやっているように見うけられた。

とっくに青春から遠ざかった、われら三人の男が、彼に嫉妬を感じたのは、言うまでもなかった。

「よかったわ。あなたが来て下さって」

と、光嬢は青年のそばへ、寄りそった。

「中年や老年の方ばかりじゃ、気づまりだったの、わたくし」

憂鬱そうな青年は、しかし、美女には興味を示さなかった。

「屍室はどこじゃね。屍体を安置する場所、礼拝堂などはどこにあるのかね」

教祖は、腹だたしげに言った。

「地下室にございます。私が案内いたしますから」

「そこが一ばん、大切な場所になるんじゃ」

花山嬢は、うるさ方を階下へ連れて行った。

「ぼくも、地下室を見てきます」

と、青年が出て行こうとするのを、私と光さんが、おしとどめた。

「おちついて、おちついて。脱獄するのは、ゴジラの腹の中へ入ってからで、よろしいのだから」

と、私はおちついたフリをして、言った。

入獄した経験のある委員長も、青年に興味をいだいた様子で、そばへ寄ってきた。

「君は、脱出の名人だそうだね。どうかね。ゴジラの巨大な魔手から、脱出できる自信が、君にありますか」
「さあ。……ぼくには、自信ありません」
「ふうん、だめかね」
「いいえ。だめというわけではありません。ぼくはいつでも、自信がないんです。自信がないから、やってみたくなるんです」
「ははア。そうか。困難は困難であるが、絶望的ではないわけだね」
「ええ、そうです。絶望的なほど困難なことに、とりかこまれていないと、ぼくは生きがいを感じないものですから」
「偉いぞっ」
と、河下さんは、はげますように言った。
「君はつねに、官権の弾圧をはねのけ、支配者のはりめぐらした、高い厚い壁をのりこえてきた。君はつねに、半封建的ブルジョア政府の鼻をあかして、権力の網の目をくぐりぬけてきた。君は、かの鼠小僧にもおとらぬ、勇敢な義賊だ」
しかし青年は、委員長のさし出した掌を、にぎろうとしなかった。彼は、相手の好意に困ったように、悲しげに首をふった。
「いいえ、ぼくはただ、人生を楽しんでいただけなんです。ぼくはむしろ、監獄をこしらえ

てくれた政府、犯人を看視する警官がいてくれることに、感謝しています。監獄も看守もいなくなったら、ぼくはもう、死んだも同然なんですから……」
「ふうん、なるほど。そうすると、君にとっては、ゴジラの襲来は、願ってもない生きがいということになるんだね」
「ええ、そう思います」
「厭な野郎だよ」
と、委員長は、がっかりして言った。
花山嬢は、ひとりだけで、もどってきた。
「教祖さんは、地下の礼拝堂にとじこもって、調伏のお祈りをなさるそうです」
と、彼女は報告した。
「あの野郎、うまいこと言って、地下室なら安全だと思ったからだよ」と、委員長。
「お食事も、地下室でするから、運んでもらいたいと、おっしゃってます」
「よせ、よせ。お祈りなら断食させといた方がいい」
「なんだったら、わたくし、運んであげてもいいわ」
と、光嬢が申しでた。
「あの方、鎌倉市をそっくり買って、大鞭教のメッカにしようとなさったでしょ。わたくし、お金持にサービスするのは、大好きですから」

「それじゃ。あなたにお願いしますわ」
と、花山さんは冷く言った。
「いや、いや。女性は行かない方がいいよ」
と、私はいましめた。
「心が乱れて、お祈りが効かなくなるといけない。それに、ぼくだって御二人のような美女を、あんなヒヒ爺さんの餌食にしたくないよ」
「餌食になるのは、わたくしの役目なのよ。それから、隊長さま、あのオ……」
と、女優は私の両掌をなでたり、もんだりした。
「あのオ、今晩、寝るときには、どういうことになりますの」
「もちろん、不寝番は、交替でやってもらわなくちゃ」
「いいえ、そうじゃなくて。男と女の組み合せは、どういうことになりますの」
さすがの隊長（経営責任者）も、その種の人員配置は、今までやったことがなかった。
「つまり、誰と誰が一しょに寝るというような……」
「ええ、それが根本問題だと、思いますの」
「しかし、ここは慰安所でもなし、ダンスパーティでもなし、隊員はやっぱり、全員一カ所にキャンプすべきだと思うがね」
「別室では、いけませんの」

「禁止はしませんよ。だけど、任務が任務なんだから、ベッドの組み合せを決めたりするのは、よしましょう」
「まア、つまらないのね」
「光さんの選ぶのは、わかってるからね。だから、選んだり組み合せたりするのは、隊長として反対なんだ。選ばれなかった者は、どうしたって淋しくなったり、ヤケになったりするからね。そうなると統制が乱れるし、仲間われができたりするからね」
「そうよ。わたくしの選びたい相手は、決まってますの」
と、彼女は熊沢くんの方を流し目に、見やった。
「でも、隊長さまの御命令なら、わたくし、順番に、えこひいきなしでも我まんしますわ。どうせ特攻隊ですもの」
ラジオもテレビも、放送を厳禁されていた。ゴジラは、グロテスクで原始的な皮膚にもかかわらず、電波には、ひどく敏感だと想定されていたからである。
競馬も、競輪も、映画館もキャバレーも、閉鎖されていた。ゴルフ場では、牛や馬があそんでいた。結局、人類の男性のお楽しみといえば、食べること、それから、ナマ身の女性とたわむれることになる。マージャン、花札、ルーレットなど、魅惑的な勝負ごとも、ゴジラ相手の必死のゲームにくらべると、血の気のうすい退屈なものであった。
「どうかね。わが隊に入隊してからも、君はまだ、探偵小説が読みたいかね」

と、私は、その方のマニアである花山嬢にたずねてみた。
「いいえ、読む気が起りません」
「ふうん。それから君は、むずかしい哲学の本。西田哲学とか、カントとかフロイドとか、いろいろ好きだったじゃないか。あの手のものも、読みたくないかね」
「ええ、さっぱり」
「それは、いい傾向だ。しかし、急にそうなったのは、なぜだろうか」
「ええ。私もそのこと、反省してみたんですけど。哲学にしろ、自然科学にしろ、ゴジラを克服できない学問が、急速に色あせて行く。これは、社長さんのおっしゃる通り、必然的にそうなりますわね。探偵小説の方は、なぜか。これはつまり、この場所、この人物たち（すなわち我々）が、あまりにも探偵小説的にできあがっていますし、推理ミステリーのページの、活字のあいだから立ち昇る犯罪の煙より、もっと濃厚で息苦しい犯罪ガスが、現実に特攻隊基地にみちみちているからではないでしょうか。自分たちが実生活で、ミステリー・スリラーを演じているから、読む必要がなくなるのとちがいますか」
ミス花山の探偵眼、推理力は実にたいしたものであった。
翌朝、大鞭氏は地下室で、死体となって発見されたからだ。
とじこもった教祖は、我々との協力をこばんで、その夜の不寝番にも立たなかった。
百歳を越しても死にそうになかった、このアクの強い宗教人が、まっさきに屍体と化そう

とは、意外だった。

朝食を運んで行った花山嬢が、

「大鞭氏が、殺されています。本部に連絡いたしましょうか」

と、報告に来たとき、私は突発事件に胆を冷やすとともに、眉一つうごかさない報告者の冷血と称したいほど冷静な態度にも、おどろかされた。

むりやりキッスしようとして、青年を追いまわしていた光嬢。ながいながい遺書を、執筆している河下氏。いずれも、意外であるような、当然であるような顔つきで、私の周囲に集ってきた。

一同そろって、地下室へ降りた。

階上より明るいぐらい、蛍光灯でアカアカと照された地下の、ボイラーの前に、血まみれの大鞭氏が倒れていた。

どんな非情の犬殺しでも、これほど残忍な殺し方はしないであろうような、メチャメチャな殴り方で撲殺されていた。火掻き棒、シャベル、ハンマーなど、鉄製の器具があたりに散乱して、どれもが血にまみれていた。一人の犯人が、これほど沢山の兇器を使ったのであろうか。頭蓋骨フン砕。四本の手脚の骨は、ことごとく打ち折られている。ただたんに、殺害されたというより、バラバラにバラされた感じなのだ。

「おれも、この男は気にくわなかった。死にゃアいいのにと、思ってはいた。しかし、こん

な殺し方は、俺にはできないな」

と、蒼ざめた河下氏は、うんざりして言った。

「ぼくもこういう、非合理主義で民衆をだます奴は、大きらいだった。隊員の中で、誰かに死んでもらうとなったら、こいつを指名したにちがいない。しかし、こうまで、むごたらしくは……」

と、委員長と似かよった意見を、私ものべた。

熊沢くんは、礼拝堂から屍室、さらに解剖室から廊下へと歩きまわっていた。

「ゴジラの仕業でしょうか」

と、光嬢は、恐そうに爪先き立っていた。

外部からは、めったなことで侵入できないはずだった。そうすると、我々のうちの誰かが？　そういう、もっともらしい疑念で我々は、お互いに顔を見あわせた。他の者の睡っているあいだに、我々のうち誰かが、十三階から地下室へ降り、また引返してくるのは、わけのないことであった。

「本部への連絡は、しばらく待ちなさい。よく調査してからにしよう」

と、私は花山嬢に命令した。

「その方がよろしいと思います」

名探偵きどりの彼女は、屍体の上にかがみこんだり、周囲を探索したりしていた。

地下室の洗面所をしらべた彼女は、犯人がそこで手を洗ったらしいと、報告した。グショぬれになったタオルには、かすかに、うす赤い血が付着していた。
「これはしかし、本部に連絡すべきだよ。我々だけじゃ、どうにも仕方ないだろう」
委員長は、気よわく言った。
「けれど、報告や連絡はいつでもできます。その前に、我々だけで解決できることは、解決した方がいいと思います」
と、花山探偵は、あくまで自信ありげだった。
「解決するって、どういう？　犯人を探し出すことかね」
「ハイ。そうです」
「我々の中にいるのかね」
と、すっかり私は、気味わるくなっていた。
「ハイ。私には、大体の見当はついております」
「そんな男がいたのかね、隊員のなかに」
「男とは、かぎりませんよ」
と、女探偵が答えると、光さんはキャアアッと叫び声をあげた。もはや我々には、女優の悲鳴が、名演技なのか、それとも本音の恐怖なのか、見わけがつかなくなっていた。
「す、すると、ハ、犯人はあなたなの？」

と、女優は女探偵にたずねた。
「この殺人事件は、特攻隊第一班の全員に関係あることですから、我々ぜんぶで考える責任があります」
と、花山嬢は、専門のレクチュアでもやる主任教授のように、おちつきはらっていた。
「動機は一体、なんなんだい。ここにいる者は、被害者とは昨日ここへ来て、はじめて会ったんじゃないのか。みんな、奴とは初対面だったんだろ？」
一同は、河下氏の質問に、一せいにうなずいた。
「二十四時間もたたない、初対面の相手に、殺人の動機が生れるかねえ」
「動機は皆さんの心の中にあります」
と、女探偵は言った。
「皆さんだって？」
と、私は思わず口走った。
「そうです。私をもふくめて、皆さんぜんぶです」
「しかし、それじゃ、誰が犯人か決められやせんよ」
「誰が犯人か、決める必要はありません」
「え？」「それじゃア」「何だって」と、一同は不思議そうに、彼女を見まもった。
「皆さんは、どなたも昨夜、就寝前にキルドルムを服用なさいましたね」

それはまさしく、その通りだった。

キルドルムは、覚醒薬と睡眠薬、ことにトランキライザーの安静作用を兼ねそなえる、最新式の輸入薬だった。誰かにつけねらわれているギャング。常に相場の変動で緊張しながら、おちつきたい株屋さん。徹夜の科学者。気のよわい自殺者などに、愛用されている妙薬だった。

キルドルムの服用を、花山嬢が提案したとき、まっさきに賛成したのは、隊長の私である。ゴジラの恐怖に抵抗するには、睡るのが一ばん良い。しかし、イザというとき、だらしなくボンヤリしていて、活動力を失っていたら、なんにもならない。それには、活動力を倍加しながら、沈静と睡りをあたえる、この新薬がもっとも適していると判断したからだ。

「私がみなさんにおわたししたキルドルムは、定量の三倍だったのです」

と、花山さんは説明した。

「ゴジラの襲来に対処するには、そのくらいでないと、効き目がないからです。それが、いけなかったのです」

「と言うと」

「殺人的睡眠薬は、効きすぎると、名前どおりの作用をするのです」

「ええと、ええと。そうするとだな……」

私は、うす気味わるいのを通り越して、背すじが寒くなってきた。

「もう、おわかりになったと思いますが」
「すると、我々ぜんぶが？」
「そうです。第一班ぜんぶが、自分たちの知らぬまに、大鞭さんを寄ってたかって殴りころしたのです」
彼女がそう宣告すると、もはや悲鳴もあげることのできなくなった光さんは、コンクリートの床に膝をついてしまった。
「まさか、そんな」
「ひどいよ、そんな。いくらなんでも」
「このひと、自分が少し、おかしいんじゃないかなア」
騒ぎ出す男たちを、女探偵は冷ややかに眺めまわした。
「お疑いになるなら、皆さんの衣服を、めいめいでおしらべになって下さい。きっと、どこかに血が付着しているはずですから」
「君自身は、どうなんだい」
「私は、ブラウスに血痕がついているのを見とどけて、さっき着がえをすませました」
ジャンパーを脱いだり、スカートを裏がえしたりして、我々はくるくる舞いした。
「アッ。そこそこ。その袖口に、付いてるじゃないか」
「ひとのこと言うけど、君のズボン、見てみろ。血のしみがベットリ」

と、互いに探しっこした。

最後まで血潮の洗礼が発見されないで、喜んでいた光さんの、鹿革のハイヒールにも、教祖の血がしみこんでいた。

「すると、我々が殺害犯人」「殺したのかねえ、ぼくが」「へんな薬、のませるからいけないんだ」

顔面蒼白となった一同は、

「本部に連絡いたしましょうか」

と、花山嬢に問いかけられると、首を横にふらずにはいられなかった。

誰か一人が、特殊の怨恨や目的のため、大鞭氏を抹殺しようとはかったのなら、話はわかっている。しかし、こんなにも種類のちがう隊員が気をそろえて、無意識のうちに、集団をなして教祖に襲いかかったのは、フにおちなかった。

どうして、彼だけが、被害者にならねばならなかったのか。

「まア、まア。かりに我々が、集団的な殺人者になってしまったのが事実だとして、どうして大鞭氏をねらうことになったんだろうか。それに、ぼくだって河下氏だって、戦闘的ではあるが、殺人という暴力手段には反対な男だし、まして、あなた方恵まれた美貌の女性に、そんな趣味があるわけはなし。ぼくにはどうしても、納得が行かんがね。花山探偵から、御説明ねがえませんか」

「説明できるだけのことは、説明いたしますけれど」

と、花山嬢（もはや博士と言いたいところであるが）は、考え深げに言った。

「ゴジラ時代の犯罪心理に関しては、まだ先進諸国でも、充分の研究がすすんでおりません。あまりにも急速に、人類の歴史はゴジラ恐怖に突入することになったので、研究者、科学者そのものが、自分たちの踏みこんだ妖怪屋敷の入口でよろめいているのです。

ただ一つ明白なこと。それは、ゴジラが人間のあらゆる種類、差別におかまいなく、すなわち、善人であろうと悪人であろうと、強者、弱者の区別も、美女と醜女のわけへだてもすっとばして、大小さまざまの権力の有無にかかわらず、あらゆる人類を抹殺しようとしていることです。ゴジラによる人類殺害は、もちろん人間の眼から見れば、無目的であり、無意味であり、なんとも形容しがたいほど圧倒的に腹立たしきかぎりでありますが、それ故にまた、『彼』の殺戮は、絶対平等だとも言えるわけです。ただただ人間であること、そのことが、ゴジラに抹消される理由なのです。

したがって、ゴジラ的殺人の動機は、今までの推理小説の『動機』とは、まるでちがっています。我々にとって問題なのは、アレやコレやの動機などという、ノンキなものではありません。殺し尽そうとする『彼』の絶対性、どうやっても改心させることのできない『彼』の、意志と行動なのです。ゴジラの殺意を、いくら批判したり、分析したりしても、なんの役にもたちません。ゴジラが存在する、それが、絶対に防ぎとめることのできない『動機』

form http://13DL.TO

なのですから。

そして、困ったことに、われら感情的な動物は、いつのまにか、ゴジラ的動機を理解するようになって行くのです」

「ぼくは、ゴジラとはちがうぞ」

「そうです。むろん、社長さんも委員長さんも、また脱獄の名人も、シャッチョコ立ちしたってゴジラになることはできません。しかし、ゴジラ恐怖に圧しつぶされそうな時代には、ゴジラになれないことが、そのまま、ゴジラ的になる理由ともなるのです。

抹殺することは、抹殺される者（つまり我々）の側から言えば、迷惑しごくなことです。抹殺は、されたくない。しかし同時に、かならず抹殺されるという予感（あるいは確信）が、私たちをスッポリと包んでいます。

無意味に、無目的に、泣こうが騒ごうが、殺されるときは殺されるという、未来感覚がしみわたってくる。そうすると、にくむべき死の絶対平等が、なんとなく解放感や救いに変形される。そこまで行かなくても、ゴジラが存在するという事実が、あまりにも大きくのさばって、ふくれひろがっているので、もしかしたら殺害や殺戮、抹殺や抹消は、きわめて日常的で、まちがいない出来ごと、いなむしろ、自然現象のように思われてくるのです。

ここまでは、一般論です。

では、なぜ大鞭教祖が第一の被害者に、えらばれたか。彼が、想像図のゴジラを想起させ

る、風格をもっていたこと。これも、かすかながら、原因にはなるでしょう。しかし、真の原因は、別に一つあります。

大鞭氏だけが、安全そうな地下室にかくれたこと。大鞭氏だけが、私たちの集団をはなれて、勝手な行動をとったことです」

「でも、そんなことぐらいで」

「そんなことぐらいが、充分に理由になるのです。定量三倍のキルドルムで睡眠中の私たちは、ほんのわずかの理由でも、ムリヤリ発見して行動にうつるのです。私たちは、睡りながら、ゴジラのあたえる絶対平等の被害を、待ちうけている。念願してるとは言えないにしろ、期待している。そのとき、仲間のなかの誰か一人が、別の安全な場所にいて、この絶対平等にそむこうとしている。奴を、あのままにしておいてよいのか、と睡眠者たちは、考える。そんな、わがままは許せんぞ。集団のおきてを破って、ただ一人助かろうなんて、そんなまちがった自由を許しておくことはできんぞ。ゴジラ恐怖は例外のない恐怖なのだ。例外をつくることは、ゴジラ時代にふさわしくない。起て、ゴジラ特攻隊。行け、人類の代表者。起ち行きて、かの不こころえ者を罰せよ」

「まア、勇ましい」

と、光嬢がつぶやいた。

「勇ましいどころか、臆病な恐怖心、陰惨な衝動にかられて、第一班はベッドから起き上り、

地下室へ降りて行く。手あたりしだいに、人殺しの道具を手にする。そして、寄ってたかって、鉄の棒やシャベルで……」

「キャアアアッ」

と、光嬢は叫んだ。そして、失神して倒れた。

大鞭氏の死体は、ボイラーで焼かれた。

いそがしい、味もソッ気もない葬式だった。しかし、加害者たちが全員そろって、ねんごろに、真剣に、被害者をとむらうなどということは、あまり例がないであろう。

軍命令で殺しておいてから「キミは護国の鬼となられた」などと、靖国神社の前で涙をながす、陸軍大臣の心境より、もっと複雑な感慨をもって、我々は、我々の殺した男の肉と骨と髪と爪の焼ける音をきき、焼ける匂いをかいだ。

我々は、人の命のはかなさを痛感した。生きているあいだ厭でたまらなかった男も、死ねば（ことに、殺されれば）気の毒にもなった。しかし、涙は流れなかった。たぶん、我々のおち入った状態、あるいは運命が、あまりにも無気味で、思いがけないものであったので、涙の源も涸れてしまったにちがいない。

ふつうの常識をもった社会人なら、「人を殺せば自分も死ななければならぬ」と、考えるはずだ。

その考えは、私にも皆さんにも、とりついていた。

「死ななければならぬ。しかし、死にたくない」

次に湧きあがる想いは、コレなのだ。

第一に、我々の犯罪は、我々ぜんぶが犯したものであるから、密告者の出るはずはない。結局のところ、発覚しないですみそうだった。

第二に、今回の殺害は、キルドルムの作用であって、我々の意志ではない。したがって、われわれ加害者には責任がないという理くつが、生れた。

第三に、ゴジラ恐怖は、一教祖の生死にかかわらず、依然として続いているのであるから、我々も昨夜の被害者とおなじく、絶対平等の死に、やがては見まわれるにちがいない。そうなれば、犯罪者であろうが無かろうが、抹殺されるにきまっているのだから、何もそうキチョウメンに、死刑になりたがる必要はない。

ゴジラ対策本部が、第一班に要求するのは、ゴジラとたたかうことであって、罪の意識に溺れることではない。なるほど我々が、隊員の一人を殺してしまったのは、まずかった。けれども、我々の重大任務があいかわらず残存しているからには、とりあえず、その任務に邁進することは、一向にさしつかえない。

どうやったら部下の隊員を、厭世気分から脱け出させて、攻撃態勢に入らせるか。というより、むしろ私自身の淋しいような、たよりない感じを、どうやって吹きはらったらいいのか。

「キルドルムの服用は、今後、一さい禁止します」
「しかし、社長さん。あの薬の効き目は、まだ三日間は継続することになっています」
「まだ、三日間？　すると、今夜も、明日の晩も、我々はまたまた殺人を犯す危険性があると言うのかね」
「さようです」
光嬢は、失神から恢復して、すすり泣きをはじめた。私だって、泣きたいところだった。
「組合事務所へ、帰りたくなったよ」と、委員長。
青年は青年で、
「牢屋の方が安全らしいな」
と、こぼしている。
「わたくしも、もう一度、精神病院へ入ってよろしいかしら」
と、光さんは泣きながら訴える始末だ。
「しかしだね。皆さん、よく考えて下さいよ」
と、私は自信のない説得にとりかかった。
「もしもここで、第一班を突然、解散すればですよ。なぜ急に解散したか、その理由を本部に報告して、釈明しなければならない。そうすれば、我々の集団殺人は厭でも明るみに出ますよ。それでは、困るでしょう。どうですかね。ゴジラは三日以内に襲来する予定ですから、

もう少しガンバッてくれませんか」

「しかし、君。ここにこうしている我々のうち、また誰かが誰かを殺すんですよ。もう殺す方も、殺される方もたくさんだよ」

と、委員長は抗議した。

「だからさ。殺したり殺されたりしないように、工夫をめぐらすのさ。花山くん。何か名案はないかね」

「はたして、うまくいくかどうか不明ですが、一つだけ方法があります」

と、彼女が答えると、我々はホッと安心した。

「共同キャンプをやめて、一人々々が個室にとじこもるんです。寝るときは、各部屋に鍵をかける。一人ずつ平等に孤立していれば、寄ってたかってという、集団殺人はなくなるでしょう。我々のうちの一人だけが、離れていたのが、いけなかったのです。全員がバラバラに、分れていれば、誰を目標にするということは、なくなるはずです」

彼女の提案は、すぐさま採用された。

一階、三階、五階といった具合に、階数のちがった部屋を、めいめい選ぶことにする。さすがに、地下室を希望する者は、いなかった。熊沢青年は、星をちりばめた青天井のあおげる、屋上がいいと言った。

「誰かと御一しょじゃ、いけませんの？　わたくし一人じゃ、こわくて、こわくて」

「でも、誰かと同室すれば、そのひとがあなたを殺すかも知れないわよ」
と、花山嬢は言いきかせた。
「いくら愛しあっていても、いけないんですの？　でも、それじゃ、ダブルベッドを使うことは永久にできないのね」
「美しすぎる人。強すぎる人は、こんなさい特に危険なのよ。美しい人や強い人は、めったにいないでしょ。だから、民衆のあいだに潜在する嫉妬心で、ねらわれることになるのよ」
「まア、それじゃ、わたくしも危いのね」
と、おびえ切った光さんは、つぶやいた。それからすぐ「失礼。わたくし、そんな美人じゃないわよ、ねえ」と、附け足した。
二日目の夕食は、できるだけ豪奢な宴会にした。音曲入りの馬鹿さわぎでもしなければ、刻々に迫ってくる不安を、どうしようもなかったからだ。しかも恐怖が外部からばかりではなく、われわれ自身の内奥にひそむゴジラ性から来ているのだから、なおさらのことだ。
銀座のクリスマスパーティも顔まけの、華やかな飾りつけもした。
脱獄青年は、サーカスの演題より、もっと危険な綱わたり、もっとむずかしい壁から壁への飛躍などを、やって見せてくれた。とんぼがえり、アクロバットと息もつかせぬ早業で、しまいには、光さんの髪の毛や足首をひっつかんで、アパッシュダンスの猛演技も披ろうした。

酔っぱらった河下氏は、重量挙げをやってくれた。重労働できたえただけあって、ほれぼれするほどたのもしい、筋肉の躍動であった。

木製の人体白骨をかかえて踊ったあげく、勢いあまってゴジラの標本を打ち砕いたときは、拍手せずにはいられなかった。美女たちの喝采にあおられて、河下氏がウォーッとうなると、ゴジラの咆哮もかくやと思われた。

二人の美女が、お待ちかねのストリップを見せてくれたのは、申すまでもない。

白痴型の光さんと、理性型の花山さん。こんなすばらしい裸女の組合せは、どこのミュージックホールでもお目にかかれないものであった。知的な手つき指さきで、一枚ずつ文化の衣をぬぎすてて、原始動物の柔軟さ、自由と欲望をとりもどして行く花山さん。それとは逆に、奔放で魔女的なスッ裸から、天使的で文化人らしい羞恥のうす衣を、重ねて行くような光さん。

「あなた、なまぐさいわよ」

と、光さんが花山さんの胸のふくらみに、顔を押しつけると、

「こら、お前は血の匂いがするぞよ」

と、花山さんが光さんを、残酷に突きころばす。二人はかわりばんこに、男役と女役、いじめ役と、いじめられ役を演じた。なまめかしく、物騒になったり、古典的で陰にこもったりして、二つの肉は二個の機械の如く、精妙にからみあった。

「ああ、疲れたわ。もう、だめよ」「まだまだ。ホラ、くすぐってやるから元気を出さんか」「だめよ。いくら、そんなことしたって。ああ、いっそのこと殺してちょうだい」「殺すのは、わけはない。生かしておいて、ゆっくり首をしめてやるのだ」「アッ。可愛がらないで。おねがいだから、もう可愛がらないで」「サア。おとなしくゴジラの人身御供になれ！」「いやよ。いやよ。私は、あなたのものよ。私を、ゴジラのものにしないでちょうだい……」

クタクタに疲れたのは、見物人の方であった。

本部から、無電の連絡があった。

翌朝までに、ヘリコプターを一機、よこすと言うのだ。イザというとき特攻隊が脱出するには、ヘリコプターが便利なのだそうだ。

なまぐさい宴会は、愉快に幕をとじた。各階の各室に、花山探偵が各人を送りとどけた。あとは、熟睡すればいいのだ。

「神よ。守りたまえ。翌朝までに、何ごとも起きませんように」

私は、七階の中央の一等病室で、生れてはじめて、天にまします我らの「父」に祈りをささげた。

だが、その祈りは、急場の間にあわなかった。

二日目の朝が、うす墨色の雲の下であけそめたとき、またしても一個の死体が（今度は地階ではなくて）屋上に横たわっていたのである。

それは、我らの救援に飛来してくれた、ヘリコプターの操縦士の死体だった。

発見者は、屋上で睡った熊沢青年である。

しかも被害者の殺され方は、前回と全く同じだった。

あれほど厳重に、めいめいを閉じこめておいたのに、我々は、我々を救出するためにわざわざ来てくれた男を、よってたかって殺してしまったのである。

睡りこけている我らの耳に、ヘリコプターの廻転翼が、ゴジラ襲来を想わせるとどろきを、吹き入れたからだろうか。

もはや我々には、動機や理由を考えている、ひまさえなかった。

「よそから来た、よそ者」というだけで、もはや我々は彼を抹殺しようと決心したにちがいない。ああ、何という、絶望的に怖ろしいことだ。

もはや、我々の被服についた血痕を、いちいちしらべるまでもないことであった。

「ゴジラが早く来てくれないから、いけないのよっ」

と、光嬢は血にまみれた右手を振りあげて、泣き叫んだ。

「そうだ。ゴジラがもっと早く来てくれていたら、こんなことにはならなくてすんだんだ」

と、頬に血のこびりついた委員長も、悲痛の表情であった。

殺害に使用された兇器だけが、前回とちがっていた。被害者の飛行服には、よく光るナイフやフォークが突き刺さっていた。それらの食器は、宴会の席から護身用に、めいめいが持

ち去っていたものであった。
　死体は、まだ匂っていなかった。
「なまぐさいわ」
と、光嬢がつぶやいた。
　たしかに、死体の匂いとも血の匂いともちがう、厭な臭気が屋上に漂っていた。ゴミ箱や溝の、あの腐ったような匂いともちがっていた。しかもその不可解な悪臭は、病院の屋上ばかりではなく、あまねく全都の空をおおっているのであった。鉛色をます空からの風がつよまると、臭気は強くなった。そして、風は、はげしさを加えはじめた。
「ゴジラだわ。ゴジラの匂いだわ」
と、花山嬢が言った。
「そうよ。もう来てるんだわ。上陸してるんだわ」
　見わたす町々は、灰色にしずまりかえっていた。金属の屋根やコンクリートの壁が、鈍く光っていた。異様なとどろきが、東京港の方からつたわってきた。突風が吹きすさぶにつれ、異様な大音響は近よってきた。
　そのさわがしさに反抗するように、ヘリコプターのエンジンが鳴りはじめた。廻転翼は、大きな鳥の羽音に似た、たよりない音で風を切ってまわりはじめた。操縦席には、いつのまにか熊沢青年が、のりこんでいた。光さんは、よろめきながら、離陸しようとするヘリコプ

ターに走りよった。

国立病院の岩丈な建物ぜんたいが、何かの衝撃で、大きくゆれうごいた。そのため、私たちは、尻もちをついたり、横たおしになったりした。大震動はつづいた。

上昇するヘリコプターの上で、青年と女優が我々に向って、手をふる姿が見えた。しかし、それもほんの一瞬であった。次の瞬間、見えない掌で殴りつけられたように、ヘリコプターは揺れうごき、落下していった。

やっとのことで起ち上った私の、目まいでかすむ眼には、大東京の破滅の開始がうつった。見えないゴジラの脚が、一歩ふみ出すたびに、一キロ四方ぐらいの大穴が、街に口をあけるのであった。透明ゴジラは、家を踏みつぶしながら、進んでいた。

「目をやられた。目が見えない」

と、河下氏は私にとりすがった。

何かの光線が、私たちを焼きほろぼそうとしていた。私の皮膚も、知らぬまに焼けただれていた。

ふり向くと、化物のようになった女探偵が見えた。彼女の髪の毛はぬけおち、むけた皮が彼女の鼻さきや口もとに、垂れさがっていた。咽喉を焼かれた彼女は、声の出ない口をわずかに動かして、私に向って両掌をさしのばした。

「しっかりしなさい」

と、叫んだつもりの私も、すでに発声ができなかった。たえまなく、ゆすりあげる大地は、病院を呑みこもうとしていた。もはや、視力を失った私には、隊員の最期を、見とどけてやることができなかった。

「神よ。あなたはゴジラだったのですか」

という想いが、ブリキの破片のようにきらめいて、かすめ過ぎた。

すると、かつて命令にそむいて偶像を崇拝した、古代の諸民族を、あますところなく打ちほろぼしたエホバの、おそるべき哄笑が、私の耳をつんぼにした。

「神よ。あなたは、ゴジラだったの、ですか……」

発光妖精とモスラ

中村真一郎・福永武彦・堀田善衞

【上】草原に小美人の美しい歌声

中村真一郎

若い言語学者の中条信一は、船室のベッドに仰向けになったまま、吸いかけの煙草(たばこ)を傍らの灰皿のなかへ拋りこむと、手探りで枕もとの大きなパンフレットを取りあげた。そして、その表紙を暫く眺めていた。それがこの退屈な航海中の毎日の習慣だった。しかし、その習慣も明日で終わる。明日は目的地インファント島に、この調査探検船は到着する。だから、このパンフレットを読み返すのも、これが最後である。

「日本国ロシリカ国合同調査探検資料」という活字を、ゆっくり自分に納得させるように見直した後で、頁を繰る。なん度も読んだので、いつも同じ頁が開く。それは「玄洋丸生存者

二等航海士以下四名の談話要約」という頁である。

最近の第八号台風の中心に、中型貨物船の玄洋丸という船は捲きこまれて沈没した。どうしてそういうことになったのかというと、その数時間前に、無線局員の不注意で、通信室の一部を焼く火災が発生し、そのために予備通信機と交換部品を含めて、受信装置の主要部分が全く作動しないという、最悪のことになった。そのために台風特別警告も、避難命令も、全然、玄洋丸には通じていなかった。それが非常に突発的だったこのA型台風に対して、逃げる機会を失わせることになってしまったわけだ。

が、そこまでは必ずしも稀な事件だとはいえない。それから先に起こった不思議な事件が、全世界に衝撃を与えた。この玄洋丸の船員のうち四人が、付近のインファント島へ打ちあげられた。救助隊員は、あるいは遺体があるかも知れないという想定で、この島へ上陸して、生きている人間を四人も発見した。

何故、生きていることが、驚きを誘発したのか。隊員たちは、裂きちぎれた船員服の男たちが、大声で叫びながら、海岸へ向かって走りでてきたとき、「白昼夢」にまどわされているのではないか、と疑ったという。このインファント島は最近、ロシリカ国が水爆実験場に使用し、島の四分の三を爆風と熱とで吹きとばしたばかりで、到底、上陸しても生存可能だとは思われなかったからである。

その生存者たちは、このパンフレットのなかで、こう語っている。

「吾々が意識をとり戻したのは、砂浜ではなく、奇妙な感じの部屋の中だった。そこはかなり広々とした部屋で、周囲が岩石からできているのを見て、地下を刳りぬいて作った洞窟だろうと思った。吾々は、何か植物をたくさん積み重ねてできた寝台のようなものの上に寝かされていた。

そして、吾々が気がついたとき、近くに五、六人の人間がいて、吾々が軀を起こすのを見ると、なんともいえない奇声をあげた。吾々とあまり変わらない人間だったが、一口でいえば、未開地によく見る原住民という感じで、言葉は全然、通じなかった。吾々は彼等からドロドロに煮つまった汁をなん杯か飲まされた。別に不味いものではないし、危険にも思われなかったので、——いや、それよりも空腹に耐えかねていたせいもあって、吾々は自分の方から追加を求めて、飲んだほどだ。それから、植物の実のようなものを、相当、多量に食べさせられた。

彼等は身ぶり手ぶりで、吾々に何かを伝えようとした。その意味は、この島は大変危険だが、ここでお前たちはもう安全だ、というように解釈された。救助されてから、説明され、吾々は非常に驚いたのだが、その危険は放射能障害を意味していたのだと思う。しかし、吾々は、帰国後の国立総合研究所での診断によって、放射能障害はおろか、すでに普通以上の体力をとり戻していることを知ってみると、あの煮つめた汁と植物の実が、何か特別の作用をするものであったと信じないわけにはいかない。

原住民については、吾々に付き添った五、六人しか見ていないが、もっとたくさんいることは殆ど間違いないと思う。その原住民たちが、吾々を案内して階段を昇りはじめたが、その階段の数で、吾々のいた部屋が、かなり深いところにあることもわかった。ただ、今でも不思議でならないのは、電灯もランプも、その外、採光のための設備が何もないのに、どうしてあの地下が明るかったかということである。吾々が漸く太陽の下に再び出られたとき、原住民たちの姿は消えてしまった。そして吾々は救助隊を見つけ、救われたのだ」

扉がノックされ、原子力学者の原田教授が入ってきた。

「中条君、君は呑気でいいね」

と、原田は子どものような赤ら顔で笑った。

「いや、君たちみたいに、毎日、食堂に集まって討論しているのが、羨ましい」

そういって中条は起き直った。

日本、ロシリカ両国政府の申し合わせによってできた、このインファント島の調査団は、両国の物理学者、生物学者、医学者、民族学者などによって構成されている。原住民の言葉を研究し、もしそれが幾分でも解明されれば、調査団の仕事は急進展するだろうという見通しから、ただひとり参加させられた言語学者の中条は、他の専門家との打ち合わせの必要もなかったからだ。

「ネルソンの奴が、また会議の間で、不愉快な態度を取った」

と、原田は眉をひそめて云った。

「いったい、あいつは何が専門なのだ」

と、中条は訊いた。

ネルソンはこの調査団のロシリカ側の事務係というような名目で参加してきた。日本語がうまい男だが、その傲慢な態度は、たびたび、日本側の団員たちを不快がらせている。

「秘密機関の男かも知れない。……しかし、これは純然たる学術的目的の団体なんだから、ああいう男を加入させたロシリカ政府の良識を疑うよ」

と、原田は椅子の背を両手で抱えて、またがるようにして、中条に云った。

「日本はロシリカの植民地じゃない」

と、中条もネルソンの冷酷な目つきを想い出して呟いた。

「あれは人殺しの目だ。……」

翌朝、甲板に銅鑼が鳴り響いて、一同は上陸準備をはじめた。

彼等は新たな設計によって作られた、放射能遮断服を身にまとった。それには小型のサイレンが付着されていて、胸のボタンを押せば鳴り響き、それによって、危険を同僚に知らせることができる。ヘルメットに備えてあるイヤホーンが、この明るく澄んだ音色を把えてくれるはずだった。

隊員たちは緊張した表情で、黙って上陸用舟艇に乗りこんだ。隊長の物理学者ラーフ博士は、島を睨むようにして、独語した。

「秘めた怒りを感じさせる島、そして孤独を訴えている島」

中条の仕事は、できるだけ原住民を発見し、その言語の体系を解くことだった。漂流者たちは確かに原住民に会ったという。しかし、水爆実験を行なうまでは、このインファント島が無人であることは定説となっていたのだ。だから、安心してロシリカ国は実験を行なったのだ。しかし、あの玄洋丸の生存者たちが四人もそろって、発狂したのでなければ、何処かに、原住民が潜んでいるに相違ない。

他の学者たちは上陸地点で、早速、調査にかかっている。中条だけは、ひとり先になって、草原のなかへ分け入って行った。名前も知らない巨大な草が彼の頭よりも高く生えている。水爆実験後、短時日で、このような草原ができ上ったとは、信じられない

彼はふと不吉な予感を感じた。蛇か？　いや、目のまえの大きな毒々しい色彩の花を持つ、風変わりな植物の蔓（つる）が、軟体動物のようにゆるやかな屈伸をみせている。盲人が杖の先で探っているように、蔓はあたりを這いながら、次第に中条の方に伸びてくる。

中条は飛びすさった。

その瞬間、鎌首をもたげた蔓は、きらめくように中条の脚にからんだ。もぎとろうと蔓を

摑んだ中条の腕に、どこで狙っていたのか、別の蔓がしなやかに絡んできた。それらの蔓の先端には、粘液をたらしながら、うごめく吸盤のような口が見えていた。

吸血植物！　その吸盤から血を吸うのだ。たちまち何本かの蔓が中条の軀に、ものうげに巻きついてきた。

中条は、わずかに自由になる手先を使って、胸のボタンを押した。

隊員たちが駆けつけてきた時は、蔓は大きな花のしたにみな、巻きついて、茫然とした中条が、その花を見つめたまま、酔った人のように、上体をふらつかせていた。

「どうしたのだ。中条君」

と、原田が訊いた。中条はこの吸血植物と今まで格闘していたことを、とぎれがちに話した。

「しかし、あの不思議な、小さな人間が来てくれなければ、ぼくも助からなかったろう」

隊長は鋭く訊きかえした。

「不思議な生物？　原住民じゃないんだね？」

「いえ、生存者の報告によれば、原住民は吾々と変わらない身長の持ち主のはずです。だから、もっと別な……」

「子どもなんじゃないのか？」

と、生物学者がたずねた。
「いや、大人のようなのだ。想像できないくらい小さな女。身長五、六十センチの……」
「なに、小人の女？」
と、ネルソンは叫んだ。彼は狩人のように、細めた瞼の間から、狂暴な視線を走らせ、口元に気味悪い笑みを浮かべた。

その夜、船に引き揚げた一同は、調査の結果を整理し記録するために、熱心な討論を行なっていた。
ただひとり、中条はあの毒々しい花のまえに立ちつくしていた時の、茫然とした表情をそのまま持ち帰ってきて、隊員たちから離れ、甲板から海を見下していた。慌しい足取りで通りかかった二人の隊員が、中条のうしろで足をとめた。
「どうしたんだ、中条君」
と、声をかけたのは原子力学者の原田だった。
中条は相変わらず黙ったまま、顔をあげて振りかえった。
「君はすっかり元気がなくなってしまった。医学班のところへ行って、診てもらった方がいいんじゃないかね」
と、原田は心配そうに訊ねた。もうひとりの同僚は、

「じゃ、原田君、今の問題は明日、上陸してから、もっとよく調べよう」
と、早口にいいながら、タラップを降りて行った。
中条は何かに気をとられているように、ぼんやりした微笑を作り、
「ぼくは病気じゃあない。事実の方が、ぼくらの想像を超越しているだけだ」
と、ひとりごとのように答えた。
「いや、あの花には何か麻薬のようなものが、あるのかも知れないよ。君は酔っているみたいだぜ」
と云いながら、原田は煙草に火をつけた。
「いや、頭痛もしないし、足もふらつかない」
そう答えて、中条は甲板のうえに両足を開いて立ってみせた。
「しかし、君はあの時、幻覚を見たのだ。あの花の匂いをかぎながら……」
「いや、それが幻覚じゃあない。たしかに小人の女が現われたのだ。明日になればわかる」
「どうするのだ。またあの草原のなかへ入って行くのか。行くなら、ぼくも同行しよう」
「一緒に来たまえ。そうすれば、ぼくが幻覚にまどわされているのではないことがわかるよ」
原田は眉をひそめて、中条の肩に手をかけた。
「とにかく、今夜はゆっくりと眠ることだな」

中条は大きく目を見開き、
「明日が愉しみだよ」
と、今度は、はっきりとした自信のある声で、原田に云った。

サイレンの響きが、明るい空の下で鳴りはじめた。海岸にいた隊員たちは、また仲間の誰かが吸血植物に捲きつかれたのかと思い、音の方へ集まってきた。
中条と原田とが、昨日の花のまえに立っていた。今度は凝然としているのは原田の方だった。中条は集まってきた仲間に向かって叫んだ。
「さあ、小さい女の実在がこの通り証明された」
一同は中条の指さすところを見た。地面にひとりの小型の女が立って、一同を見上げていた。身長六十センチ余り、乳房と腰だけを掩った美しい女性が、不思議に輝かしい小さい瞳で、隊員たちを見回している。
「昨日の経験で、ぼくはこの美しい小人が音響に対して非常に敏感なのだろうという推理を得た。それでこのサイレンを鳴らしてみた。実験は成功した。この通り、彼女は現われでた。もう疑うことはできないだろう」
一同は感嘆して、この自然の傑作を見下していた。
その時、突然、小美人は話しはじめた。——それは、言葉というより、歌だった。かつて

人間の喉から生まれるのを聞いたことのない、透明な歌声が、彼女の小さい口から、次々と溢れ出て、それに合わせて、彼女の四肢は舞踊のように動く。

中条はじっとその旋律に耳を傾け、また身体の動きを追っていた。それから、目を小美人から放さないままで云った。

「この言葉は、どの言語体系にも入っていない。全く独自のものだ。ここには主語と述語しかない。それは殆ど言葉というより、暗号だ。……しかし、水爆実験はもうしないだろうか、と訊いているように思われる」

女は話しやめ、中条の顔を見上げて微笑した。その信頼に満ちた表情は、中条の心のなかに、名状しがたい幸福感を湧きださせた。彼は思わず、その女に手を差し延べようとした。

その時、背後で、ラーフ隊長の苦々しい言葉が聞こえた。

「中条、この島には、もう演習上の価値はない、と伝えてくれ」

中条はそれを、この女のように旋律に翻訳する能力がないことを悲しむように、黙って微笑しながら、首を横に振った。

小美人は、顔に歓喜の表情を浮かべた。中条は自分の気持ちの通じた喜びに、何度も女に向かってうなずいてみせた。

女は片手をあげ、それから急に走り去ろうとした。

その時、不意にネルソンが女の前に飛び出した。そして、逞しい腕で、女をかかえあげた。

「なにをするのだ！」
中条は驚いてネルソンの肩に手を掛けた。
「乱暴をするな」
ネルソンは振り向くと、軽蔑的な目で中条を見た。
「貴重な資料だ。資料は採集する」
腕のなかでもがいていた女は、ネルソンの顔を見上げ、自分が捕えられることを察したのだろう、突然に鋭い叫び声をあげた。それもまた、素晴らしい歌だった。それは暑い空のなかへ吸いこまれて行くような想いに、一同を誘った。
「原住民だ！」
と、誰かが叫んだ。
まわりの背の高い草の間から黒い肌の裸の男女が、続々と現われてて、一同を取りまきはじめた。彼等の表情には殺気が溢れている。
「危険だ！　ネルソン、その女を放せ！」
と、ラーフ隊長は叫んだ。
ネルソンは舌うちをしながら、女を地上に降ろした。
原住民たちは忽ち、その小美人を取りかこみ、一瞬の後には、みな、草の間に消えてしまった。

「何を恐れているのだ。吾々にはピストルだって、ライフルだってある」

と、ネルソンは隊長と中条とを、交々睨みながら云った。その目には醜い情熱が燃えていた。

「暴力の必要がどこにあるのだ。ネルソン」

と、中条は大声をあげた。

「アフリカで猛獣狩りをするのとはわけが違うぞ。彼等も吾々と同じ人間なのだ」

「人間？」

と、ネルソンは両手を差しあげて、嘲笑した。

「あの小さい動物が人間だというのか？　あれが人間の女なら、君、あの女と結婚するがいい。……」

ネルソンの顔に、卑猥な笑いが浮かんだ。

「ジャップと小人女！」

ラーフ隊長が鋭い声で停めた。

「ばかな争いはやめたまえ。学問上の討議なら、いくらでも続けるがいいが……」

一同はふたたび、自分の調査に戻って行った。中条はひとり残り、小さな女の消えて行った植物の間を見詰めていた。そして、何度か胸のスイッチに手をやりかけては、また諦めた。

もしサイレンを鳴らせば彼女はまた帰ってくるだろう。あの不思議に幸福な想いに人を誘う目つきをして。……しかし、その音は隊員たちをもまた呼びよせる。そして、今度はネルソンは本当に彼女を捉え、「貴重な資料」という言葉で、一同を承服させてしまうかも知れない。

彼は空想する。この調査の終わるまでに自分はどこかで、また彼女と会うだろう。そうして彼女のあの単純な言葉を習得しさえすれば、彼女の心にさえ、自分は触れることができるようになる。あの小さい身体のなかの心は、なんと小さく、そして可愛いことだろう。が、それは文明の汚れを入れることができないほど小さいが故に、また自分たち文明人の失ってしまった、純粋な感情が、真珠のように、静かな光を放って生きているのだろう。……

中条は突然に、夢想を中絶した。自分の今の想いに答えるかのように、島のどこかから、あの不思議な旋律が立ち昇ってきたのだ。それは確かに、彼の想いに答えている。その旋律は、彼の想いと対話をするように、断続する。

彼は立ちあがると、二、三歩、歩みでた。歌声が途切れる。中条は叫ぶ。

「小美人！」

歌がそれに答える。

「小美人！」

また同じ旋律が、短く繰りかえされる。

「小美人！　小美人！　小美人！」

今度は、島の東から、また西から、旋律が呼応するように立ち昇りはじめる。それはやがて、南からも北からも、相応じるように、別の声で、しかし、ひとつの旋律のまわりに、美しいハーモニーを響かせながら、ひとつのコーラスを作って行った。

【中】四人の小妖精見世物となる

福永武彦

沿岸警備隊所属の第四救助船が、インファント島の調査探検隊の一行を乗せて、早朝、東京湾に入港した日の、ラジオ、テレビ、新聞は、全機能を動員して埠頭に一行を迎えた。

危険な水爆実験の島へ、日本とロシリカとの有能な学者たちを送った以上、万一の放射能障害を気づかう気持ちが、出迎えの全員の胸の底にあったから、次から次に、元気な足取りでタラップを降りて来る学者たちが、一人も欠けずに、自信ありげな微笑を見せていることは、この調査隊が南海の孤島で十分の成果を収めたものであろうことを、まず約束していると言ってもよかった。

そこで雲集した報道陣の諸君は、なんとか一言でも結果を聞こうとして殺到していたのだが、これはものものしく警固に当たった警官隊によって阻止された。調査隊の一行は全員まず中央病院に送られて、放射能に関する詳しい検査を受けなければならない。万事はその後

である、と簡単に発表された。

　このこと、つまり東京港の埠頭で、折角の歓迎陣がなんのお愛想もなく、というのはなんの公式声明も与えられずにすっぽかされたことは、かえって特殊な効果を生んだ。わが国の新聞は、この事実によって、インファント島の探検では、意外な重要きわまりない発見があったに違いない。調査隊の一存では発表ができないので、ロシリカ政府と連絡を取っているのではないか、と推測した。一方これに対してロシリカ本国からわが国に特派されている新聞記者諸君は、むしろ調査隊に対して食ってかかるような記事を本国に打電した。

　もともと、この日本ロシリカ合同調査隊が出発するに当たって、一人の新聞記者をも乗船させないという秘密主義（と有能なロシリカン・プレスの記者は論難した）から、早くもそうした感情はくすぶっていたので、その一行がめでたく帰還したのに、声明文さえも用意していないとは怪しからん、というのが彼等の論旨だった。しかしどっちにしても、こうしたわが国およびロシリカの新聞の論調が、全世界に、焦躁に近い烈しい期待感を与えたことは疑い得なかった。

　その翌日、調査隊の公式声明が、隊長ラーフ博士と情報事務を掌っている（と称する）ネルソンとによって発表された。日本側からは、一人の隊員も顔を出していなかった。しかも、さんざんじらしたあげくの発表にしては、それはあまりにも簡潔で、要するに隊員はそれぞれ研究の結果をまとめるのに数カ月を要するから、正式の発表は三カ月後に行なう、それま

では一切ノー・コメントである。諸君は絶対に個々の隊員からスクープを得ようなどと試みられてはならない、云々。

R・P（ロシリカン・プレス）の記者を初めとして、その場にいた全員がいきり立ったために、ネルソンとの間に簡単な一問一答が許されることになった。

――所期の成果はあがったと認めてもよいのか？

――イエス。

――水爆の影響はインファント島に於いて認められたか？

――イエス。

――しかもなお、原住民は生存していたか？

――イエス。

――その理由は判明したか？

――ノー・コメント。

――何か特に秘密にすべき理由がそこにあるのか？

――……（ネルソンは肩をすくめた）

――何かその他にも重要な発見があったのか？

――（ややためらった後に）イエス。

一問一答はいい加減のところで打ち切られた。しかし奥歯に物の挟まったようなネルソン

の態度には、いかにも人をじらすようなものが隠されていた。記者会見の終わりに、彼は一言、「君たちはやがて見るだろう」と謎のようなことを言った。

日東新聞の社会部記者福田善一郎は、この記者会見にあきたりなかった一人だった。調査隊に参加したロシリカ人の学者たちは、早々と本国に引き上げて行ったから、彼は日本側の学者たちを、研究室から自宅へと次々と追い掛け回した。しかし彼等は容易に面会してくれず、会っても実のあることは殆ど喋らなかった。ただ原子力学者の原田教授だけは、彼の熱心さに半ばあきれて、一つだけ有益な忠告をしてくれた。それは冗談半分の言いかただったが、「インファント島に密航するさ、そうすればわかる」それからこうも付け足した。「中条君に原地の言葉を教わって行くんだね。但し、命がけだよ」。そして福田善一郎は熱血漢だったので、この冗談を真に受けた。

中条信一は大学の研究室に閉じこもったきり、決して新聞記者に会おうとはしなかった。彼は帰国してからひどく愛想が悪くなり、何やら研究に没頭しているように見えた。新聞記者の福田がインタビューに成功したのは、彼がオセアニアの言語分布について教わりたいと申し込んだからだった。その実、福田は言語学のことは何も知ってはいなかったのだが。

言語学者と新聞記者、ところがこの二人は奇妙にウマが合って、二、三度会ううちにすっかり仲が良くなった。福田はそこで、彼の本心を、つまり、インファント島に渡って自身調

査をやってみたいから、ご存じの限りの原地の土語を教えてほしい旨を、白状した。中条信一の研究はすでに相当に進捗していて、テープに取った言葉がカードに分類されていた。

「羨しいな、僕も行きたいな」

と若い言語学者は遠くの方を見詰める目つきをした。

「行きませんか、一緒に。中条さんと一緒なら僕も安心だ」

「僕は行かれない。それに君、放射能のある島ですよ、万一ということもありますよ」

「なに、原住民と親しくなって、例のドロドロの汁を飲ましてもらえば大丈夫なんでしょう」

と福田は平気の平左だった。

「君が新聞記者でさえなければ、僕は君にいろんなことを教えてあげられるのだが」

「僕は約束は守りますよ。しかし、なぜなんです。なぜ、こんなに秘密秘密で凝り固まっているんです？」

「それは僕には言えない」

「僕個人の考えでは」と福田は皮肉な表情で言った。「これはロシリカ政府の要請によって、政府があなたたち調査隊員を縛っているんじゃないですかね。あなたがたは、みなさん大学の先生で、つまりは公務員ですからね。ただわからないのは、なぜロシリカがそれほど圧力を加えるかってことだな。どうです？」

中条信一は曖昧な表情を浮かべたきり答えようとはしなかった。

福田善一郎は二カ月の休暇を取って、インファント島へ密航した。彼がどのような方法で便船を得たかは省略しよう。彼が到着してから正確に三十日後に、迎えの船が来る手筈になっていた。

福田はもちろん、放射能遮断服を着込み、中条が彼のために作ってくれた地図を頼りに、島の奥地を目指して進んで行った。福田の決心が牢乎(ろうこ)として抜きがたいのを知ると、中条はある程度まで（つまり原住民の言葉とか、島の地勢とか、危険な吸血植物の存在とかについては）親切に教えてくれた。「それ以外のことは、君が自分自身の目で見るさ」と中条は言った。

福田善一郎は怖いもの知らずの青年だった。彼は身の丈よりも高い草原を、吸血植物とやらを警戒しながら、そろそろと進んだ。こっそりと草の陰から、自分の方を窺う人影を見出した時には、驚くよりも寧ろほっとした。彼はかねて中条から教わって十分に習い覚えた土語を操って、彼等に話し掛けた。冒険は彼の計算通りに運んだ。原住民と思われる土人たちが数名姿を現わし、彼を案内した。草原を抜けると山岳地帯になり、大きな岩がごろごろしたあたりに洞窟があった。一行はその中に入って行った。福田は例の「玄洋丸生存者の談話要約」を暗記するほど熟読していたから、この洞窟の抜け道が、そして岩を刳り抜いたと思

われる部屋が、仄かに燐光を発しているのにも、また、放射能遮断服を脱がされてから、例のドロドロの汁を飲まされたことにも、ちっとも驚かなかった。

こうして福田はこの地下の洞窟の客となった。言葉が通じるほどありがたいことはない（もっともそれは言語学者の中条信一の研究のお陰なのだが）。曲がりなりにもお互いの意思を通じ合うことによって、土人達は彼を信頼し、彼は新しい知識を得た。土人等は、神話とも現実ともわからないような、一種の超現実の時間の中に生きているらしかった。福田は学生時代に、比較神話学や民俗学を熱心に勉強したことがある。こういう未開の野蛮人にとって、世界は彼等だけに限定されていた。インファント島はロシリカ国の水爆実験が行なわれるまで無人島とみなされていたくらいだから、この島の原住民は遠い過去から、彼等だけ孤立し他の島と隔絶して、暮らして来たようである。その神話もまた、一種独得の奇妙なもので、福田は聞くに従ってそれを採集して行った。

インファント島の神話のごく根幹のところは、次のようなものである。

昔、この世がまだ渾沌として定まらなかったころ、最初に現われたのは、永遠の夜を治める男神アジマである。霧のように、雲のように、濁って流れて行くもののうち、彼は重たい水気のあるものを下に沈め、軽やかなものを上に押しあげた。これによって海が生まれ、空が生まれた。

アジマは海の底から、最も重いもの（地面）を引き上げて、二つの島を創った。アジマは仕事にくたびれて砂ばかりの島の上に横になり、鼾をかいて眠った。この鼾から、雷鳴と、暴風と、津波とが生まれた。

男神の支配する島ではいつまでも夜が続いた。彼は空と、海と、島と、自然のさまざまの現象とを創ったが、遂に退屈で耐えられなくなり、自分の身体を縦に二つに引き裂いた。その右半分は、依然として男神アジマとして生まれ変わった。左半分は女神アジゴとして生まれ変わった。

女神アジゴは昼を治めた。彼女は太陽を創った。彼女が陸に向かって息を吐くと、草や木や鳥や獣が生まれた。海に向かって息を吐くと、魚が生まれた。男神はそこで月や星を夜空に創って対抗した。しかし二人とも創造の仕事に疲れたので、やがて一緒に寝た。

やがて生まれたのは巨大な卵だった。これは今までのように、男神あるいは女神が単独で生んだものではなく、二人の間から生まれたもので、従って昼と夜との両方の特徴を持ち、太陽のように、また月のように光った。しかしこの卵モスラはいつまで経っても孵らなかった。

次にアジマとアジゴとの間から、男女二人の人間が生まれた。人間は彼等自身の力で、次第にその数をふやして行き、やがて島に溢れた。

次に男神と女神との間から、今度は無数のごく小さな卵が生まれた。その卵もまた、夜に

は星のように光った。卵は幼虫になり、蛹になって飛び立った。

男神アジマは、この無数の小さな卵を生んだことは、女神の失敗だときめつけ、はなはだ怒った。彼は人間にも、鳥や獣や魚にも、ひとしく死を送り、その半ばを殺した。その上アジマは、怒りのあまり自分の身体を縦に四つに引き裂いた。島は鳴動して崩れ落ちた。身体の四つの部分は、それぞれ暁の星、宵の星、北の星、南の星へ飛び去った。

女神アジゴは嘆き悲しみ、永遠の卵モスラの前に自分の身体を犠牲（いけにえ）として捧げその前で身体を縦に四つに引き裂いて死んだ。しかしその四つの部分から、アジゴをごく小さくした、人間の背丈の半分ほどもない四人の若い女が生まれた。彼女たちは夜でも身体じゅうが光り輝いた。彼女たちはアイレナと呼ばれ、永遠の卵モスラに仕える巫女として、永遠の生命を持っていた。彼女たちは、以前に生まれた無数の小さな卵が幼虫になって繭をつくる時の、その糸を取って織物を織った。その糸もまた、夜でも燐のような光を発した。

女神アジゴは死ぬ前に予言をした。

「アイレナはモスラに仕え、モスラは必ず島を守る」……

福田善一郎が、島の長老たちから聞いたこうした神話は、単に一つの荒唐無稽のストーリー、どんな民族でも祖先から受け継いで来ている一種の文化的な遺産にすぎない、と彼には思われた。

ある日、彼は洞窟の外に出てみようとして、トンネルの途中で道を間違えた。というより

も、どこからともなく聞こえて来る歌声のようなものに誘われて、彼は出口の方へ行く代わりに、反対に奥の方へ進んだ。何等の照明もなくて仄かに蒼白く光っているこの地下の抜け穴を辿りながら、彼は、それが神話の中の、無数の小さな卵、幼虫、蛹、蛾（それらは常に発光した）と関係があるのではないか、と疑い始めていた。

福田が抜け穴をついにくぐり抜けた時の、彼の驚きは殆ど形容できない。そこは周囲を山壁に囲まれた擂り鉢型の盆地で、自然に階段をなしているその最上段に、巨大な、蒼白く光り輝く卵が横たわっていた。一段低いところは神殿風の建物で、四人の、これはまたあまりにも小さな女たちが、機を織っていた。彼女等の身体も、身につけている衣装も、機にかけた織物も、すべて光を発していた。中条信一が「自分自身の目で見るさ」と言ったのは、つまりこれだったのだろうか。そのあまりに神秘的な美しさに、福田は自分の目を信じることができなかった。四人の小さな女たちは、天使のようなとでもいうほかはない声で、合唱した。

翌朝、福田が幸福な気持ちに包まれて目を覚ました時に、彼は土人たちが慌てふためいているのに気がついた。

「アイレナが行った。アイレナは行ってはならない」

福田はなんのことやらわからず、不安に駆られて土人等と一緒に洞窟を抜け出て戸外へ出た。音色の美しいサイレンの響きが海岸の方で鳴り続けた。

「アイレナは行ってはならない」

福田は海岸を眺めて、そこに戦慄すべき事件が展開しているのを見た。放射能遮断服を着込んだ幾人もの男たちが、手にピストルやライフル銃を構え、武器を持たぬ土人等に対峙していた。福田が昨晩見た小美人の一人が、すでに檻の中に捕えられて、歌うような声で叫んでいた。土人たちは彼女を助けようとして近づき、一人ずつ銃弾に倒された。それは無抵抗な人々に対する虐殺だった。

「よし、そのくらいで逃がしてやれ。そして奴等のあとを追い掛けるのだ。女たちはまだほかにもいるかもしれんぞ」

福田はその声を聞き、隊長らしいその男の顔を見た。それはネルソンだった。その瞬間に、彼はこの憎むべき陰謀を、それが意味するものを、新聞記者の本能で理解した。しかし土人等と一緒に逃げ出そうとした時に、彼は草原の中で転倒し、そのまま気を喪ってしまった。

インファント島の秘密　ついに明らかとなる　四人の小美人　妖精か天使か　ネルソン氏の公式声明

こういう最大限にセンセーショナルな見出しが、日本とロシリカの全新聞の第一面を飾った。ネルソンはR・Pを初めとする各社の記者に、まずこの三カ月間は、インファント島からデータを運び寄せるために必要だったと弁解した。そのデータが、すなわち諸君がこれか

ら見るところの四人の妖精である。私はあえて四人の女とは言わない。この者たちは歌うだけで言葉は発しない。大きさは子どもよりも小さいが、決して子どもではない。インファント島には、これらの四人のほかに同じ種族と思われるものは存在しなかった。これら四人は生殖を行なわず、かつ不死であるように思われる、云々。

そして四人の小美人、あるいはネルソンのいう妖精たちは、好奇心に燃える報道陣の眼指しの前に、その姿を見せた。但しそれは、写真班が写真を撮るのに必要な、ほんの五分間だけだった。しかし、その印象は圧倒的だった。

「私は諸君をもっと驚かせることができる。しかし、諸君はいずれ、それを見るだろう」

ネルソンはもったいぶって、最後にこう予言した。

その言葉は、小美人たちの公開という形で、やがて証明されることになった。学術的資料の公開という名目はついていたが、R・Pがいみじくも名づけたように、それはまさにフォア・フェアリーズ・ショー（四人の妖精のショー）だった。それは東京の最大の劇場で、前代未聞の高い入場料を取って行なわれた。その初日の慈善（チャリティ）ショーには、総理大臣やロシリカ大使を初めとして、学術的ということには縁のない貴顕淑女が大勢つめかけた。開幕のベルが鳴り、ロシリカ人と日本人の二人の司会者が長々と演説をし、そこで突然、全照明が消え去った時に、自ら発光する四人の妖精たちが、いかに人々を驚かせたかは言うまでもないだろう。

言語学者の中条信一は、この興行に対して人道的な憤りを覚えた人たちの一人だった。彼が帰国以来、なんとなくぼんやり考え込むことが多くなったのには、島でのあの小さな女との出会いが作用していることは確かだった。恋愛というのではない、しかし彼はまざまざと彼女の声（歌うようなその声）を心の中で聞き続けていたのだ。あの新聞記者の福田が帰って来ればいろんなことがわかるだろう、と思っていた。

福田はまだ帰らなかったが、しかし中条には、今や多くのことがわかった。インファント島調査隊は、政府から研究の発表を禁じられた。それは明らかにロシリカ政府の干渉によるものと思われる。そしてロシリカの首脳部を動かしていたのは、情報連絡係という仮面の下に隠れていたネルソン、この稀代の興行師の仕業であったに違いない。なんと巧みな宣伝をこの男は用意したことか。これこそ無限の富に憑かれている男の、最大の博奕、非人間的の汚名をも辞さない大博奕に他ならなかった。中条はついに決心して、ネルソンに面会を求めた。ネルソンも、彼の調査隊員としての肩書きを重んじて、五分間だけ、貴重な時間を割くことに同意した。しかし、ネルソンは、熱心に訴える中条の言葉に、不遜な微笑を浮かべるだけだった。

「非人間的？……あれは人間じゃありませんよ。物ですよ。私がインファント島で採集した資料。つまり私有財産です。島へ帰せ？　とんでもない。中条さんはまだショーも見ません

ね。私が指定席の切符をあげるから、見てご覧なさい。あの連中は何一つ束縛されているわけではない。島へ帰りたいなどと言ってはいない。嬉しそうに歌っていますよ」

中条は、到底ネルソンに太刀打ちすることができなかった。彼はすごすごと引き上げ、なんとか小美人たちに会いたいと望んで、とにかくもらった切符で劇場にはいった。照明が消えると、四人の妖精たちはひとりでに光りながら歌った。超満員の客の中で、中条ひとりが、彼女等の歌うハミングのような合唱の中に、ある種の意味を感じ取ることができた。それはかつての島での経験が、彼に、この四人のうちの一人と、謂わば、テレパシー（精神感応）によって通じ合っていたせいかもしれなかった。確かに、その歌声は明るく、澄み切って幸福そうな響きを持っていた。ただその中に、何ものかへの期待、超自然的なものの呼び掛けが、ぞっとするような確実な未来として、含まれていた。

福田善一郎は夢から覚めたように、地下の洞窟の一室で目を開いた。幸福感から恐るべき悲劇への転落、――それは一場の悪夢としか言いようがなかった。しかし、土人等は殺戮され、生き延びた者たちは怪我人の世話で忙しかった。アイレナは四人とも盗み去られた。福田もまた負傷して、今まで看護を受け、今や共にこの悲劇の後味を味わうことになった。

原住民たちは、もはや福田にその秘密を隠さなかった。彼は洞窟を奥へ抜ける抜け穴を通って、かの神殿の前へと案内された。そこには昼は太陽のように、夜は月のように光り輝く、

永遠の卵モスラが横たわっていた。そして土人たちは呪詛と哀愁と悲願との入り混った、奇怪な舞踊を歌いおどった。その儀式は夜ごとに続けられた。

福田は今に至っても、まだ悪夢の感じから覚め切ることができなかった。というのは、毎晩この儀式に加わって見ているうちに、この巨大な卵は、一日ごとに大きくなり、その光も一層輝きを増すように思われたからだ。そしてついにある晩、轟然たる音響がとどろき、土人等がひれ伏している間に、卵の殻は破れ、円筒形の途方もなく巨大な幼虫が生まれた。頭と胸と腹とからなる、その全身は、やはり蒼白く光り輝いていた。

「宇宙の神アジマは蘇った。永遠の卵モスラは孵った。モスラは必ずアイレナを守る」

土人等は呪文のように叫んでいた。

その間に生まれたばかりの幼虫は、八対の脚で匍匐すると、海岸の方向へ素晴らしい速さで消え去った。福田は自分の目を凝ったがもうその時彼の前には、はてしない夜の闇と、土人等の黒々とうずくまる姿が、あるばかりだった。

【下】モスラついに東京湾に入る

堀田善衛

暗い夜の海。一隻の漁船が月光を浴びて南下していた。漁船は漁船だが、この船はそのマストに日東新聞社の社旗をかかげていた。新聞社に臨時にチャーターされて福田を迎えに行

くのである。その乗組員の一人が、甲板で月光に照らされながら煙草を吸っていた。

海は静かなうねりがあるばかりで、平穏な航海であった。海は静かだったのだが、遠くから異様に湧き立つような潮騒の音が聞こえてきた。男は聞き耳をたてやがて立ち上がって自分の目を疑った。彼ははじめ、これが話に聞いている白鯨というものなのか、と思いかけたが、そうではなかった。双眼鏡をとってきてのぞいて見、彼はいっそう驚いてしまった。巨大な、全長百メートルもあろうかと思われる、魚でも鯨でもなく、白味をおびていた太くまるいものが、波浪を湧きたてるようにして泳いでいる。船の進行方向とは反対に、北西へと異常な速さで進んでいる。ブリッジへ駆け上がるようにして彼が叫んだ。

「おい、でっかいカイコが泳いでいるぞ……」

怪物は小さな漁船などふりむきもせず、蒼白い微光を放ちながら、ときどきは異様なうめき声さえ発して、うねりを乗り越えて行った。

中条信一は唇をかみしめて舞台を見守っていた。彼の横には、助手の花村ミチ子がすわっていたが、彼女は、少々当惑していた。彼がインファント島から帰って来て以来、言葉少なくなり、じっと机に向かって考え込んでいたり、あるいは出し抜けに怒り出したりするので困っていたのだが、この花やかな舞台を見守って唇をかんでいられるのも、彼女にはやりきれなかったのだ。なぜなら、舞台の上の四人の〝妖精〟の歌声は、つかずはなれず、どんな

音楽のリズムにも乗って行き、あたかも現実の音楽を伴奏にした、超自然のハーモニーのように聞きとられ、人々をほとんど陶酔させるほどであったから。そのハーモニーは、ジャズのビートにも、ラテンのリズムにも、また重音楽の弦の流れにも、不思議に自然にのって流れた。

その日の終幕は、ネルソンがこの国の若手の作曲家に巨大な作曲料を払ってつくらせた交響楽団伴奏のものによって飾られた。音楽は、生の音楽に、いわばはじめて電子音楽をかさねることができたような効果をおさめた。

演奏は終わった。人々は手が痛くなるほどに拍手をした。がしかし、不思議なことが起こってしまったのだ。〝妖精たち〟が歌いやまないのである。中条信一は、オペラグラスに目をこすりつけるようにして、妖精たちの表情を注視していた。花村ミチ子が、「こむといけませんからもう出ましょうか」と話しかけても返事もしなかった。

中条は、耳に異様な音をとらえていた。彼女たちは、ただひとつの言葉をくりかえしているのだ。

……モー……スー……ラー……

……モー……スー……ラー……

……モー……スー……ラー……

オペラグラスをのぞいたまま、

「モー……スー……ラー……、モスラ、モスラ……」

と中条はくりかえしていた。

オーケストラの指揮者が、音楽はもうおわったのだと注意したとき、中条はオペラグラスのなかに、それまで悲痛な表情をしか見せなかったと思われる〝妖精〟たちが、不思議に明るい顔をし、うち一人は明らかに笑ってさえいるのを確認した。仕事が――とにもかくにも仕事の一日が、おわったことを喜んでいるのだろうか？　そうかもしれない、いや、しかし……、と中条は迷いに迷った。

……モー……スー……ラー……

あれは、何かに対する呼び掛けではないのか。

花村ミチ子がおどろいたことに、中条信一は物も言わずに廊下にとび出し、人々の流れとは逆に楽屋へ通じるドアへと突進して行った。その結果は、しかしむなしかった。楽屋は厳重に警戒されていた。首相とロシリカ国大使とが訪問していたからであった。最近この国ではロシリカ国と軍事条約が結ばれ、この条約問題をめぐって国会の内外に多大の紛乱がまきおこされ、条約は国民の十分な納得のいかぬうちに締結されてしまったのであった。だから、首相とロシリカ大使とのこの楽屋訪問は、軍事条約問題後ちょっと気抜けのしたような国内情勢に、やわらかい微風を送るような効果をもつようにと、あらかじめ配慮されてあったものである。中条信一などの出る幕ではなかった。彼はボディー・ガードに、いとも簡単に押

し出されてしまった。

本土をはるかに離れた海上では、漁船の上でラジオを聞いて福田記者が苛々(いらいら)していた。苛々する以上に、乗組員に繃帯をかえてもらいながら、彼はもうほとんど怒っていた。四人の〝妖精〟アイレナのことは言うまでもなく、この漁船の乗組員が夜の海上で目撃し、かつ乗船してのち彼が無電で報告したモスラについて、ラジオはきわめて簡単に、巨大な流木らしいものが漂流していると報道しただけであった。インファント島でのこと、またモスラについては、福田も中条信一が原子力学者の原田氏と相談しないで、これらの探検隊員たちの確認なしで社のデスクがいったい信用するかどうか疑念があったので、きわめて簡潔な報告をしか、いまだ送っていなかったのであった。彼は一刻も早く空路のある島へ到着することをねがっていた。

しかし中条信一は、福田記者の帰還を待ってはいられなかった。彼は思い切って新聞社を訪ねた。訪ねてみて中条がおどろいたことには、〝発光妖精〟たちに関することは、すでに芸能記者の担当ということになってしまっていた。現代ではどんなに重大な事件でも、直ちに芸能化されることを避けがたい。原子爆弾(アトミックボン)から名をとったアトミック・ガールズなるラインダンスが、アイレナたちの合唱(ハーモニー)のあいだつなぎをする世の中である。

翌日の新聞をひらいてみて、そこに、読者は四人の〝発光妖精〟アイレナによってなしとげられた音楽上の文字通り未聞の達成と、騒乱のもととなり、国際信用一般にまで拡大されて考えられていたロシリカ国との関係までが、この政府的には中立である〝妖精〟によってその緊張を緩和されるかもしれぬとして、首相とロシリカ大使とが妖精たちと酒瓶とを乗せたテーブルを前にしての握手の写真がのっているのを見出した。政治の世紀である現代にあって、芸能もまた政治に利用される、これもまた避けがたかった。また、妖精たちは酒瓶とともに、高級社交界（ハイソサエティ）の宴会のツマにまで使用されそうであった。

その新聞の下の方に、太平洋に巨大な流木らしきもの、という小さな記事があった。別の新聞には、単に正体不明の流失物とあった。はじめ中条信一は何気なく見ていたのだが、そのうち、ふと気付いた。彼の耳には、まだ昨夜の、

『……モー……スー……ラー……、モー……スー……ラー……』

という、あの超自然の呼び声のような、しかも現実に耳にしたときには哀切なものを含むアイレナたちの合唱がひびいている。

彼はすぐに大学へ行き、花村ミチ子をつれて物理学教室に原田教授をたずねた。顔を見るなり、いきなり、

「モスラだ、この記事、モスラだ！」

と叫んだが、いっしょに探検に行った原田教授にとっても、モスラであれモンスターであ

れ、なんといわれてもどうしようもなかった。巨大な流木という記事を信ずるほかなく、中条は中条で、これまた十分に説明すべき材料がなかった。しかし、原田教授も、ネルソンの人を人と思わぬ、神を怖れざる仕打ちに怒っていたので、彼に電話をかけて面会を申し込むことには賛成した。面会はにべもなく拒否された。ネルソンはこの国の政治情勢を考慮した大使館筋からボディー・ガードをやとっておく方がいいとすすめられていた。

けれども、〝発光妖精〟たちの合唱を聞いて、喜んでいる人ばかりではなかった。それを悲しみをもって聞く、鋭い耳をもった聴衆もこの国の音楽ファンのなかにはいたのである。昨夜の、オープニング・ショーに行ってみて後味がよくなかった、という人々もいた。無惨、残酷だ、と言い、ああいうものに一国の首相やロシリカ大使までが臨むとは何事か、と息まく人もいた。軍事条約問題の後の、一段落後のムードつくりに、ああいうものまでを動員するとは、と怒る人もいた。中条と原田教授の会話を横でだまって聞いていた花村ミチ子は、そこに何かしらキナ臭いものがある、と感じ、会議後に彼女は男友達の学生運動の指導者にそっと話してみた。

一日たち、二日がたった。

ネルソンは、探検隊の結果発表を三カ月おさえたのと同じやり口で〝発光妖精〟のテレビ中継をはじめの五日間一切禁じ、その後も一社独占にした。インタビューも禁止した。それは人気をいやが上にもあおるのに一効ある方法であったろう。怒った他のTV局は批判キャ

ンペーンをはじめた。世論も二つに分かれた。

その四日目の真夜中に、羽田飛行場から中条の家へ電話がかかって来た。福田記者が帰って来たのだ。福田記者は、すぐにネルソンに会いに行くから、と中条の同道を求めた。

二人がそれぞれ別の車で薄明るくなって来た東京の町を、ネルソンと〝妖精〟たちの止宿しているホテルへ走っているとき、関東はるか南の海を一隻の船が航行していた。P海運所属のプレシデント・オブ・ヒックリカー号である。その鋭敏なレーダーが、異様に白くなってしまった。円型のレーダーの右方に、その半円の上から下までを長く占めるほどに、その白いものは大きくなっていった。

上空を飛行機が飛んでいた。プレシデント・オブ・ヒックリカー号は、無電で飛行機に調査を依頼した。実は依頼するまでもなかったのだ。飛行機は、ようやく明けそめた海に、すでにそれを視認し、報告の第一電を送っていた。また、しばらくしてプレシデント・オブ・ヒックリカー号自体も、たとえば海上を動く雪のつもった低い丘つづきのような、そのおどろくべきものを視認し、いや視認どころかただちに退避しなければならなかった。

モスラは急速に成長、いや成長どころか、さらに巨大化していたのだ。うめき声は、海ひろく、しかしどことはなく悲しげに、這うようにしてひびいていった。

「ネルソン、われわれは真剣なんだ」

「中条さんに、福田さん、あなた方の偉大な想像力には心から敬意を表します」
「そんなことはどうでもいい」
「しかし、その怪物が、あのかわいい妖精を救いに来るという証拠がどこにあるか、第一、その怪物を見た人は、いや、見たと主張する人は、福田さん、いまのところあなたたった一人。それにそいつがもしいるとしてなんという名の何なのか……。福田さん、私は芸能ＰＲの専門家です」と言って、ネルソンは肩をそびやかしてみせた。「朝っぱらからですが、ねむけざましにカクテルでも注文しましょうか。うんとビターをきかせたやつを」
「なにを言ってるんだ。一刻を争うんだ」
そのとき、突然、中条が立ち上がった。これには福田もおどろき、まさか中条がネルソンになぐりかかったりしないだろうな、とぎょっとしたのだったが、中条は意外に静かな声で、
「……モー……スー……ラー……、モー……スー……ラー……」
とくりかえしたのだ。しばらくはネルソンも福田も呆っ気にとられていたが、やがて二人は、次第に頬から血の気がひいていくのを感じた。中条の叫び声に呼応するようにして、隣室の、檻のなかにとじこめられていた〝妖精〟たちが、『……モー……スー……ラー……、モー……スー……ラー……』
とその美しい合唱をひびかせはじめたのだ。それはもうとめどなくつづいた。
中条と福田が部屋をかけ出した。廊下には、おやといの暴力団が眠りこけていた。扉には

もちろん鍵がかかっていた。暴力団が起き出した。が、ネルソンも思い切りがついたか、ポケットから鍵をとり出して、彼も二人につづいて〝妖精〟たちの部屋へはいった。

インファント島から帰って以来、録音テープによって専心、この島の言語を分析研究していた中条が、まず問いかけた。それに対して四人のうちの、彼を吸血植物から救ってくれた一人が中条を認めた。そうして四人はみな福田を認めた。中条と福田が話しつづけると、次第にネルソンが苛立って来た。

『貴女がたをわれわれは助けてあげたい。インファント島へかえしてあげたい。しかしこのネルソンが拒否しています』

『それはわかっています。わたしたちはかならず助かりますし、島へかえれます。しかし……』

『われわれだけではなくて、この国には、あなたがたの運命に同情している人もたくさんいます』

『ありがとう。わたしたちはかならず助かります。しかし……』

『しかし……？』

『しかし、わたしたちが救われるために、この国の人々に多大の迷惑と不幸をもたらすことになるのが悲しいのです』

『なんですって、迷惑と不幸？』

『そうです。モスラが……、モスラが来ます』

はじめて、彼女たちの口から、あのモ……ス……ラ……という、いまとなっては不気味な、しかし美しいひびきをもったことばが聞かれた。それを言うとき、彼女たちは真に悲しげな表情をしていた。

第一報がはいった。飛行機は上空をとび、プレシデント・オブ・ヒックリカー号は、遠まきに接触をつづけていった。怪物はわき目もふらなかった。飛行機と、ヒックリカー号は、間断なく情報を送った。

太平洋上に巨獣あらわる。関東南岸に向かう公算大。謎の大怪獣、関東へ上陸か。沿岸警備隊に待機命令下る。……

臨時閣議がひらかれた。中条信一も福田善一郎も、また原子力学者の原田教授でさえが、殺到して来た新聞、ラジオ、テレビに捕虜にされ、閣議の召喚に応ずるのがやっとであった。福田記者は肝腎の原稿を書くひまさえなかった。午前の町には、もうすでに、モスラ、モスラ、モスラという叫び声がはんらんしていた。

「臨時ニュースを申し上げます。ただ今、政府より謎の生物に関する緊急指令が発表されました。この発表は第一沿岸警備隊よりの謎の生物に関するその後の状況報告にもとづいてな

されたものであります。

一、謎の生物は、東京湾に侵入する公算はきわめて大であります。

二、謎の生物の形態は、ほぼカイコに似ていて、かつてのゴジラよりもさらに巨大にして、狂暴なりと推定される。

三、その進行速度はきわめて早く、放射能を内蔵するや否やは目下調査中。

四、上陸に際して発生を予想される事態を考慮し、沿岸住民は第一沿岸警備隊の指示に従い、すみやかに避難してください。

五、政府は目下、この大怪獣の、明示にして緊急の侵略に対し、ロシリカ国との軍事条約発動のため、事前協議中であります。

六、以後、この大怪獣を、モスラと呼称する」

モスラは、しかし、夜にはいってからとうとう上陸した。上陸地点は鎌倉七里ガ浜であった。江ノ島は波をかぶって一時その姿を没した。

ネルソンは、緊急事態にもかかわらず、損失を最大限に防ぐためにその夜の上演を強行した。いかなる緊急事態にあっても、ひまな人や、たとえ何であれ珍しいものを見たいという人はいるものである。劇場はいっぱいであった。劇場警戒には目つきの悪い男たちが動員されていた。なぜなら、その日一日、いち早く危険を告げた花村ミチ子を先頭にした学生たち

が、小美人をかえせ、ゴーホーム・ネルソンと叫んでデモをやっていたからである。フォア・フェアリーズ・ショーは、おわりかけていた。四人の〝発光妖精〟は、数日前とは、まるでことかわった声調でうたった。

「……モー……スー……ラー……、モー……スー……ラー……」

とその瞬間、七里ガ浜から上陸して稲村ガ崎の山を越え、鎌倉大仏前まで来ていたモスラが、急に方向をかえてふたたび海にはいって行った。その夜破壊されたのは鎌倉市だけであった。中条と福田はそれがアイレナたちの懇望と、同時にこの国の破壊をさけたいという切望にもとづくものであると考えた。

翌朝、ロシリカ国大使館は声明を発表した。

「日本国とロシリカ国は、相互の平和と安全を保証するために、すでに発効を見た条約を締結した。この条約は、かかる明示にして緊急の事態に際して発動さるべきものであると考える。しかも、今回の不祥事は、ロシリカ国民であるピーター・ネルソン氏の個人財産に重大な関係があるという事実を、確実な情報にもとづいて報知されている。従って、私有財産制度を擁護する自由主義国として、その原則を守るためにも条約は発動されるべきものと信ずる。第七〇〇艦隊と第五〇〇空軍は……」

しかしモスラはふたたび上陸を開始した。再上陸との情報が町にはいったころホテルをとりまくデモ隊がまだ十分にあつまっていないとき、二台の大型車がホテルの裏口をあとにし

た。自動車は、羽田飛行場ではない、東京北郊の飛行場をめざしていた。

モスラは八つの巨大な関節を次々とうごかして、そのきわめて柔軟な体を屈進させ、おそろしい速度で京浜国道を都心にむかって突進した。銃弾も砲弾も貫通することがなかった。被害は予想されたものよりも少なかった。彼は道路にそって前進し、霞ガ関付近へ来てはじめて積極的に建物に挑みかかった。頭部が、ちょうど国会議事堂に達したとき、彼は運動を停止した。彼の上空を一台の大型ジェット機が飛んで行った。

運動を停止して、彼は巨大な口腔のなかの絹糸腺と見えるものから絹糸状の糸を吐きはじめた。カイコからサナギへの完全三段階変化が開始された。おどろくべく多量の繊維状のものが吐き出され、糸は国会の塔と両翼にまでかかった。モスラのサナギが、ついにマユをつくってしまったのだ。

なんとも奇妙な光景であった。繊維の一本一本が日を浴びてキラキラ光る、長円型のマユが日本の中心にすわり込んでしまったのである。微動だにしない。音もたてず、こうなってから物もこわしもしない。シーンとしている。静止している限りでは無害である。夜にはいってからは、蒼白い、いぶし銀の色ともいうべき微光を放ちはじめた。

夜があけてから、マユに対しての攻撃が再開されることになった。静止している限り無害であるとはいえ、事は国家の面目にもかかわる。

けれども、中条信一、福田善一郎の共同声明によって、この事態がネルソンの私欲にもと

づいてインファント島なる小国の平和を乱したために起こったことを知った市民は、おっかなびっくりながら直接マユをのぞみうる非常線まで進んで来て、口々に余計なことはしない方がいいのではないか、放っておけばそのうち蛾になって飛んで行くのではないか、ロシリカ国はわが国に対して、いらぬ世話をやかぬ方がいいのではないか、と叫んだ。板橋区あたりに住んでいるらしく、これまで何の被害もうけなかった一人は、アリガターのメイワクーと怒鳴った。

一方、ロシリカ国大使館としては、どうしてもこのマユをマユのままで、まさにこの東京で抹殺する必要があった。なぜなら、このマユがもし蛾になったが最後、この蛾は必ずやあの四人の妖精を追ってロシリカ国を襲うであろう……。

世論を考慮してロシリカ軍が直接出動することは中止され、指揮だけをとることになった。軍事援助によって提供された熱線放射機がすえつけられ、ついに発射された。マユは赤黒い煙を発し、火を吹き上げて燃えた。やがて、真紅に燃え上がった。マユは異常な熱のために変化を早められてやがて自らの力でやぶれた。火と熱とほとばしる光線をさえぎって、すでに最終段階の変化を完全におえた巨蛾があらわれた。

巨蛾モスラは、近づいて来るジェット機を金粉をまきちらしながらうち落し、予想されたようにロシリカ国のニュー・ワゴン・シティを襲った。そこで強欲無慙なピーター・ネルソ

ン氏があくまで興行を強行していたのであった。劇場は摩天楼の立ち並ぶラジオ・センターと呼ばれるところにあった。

ロシリカ国でも小国の平和を乱したことの結果について世論がわき上がった。首都では、ここでもデモがおこった。ネルソン氏は何者かに射殺された。四人の〝発光妖精〟たちは、しかし、そのあまりな小ささのために、また救いに来たモスラはモスラでそのあまりな強力、強大さのために、お互いに近づくことができなかった。モスラがちょっとでも羽ばたけば、四人とも吹きとんでしまうであろう。ついに苛立って来た。モスラが怒った。怒りの結果は惨憺たるものがあった。

言語を解する中条信一がにわかにロシリカ国大使から請われて渡航することになった。随行記者にきまった福田と中条の二人は、大使に渡航を承諾する旨を告げ、報酬についての話にはいったとき、二人は冷たい目で大使を見上げた。

二人がほとんど廃墟と化したニュー・ワゴン・シティに到着してみると、途方にくれた当局者は、相変わらず四人の妖精を檻のなかにいれて〝保護〟していた。

中条と福田は四人と相談して、廃墟となった都市の上空を飛びつづけるモスラを飛行場に着地させ、そこで静止して待機させることになった。四人が呼びかけた。

……モー……スー……ラー……

……モー……スー……ラー……

……

……

美しい合唱が、ニュー・ワゴン・シティの廃墟に流れ、漂った。ここへ来てからモスラは放射能をさえ吐いたのだ。

廃墟を見て、四人の妖精は涙を流した。彼女らが望みもしなかったのに、世界の二大代表的都市が破壊されたのである……小さなインファント島の平和が侵されたばかりに。東京は、この都市に比してはまだしも被害は少なかったというべきであった。

モスラは待っていた。四人は中条と福田に別れを惜しんだ。彼女らは、モスラの複眼のなかへはいっていった。痛くはないのであろう。

インファント島付近へ出ていた船の報告によると、モスラはたしかに到着した。が到着してしばらく後に、ふたたびどこかへ飛び去ったという。さらにその後しばらくして、国連管理の人工衛星ＩＧ４・スペースパーキング号が、彼が宇宙空間をまっしぐらに進行し、アンドロメダ星雲をかすめて、別の宇宙、反世界へと突入して行くのを確認した。反世界にまで人工衛星を突出させることは、まだできていなかった。

いつの日かまた小国インファント島の平和が侵されるとき、反世界からふたたびモスラがもどって来ないとも限らない。だから人々はインファント島がどこにあるかなどとさがして

はならないのである。そんな島がいったいあったのか、などと論じてもいけなのである。モスラが来る！　このことを、中村真一郎、福永武彦、堀田善衛の三人は共同謀議によりここに連名で厳粛に宣言する。

帰国の飛行機の上で、中条と福田も妙にしょぼんとしていた。二人が思い浮かべているもの、耳にしているものは、言う必要もなかったであろう。

やがて、福田記者が何かを断ち切るように中条の肩をどすんと一つたたいて、言った。

「君もたいへんだなあ、あんなエンゼツのうまい女房なんぞもらったら、こりゃたいへんだぞ」

「なに、なんのことだ？」

「あれさミチ子さん、花村ミチ子よ」

闇の声

W・H・ホジスン（大門一男訳）

暗い、星のない夜だった。われわれは風が凪いだ北太平洋に船を停めていた。われわれの正確な位置は私にも分らない。というのは、われわれの頭上、マストの先ほどの高さに漂っているように見える薄い靄が、時おり降りてきては、周囲の海面を覆い包み、あきあきするような、そよとの風もない、その一週間の航海のあいだ、太陽を隠していたからである。

風がない以上、われわれは舵をしっかり取っていなければならず、私は一人で甲板に頑張っていた。二人の男と一人のボーイから成る乗組員は、船首のそれぞれの小部屋で眠っており、私の友人で、この小船の船長であるウィルは、船尾の左舷の小さな船室の寝台に入っていた。

突然、あたりを包んだ闇の中から、呼び掛ける声が聞えてきた。

「おーい、スクーナ！」（スクーナは通例二、三あるいは四本マストの縦帆式帆船）

あまりに思いがけない叫びだったので、私はびっくりして、すぐには返事が出来なかった。

声はまた聞えてきた――われわれの左側面の、暗い海のどこかから呼びかける、妙にしゃがれた非人間的な声だった。

「おーい、スクーナ！」

「おーい！」と、私は勇気をふるって叫んだ。「そっちは誰だ？　何か用か？」

「心配することはない」と、おそらく私の口調に狼狽のひびきを多少感じたらしく、妙な声はこたえた。「私はただの――年寄りだ」

間をおいたそのことばが奇妙だった。

「それなら、なぜ舷側へ寄せないんだ？」私は、自分がすこし震えているのを相手にほのめかされたのが気にくわず、ややぶっきら棒に訊いた。

「それが――それが――出来ないんだ。危険だからね。私は――」声はと切れて、静寂に返った。

「なんだって？」私はますます驚きに撃たれて、尋ねた。「何が危険なんだ？　あんたはどこにいるんだ？」

私はちょっとの間、耳を澄ました。しかし返事はなかった。それから突然、自分でも分らない、漠然とした疑いに駈られて、私は素早く羅針儀箱のところへ行くと、火の点ったランプを持ち出した。それと同時に、私はウィルを起そうと靴の踵で甲板をつよく叩いた。そし

て舷側に戻ると、手摺りの向うの果しない静寂の中へ黄色い光りの円筒を投げた。そうしながら、私はかすかなくぐもった叫びと、それから急に誰かが櫂（オール）を水に突込んだようなザブザブいう物音を聞いた。その明りの最初の閃きで、いまは何もない海上のそこに、何物かが浮んでいたように見えた。

「おーい、そこの人！」と私は叫んだ。「ばかな真似をするな！」

だが、そちらからは夜の闇の中に遠ざかって行くボートのかすかな物音しか聞えてこなかった。

それから私は、船尾の昇降口の方向から、ウィルの声を耳にした。

「何かあったのか、ジョージ？」

「こっちへ来てくれ、ウィル！」と私は言った。

「どうしたんだ？」彼は甲板を横切って来ながら尋ねた。

私はいま起ったおかしなことを彼に話した。彼はいろいろと尋ね、それからちょっと黙っていてから、両手で口を囲うと、高い声で呼んだ。「おーい、ボート！」

はるか離れた所からかすかな答が返ってくると、私の仲間はもう一度繰返して呼んだ。やがて、しばしの沈黙の間（ま）をおいてから、低い櫂の音がわれわれの耳に聞えてくると、ウィルはそれにまた呼びかけた。

今度は返事が聞えた。

「火を消してくれ」
「そんな事をしてたまるか」と私は呟いた。がウィルは声が言うようにしろと私に言うので、私は舷檣の下にランプを押し込んだ。
「もっと近くへ来い」とウィルが言うと、櫂を漕ぐ音はつづいた。それから、およそ六尋ほどのところで、また音は聞えなくなった。
「舷側へ寄せろ」とウィルは叫んだ。「この船には何も恐がるような物はないぞ！」
「明りを見せないと約束するか？」
「一体どうしたっていうんだ」と私は怒鳴った。「なんでそう明りを恐れるんだ？」
「それは――」と、声は言いかけて、急にことばを切った。
「それは、どうした？」と私は素早く尋ねた。
ウィルは私の肩に手を掛けた。
「ちょっと黙っていろよ」と彼は低い声で言った。「おれにやつの相手をさせろ」
彼は手摺りから体をのりだした。
「おい、きみ」と彼は言った。「この呪われた太平洋のまっ只中から、こんなふうにきみが現われたというのは、どうも解せない事じゃないか。きみがどんな卑劣なことを企んでいるか、おれたちには分らないぞ？　そこに一人しかいないと言うが、こっちからは何も見えないぞ――ええ？　とにかく、なんで明りを向けさせないんだ？」

彼がことばを切ったとき、私はふたたび櫂の音を耳にし、それから声が聞えてきたが、今度は非常に離れた所からで、その声はひどく絶望したように悲しげにひびいた。

「すまない――すまなかった！　あんたに迷惑をかけるつもりはないが、ただ私は餓えていたし、それに――彼女も餓えてるのだ」

声はとだえて、不規則に水をかく櫂の音だけが、われわれに聞えた。

「待て！」とウィルは呼んだ。「追っ払おうというんじゃないんだ。帰って来い！　どうしてもというのなら、明りは隠しておく」

彼は私のほうを向いた。

「どうも妙だぜ、こいつは」

「うん、あの男はこのあたりで難破して、頭がおかしくなったんじゃないのか」

櫂の音が近くなった。

「そのランプを羅針儀箱に入れてこいよ」とウィルは言い、それから手摺りにもたれて、聞き耳を立てた。私はランプを元に戻して、彼のわきに戻ってきた。櫂の音は数ヤード離れたところでやんだ。

「さあ、舷側へ寄せないか？」とウィルは落着いた声で言った。

「ランプは羅針儀箱へ戻したから」

「それが――出来ないんだ」と声は答えた。

「これ以上はそばへは寄れない。それに――私は食糧の金も払うことは出来ない」
「そんなことは構わない」とウィルは言って、ちょっとためらった。「何でも好きなだけ持ってくがいい――」
「それはご親切に」と声は叫んだ。「神様が、あなたに報いられるだろう――」声はかすれて消えた。
「その――女の人は？」と、ふいにウィルが言った。「その人は――」
「島へ残してきた」と声は答えた。
「何て島だね？」と私は口を入れた。
「名前は知らない」と声は答えた。「私は……」何か言いかけて、急にやめた。
「彼女を呼びにボートをやってはいけないのか？」とウィルはすかさず尋ねた。
「だめだ！」異常に激しい語勢で、声は言った。「絶対だめだ！」一瞬の沈黙がおかれた。それからまるで咎めるような口調でつけ加えた。「私たちはどうしても欲しいからこそ思い切って来たんだ――彼女の苦しみが私には堪えられないからこそ来たんだ」
「うっかりしてた」とウィルは叫んだ。「ちょっと待っててくれ、すぐ何か持ってきてあげよう」
二、三分すると彼はまた戻ってきたが、その両手はいろいろな食糧でいっぱいになっていた。彼は手摺りのところで息をついだ。

「これを取りに舷側へ来られないかね？」と彼は尋ねた。

「だめだ――それが出来ないんだ」と声は答えたが、私はその口調のなかに息苦しいほどの渇望のひびきを感じ取った。咄嗟に私には、ついそこの暗闇の中にいる憐れな老人は、ウィルの手にしているものを真実欲して悩んでいるが、しかし何か不可解な懸念が、われわれのスクーナに漕ぎ寄せて、それを受取ることを自制させているように思えた。そしてこのいなずまの閃きのような確信とともに、目に見えぬ相手が狂気の人間ではなく、何か堪えがたい恐怖に直面している正気の人だということを悟った。

「よせ、ウィル！」複雑な気持に駈られながら、何よりもふかい同情が先に立って、私は言った。「箱を取ってくるんだ。それに詰めて流してやろう」

われわれはその通りにした――と、たちまち、見えぬ相手からかすかな叫びが聞えてきて、われわれは彼が箱を手に入れたことを知った。

しばらくすると、彼はわれわれに大声で別れを告げたが、心からのその感謝のことばで私は一そう確信をふかめた。それから後は何事もなく、ひたすら闇の中を漕いで行く櫂の音をわれわれは聞いた。

「さっさと行っちまいやがった」とウィルは、少々気にさわったように言った。

「待ってろよ」と私は答えた。「おれはあの男はどうも戻ってくるような気がする。彼はあの食糧がひどく必要だったに違いない」

「それに女もな」とウィルは言った。しばらく口を噤んでいてから、またつづけた。「こんな妙な事件にぶつかるのは初めてだ」

「うん」と私は言って、考えに沈んだ。

こうして時が過ぎて行った――一時間、二時間、だが奇妙な出来事が彼の眠気をすっかりふき払ったとみえて、ウィルはまだ私とともに止まっていた。

三時間目も四分の三ほど過ぎたころ、われわれはふたたび静寂な海面に櫂の音を聞いた。

「聞いたか！」と、ウィルは低い興奮の口調で言った。

「思った通りやって来た」と私は呟いた。

水をかく櫂の音はしだいに近づき、私はしっかりした長いその漕法に気がついた。食糧はやはり必要だったのだ。

櫂の音は舷側から少し離れた所で止まり、闇の中からまた奇妙な声が起った。

「おーい、スクーナ！」

「きみか？」とウィルは尋ねた。

「そうだ」と声は答えた。「さっきは急に行ってしまったが、しかし――しかし、急いでいたんだ」

「女の人がか？」とウィルが訊いた。

「彼女はいま非常に感謝している。もうすぐ――天国できみらに感謝することだろう」

ウィルは途方にくれたような声で、何か答えかけたが、しかしことばに詰まって、すぐに口を噤んだ。私は何も言わなかった。非常な同情の念に搏たれていた。

「私たちは――彼女と私は、話していたんだ、神様の思いやりにあずかったことや、きみらの――」

ウィルはさえぎった、がそのことばはしどろもどろだった。

「――きみらの今夜のクリスチャンとしての施しの行為を卑下しないでくれ」と声は言った。「それが神の目を洩れることはないだろう」

声はやんで、たっぷり一分間ほどの沈黙がおかれた。それからまた声は聞えてきた。

「私たちは――私たちの身に振りかかったことを、誰にも話さずに、死んでしまうつもりだった。しかし、今夜の出来事は神の特別な裁きだ……だから私たちは、あれ以来忍んできたことのすべてを、きみに話すようにとの神の思召しだと――」

「あれ以来とは？」とウィルがやさしく言った。

「アルバトロス号が沈んで以来のことだ」

「ほう！」と、私は思わず叫んだ。「あの船はサンフランシスコに向けてニューカスルを六カ月前に出てから、消息を絶っている」

「そうなんだ」と声は答えた。「航路の北方数度のところで、船は恐ろしい嵐に遭い、船はひどく浸水し、マストも折られてしまった。夜が明けると海も凪いできた。すると船員たち

はボートに乗って、去って行ったのだ。難破船に若い女——私の許嫁と——私を残してね。

「私たちは下で、持物をすこしばかり纏めていたのだ、そして私たちが甲板に上ってきた時は、あいつらは遥かな水平線に豆粒のようにしか見えなかった。が、私たちは絶望しないで、仕事にかかり、小さな筏を組立てた。これに私たちは水や船のビスケットを含めた、保存に堪える品物を積み込んだ。それから、私たちは筏へ移り、船を突いて筏を出した。

「私たちは、ある角度をもって船から私たちを押しやる潮か海流に乗ったようだった。そして、私の時計で三時間もたつと、アルバトロスの船体は私たちの視界から消えた。それから夕方になると、靄が下り、そうして夜になった。翌日も私たちは相かわらず霧に包まれていたが、天候はずっと静かだった。

「四日間というもの、私たちはこのふしぎな靄の中を漂った。四日目の夕方になって、遠くのほうで波の砕けるざわめきを耳にした。その波音はしだいにはっきりし、真夜中を過ぎたころ、あまり遠くない空間の両方面からそれは聞えてくるような気がしました。

「朝になると、私たちは一種の大きな湾の中にいるのに気づいた。そして、なんと、私たちのすぐ目の前に、一面の靄を通して、巨きな帆船の船体がボーッと浮んでいたのだ。私たちは同時にそこへひざまずいて、神に感謝した。私たちの危難もついに終ったと思ったからだ。まだなにも分らずに……

「筏が船に近づいたので、私たちは乗せてくれと叫んだが、誰も答えるものはない。そのう

ち筏が船の側に着き、見ると一本のロープが上から垂れているので、私はそれを摑んで、登りだした。しかしそれを登るのは大変だった、というのは灰色をした、苔に似た一種のキノコ菌が、ロープを覆っていて、船腹にも青黒く点々とついていたからだ。

「私は手摺りに達すると、それを跨ぎ越えて、甲板に立った。そこでも私は甲板の到る所が点々と灰色のかたまりに覆われ、その中のある物はふし瘤状をして数フィートの高さにもなっているのを見た。けれどもその時は、船上に人がいるかどうかということのほうに気をとられていた。私は怒鳴った、だが誰も答えない。それから私は最上後甲板（プープ・デッキ）の下のドアへ行った。私はそれを開けて、覗き込んだ。すると、ひどくかび臭いにおいがした。とたんに、この中に生きものがいないことがわかった。孤独が急におそってきた。

「私は舷側に戻った。私の許嫁はまだじっと筏の上に坐っていた。見下ろしている私を見て、彼女は船内に誰かいたかと大声で尋ねた。私は、この船は長い間棄てておかれたようだ、と答えた。間もなく私は甲板の反対側で、一つの縄梯子を見つけた。私はこれを運んで行き、彼女はやがて私のわきに上って来た。

「私たちはいっしょになって、船室や、船尾にある小部屋を調べて廻ったが、どこにも生き物の気配はなかった。どこでもかしこでも、船室の内部でも、私たちはあの妙なキノコ菌の斑点にぶつかった。

「最後に、船の後部に誰もいないことを確かめてから、私たちはあのふしぎな繁殖物が醜い

灰色のふし瘤状をしている間を抜けて、へさきへ進んでみた。そして私たちは船上に私たち以外に人のいないことを悟ったのだ。

「もう疑う余地はなかった。私たちは船尾に帰り、自分たちで出来るだけ住み心地よくやっていけるように準備をはじめた。私たちは協力して二つの船室をすっかり掃除し、その後で、船内に何か食べられる物があるかどうかを調べて廻った。それもすぐにあることが分り、私は神のご慈悲に心のうちで感謝したのだ。私は飲料水のポンプのあり場所も見つけ、それを手入れした結果、味は少々おちるけれど、飲んで飲めない水ではないことを発見した。

「そうして数日間、私たちは上陸する気にもなれず、船内で暮していた。私たちはそこを住みよくするために忙しかったのです。しかしこうした最初のころから、この一劃が思っていたほど好ましい所でないことには気がついてきた。というのはほかでもない、私たちは船室だの食堂の床や壁に点々とついているあの妙な繁殖物のしみをこすり取ったところが、丸一日もするとそれはほとんど前とそっくりの大きさに返っているではないか。これには、私たちも、がっかりさせられるだけでなく、なんとなく気味わるさを覚えさせられた。

「それでも、私たちは気を取り直して、さらに掃除につとめ、キノコ菌をかき落すだけではなく、私が食器室で一缶そっくりしているのを見つけた石炭酸で、その跡を拭ったのだ。しかし、その週のおわりになると、この繁殖物は非常な勢いで元に戻り、おまけに私たちの手に触れたため菌がよそへ移動したように、他の場所にまで拡がってきた。

「七日目の朝、私の許嫁は目を覚まして、この小さな斑点が、彼女の顔のすぐそばの、枕の上に出来ているのに気づいたのだ。彼女は着物をひっかけるやいなや、私のところにとんで来た。私はそのとき料理室で朝食の火を起していた。

「『ジョン、来てよ』と彼女にいわれて、私を船尾へ連れて行った。私は彼女の枕の上のものを見るとゾッとして、たちどころにこの船を出、陸でもって気持よくやって行けるかどうか見てこようということに相談が一決した。

「私たちは急いで持ち物を纏めたが、その中にさえすでにあのキノコ菌が繁殖しはじめているのを知った。というのは、彼女のショールの一つの端のほうに、小さなあのかたまりが出来ていたからだ。私は彼女には何も言わずにそれをそっくり舷側から投げ棄てました。

「筏はまだ舷側にあったが、これはあまりひどくなっているので、私は船尾に吊ってあった小さなボートを降ろし、これに乗って岸へ向った。しかし、そこへ近づくにつれて、私たちを船から追い出したあのいやらしいキノコ菌がここにも縦横に繁殖していることに、私はしだいに気づきはじめた。所によって、それは恐ろしい異様な塚になって盛り上り、風がそこを渡るときは、静かな生命あるもののように、揺れ動くような気がした。そこかしこでそれは巨大な指のような形をし、またべつの所では平たく、滑らかで、腹黒そうに拡がっているのだ。離れた所では、それはひどくねじれて節くれ立ったグロテスクないじけた樹木のような恰好をしており——時おりその一切の物がいやらしくゆさゆさ揺れていた。

「最初私たちは、この物凄い苔の下になっていない土地は、周囲の海岸に一カ所もないと思ったが、それは誤りで、少しばかり海岸線に沿って行くと、きれいな砂浜のように見える、滑めらかな白い一劃をかすかに認めた。そこで私たちはそこへ上陸した。どういうわけか知らないが、とにかく、この上にはキノコ菌が育たないらしいのだ。ところどころ、灰色の苔の荒廃の中に、砂地みたいな、うねった細道を除く以外は、到る所あの胸のわるくなるような灰色一色だった。

「この繁殖物からまったく解放されている一つの場所を見つけて、私たちがどんなに元気づけられたかをあなた方に分らせるのはむずかしい。それから私たちは、当座必要と思える物を取りに船へ戻った。それらの物の中で、私は船の帆の一つを陸へ運び、それで二個の小さなテントを作った。これはひどく不様なものだったが、それでも結構目的は果した。私たちはこの中に住み、いろいろな必需品を貯え、こうして四週間ほどは、特に不幸なこともなく、すべてが順調に運んだのだ。いやむしろ、幸福だったと言ってもいいだろう——私たちは、いっしょになれたのだから。

「あの繁殖物が最初に現われたのは、彼女の右手の親指だった。最初それは、可愛い灰色のホクロほどの、小さな円い点にすぎなかった。そこを彼女が示したとき、私は恐怖で心臓が締めつけられそうになった。私たちは、二人がかりでそこを清め、石炭酸と水とで洗った。次の朝、彼女はふたたびその手を私に見せました。灰色のイボのようなものは、また元通り

になっているではないか。ややしばらく、私たちは黙って顔を見合わせていた。それから、無言のまま、またそれを拭いはじめたのだった。そうしていたとき、突然彼女を口を開いたのだ。

「『あなたの顔の横にあるそれはなに?』その声は不安に尖っていた。私は手を顔に上げた。

「『そこよ! 耳のわきの髪の下。もうちょっと前』私の指は言われた所に触れ、そして私は悟ったのだ。

「『きみの親指を先にやってしまおう』と私は言いました。私が彼女の親指を洗って、消毒しおえると、今度は彼女が私の顔にかかった。それがすむと、私たちは並んで坐り、しばらくいろいろと話し合った、私たちの身の上に突然、世にも恐ろしいことがふりかかってきたのだ! 私たちは、死よりもわるいものにとりつかれたのだった。私たちはボートに食糧や水を積んで、海へ逃れようか、と話しあった。しかし、そんなことをしても仕方がなかった——私たちはすでに繁殖物に犯されていたのだ。私たちは止まることに決めた。それが神のお心であるならば、神は私たちと共に在られることだろうから。私たちは待つことにした。

「一ト月、二月、三月が過ぎて、患部は多少拡がり、他の部分にも現われてきた。ただ、その進行が比較的に緩慢だったので、恐怖と闘うことができたのだ。

「ときどき私たちは必要な貯えを取りに危険を冒して船へ出掛けた。そこではキノコ菌が頑強に繁殖しつづけているのに私たちは気づいた。メイン・デッキのかたまりの一つなどは、

間もなく私の背丈ぐらいの高さになった。

「私たちはもう島を去る望みをすっかり諦めていた。私たちがいま犯されている物を持って、健康な人間の中に戻ることは、許されないと思ったからだった。

「この決意と、私たちが心に思っていた知識によって、食糧と水とを節約して行かなければならないと私たちは思った。まだ今後何年も生き永らえるかもしれないと思ったからだ。

「それで思い出したが、私はさっき、老人だと言ったね。年からいえば、そんなことはないのだ。しかし――しかし――」

彼はことばを切って、それからまたやや唐突につづけた。

「いまも言ったように、私たちは食糧を気をつけて使わなければならなかった。しかし、その節約しなければならない食糧が、どれほど少ししか残っていなかったかには、考えつかなかったのだ。すべていっぱい詰まっているものとばかり思っていたパン桶がからっぽで、野菜や肉やその他のわずかばかりの缶詰のほか、頼りにする食糧は何もないことを私が発見したのは、それから一週間のちのことだった。

「これが分ってから、私は自分で出来ることは何でもしようと思い立ち、魚を釣りに湾へ出たが、うまく行かなかった。それで、湾の外へ、広い海へ出てやってみようと思いついた。

「そこでは、ときどきわずかの魚が取れることもあったが、それもごくまれで、私たちを脅かしている飢えから護ってくれるにはほとんど援けにならなかった。私には死が、私たちの

体を捕えているあの繁殖物によらずに、飢えから訪れてくるような気がしてきたのだった。

「私たちがこうした気持でいる間に、四月目が過ぎた。このころ私はまたも恐ろしい発見をした。ある日、昼すこし前、私は残っていた一包のビスケットを船から取って戻って来たときだった。見ると、彼女はテントの入口に坐って、何か食べているのだ！

「『何を食べているんだ？』と、私は岸にとび降りながら、大声に叫びました。私の声を聞くと、彼女は当惑した様子で、背を向けるとそっと何かを狭い空地の端に投げた。それが何となくうさん臭かったので、私は寄って行って拾い上げてみた。それは灰色をしたキノコ菌の一片だったのだ。

「私がそれを持って彼女のほうへ行くと、彼女はひどく蒼ざめた顔になり、それからまっ赤になった。

「私はふしぎな困惑と恐怖を覚えた。

「『おいおい！』と言ったきり、あとのことばがつづかなかった。しかしそのことばに、彼女はがっくりして、激しく泣きだしたのだった。やがて彼女が落着くにつれて、私は彼女がその前日にも食べてみて——好きになったということを、聞き出したのだった。私は、どんなに飢えようとも、二度とそれに手を触れないことを、ひざまずいて彼女に誓わせた。彼女はそれを誓った。そして、突然食べてみたいという欲望が起ったので、その欲望が起る瞬間までは、この繁殖物に対して最も激しい嫌悪の念以外は何の感情も持っていなかった、とい

うのだった。

「その日の午後、先ほどの発見で非常なショックを受け、ふしぎな胸騒ぎを覚えた私は、キノコ菌の繁茂した間をくねっている小径の一つ――あの白い、砂のような物で出来た小径を、分け入って行ってみた。前にも一度、思い切ってその道を行ったことがあったが、そう奥までは入らなかったのだ。が今度は、乱れた想いにわれを忘れて、これまでになく奥へ進んだ。

「突然私は自分の左側で、妙にざわめく音を聞いて、われに返った。素早く振り向くと、私の肘のそばで、変った形をした一つのキノコ菌のかたまりが動いているのだ。それはまるで生あるもののように、ふらふらと前後に揺れていた。それをじっと見詰めているうち、ふいに、それが、ゆがめられた、グロテスクな人間の姿に似ていることに私は思い当ったのだ！その考えがちらっと私の頭をかすめた瞬間、何かを引裂く低いいやな物音が起り、枝のように見えた腕の一本が、びっしり覆った灰色のかたまりを離れて、私のほうへ差し伸ばされた。それの頭も――不恰好な灰色のボールも、私のほうに向けられているのだ。その忌わしい手は呆然と立っている私の顔を横に払った。私は恐怖の叫びをあげ、二三歩とびすさった。それが触れた私の唇の上には、甘い味が残っていた。それを舐めたとたん、急に私は動物的な欲望に駈られたのだ。私は振り向いて、キノコ菌のかたまりを摑んだ。それからさらに一摑み――二摑みしました。私はいつか、飽くことなくそれを貪っていたのだった。こうして夢中で食べている最中、今朝の発見の思い出が、私のボーッとした頭に閃いた。神の啓示でし

た。私は手にした残り物を地に擲った。恐ろしい罪の意識ですっかりみじめな気持になった。そして私は、小さな宿営地に向かって、帰路についたのだった。

「彼女は私を一目見るなり、愛情が齎らす直感ですべてを悟ったのだ。彼女の穏やかな同情心に誘われて、私はすべてを彼女に話した。しかしその前の異様な物のことには触れなかった。必要のない恐れを彼女に抱かせたくなかったからだ。

「けれど、私自身は、堪えられない恐怖の知識を増したわけだった。なぜなら、私は湾にある船にのってこの島へ来た男たちの一人の末路を見たばかりでなく、私たち自身の醜怪な最期をも目にしたことになるのだから。

「それ以来、どれほど食べたくなっても、私たちはあの忌わしい食べ物には触れないのだ。しかし、恐ろしい罰は、やはり私たちの上に振りかかってきた。日ましに、すさまじい勢いで、私たちの貧しい肉体を菌が蝕んできたのだ。私たちの禁欲も、実質的には何の防ぎにもならなかった。そうして——そうして——かつては人間であった私たちは、いずれ——いや、そんなことは日ましにどうでもよくなったのだ。ただ——ただ私たちは、けっきょく雄と雌だったのだ！

「日一日とあの恐ろしい苔に対する飢えの煩悩に抗する戦いは、すさまじくなった。

「一週間前、私たちは最後のビスケットを食べ、そのとき以来私は三匹の魚を獲った。今夜もここに魚を獲りに出ていた時、あなたのスクーナが靄の中から私のほうへ漂って来たのを

見たのだ。それで私はつい呼びかけてしまった。あとはご存じの通りだ……」

櫂を一かき、二たかきする音が聞えた。それから薄れた一面の靄を通して、声はふたたび、それを最後に、陰々寂々とひびいて来た。

「あなたの上に神のみ恵みがあらんことを！　さようなら！」

「さようなら！」われわれはさまざまの感慨に浸りながら、しゃがれ声で異口同音に叫んだ。私は自分のまわりを見廻した。いつの間にか黎明がわれわれの頭上に迫っていた。

太陽が気まぐれな一条の光を暗い海面に投げた。それは靄をにぶく貫き、陰鬱なかがやきで遠ざかって行くボートを照し出した。おぼろげながら、私は二本の櫂の間でコックリコックリ動く物を認めた。私はスポンジを連想した——大きな、灰色のコックリコックリするスポンジを。櫂は休むことなく動いていた。ボートと同じように、それらは灰色で、私の眼は一瞬その手と櫂の結び目をむなしく探った。私の視線はすぐまたその——頭部へ戻った。櫂を後方へ繰り出すにつれて、それは前方へコックリした。それから櫂は水にくぐり、ボートは明るい一画を突き抜け、靄の中へコックリコックリしながら入って行った。

マタンゴ

福島正実

1

窓の外を、重く霧がながれていた。

乳白色の煙に似た霧。

霧はときおり、乳のようにこく、またときおり、紗のようにうすくなった。うすくなるたびに、霧のむこうのもののかたちが、ぼんやりと現われた。だが、決してはっきりとはしなかった。霧がうすまると、それを補おうとするように、濃密な霧の層が、おいかけてくるからだ。

しかし、霧のむこうが海であることはたしかだった。ず、ず、ずんと、大地を震わせる波

浪の音が、その白さの奥から、おなじテンポで、おなじつよさで、ひびいていた……。

「あれを聞いていると、ぼくはここから絶対に退院できないだろうって、いつも思いましたよ——とくにこんな、濃い霧の日にはね」

男が、しずかにいった。

相手はうなずいた。

「まるで、あれっきり、まだあの島にいつづけたような錯覚におそわれるんですよ。あのときだって……」

男はぽつりと言葉を切って、黙りこんでしまう。いいよどむというより、出てくるはずの言葉が、窓外の霧のなかに、紛れてしまったという感じだった。

「あのときだって？」

相手がうながす。

「え？」

と、男はおどろいたように聞きかえしてから、

「ええ……あのときだって、ぼくはなん度、ボートを取り巻く霧のなかから、ぼうっと現われる船の幻影を見たかわからないんです。そのたびに、ぼくは、気ちがいのようになって、おーい、助けて、おーい、助けて、おーい、おーい、おーいって」

男は、思わず大声をだしたのに気がつくと息ぐるしそうに黙りこんだ。

「声がかれるまで呼んでから、まぼろしだったことに気がついて……それが、幾度そうして騙されても、今度こそは、もしかしたらと思うと矢も楯もたまらなくなるでしょう。そしてまた騙されたことに気がつく。そのたびに、自棄になって、死んでしまおうと思うんだけれども、死んだってこの白い霧の世界からは出られないような気がして……だから、とうとう、ほんとに助けられたときは、逆にどうしても信じられなかった。いや、今だって、ことによったら……」

男は、ぽっきり言葉を折って、きゅうに、からからと乾いた声で笑いだした。

「よしましょう、くだらん。この霧のせいですよ。まったく、晴れるときがない、いやな霧なんだから——でも、ぼくももう退院するんだ。退院して、あかるい陽の照る、あたたかいところにでも行って暮らすんだ」

「あんたひとりで？」

相手が、ぽつりといった。

男はぎくりとして身をのけぞらした。

「ぼくひとりだって……？　なぜそんなことをいうんだ？」

男は、喘いで息をついた。相手は白壁のように黙りこんでいた。彼にいい負かされたからでなく、彼を、頭から信じていないからだった。男は、頭をたれた。

「それは確かに、あんまり気のすすまない暁子を、海につれていったのはぼくだ。でもそれ

は、あんまり天気がよかったからだ。天気予報だって快晴だといってた。あれだけ慎重派の作田だって、こんな帆走日和は年に一度だといった。だからこそ、ぼくは暁子を説き伏せたんだ。そうだ——油壺を出るときのあの空の青さなんてものは——」

男は、ふと、相手の頭上あたりに視線を据えた。そこはもう、灰色のだだっぴろい壁ではなく、飽くまで澄んだ青い空と、半月形に脈うつ海原のひろがりだった……。

2

「もう一隻も見えないわ——みんな、置いてきちゃったのね！」

はずんだ声で、田鶴子がいった。頭上で、風をはらんだメーンセールが、ばん、ばんと銃声のような音をたてた。

「ここまで来りゃ、たいていのヨットはいなくなるさ」

スキッパーの作田が海風にむかって胸を張る。

「うおーお」

コックピットに腰かけて沖を見つめていた時実がけものじみた大声をあげた。

「うるせえな」

トランジスタ・ラジオを耳におしつけてジャズを口ずさんでいた吉田がつぶやく。田鶴子

がふりかえって輝くように笑う。

村井も、甲板に、田鶴子とならんで坐っている暁子を見あげた。

「どう？　気持がいいだろ」

「ちょっとこわいわ」

ちいさな声だった。見あげたせいか、まつ毛のながい目がべそをかいたように見えた。

「だいじょうぶだよ——作田も時実も、ヨットじゃ、オーシャン・レースの選手級の腕もってる——それに、ヨットってものは、ぜったい沈まないようにできてるんだ」

「そりゃわかってるけど……でも、三浦半島はとっくに見えなくなったし……どこを向いても海ばかりなんですもの。心ぼそいわ」

村井は、黙りこんだ。

——やはり、連れてくるんじゃなかったかな、と思ったのだった。

確かに、今日の帆走は、素人むきではなかった。油壺のヨット・ハーバーを出て、小網代湾を経、まっすぐ南下して大島の東を抜け利島をまわって久里浜に帰る——ちょっとした外洋レースなみのコースだった。

ヨットの持主で、リーダー格の作田が、今年最後の外洋帆走をやろうじゃないかといいだして、村井たちいつものクルーは、一も二もなく賛成した。それを、吉田の恋人の田鶴子がききつけて、自分も連れて行けと割りこんできたのだった。田鶴子が行くときまったとき、

村井は、暁子にも行こうとすすめた。
「結婚したらそうそう遊べなくなる。思い出になるから行こうよ」
二人は来年の春に結婚する予定で、もう式の日取りも会場もきめていた。
暁子はしぶった。そのしぶりかたが、村井には気にいらなかった。結婚まえに、常識や慎重さをかなぐりすてて情熱に身をまかす瞬間の一度や二度はあっていいはずだと、まえまえから思っていたからだった。暁子は、村井に、まだ抱擁はおろか、キスひとつ許していなかったのだ。
「おい――スキッパー」
吉田が、ふいに身をおこして、ロープをつかみながら、作田に呼びかけた。
「天気がかわるらしいぜ。九州の南に熱帯性低気圧発生だ。東にうつってるとさ。昼間はいいらしいが、夜には多少ガブるらしいよ」
トランジスタ・ラジオを口うつしに報告する。
クルーは作田の顔に視線をあつめた。
ふいに、海が、手に負えない生きもののように肌に感じられ、風と波としぶきとが、はっきり意識された。
「おれは予定どおりやりたいな。天気はくずれてもたいしたことはない。それに、多少ガブられた方がせっかく出て来た甲斐がある」

ふいに、大会社の御曹子らしい命令しなれた調子が出た。
「しかし作田、レディが二人いるんだよ」
村井がいうと田鶴子が口をはさんだ。
「わたしはヘッチャラよ」
村井は暁子をかえりみた。
「わたしもいいわ、みんなにわるいから」
暁子が、こわばったような表情でいった。
「それじゃきまった。予定どおりだ」
「アイアイ、スキッパー」
田鶴子が、またはしゃいでみせた。

3

天候が急にかわったのは、それから一時間もしないうちだった。
晴れあがっていた空に、みるみる鉛色の雲が張りだし、海があざやかな青さをうしなってどす黒い不機嫌な色にかわった。風が、海面をなぐるように吹きはじめて、うねりの上に白波をたてはじめた。

視界も、たちまち悪くなった。じめついた霧がいつともなく発生して、ふと気づくと、ヨットのまわりの海が、ぐっとせばまった感じになっていたのだ。

「うまくないな、スキッパー」

吉田が、そのときはもうキャビンに入っていた女たちに聞こえないように、ひくい声でいった。艇が急に左舷いっぱいにかしいで、マストがはげしくきしんだ。

「どうする？　引き返すか？」

「まだその必要はないと思うが……」

いいかけて、どっと降りそそぐしぶきに、作田の言葉が中断された。

「あっ、ちきしょう、トランジスタをやられた！」

吉田が、ざざざっと青黒くひいていく海面をにらみながら、さけんだ。しぶきをさける拍子に海へ落したのだ。

しかし、それが、みなの気持を一つ方向へ持っていくきっかけをつくった。この時化がたたではおさまりそうもないことを、とつぜん、四人の男たち全部が覚ったのだった。

「よし、帰港だ」

ヨットは風に逆って方向を変え、本土の方向へ、ひた走りに走りはじめた。

たたきつけるような雨が降りだした。あたりの海面全体がしぶきをあげた。風が巻きだした。陽がおちた。

闇の海上を、ヨットは、いっきに五メートルも持ち上げられると思うと、つぎの瞬間には谷底までつき落されるように、波のはざまに落ちこんだ。帆が風をはらんで、なん度も転覆しかけた。操縦はまったく不可能だった。

作田は漂流を決意して帆をたたませた。作業中にミズン・セールがふっとんで、あぶなく吉田が持っていかれそうになった。シー・アンカーを投げて、全員キャビンに入った。

「この艇はぜったい沈まない。自信をもて」

作田が女たちにむかってどなった。その声さえ、荒れ狂う海の怒号に打ち消された。ヨットはめちゃめちゃにふりまわされ、波がキャビンの中まで容赦なく流れこんだ。

4

時化は、二日のあいだ荒れ放題に荒れ狂った。最後には六人ともせまいキャビンの中で死体のようにころがされ、ぶつかりあった。

二日目の昼ごろ海はようやくしずまった。

甲板によろばい出てみると、ただもう一面の霧だった。じっとりと重い霧は、まるで白い煙のように海上を渦まき、ヨットの上にも這いのぼってきた。

ヨットはむざんな有様だった。メーンマストは下三分の一ほどを残して折れ、舵をもがれ

て、うねりのままに漂っていた。そして、何より悪いことには、艇の位置が、まるでわからなくなっていた。

彼らの漂流は、こうしてはじまったのだった。

霧はさらに三日間、まったく晴れようとしなかった。艇には、救急用の食糧が二日分だけ積んであった。それは、喰いのばし、喰いのばしして五日もった。その日には水もなくなっていた。飢えが、空腹でなく疼痛だということを、彼らははじめて知った。

救助の見こみは日一日とうすれていった。

彼らのヨットの帰らないことは、もうヨット・ハーバーで確認したはずだったが、このひろい海原で、位置のさだまらないヨット一隻を探すことの困難さは、彼ら自身が一番よく知っていた。去年、オーシャン・レースの最中に二隻のヨットが行方不明になり、自衛艦や自衛隊機から、アメリカ軍用機までかりだしての大捜査陣が、ついに徒労におわったこともまだ記憶にあたらしかった。

霧が晴れたことも、最初はなぐさめだったが、しばらくすると、逆に彼らの苦痛をますだけであったことがわかった。陽がじりじりと照りつけると渇きが疼きにかわったのだ。島かげ一つ、船影ひとつ見えない青い海は彼らをがっちり捕えてはなさない怪物だった。

その頃から、彼らの心に、それまではさかまく怒濤の中でも空っぽの食料函を見たときにも感じなかった〈死〉が、しのびよってきた。女たちは泣いた。男たちは、悔恨と絶望とに、

身をさいなまれていた。

そして、なん日めだったのか、もう日数を数える気力もなくなったある日の朝はやくに——まだ太陽が水平線のかなたで朝立ちの準備をしていた。その輝やかしい光の箭の中に、一つの島かげが黒いシルエットになって浮かびあがってきたのである。

信じられなかった。だが、まちがいなくそれは島だった。

「陸だぞ！」

作田が、ひびわれしわがれた声でいった。

5

作田はみなを督励して、みじめなかたちで残っていたミズン・セールとジブを張らせた。ヨットは、よたつきながらも、ふたたび水を分けて走りだした。

だが、島が見えていたのは、わずかのあいだだった。

ふたたび、どこからとなく湧いてきた霧が水平線と島とを、白い幕のむこうにおおいかくしてしまったのだった。

霧につつまれると、たまらない恐怖がみなを襲ってきた。さっき見たのが、やはりただの幻影か、雲塊ではなかったのかという不安が、追っても追っても心を曇らせるのだった。

それだけに、昼をすぎた頃、ふいに、白い垂れ幕をさっとあげたようにその島が眼の前にせまったときは、六人が六人、思わずかん声をあげていた。

だが……かん声は、たちまち消えた。

つぎの瞬間、灰色っぽいみどりをまとったその島を、みなは呆然と見つめていた。

なぜかは、わからなかった。

ただ、いまあれほどに湧きたった歓喜の気持が、かけらもなくなっていることに、みんなが気がついたのだった。

しんかんと静まりかえって、海面にうずくまる島のかたちの異様さに、おびえたのかもしれない。

島の上空にも、周辺にも、一羽の鳥も羽虫も飛んでいないことに、不吉を感じたのかもしれない。

しかし……。

スターンに立っていた作田がはっとふりかえった。その動作が、四人の男たちには、すぐのみこめた。

（艇をもどそう）

作田は、明らかにそういうつもりだったのだ。だが、その作田の顔が、たちまち無気力にかげったのを見て、男たちもふりかえってみた。作田の気持が、すぐにわかった。彼らの背

後には、白く、ねっとりと渦まく白い霧の層があった。そこへもどっていくことはとてもできない……。

島へ行くしかないのだ。

島の東に、せまい、貧弱な砂浜があった。

ヨットは、砂浜にむかって、まっすぐに近づいていった。キールが砂を嚙むあたりで、作田はアンカーを投げた。六人は、水しぶきをあげて、陸地をめざした。動かない大地が、たまらなく懐しいものに思えた。

乾いた砂を踏むと、みんな、そのままその場に倒れこんだ。時実が口を開いたのは、十分もたってからだった。

「いったい、ここはどこだろう？」

「伊豆諸島のどこかじゃないか？」

「ばかいうな。伊豆にこんな島があるものか」

作田がいって、上半身をおこした。

「なにか、喰えるものと水を探しに行こう。暗くなったらうっかりそこらを歩けないぞ」

「人家はないかしら？」

田鶴子がいった。

「人家なんてあるもんか」
「どうして？　まさか、日本のそばに、無人島なんてないでしょう」
「ないはずのものがここにあるじゃないか。それに、おれたちがどのくらい流されたか、わかりゃしない」
「それにしたって、一週間かそこいらじゃ、たいした距離のはずはないぜ」
「常識でならな」
「どういう意味だ、それは？」
吉田が、まゆをひそめていった。
「べつに意味はない。でもなんとなくおれはあの暴風以来のことが、常識じゃ判断できないような、みょうな気がしてしょうがないんだ。だからこの島だって……」
六人の男女は、ふと顔を見あわせ、あたりを見まわした。
海は白一色の霧だった。せまい海岸からすぐに、たこの木に似たねじけた亜熱帯性の樹木のびっしりと生えた山が迫っていた。霧の動くせいか、山がゆらいでいるように見える。
「気味がわるい……」
暁子が、ぽつりといった。
「とにかく、ここでぐずついていてもはじまらない。その辺を歩いてみよう」
村井が提案した。じめじめと暗い亜熱帯樹の森に入って、数分、小川が見つかった。密生

した下生えの下を流れる水は澄んでいた。

みなは、先をあらそって、小川のふちに腹這うと、冷めたい水をむさぼり飲んだ。冷たい無味無臭の水が、飢え疲れた彼らにいくぶんかの活気を与えた。男たちは、下生えを踏みくだいて、食料になりそうな木の実でもないかと探しはじめた。

時実が赤い南天に似た木の実を見つけて口にふくんだが、たちまち顔をしかめて吐きだした。強烈なにが味が、はれあがった舌を刺したのだった。ついで吉田が、触れるとほろほろと散りおちる、野イチゴそっくりのピンク色の草の実を見つけたが、これも、鼻先までもってくると、つーんと神経にまでひびく油じみた臭みがあって、とても口には入れられなかった。

森はしだいにのぼり坂になった。

一時間もすすんだときだった。

先頭を歩いていた作田が、張りだした枝を腹立ちまぎれにはらいのけたとたんに、

「おッ！」

と息の詰まったような声を出して立ち止った。村井は、作田の視線を追って、やはり息をのんだ。森がとぎれて、なだらかに下る傾斜の先端が、礫石だらけの入江になっている。その荒磯の突端に、かなりの大きさの外洋ヨットの白っぽい船体が見えたのだった。

「ヨットだ！」

吉田がさけんだ。その横へ、身体ごとぶつけるように田鶴子が走ってきて、
「わたしがいったとおりじゃないの。この島は、ちゃんと人の住んでる島よ。たすかったのよ、わたしたち！」
「そうとはかぎらない」
作田が、いきなり、おし殺した声でいった。
「なぜ？」
「あれは難破船だ。ぼくらと同じように、ここへ漂着したんだ。帆をみてみろ」
みなの視線が、帆に集中した。メーンセールがちぎれちぎれにはためき、ラインがぶらりと宙に浮いているのがたちまち目に映った。そして、あたりに人の気配は全くなかった。

6

「やっぱりそうだわ……」
海岸に立ったとき、田鶴子が、大型ヨットの船べりを見あげていった。
それは、彼らの艇とはちがって、遠洋航海用に設計された、がっちりしたスクーナーだった。だが、その姿のなんという異様さだ。船全体が、うすぎたなくくすんで、まるで腐ってカビの生えた果実のように、ぶくぶくと内側からふくれている感じ——手を触れれば、ぶす

りと指のつき通りそうな感じ。

「遭難してから、すくなくとも一年はたつ」

時実が、ひくく、あたりをはばかるようにいった。芝居じみたその仕様が、ちっともおかしくは感じられない異様な重苦しさが、船全体からただよってくるのだ。

「この船の人たちはどうしたのかしら？」

田鶴子がいった。

「すくなくとも、船にはいないな」

「なぜ？　なぜなの？」

暁子が、かすれた声でいった。

「さあ……」

誰も答えなかった。吉田が沈黙を破った。

「とにかく、あがってみようや。ことによると、なにか食いものが残ってるかもしれない」

「あるもんかい。この船の連中の骸骨ぐらいなもんさ」

時実が毒づいた。

「よし、ぼくも行こう」

村井が吉田につづいて、服をぬぎすてた。二人はパンツ一枚になると、ザブザブと水を渡りだした。岸から数メートルで背がたたなくなり、二人は泳いで船腹に近づいた。

見あげると、船腹いっぱいに、てんてんと青黒いコケのようなものが附着していた。奇妙に、貝がひとつもついていない。

船べりが高くて、よじのぼれそうもなかった。吉田が、水をとばしながら船尾をまわって反対側へ出た。村井もつづいた。船尾に、辰洋丸と、消えかかった船名が読めた。

ミジップから、ロープが一本、海面すれすれまでたれ下っていた。

吉田が、立ち泳ぎしながらロープをつかんだ。あがりかけたとたん、手がすべったのか、吉田ははげしい水音をたてて海面におちた。

「どうした？」

「こけだよ。ロープに、びっしりついてやがって……気持のわるいこけだ」

吉田は水面に首と手だけだして、顔をゆがめた。

「こけぐらいついてたって、あたりまえだろう」

「おまえ、やってみろ」

村井はロープにとりついて、上体を水からあげようと、ロープの上をつかんだ。

ぐにゃっとした、たとえようない異妖な感触がした。とたんに、ただ無性にそれから離れたいという気持がはしって、手をロープからはなそうとした。

目がロープを見た。

それはこけではなかった。一種のキノコだった。大きくて小豆ぐらい、小さいのは米粒ぐ

らいの、白蠟色のキノコが、びっしりと密生していたのだ。それは、一定の距離から見ると、ふしぎなつやをおびて青黒く見えた。

つかんだところはぬるっとつぶれて原形をなくし、ねとねとした灰白色の液体になってしまう。それはまだ、見たことも聞いたこともない異種のキノコだった。それはかすかなにおいを持っていた。かびに似た、無機的な切ないにおいだった。

村井はロープを離し、手を海水でごしごしとこすった。水面で二人は顔を見合わせた。

「どうする？」

「しかたあるまい」

大の男が、キノコが生えているから気持がわるいと、おめおめ帰るわけにはいかない。

「行こう」

迷いをふっきるようにいうと、村井は再びロープをつかんだ。じりじりと甲板めがけてのぼりはじめた。吉田もつづいた。すべる手に力をこめて、村井はようやく甲板についた。足を踏んばって、あたりに目を配った。

考えたとおりだった。甲板も、マストも、キャビーンも——ところきらわず、灰白色のキノコの群に占領されていた。ところどころキノコの群の上に群が繁殖し、まるでグロテスクな昆虫の、巨大なパロディのような節瘤状の塊りになっている。

背筋を、悪寒が走りすぎていった。

「こりゃひでえや」

吉田がうなるようにいった。

一歩足をふみだすと、キノコがつぶれて、ぬらぬらとすべった。村井たちは、ともすれば萎えかける気力をふるいおこしながら、一歩一歩とすすみ、勇を鼓してキャビンに通じるハッチをひらいた。

よどんだ空気にまじって、一種異様なキナ臭いにおいが、鼻をおそってきた。船室まですっかりキノコに占領されているらしい。

二人は、できるだけ壁や手すりにふれまいとしながら、船室におりてみた。想像したような、乗組員の死体はどこにもない——そのかわり、どこもかしこも、ところきらわず白いキノコに埋めつくされていた。

船倉のふたをあけると、キナ臭いにおいはいっそう強くなった。思わず顔をそむけてきびすを返そうとしたとき、吉田がふいにずかずかと中へ踏みこんでいった。

「みろ、食いものだ！」

彼は、壁ぎわに積み重ねてあった大きなボール箱の中に手をつっこみ、缶詰らしいものをひっぱりだした。村井も思わず近よって、それをとって見ようとすると、

「てめえで取れ！　いくらでもある」

吉田は、じゃけんに手をふりはらって、そのあたりをかきまわしはじめた。

「しめた！　ナイフがある」

吉田は、いきなりどっかと床に坐りこむと缶詰をあけにかかった。麻薬患者のように、全身をふるわせ、うなりながらめちゃめちゃに缶詰をあけると、指をつっこんで、なかみを取りだし、貪りくう。

「うまい！　ああ、うまい！」

吉田は、顔も手もあぶらでギトギトさせながらわめいた。吉田は一つめをまたたくうちにからにすると、すぐに二つめを取りだしてあけにかかった。そしてふと、自分を見つめている村井の視線に気がつくと形相をかえた。

「なんだってそんな顔して、おれを見てるんだ！　おれがこれを独占するとでも思ってるのか？　そんなきたないことはしないよ。いますぐ、やつらにも知らせにいってやるさ。でもその前に一つや二つ役得があったっていいじゃねえか――おれたちが見つけたんだ」

村井は視線をそらした。

吉田は、また口いっぱいにほおばると、あたりを見まわした。

「そのボール箱の横に、石炭酸の缶があるだろう。そいつで船室を消毒すりゃ、ここに住めるぜ。そうすりゃ、野宿しないでもすむ。こいつは、運がむいてきたぜ！」

村井は答えなかった。理由のない圧迫感が彼の反射神経を麻痺させていた。

吉田は、立ちあがると、

「よーし、そろそろこいつを見せびらかしてやるか」

そして、なおも缶詰のなかみをほおばりながら、船室を出ていった。村井は、そこに立ちすくんだまま、甲板から、海岸の仲間たちに呼びかける吉田のはしゃいだ声を聞いていた。あたりで、キノコが、白く、ぼうっと光っていた。

7

確かに、この遭難船を見つけたのは運がよかった。手わけして調べてみると、食糧は、缶詰が二箱のほか、ビスケットや米まであった。節約すれば、ゆうに二週間は六人の命をささえられる量だった。

船長室で、狩猟用のライフルと、数箱の弾丸を見つけたとき、作田はよろこんだ。島で獲物をとれるからだ。もっとも、その点ではやはりそこで発見した釣道具のほうが実際的かもしれなかった。

吉田の提案はすぐ実行にうつされた。石炭酸で船室の床や壁のキノコをぬぐいとると、船室は住みやすい宿舎に一変した。船長室が田鶴子と暁子にあてがわれ、メーンキャビンが男たち四人のすみかになった。

ただ、このスクーナーの所属をしめす書類も航海日誌も、乗組員たちの個人的な持物も記

録も、なにひとつないのはおかしかった。

「そういえば鏡がひとつもないのもへんね」

もう気力を回復して、化粧の心配をはじめた田鶴子がいった。

「そんなことより、無線がないのがざんねんだな。それさえありゃ、助けがよべるのに」

作田がくやしがったが、それさえ、ほかの連中には、切実にひびかなかった。食糧と住居の心配が一時的にせよなくなってみると、彼らは、この島流し生活に、なにか興奮のようなものを感じていたのだった。

村井もその一人だった。彼は暁子が、この異常な生活のなかで、もっと情熱的な女に変っていくのを、期待する気持になっていた。

それからの二、三日は、スクーナーをできるだけ住み易くすることに、みなは時を忘れていた。

吉田と村井はもとの海岸までもどって、ヨットをまわしてきた。

だが、失望もあった。

作田は、一日、ライフルをかかえて島に上陸し、獲物をさがした。朝早く数発の銃声が島のあちこちからひびいていたが、昼まえに帰ってきた作田は手ぶらだった。

「だめだ。何もとれなかった」

そういう作田の顔に、村井はふと、濃いかげりを見つけて、はっとした。

「日頃の腕自慢ははったりだったな」
吉田がにやにやしていうと、
「いや……この森の西で、四、五回、木陰にかなり大きな白っぽい動物を見つけて射ったんだが、すばしこいやつでね。そのたびに逃げられちまった。一発や二発はあたってるはずなんだが……どうもへんだ」
最後に、ひとりごとめいていた。
「それじゃ、明日はおれにやらせろよ。でかいやつをしとめてきて、みんなに血のしたたるステーキを喰わしてやる」
吉田が、もう舌なめずりをしていった。
「よしたほうがいい。それに、森のあちこちに、この船に生えてたのより大きい胸くそのわるいキノコが繁殖してね。……じつはぼくも、それできりあげて帰ってきたんだ」
「あの、いやらしいキノコ？」
田鶴子が、顔をしかめていった。
「ああ、まるでお伽話に出てくるキノコの国さ。そこらじゅうキノコだらけでね。うっかりそこへ踏みこんだ時には、なんだか、こっちの身体にまでキノコが生えてきそうな気がしたよ」
「気味がわるい！」

暁子が顔をそむけていった。
「この島は湿気がはげしいんだ」
村井が、ふと天井のあたりを見ていった。
「あしたあたり、また石炭酸で掃除をやりなおさんと、あちこちにまたキノコが生えかかってる」
「ふん——あいつが喰えりゃ、文句はないんだが」
吉田がひょうきんにいった。
「あした、おれがバーベキューをやるとき、マッシュルームあえとしゃれられるんだが」
「だめだ！」
いきなり、村井がいった。なぜそんなに声を荒げたのか、自分にもわからなかった。ただ、総身を、こらえられない不快感が走って無意識にどなってしまったのだ。
気まずい空気が、一座をながれた。

8

「かんをたてるなよ、村井」
時実が、みょうに静かな声でいった。

「でないと、欲求不満がばれちまうぜ」
「なに？」
村井は時実の言葉にふくまれた何かを感じて、いきなりかっとなった。
「もう一度いってみろ」
「なん度でもいってやるさ。紳士はお上品だから、てめえの女にも手を出さないで欲求不満になる。ところが、誰かさんはもうよろしくやってるから、みんなの中で一番元気がいいし、精神状態も安定してるってわけだ……。なあ、田鶴ちゃん？」
「なにいうの、時実さん！　あんたって、いやらしい人ね！」
村井はいい返す田鶴子の、どす黒く興奮した顔を、あっけにとられて見た。
「わたしたちがなにしたっていうのよ」
「しらばくれるなよ。おれはちゃんと知ってたんだ。ゆうべ、お前さんがたは、船尾の小部屋にしけこんだろう」
時実が、ぬめぬめと唇をなめていった。
「あそこで何してた？　人生について語ってたのか？　それともっとてっとりばやく」
「ばか！」
田鶴子が、立ちあがりざま、時実の頬に平手うちをくわせた。
「このあま！」

時実は立ちあがった。同時に作田と村井が両側から時実の腕をとった。時実は二人をはねのけようとしながら、

「やったな、あばずれ」

「わたしたちは恋人どうしよ、わたしたちがなにをしようと勝手じゃないの」

田鶴子が猛然とさけんだ。それはもう、きのうまでの少女めいた田鶴子ではなかった。

「ばかいえ。東京ならいざ知らず、ここは無人島だぞ。おれたちは否応なく一緒に閉じこめられてるんだ。お前らはそれでよかろうがこっちがそれじゃたまらねえや、べたべたしやがって」

吉田が、何かさけんだ。そして、両腕をかかえられて身動きできない時実の腹に、力いっぱいのパンチをたたきこんだ。時実がげえっとうなって前のめりになった。かさにかかって、なおもなぐりかかろうとする吉田を、作田がつきのけた。

「いいかげんにしろ、吉田」

「きたねえ野郎だ。ぶちのめしてやるんだ」

「やめないか」

村井が、その前に立ちふさがると、吉田は顔面をゆがめて、くってかかった。

「お前がおれをとめるのか？　あんなことをいわれた張本人のお前が？」

村井は黙っていた。

吉田は、村井の沈黙にかえって気勢をそがれたらしく、一歩さがると、田鶴子の腕をとった。

「とにかく、こうなったらはっきりしておこうじゃないか。おれは、今日から田鶴子と一部屋とる。食料も分配してもらおう。文句はあるまい？」

「ある」

作田が答えた。

「なんだと？」

「お前の気持がわからないわけじゃない。しかし、おれたちはいま、こんな場合にいるんだ。勝手なことをいったら、おれたちの共同生活はひとたまりもない。今までどおりで暮すんだ。わかるだろうな、田鶴ちゃんも」

田鶴子は、反抗的にそっぽをむいた。その仕種が、ひどくエロチックにうつった。

「ちょっとまて、作田。いつまでもお前なんかのいいなりになると思ったら間違いだぞ」

吉田がずいと一歩出た。小柄な身体に、殺気に似た気合があった。

「お前はスキッパーだった。だからこそ、海じゃお前のいうことをきいた。しかし、こうなっちゃ、意味がねえ。第一、おれたちのこんな災難の責任だってお前にあるんだ。リーダー面もいいかげんにしろ」

吉田は、村井と、うしろの暁子の顔を見た。

「なあ、村井だってそう思うだろう」
「あなたは、わたしたちの味方よね、村井さん。暁ちゃんと一緒になるでしょ？」
田鶴子が、どんと胸をぶつけてきた。ふりかえると、田鶴子の目の中に、彼はおぞましいものを読んだ。
「わるいけど、作田さんのお腹の中はわかってるわ。作田さんも女がほしいのよ。暁子をねらってるのよ。だから、こうなるとつごうがわるいんだわ——だって、こうなれば、あんたと暁子がいっしょになるの、あたりまえだもの」
「いやよ、わたしは……いや！」
暁子が、ふいにふるえながらいいだした。
「このままのほうがいいわ……」
みなが村井の顔を見ていた。
「ああ、やっぱりねえ……」
田鶴子が、誇張した仕種でうなずいた。村井をふりかえる、その目が妖しく光った。
「わかったでしょ、村井さん、暁子のあなたに冷たかったわけが。暁子が作田さんにいかれてたとは、わたしも気がつかなかったわ。でもね——」
田鶴子の目が村井をのぞきこむ。
「今からだってへいきよ。あなた男だもの、取っちゃえばいいのよ。あたしを、吉田くんが

取ったみたいに。カンタンよ」

吉田をふりかえる目が思いきってみだらだった。村井ははげしい嫌悪におそわれた。

「おれは作田に賛成だ」

村井がいったと同時だった。

「くそ！」

わめいて、吉田が、作田をつきとばした。作田は、ふいをうたれて転倒した。その上を飛びこえて、吉田がキャビンの隅へ走った。

目的はすぐわかった。そこに装塡したライフルが立てかけてあったのだ。

とたんに、しゃがみこんでいた時実が、吉田に体あたりした。二つの肉体がぶつかりあい、ころげまわった。作田がはねおき、村井も走りよった。たちまち吉田はおさえつけられた。

「どうする？」

「チャート・ロッカーにぶちこんどこう」

作田が喘ぎながらいった。チャート・ロッカーに、外から頑丈なかんぬきのかかるのを思いだしたのだ。三人は荒れくるう吉田をロッカーへひきずっていった。

ドアをあけた——とたんに吉田が、抵抗をやめた。

「あ、あ……」

三人もぎょっとしてロッカーの中を見た。せまいチャート・ロッカーのなか全体に、まる

で裏うちしたように、微細なキノコ群が生えていた。ぶつぶつがにぶく光って……。

「いやだ……たのむ……ここへはいれないでくれ」

吉田が、すすり泣くような声でいいながら後じさりした。その背を、どんと時実がついた。吉田はつんのめってロッカーに転がりこんだ。ドアが閉まり、かんぬきがかけられると、ロッカーの中から、こもった絶叫がひびきはじめた。

田鶴子が、泣きわめきながら、キャビンの外へ走りだした。暁子は、両手で耳をおおってうずくまっていた。三人の男たちは、大きく喘ぎながら立ちつくしていた。疲れ果て、なすすべもなく、そうして立っていることのみじめさをかみしめながら。

（いったい、この先どうなるんだ？）

村井は、何者かにむかって問いかけた。そして、ふと見上げた天井の一角に、節瘤状に下にむかってもりあがったキノコの群が、みじめな人間の悲喜劇を照らすグロテスクなシャンデリヤのようにぶらさがっているのが見えた。

9

村井はふと目ざめた。

窓からよわい朝の光がながれこんでいた。白い煙のようなものがその中を舞っている。ま

た霧なのだ。

寝返りをうとうとして、はっと気がついた。となりのバンクの時実の姿がない。そのむこうで、作田が、歯ぎしりしていた。

ある予感が、彼の脳裡をひらめいて過ぎた——

彼はがばとはね起きると、

「時実！」

と大声で呼んだ。

「どうしたんだ？」

目をさました作田がいった。

「時実がいないんだ」

作田はバンクから飛びおきると、ハッチへかけだした。彼も村井と、同じことを感じたらしかった。村井もあとを追ってラッタルを駈けあがった。甲板を、白い霧が、濃くうずまいていた。作田が時実の名を呼んだ。

答えなかった。

村井がヨットのことに気がついたのはその時だった。舷にちかく寄せておいたヨットがない！　霧の海上にも……ない！

作田はそれを知ると、

「あっ！」

さけびざま、身をひるがえして、キャビンへ飛びこんでいった。村井もつづいた。

暁子が目を見ひらいて二人を見た。田鶴子は青い顔でロッカーの前にしゃがみこんでいた。

作田は船倉のドアをあけて突っ立った。

「やっぱりやられた。時実のやつ、おれたちの食糧をごっそり持って行きやがった」

「いつのまに……」

「おれたちが、寝しずまるのを待っていたんだ」

作田はつかつかとじぶんのバンクに近よって下をさぐった。顔が鉛色になった。

「ライフルも持っていかれた」

そのとき、かすかに木のきしる音がした。

ふりかえろうとすると、声がした。

「ライフルなら、ここにある」

チャート・ロッカーがあいていた。なかから、ライフルを構えた吉田の顔がのぞいていた。

そばに、田鶴子のネズミのように尖った顔があった。

「あんたのしわざだな」

作田がひくく、つぶやくようにいった。

「そうとも。この間抜けめ。そんな間抜けだから、時実みたいな青二才にしてやられるんだ。

ゆうべ、おれにやらしておけばこんなことにはならなかったのに……動くな！」

黒い銃口が作田の腹につきつけられた。そのまま、ずいと出てくる吉田を見て、

「あ！」

声にならない声が村井の咽喉をもれた。

吉田の顔にキノコが生えていたのだ。

一晩キノコの密生したロッカーに入っていたためだろうか？　それとも、空腹にたえかねて吉田がキノコを食ったからか？

村井は、凍りつく思いで青黒く変った吉田の顔の、こめかみあたりと鼻孔にちかく、さらには首のつけ根あたりに、こんこんと白くしみのように浮いているキノコを見た。

「ライフルをよこせ、吉田、お前は病気だ」

作田が手をだした。

「歩け。村井、きさまもだ」

吉田は銃口を二人の中間にすえてうながした。目が狂暴に光っていた。その場で引金をひくかもしれなかった。作田が歩きだした。村井も、つづいた。

「どうする気だ？」

「殺してやる。そうすりゃ、口が二人へる」

甲板へ出ると、しゅうしゅうと流れる霧が有毒ガスのようにからみついてきた。

「村井は気の毒だがしかたがない。まあ、暁子もおれがかわいがってやるさ」
甲板がひどく短かく感じられた。二人は、銃口に追われて船尾に行きついた。
「村井……」
ひくく作田がいった。とたんに、轟然と世界が音をたてた。作田の身体がびんと宙にとびあがったと思うと、まっさかさまに海上へ落ちていった。思わずのぞくと、霧のためか海がひどく遠く見え、そこへ、高速度撮影のように、作田の身がグロテスクな姿勢で落ちて、しぶきをあげた。
ふりかえると銃口が見えた。
村井はひょいとそれをくぐった。
ぐわーん!
あたりが一瞬赤くそまった。無意識に、弾丸のそれたのを感じた。村井は反射的に、吉田の手もとに飛びこむと、ライフルをおさえて、右手で吉田の顔をなぐりつけた。吉田がふっとんで、ぶざまに倒れた。
「射つな……お、おれは死にたくない!」
吉田が泣きわめいた。その姿を、村井は、悪夢の中の人形劇を見るように、呆然と見つめていた。

10

村井は、干潮を待って吉田と田鶴子とを、海岸に追いあげた。

「二人とも、二度と姿を見せるなよ。近づいたら、射ち殺す」

僅かに残っていた食糧の半分を投げあたえてから、村井がいった。二人は、いっしょに置いてくれと哀願したが、村井の決意はかわらなかった。ぐずつく二人の足元へ、一発ぶっぱなしてやると、ようやくあきらめて、二人はとぼとぼと森の奥へ姿を消した。

村井が一人で帰って来るのを見ると、暁子は、肉食獣におわれる小動物のように、身をひるがえして逃げた。

それが、村井の、しびれたような頭脳に火をつけた。彼は、暁子を追って船長室まで行った。ノブに手をかけると、鍵がかかっていた。

村井は銃の台尻で鍵をぶちのめした。板はめりめりと割れ、蹴とばすと、無雑作にあいた。暁子は、船長室のすみに棒立ちになっていた。村井がちかづくと、まるで発作をおこしたように、全身をわななかせた。

彼はライフルを投げだすと暁子を抱いた。あらあらしく唇をうばった。暁子はまったく抵抗しなかった。彼は暁子を、床からすくいあげてベッドに横たえた。

ブラウスをひきちぎると、胸をおしひろげた。暁子は、わずかに身をすくめただけだった。村井は狂暴な発作にかられて、暁子の着衣をはいだ。やがて白い裸形が——しかしそれは、シーツの海に浮かんだ溺死体のように生気がなかった。村井はそれへ、挑みかかっていった。

村井は、短かい、重い眠りから目覚めた。ふと見ると、暁子は、村井の身体からできるだけ離れるようにして、ベッドの端に身をちぢめていた。その、弱々しさが、村井の胸に残酷さを呼びおこした。彼は暁子の身体から毛布をはぐと、また挑んだ。

暁子は抵抗しなかった。ただ、そのあいだ中、無感動な目を天井に据えているのだった。そのたびに、村井の胸に棲む狂暴なあらしがはげしくなる。

それが、なん回かさねられたか、村井はおぼえていない。時の区切りのつかぬままに、二日か、あるいは三日がたっていったのかもしれない。

ふと明け方に目覚めた村井が、疲れきってこんこんと眠りこけている暁子を見やったときだった。その頭の、ほんの二、三センチさきのシーツの上に、全く、やわらかい、異形のものを見つけたのだ。

ぞっと、悪寒が全身をつらぬいた。

キノコだ。

村井は、裸の上半身をおこした。気が遠くなるような気がした。彼らが、着て寝た毛布の

表面べた一面に、キノコが群生していたのだ。

思わず悲鳴をあげたにちがいない。暁子もはっと身をおこした。すると、その枕にも、シーツの端にも、ベッドの手すりにも、米つぶほどの稚いキノコが数個ずつかたまって繁殖をはじめていた。

暁子が、恐怖の声をあげてしがみついてきた。村井は暁子の裸体をだきあげてベッドを出ようとした。

サンダルに足が触れたとき、彼の口から耐え性のないうめきが洩れた。サンダルにも生えていたキノコを踏みつぶしたのだった。

彼はサンダルを蹴とばしてベッドの上にとびあがった。暁子はひっきりなしに悲鳴をあげていた。

「うるさい、だまれ！」

どなりつけたとき、村井は見た。

暁子の耳のすぐ下の、やわらかい皮膚に、白いホクロのような、ケシツブほどのキノコが……。

「あっ！」

暁子がさけんで、村井の顔をまじまじと見つめていた。

「あなたの、鼻の横にある……それ、なに？」

村井は指先で鼻の横にふれた。ちいさなものがつぶれてぬらりと指先がぬれた。キノコだった。

暁子の目が、くるっとかえった。気をうしなったのだ。

村井は、硬直した暁子の身体を、重く両腕にささえながら、そのときはじめて、じぶんたちが巨大な運命の手ににぎられていたのを覚った。

キノコは、彼らにも寄生しはじめたのだ！

11

気がつくと、キノコは、そのときすでに、船内くまなく繁殖していた。船全体がキノコの養殖棚だった。天井にも、床にも、壁にも甲板にも、あらゆる有機物の上に、白く、青く、はびこっていた。もう船には住めなかった。

村井は半狂乱の暁子を船から連れだした。わずかに残った食料と、釣道具とライフルも陸に運んだ。

だが、キャンプを張る場所を探したとき、村井は、たった二、三日のうちに、あのキノコが全島くまなく進出しはじめていたのを知った。あらゆる樹木の木肌に、キノコは群生しはじめていた。森はもうみどり色ではなかった。

灰緑色のキノコの森だった。キノコは、そこここで塚をなし、風がわたると、まるで生命を持つもののように揺れうごいた。巨人の指のように見えるものもあった。ひらたい、ハスの葉のように地上に拡がっているものもあった。そのどれもが、グロテスクな生命力を誇示していた。

村井は、ようやく、今までの入江の反対側の岸に、キノコの繁殖していないせまい砂浜を見つけて、そこへ移動した。

だが、キノコの魔手をのがれることが、それほどたやすくできないことを知ったのは、そのあくる朝だった——二人は、おたがいの顔や手足に、ふたたびあのキノコを見つけたのだった。

村井は、恐怖をねじふせて、船から持ってきた石炭酸で暁子のキノコをぬぐいとった。それがすむと、自分の身体の処置をした。

しかし、そのときはもう、村井にもわかっていた——いくら消毒しようが、それは所詮一時の気休めでしかないのだ。空気中を飛び交う目に見えないキノコの胞子が、有機体という有機体を、絶えずおかしつづけているのだ。

おそらく、このキノコの繁殖には、時期があったのだろう。彼らが漂着したときは、繁殖期のはじまりだったにちがいないのだ。そしていま、キノコは全盛期にむかいつつあるのだ！

入江のむこうに見えるスクーナーは、もうキノコの化物だった。

村井は、そのスクーナーの生き残りの船員たちの運命も、いまははっきり判った。彼らもこのキノコの魔手からついにのがれられなかったのだ。

だが……いったい、これからどうなるのだろう？

「わたし、わかったわ……」

暁子が、足の先からふくらはぎへかけて、またもてんてんと生えはじめたキノコを、無気力に見やりながらいった。

「あの船には、鏡がひとつもなかったでしょう。あれがなぜか。船の人たちは、キノコにとりつかれたじぶんたちを、見るにしのびなかったのよ」

村井は黙ってうなずいた。彼にもわかっていた。なぜあの船に、航海日誌もなにもなかったのかを——彼らは、この世ならぬ怪物になり果てた自分たちの運命を、他人に知られたくなかったのだ。

そして、もう一つの、避けられない運命がやってきた。わずかばかりの食料がかんぜんに切れてしまったのだ。

「魚を釣るさ。魚なら無尽蔵にある」

村井は、はげますつもりでいった。

「魚をたべて、生きて、どうするの？」

暁子が、ねじけた笑いをうかべていった。
「石炭酸がもうないのよ」
村井は缶をのぞいた。からだ。キノコの繁殖をふせぐ唯一の方法がなくなったのだ。
「いっそのこと、なにもたべずに餓死したほうがましよ」
暁子は砂に横たわって空を見あげた。空は曇って、また霧が来そうだった。暁子の目から、久々の涙がするりと流れて、キノコにおかされたうなじの方へ流れていった。

12

だが、村井は毎日魚をとりに出た。生きて甲斐ないこととは知りながらも、飢えにさいなまれると、いつか海岸に出て、釣をしている自分を見出すのだった。それは暁子もおなじことだった。村井の取ってきたわずかな獲物に、彼女は餓鬼のようにかぶりついた。
そうした暁子の様子に、微妙な変化がおきているのを知ったのは、食料がなくなってから、なん日めかのことだった。
暁子は、村井の取って来た魚をちらと見やっただけで、いったのだ。
「ほしくないわ……あなた、たべて」
村井はその暁子の眼のあたりに、ふと異妖なものを感じた。そして見ると、暁子の身体ぜ

んたいに、今まではなかった生気がみなぎっていた。肌の色には艶さえあった。

その夜、暁子ははげしく村井をもとめた。燃えて歓喜に身をもだえる暁子を抱きながら村井は、はじめてなぜだろうといぶかった。いままで、魚のように無感動だった暁子なのだ。いつも村井は一人芝居をしてきたのだ。いや、それよりも、こんな体力が、暁子に残っているはずはない……。

答えはあくる日、見つかった。

いつものように海へ出た彼がもどってくると、暁子の姿がテントのあたりになかった。彼はぎょっとして、あたりを見まわした。

ゆうべの、異常な燃えかたが、とつぜん全身の感覚としてよみがえってきた。

自殺する気だったのだ！

村井は、獲物を投げ捨てると、ライフルを摑んだ。

スクーナーだ。

彼は、よろめきながら、海岸を走りだしていた。

たちまち、行く手は、キノコの世界に変った。浜いったいは、キノコの絨毯を敷きつめ、キノコのかたちをした木を植え、岩のように見えるものまで、じつはキノコの群落だった。

村井は、キノコを蹴ちらして走った。

前にはなかった森が行手をさえぎった。キノコが、森のかたちで海岸まで進出していたの

だった。

彼はためらわずそこにおどりこんだ。

と——ふいに、奇妙な、けものの泣き声に似たさけびを聞いて、村井は立ちどまると銃をつきつけた。

巨大なキノコの柱の下から、人間の脚がつきだしていた。暁子の足だった。

「暁子！」

キノコをわけて見た村井は、思わず目をそむけた。暁子が、口いっぱいに白いキノコを頬ばって、口の端からよだれの糸をひき、目をほそめ、身もだえしていた。けもののうめきと聞いたのは、暁子の歓喜の叫びだった。

「暁子！」

暁子はふっと目をあけた。そして村井をみとめると、あたりのキノコをてのひらいっぱいにしゃくって、村井の目の前につきだした。

「おいしいよ」

暁子の顔はキノコの群生におおわれかけて異形のものに変形しつつあった。

村井は夢中ではねのけた。

ふいに、背後のキノコの塊が、ぐらりとゆれて、人間の手に似た触手をのばしてよこした。

村井は恐怖のさけびをあげた。

触手につづいた灰色のボールが人間の頭そっくりだったからだ。

いや、人間なのだ。人間のなれの果てなのだ。キノコを喰い、キノコそのものに変身してしまったキノコ人間なのだ！

村井の周囲ぜんたいが、ざわめきだした。

見まわすと、キノコ人間が、二つ、三つ、四つ……ぞよぞよ、ぞよぞよと彼めがけてせまってくるのだった。

ばしっと、何かが、顔にあたって、くだけた。

キノコ人間が、キノコの塊をぶつけたのだ。散ったキノコのしぶきが、口へ入った。しぶきは甘く、芳香をはなった。

村井は、一瞬、その場にしゃがみこんでキノコをむさぼり喰いたい強烈な衝動にかられた。うまい、うまい、うまいキノコを……。

赤いネッカチーフが目についたのは、村井が誘惑に負けてしまう、そのほんの寸前だった！

赤いネッカチーフを、まだへばりつけているキノコは、田鶴子のなれの果てにちがいなかった！

その横は吉田だ！　そのまわりにいるのは船員服のきれはしをつけている！

村井は本能的にライフルの引金を引いた。

目の前のキノコ人間から、パッとキノコのくずが飛んで、どうと倒れた。まわりの灰白色のボールが、いっせいにせまってきた。

村井はライフルを、弾丸のつづくかぎりうちまくった。銃声が、彼の萎えかけた心をよびさました。村井はライフルをふりまわしながら、走った。走った。走った……。

そして、気がつくと、海岸にたどりついていた。波打際に、時実がぬすんでいったはずの彼らのヨットが、波にもてあそばれていた。村井は波を蹴ちらしてヨットに乗った。渾身の力で沖へ出した。

海は、なまり色のうねりと白い霧だった。ヨットは白い世界に入っていった。ひやびやと、音もなく……。

13

白い、広々とした部屋の中で、男は、まだ話しつづけていた。だが、あいてが、あまり壁のように黙りこくったままなので、ふと口をとじた。

男は、じぶんの長話のせいで、あいてを退屈させてしまったのか、と思って狼狽した。

「でも、もう終ったんですよ。ぼくは助かったんだし、もうすぐ退院するんだから。ね、ほら見てください、ぼくの腕。キノコなんか、ひとつも生えていないでしょう。痕はのこった

けど」

男は、腕をまくると、照明の下へすっと出して見せた……。

「ね、ほら、やったでしょう、先生？」

と若い医師は、息をはずませて私をふりかえった。私たちは、明るい照明のついた病室の中を、のぞき窓から、見まもっていたのだった。私は、照明に照らされてなんの傷痕もなくてらてら光る、その男の腕を見つめた。

「せっかく先生に来ていただいたけれど、ぼくは、あの患者は、回復の見込みはないと思いますね。ヨットで遭難して、仲間が五人死んで、彼だけ漂流してるところを発見されてこの病院にかつぎこまれたんです。あまりの孤独と飢えとで、発狂したんですよ。あのキノコの話を、壁をあいてに毎日くりかえすんですよ。かわいそうに」

若い医師は、切なげに首をふってみせた。

私は黙って、窓の外を流れる霧を見た。そして、むかし読んだことのある中世の医書にマタンゴという奇怪なキノコの話があったのを、このわかい医師に話すべきか、どうかとまよっていた。

マタンゴを喰ったな

橋本治

マタンゴを喰った人間はマタンゴになるという。誰が名付けたのかは知らないが、これは史上最強の生き物である。

キノコがセミの幼虫に寄生して冬虫夏草になるとは言っても、セミがキノコになる訳ではない。鳥が木の実を啄んでも、種はウンコで運ばれて行くだけだから、鳥が木の実になる訳ではない。生物の異種は基本的に侵し合わないという生物界の鉄則を踏み躙ってマタンゴは存在しているのだから恐ろしいキノコである。ほとんど意志を持った癌のようなものだ。エイズよりこわい。また、マタンゴという一種卑猥な命名が実はキノコであるというところも、なんとなく両性具有の相互オカマ化現象のようでこわい。

こんなこわいもの尽しのようなものが存在してしまったからこわい。日本は雨が多いから、キノコの繁殖には好適なのである。

沖之掛金島は日本の南方三十キロのところにある名もない小島であるが、既にこの一行で嘘である。そこは一年中霧に閉されている船の墓場なのであるが、どうして南の小島が霧に閉されなければならないのかがよく分らない上に、船の墓場に住民が住んでいることもおかしい。大体に於いて日本の南方三十キロというのがどの程度の距離なのかよく分らないところへもって来て、どうしてそこが放射能で汚染されているのかもよく分らない。そんなことを言っていたら東京もビキニ環礁になってしまうだろうが、突然変異をすべて放射能のせいにしてしまうからこういう矛盾が生まれるのである。

とりあえず、沖之掛金島の住民は全員マタンゴになってしまったのだが、どうしたらいいだろうということになった。

「焼き払ってしまうほかはないだろう」ということになって海上自衛隊が沖之掛金島に向ったのだが、マタンゴになってしまった住民が全員で、「俺は人間だ、殺さないでくれ」というので困った。人間を殺してしまうと、とかく自衛隊問題でとかくの噂がある自衛隊が、待ってましたとばかり世論の袋叩きに合う。「ここはやはり人道的見地から見て」ということになって、沖之掛金島は隔離されるだけで終った。

そんなことを言えば、沖之掛金島は元々鳥も通わぬ海の孤島なのだから放っとけばいいのに、一体何をしに行ったのか訳が分らない。訳が分らないことをするとロクな結果にしかならないということは次の章で証明される。

第二章　マタンゴがついたな

マタンゴはもともとキノコだから胞子で殖える。胞子が殖えすぎて、島中キノコだらけになってもうどうしようもないなということになったので、マタンゴの方は自分を人間に食べさせるという方式を取るようになったのである。すべての生物が環境に合わせて自らを変えて行くのは生物界の常識である。

という訳で、島中の人間はマタンゴを喰ってマタンゴになった。これはマタンゴにとっては輝かしい進化の第一段階ではあったのだが、〝マタンゴを喰えばマタンゴになる〟という恐ろしい鉄則を打ち立てた狡猾なマタンゴは、人間ほど愚かではなかった。即ち、便宜的な二次的方法を野放しにすると、その生物は仮初の繁栄を誇ったとてやがて根無し草になって絶滅するという鉄則も、我が生物界にはあるのである。

〝マタンゴを喰えばマタンゴになる〟ということは、実に目覚しい生存拡張方法ではあるが、しかしキノコがキノコである本来の性質を忘れてしまったらマタンゴはマタンゴでなくなる——というようなことを人間の言葉ではなく、マタンゴの細胞が細胞として感じとったのである。生物が生き延びるということは、全細胞がそれぞれに外界の情報に対しての反応を全開にすることであるというテーゼもある。

斯くして、〝マタンゴを喰えばマタンゴになる〟という、生物史上最強の方法論を自らの遺伝子に刻み込んだまま、マタンゴは己の素朴なる本来性に従って、胞子を飛ばしたのである。だから、訳の分らないものには近づくなというのである。

という訳で、マタンゴ絶滅の為に沖之掛金島に立ち寄った海上自衛隊の駆逐艦第三金田麩丸はマタンゴの胞子を船体一杯に付着させて帰国の途についたのである。

だから余計なことはしなければいいのにというのである。

第三部　世界はキノコで一杯だ——併にキノコは密室で育つ

海上自衛隊の駆逐艦第三金田麩丸はやがてマタンゴで一杯の姿を竹芝桟橋に現わすのであるが、それはそれとして沖之掛金島に取り残されたマタンゴ本体はどうなったかというのである。

まァ、日本に向けて触手は伸ばしたが、「それはそれとして我々はどうすればいいのか」とマタンゴは考えたのである。これ以上ここで殖えても海にこぼれ落ちるばかりであると。本拠をなおざりにして支店の繁栄だけに目を細めていると、やがて子供に捨てられて孤独な老後を養老院で送る寝たきり人間のようになってしまうと、人間の言葉に翻訳すればそう考えたマタンゴは、さすがに自然界の生き物である。環境に適応して行くのが生物の務めであ

ると悟ったマタンゴは、遠い中生代の昔の爬虫類の先例に鑑みて、海生マタンゴを生み出して行ったのである。

斯くして、やがてマタンゴだらけになる海上自衛隊の駆逐艦第三金田麩丸の後に、ゆったりと、クラゲの大群のような海生キノコの海が出現することになるのであるが、そんなことは知らないこちらは海上自衛隊の駆逐艦第三金田麩丸の内部である。なにしろ肉体労働に従事している男達だけの密室が船なのであるから、ジトジトと汗臭くてキノコの繁殖には絶好である。

なにしろ押入れに放り込んであるパンツの中からキノコが生えるという前例もあるのだから、前例のあるところに後例のなかったためしはない。まずマタンゴの胞子はエアコンに巣喰って、エアコン内部の薄汚れを滋養として育ち始めた。見えないところを掃除しないでいる方が悪いとマタンゴが言ったかどうかは分らない。エアコン内部のジトジトを本拠にして勢力を伸ばして行ったマタンゴは、電気系統をショートさせるという方向に進んで行った。自然の摂理はよくしたもので、エアコンからはコードが伸びているのであるからしようがない。「なんだか艦の中が蒸し暑いなァ」と乗組員が思った時は後の祭りで、艦内の電気系統は全部やられていた。

艦内の電気系統が全部やられるとどういうことになるのかというと、「ああ、お腹が空いたなァ」と思って開ける食糧貯蔵庫が全部カビだらけということである。ムアッと、生臭い

匂いが食事時間になると広がり渡るということである。それは気持が悪い。

食い物がなくなるとどうしても士気が落ちるというのは、泰平の世に慣れてしまった人間の常としてしようがない。

「艦内の掃除を全力を挙げてやれ！」と言われても、「いいんじゃないの」という気になる。「あと一日我慢すれば日本に着くんだからサ」と乗組員は思ったのだが、しかし一体、日本の南方三十キロというのはどの程度の距離なのであろうか。誰も知らない。

不条理が不条理だというのは、これはもう抵抗のしがたい事実で、「あと一日我慢すれば日本に着くんだからサ」などと呑気なことを言うヤツは、自分の発言に反して、決して我慢なんかはしない。やる気をなくしてボーッとすれば、カビだらけの船内は蒸し暑くって、我慢なんかしようという気には到底なれないところだというのは分りきっていることで、「怠惰に寝そべっちまえ」というところを「我慢すれば」なんて不正確な言葉遣いをするからいけないのだ。

「後一日で日本に着くから片付けろ」と言う人間がいる一方で「後一日で日本に着くんだからまァいいんじゃないの」と言うヤツもいるんだから、「後一日で日本に着くんだから」と思ってマタンゴを喰うヤツだっている。食べるとどうなるかはもう結果の見えていることで、体が熱っぽくなってだるくなって、しかもそれが不快感を伴った心地良さで、もう、マタンゴを食べる以外になんにもする気がしなくなって、体中がマタンゴ化し始める。

体中がムズ痒くなって来て、ボーッと、ニキビのような湿疹が全身に浮き上って来て、ほとんどエイズである。男だらけのジトジトした船の中でそういうものが日本に帰って来てしまったというのが、エイズ＝マタンゴ説がまず上陸してしまったという日本の悲劇なのであるが、この先話はもっと気持悪くなって行く。

更にマタンゴを喰ったな

橋本治

さて、まだキノコを体中に花開かせないマタンゴ化の前症状をエイズのようにはためかせながら、海上自衛隊の駆逐艦第三金田麩丸が着いたのは東京の竹芝桟橋であるが、こういうことは前篇で言ってしまったので今更変更のしようがない。

エイズを装ったマタンゴが竹芝桟橋に着いてしまったのはもう不幸の至りで、ここは実に倉庫と称する進んだファッション関係者の前進基地でもあったのだ。男だけの自衛隊→ジトジト→ホモ→エイズ→ファッション関係者というヘンな流通経路を流言蜚語と共に獲得してしまったマタンゴは、もっと不気味な方がいいと思って、ここで平仮名になるのである。即ち、

第二楽章　またんご。

どうです気持悪いでしょう。という訳で、沖之掛金島から発生したまたんごは海上自衛隊の駆逐艦第三金田麩丸に乗って竹芝桟橋から、一路、青山・六本木・霞町近辺の和食中心のカフェバーへと延びて行くのである。もう気持悪くって書けない。

かふえばあ・またんごである。それが気持悪くなかったら何が気持悪いであろうか。環境音楽はまたんごによくまっちするのだった。

さて、陸の通路はそうなのだが、話は変って浪の上である。カツオがまたんごを喰うとどうなるのかという、気持の悪い話をするのである。

地球の七割を占める海は、人の手の届かぬ底知れぬ神秘を湛えている。

こう書くともう、海の中ではなんでも起る。何が起っても不思議はない。何が起っても人間は知らないでいるのだから、それは確実に起るのである。

さて、沖之掛金島から海に落ちたまたんごの胞子は、海の中でびらびらのくらげのように花開いた。海生と陸生とで、またんごはかなり性質を変えたのである。汚水溜めに育ったカツオノエボシが茶色くなったと思ってもらえばよい。それはそのまま、あの懐かしの紅茶キノコである。

またんごとしては最初、それを魚が喰ったらどうなるのか、ということを考えてはみなかったのである。初めて己が眼前に開けた自由の新天地〝海〟を目の当りにして、興奮して、

ただ育ったのである。沖之掛金島周辺の海域がある日突然茶色く濁ったのはそういう訳だったのである。それは、海底火山でも赤潮でも生活汚水でも工場廃液でもなく、泳ぎ漂うまたんごの海だったのである。あのヘドロだらけの田子之浦が沖之掛金島近辺に育ったのであるが、海生またんごが東京湾や隅田川に親近感を持ったとしても仕方がない。やがて東京中、いや日本中の下水が紅茶きのことなるのである。

時々地面の下で悲鳴が聞こえたりするのは、あれは下水道にまぎれこんだ子供が紅茶きのこ化した下水生またんごに襲われている悲鳴である。人道的見地から見ればこの子供は可哀想なのだが、悲鳴を上げた途端、子供の口の中にまたんごが入りこんで子供は自動的にまたんごになっているから可哀想がっても意味はない。可哀想だと言えば、下水にまぎれこむ子供よりも、二十四時間営業のスーパーの店員の方がもっと気持悪い。なにしろ、誰もいない夜中に、顔からきのこを生やした男がニタニタ笑ってやって来るのだから、それはこわい。一体何しにまたんご化した男がやって来るのかというと、それは勿論、失われたアイデンティティーの回復の為である。

やっぱりまたんごになっても、またんごになりきるまでは半分人間だったりもするので、「どうせ自分はまたんごだ。極楽々々」と思っていても、夜中になるとふっと人恋しくなる。ひょっとしたら自分はまたんごになっていないのかもしれないと思うところが恍惚状態をもたらすまたんごのＬＳＤ的幻覚のこわさなのである。そういえばＬＳＤもキノコではあった

と言ったら「それは間違いだ」という声もあったので違うのかもしれない。

という訳で、孤独な人間が夜中にフラーッとやって来て、「ねェ、僕はまだ人間ですよねェ」とニターッと笑って言うものだから、こわくなって二十四時間営業のスーパーはみんな店を閉めてしまった。

という訳で、夜中になると喰い物はなくなるという昭和三十年代的現実が再びやって来たのだが、時は昭和五十年代だったから、多くの人々は夜中になるとまたんごを喰ってしまうという悪習が広がって、歯止めはなくなったのである。

あ、そうだ、海の話をしていたのであった。

海一杯に広がった海生またんごはほとんどカツオノエボシとなり、海に酸欠状態をもたらした。海はまたんごで蓋をされてしまったので、しようがないから、魚はまたんごを喰ったのである。喰われて初めて、「あ、そうか、魚だってまたんごになってもいいんだ」とまたんごが気がついたのは、既に王道を行く王者の風格であろうか。

とにかく、腐ってると分ってる水の下に一体何が住んでるのなかァなんて考えることはそれ自体で不気味である。何が住んでるのかと言えば、ドロドロになった甘酸っぱい汚水溜めに、目から先がドロドロに溶けたきのこを平気で垂れ流しているようなウロコの剝げた魚のようなものがグチャグチャと泳いでいるのだから気持が悪い。

それが東京湾から隅田川、多摩川、下水道へと溯って行った話はもう前にした。なにしろ

多摩川に鮭を呼び戻そうと思って鮭の卵を絞ったら、イクラの半分が紅茶きのこ化していたというのだから気味が悪い。上流の方では、鮎がキノコになって民家の天井から垂れて来たというのだから気持が悪い。沼沢地に住むイボガエルなどは、イボが全部キノコになって、ためしに腹を割ってみたら、内臓の代りに薄黄色の菌糸がウジャウジャと蠢いていたというからホントに気持が悪いのにも困ったものだ。

同じような話では、ニキビとまたんごの区別が曖昧になって、ニキビのある高校生などはもう村八分にされるものだから、「畜生」と思ってニキビだらけのその顔を人前でプチュッと潰したらそれがホントにまたんごだった、という話もＮＨＫの岐阜放送支局から伝えられている。

勿論金魚なんかはまたんごであるが、もっと気持悪いというのは群馬県の椎茸栽培農家の報告によると、自宅の庭で栽培していた椎茸が突然おばあさんになってしまったという話がある。茨城県の方では、栽培中のエノキ茸がみんな泥鰌になって、夜中にゲラゲラと笑うというのも気持が悪い。大体、またんごという言葉を聞くと、みんなが抵抗力をなくしてしまうという風潮がよくなかった。

はじめはＮＨＫのニュースでもこいつのことを〝またんご〟とは言わずに〝寄生菌類〟と言っていたのだが、例によって週刊文春がグラビアで「これが〝マタンゴ〟だ!?」などというスッパ抜きをやってしまったのがよくなかった。昭和三十年代の東宝特撮映画は、ある年

代から下のマニアには、とてつもなく懐かしい響きがあるからだ。

もっとも、そこら辺の世代だと「もうノスタルジーはやめよう」という理性がいくらかでもあるからいいのだが、『オールナイト・フジ』で片岡鶴太郎が「またんごお」と平仮名で言ってしまったのがよくないようだった。オールナイターズがみんな「やだァ♡」と言ってゲラゲラ笑ったのである。これ以降、若いお嬢さん達の間でまたんごと言ったら卑猥なものということになってしまったのである。要するに〝またんご〟という言葉そのものが呪縛力を持ってしまったのである。

「俺は絶対にそういう軽薄な風潮に乗らないぞ」と思っていたNHKのアナウンサーが、全国ニュースで「いわゆる〝またんご〟と称される」と言ってしまった途端、「やァだァ」という女子大生の幻聴を聞いてしまったのがいけなかった。彼はうっかり、ここで頭を掻いてしまったのである。もう、そこら辺から〝またんご〟という言葉は媚薬のように人をニタつかせるものになってしまった。

中国辺りに行くと、あそこは元々揚子江にしろ黄河にしろ濁っているものだから、ほとんど川そのものがぶよぶよにまたんごだという。中華料理も食べられなくなってしまった。

アマゾン辺りだと——もう気持悪くなって書けない。

ところであなたはもうまたんごを食べましたか？　なういギャルはまたんごしてるそうですよ。

マタンゴ

大槻ケンヂ

呪いの館には行っちゃいけねえ！
呪いの館には行っちゃいけねえ！
くどいようだが行っちゃいけねえ！
呪いの館には行っちゃいけねえ！
それでも行くと言うのなら
僕を振り切り行くのなら
ひとつ気をつけてね
タマミちゃんにはね

マタンゴというキノコは人に寄生いたします

あまねく全ての人が
お庭にキノコを植えたら
キノコ人間になってしまった
君の家のタマミちゃんが
目立たなくなるからいいねぇ（いいよね）
おめかしをしてドレスを着せて
パーティーにつれてゆけるからいいねぇ（いいよね）
いくら
頭が良くったって
かわいくったって
キノコ人間じゃあねえ……

マタンゴ
マタンゴ
タパタパタパタパ
タパタパタパタパ
タパタパ胞子を振りまくよ

科学小説

花田清輝

その文体

科学小説の見本に、武田泰淳の『「ゴジラ」の来る夜』をとりあげなければならないとは、なんという不運であろう。もしかすると、この作家もまた、ロアルド・ダールのいわゆる「偉大なる自動文章製造機」を使用しているのではあるまいか。ボタンを一つ押せば、一秒に一枚の割合で、きれいにタイプされたお好みの原稿が、さらさらとバスケットのなかへ落ちてくる、あの便利な、機械である。もしもそうだとすれば、右の小説は、八十枚だから、製造するのに約一分二十秒ぐらいかかった、ということになる。ところが、そういう小説を読んで、なんとかもっともらしいようなことをかくためには、すくなくともこちらには、そ

の十倍か、二十倍の時間が必要だ。それでは小説家にくらべて、批評家が、あまりにもかわいそうではないか。わたしもまた、「偉大なる自動批評製造機」を欲しいとおもう。自動読書機と自動文章製造機とを結合した仕掛けである。それさえあれば、小説のばあいほど、その操作は簡単でないにしても、この時評など、せいぜい、十秒内外で、でっちあげることができるかもしれない。

そういえば、わたしには、『「ゴジラ」の来る夜』よりも「偉大なる自動文章製造機」のほうが、はるかにサイエンス・フィクションらしいような気がしないこともない。ということは、わたしが、サイエンス・フィクションの原型を十八世紀の小説に——それも、ヴォルテールの『ミクロメガス』のような小説にではなく、スウィフトの『ガリヴァ旅行記』のような小説に求めていることを意味する。げんに後者の第三部にはいっているラガードー学士院参観のくだりには、電子計算機を模してつくられたダールのものほど精密ではないが——しかし、それだけにまた、誰にでも、そくざにその原理ののみこめるような文章製造機が、ちゃんと図解いりで紹介されているのだ。なるほど、それは、まだ、ボタン一つを押せば、きれいにタイプされたお好みの原稿が、バスケットのなかへ、さらさらと落ちてくる、といったようなぐあいに、うまくはできていない。四十人の助手をつかって、四十の鉄のハンドルを、ガチャン、ガチャンとまわしながら、そのつど変化していく単語の配列を、一々、記録していかなければならないというのだから、相当、原始的である。たしかにそこには、オー

トメーション時代の文章製造機とマニュファクチュア時代のそれとのあいだにみいだされる相違が、歴然とあらわれているといえばいえよう。その点では、同じ十八世紀の小説ではあるが、シラノの『月世界旅行記』のなかにあらわれている蓄音機仕掛けの書物などのほうが、今日のテイプ・レコーダーやシンクロ・リーダーに、ヨリ近いシロモノかもしれない。しかし、正直なところ、そんなことは問題ではないのだ。ダールは、スウィフトの弟子であって、でっちあげ専門の著者たちにたいする後者の諷刺が、かならずしも前者のそれよりも、単純なメカニズムをもっているとはかぎらないのである。

数年前、『第一のボタン』という未完におわったサイエンス・フィクションをかき、水爆投下のボタンを押した人物の戦争責任をとりあげた当時まで、どうやら武田泰淳は、まだわたしと同様、「偉大なる自動文章製造機」のボタンを押すことにためらいのようなものを感じていたらしい。そのころのかれが、どの程度まで真剣に戦争責任について考えていたか疑問であるが、すくなくともかれが、そこで、表現の責任について拘泥していたことに疑問の余地はない。しかるに、この『「ゴジラ」の来る夜』という第三次大戦前夜の不安を、アレゴリカルに描こうとした作品のなかでは、かれは、戦争責任はむろんのこと、表現の責任さえ放棄し、ボタンを押したあとで、バスケットへたまっていく原稿の枚数を、ささやかな良心のカシャクさえなしに、ひややかにながめているらしいのだ。『第一のボタン』のなかに霧のようにただよっていた仏教的なニヒリズムが薄れてしまうと、水爆投下後の風景のよう

な、惨澹たる廃墟があらわれたというわけだ。

『「ゴジラ」の来る夜』は、資本家と資本家の女秘書と労組の指導者と脱獄の上手な犯罪者と宗教家と「ゴジラ」劇に登場する女優とが、特攻隊になって、無人の病院へたてこもり、「ゴジラ」の出現を待っているところからはじまっている。ところが、籠城の第一夜、なにものかのために、まず、そのなかの宗教家が殺される。女秘書の推理によれば、これは、精神の不安をまぎらわすため、かれらの服用した「キルドルム」という睡眠剤の作用で、一同が、無意識のうちに、宗教家におそいかかった結果だというのだ。そういわれてみると、いかにもおもいあたるふしぶしがないではない。なぜなら、かれらのからだのどこかに、それぞれ、血痕が附着していたからだ。疑心暗鬼のまま、第二夜があけると、こんどはかれらに連絡にきた本部のヘリコプターの操縦士が、殺されている。原因はどうやら前回と同じらしい。そこで、これはたまらんというので、犯罪者と女優とが、ヘリコプターで脱出しようとするのであるが、その瞬間、「透明ゴジラ」がやってきて、一同、一人残らず壊滅してしまうというおはなしなのである。

わたしは、べつだん、右のおはなしが、ばかばかしいから、つまらないというのではない。ばかばかしいといってしまえば、スウィフトの『ガリヴァ旅行記』にしても、H・G・ウェルズの『宇宙戦争』にしても、サイエンス・フィクションの古典という古典は、ことごとく、ばかばかしいおはなしばかりだ。にもかかわらず、それらの古典に滋味溢れるもののあるの

はなぜであろうか。一言にしていえば、すこぶる非科学的なことながら、すべてかれらが、文章の製造にあたって、手工業的な段階にとどまり、断じて「偉大なる自動文章製造機」のボタンを押さなかった点にあるのではないかとわたしはおもう。つまり、かれらは、例外なく、表現の責任をとっているのである。

といって、——だからといって、べつだん、かれらは文章にこっていたわけではない。スウィフトの文体にしても、ウェルズのそれにしても、至極、不愛想なドキュメンタリー・タッチにすぎない。コンリンズのいわゆる「微塵も芸術に負うところのない文体」なのである。スウィフトはともかく、ウェルズは、武田泰淳などよりも、はるかにサイエンスを信じていたおめでたい人物だったかもしれない。しかし、『宇宙戦争』の文体と、『「ゴジラ」の来る夜』のそれとをくらべてみると、どうもわたしには、おめでたい人物のほうが、はるかに人を食っていたような感じがしてならない。

その思想

科学者であるフランケンシュタインは、かれのつくりだした怪物によって殺される。しかし、その怪物が、はたしてこれまで考えられてきたように怪物みたいにみえるかどうかということは、はなはだ疑問であって、案外、それはフランケンシュタイン博士にそっくりかも

しれないのだ。それかあらぬか、いまでは、フランケンシュタインというと、すくなくともわれわれの周囲では、怪物そのもののほうをさすばあいが多いようだ。安部公房の『人間そっくり』というテレビ・ドラマのなかで、科学小説家を訪問してくる火星人夫婦は、みたところ、その小説家といっこう変りのない人間そっくりの風貌をしているので、かれらが、かれの小説の単なる愛読者であるのか、それとも火星人だとおもいこんでいる気ちがいであるのか、あるいはまた、ホンモノの火星人であるのか、話をしているうちに、小説家自身にも、さっぱりその区別がつかなくなってしまうのであるが、そこに今日のフランケンシュタインのドラマが——無気味であればあるほど、ますます滑稽な、二十世紀のドラマがあることはいうまでもない。ということは、つまり、安部公房自身がみずからを、フランケンシュタインであるのか、怪物であるのか、そくざに決しかねているということであろう。

怪物には未来が——すくなくともフランケンシュタインよりも、未来がある。もしかすると、かれが怪物だとみられているのは、そのせいかもしれないのである。わたしは、ポール・ヴァレリーが、『テスト氏』のなかで、怪物の特性を、存続できないという点にもとめているのは、非常なまちがいであって、それは、かれがあまりにも日常的なものにだけ執着し、そういうものだけに存続の可能性が保証されているとおもいこんでいたためであろうと考える。しかるに、未来とは——もしそれが、真に未来の名に値いするような未来であるとするならば、その種の日常的なものから飛躍したところで、はじめて成立するものなのであ

る。したがって、われわれの身辺にみいだされるいっさいの未来のにない手たちは――たとえかれらが、人間そっくりのようにみえるにしても、ヴァレリーのような保守派の眼には、逆に未来のない存在として――了解しがたい「怪物」としてうつることは、当然のことというほかはないのだ。

安部公房の力作『第四間氷期』（講談社刊）は、ヴァレリーとは反対に、革命的な立場から、二十世紀の「フランケンシュタイン」を描きだし、あくまでも怪物のがわに立って、ともすれば日常的な現実にしがみつきがちなわれわれ人間を、無慈悲に断罪しているので痛快だ。「フランケンシュタイン」というのが誤解をまねくなら、かつて『フランケンシュタイン』の作者であるマリー・シェリーがおのれの作品に、「現代のプロメテウス」という傍題をつけたのにならって、わたしは、ここに、今日の火をぬすんだものの物語があるといってもいい。そして、なにより注目しなければならない点は、すべての登場人物たちが、かれらの行動に、それぞれ、思想的な動機をもっているということだ。

最近、推理小説の領域において動機が問題にされているのは、けっこうなことであるが――しかし、科学小説の領域においても、同様のことが、さらにいっそう声を大にして、強調される必要があるのではなかろうか。もっとも、その動機なるものは、かならずしもいっぱんにいわれているように、金銭だとか、愛欲だとか、名誉だとかいったような日常的なものでなければならないとは、いささかもわたしはおもわない。いや、むしろ、それらの動機

に、むやみに拘泥することは、かえって、推理小説や科学小説を、世のつねの風俗小説に堕落させてしまうおそれがないでもないのだ。

したがって、わたしは、このさい、右のような知的な小説のジャンルにおいてなにより注目されなければならないのは、『第四間氷期』のなかで安部公房の描いているような思想的な動機であると考えるのであるが、如何なものであろう。

むろん、そのためには、作者自身が、無思想であってはなるまい。といって——だからといって、その思想を登場人物たちのくちをとおして、しゃべらせなければならないというのではない。安部公房の思想が、もっともあざやかに描きだされているくだりは、案外「序曲」と題する、その小説の冒頭の二ページかもしれないのだ。そこではかれのこれまでにたえず主張しつづけてきた終末観が——おそるべきカタクリズムにたいする予感が、信じがたいほどの波長と時速七二〇キロの速度で、深海を陸地にむかって走りつづけている海水の振動といったようなイメージで、みごとにとらえられているのである。そして、いずれは陸地という陸地を水びたしにしないではおさまらない、そのような海底のアンダーカレントに、さりげない顔つきでふれたあとで、まず、かれは、『プログラム・カード・ナムバー・1』のなかで、日常的なもののなかに頭からとっぷりとひたりきっているニセモノのフランケンシュタインと、かれのつくりだしたニセモノの怪物である予言機械とを、完膚なきまでに嘲笑する。つづいて『プログラム・カード・ナムバー・2』のなかで、はじめてかれは、ホン

モノのフランケンシュタインと、かれのつくりだしたホンモノの怪物である水棲人間とを紹介し、ニセモノが、ホンモノによって断罪されていく過程を物語る。そして、そのつぎの『間奏曲』のなかで水棲人間の生態について述べ、最後の『ブループリント』のなかで、水棲人間によって統治されている未来社会のスケッチを試みている。すべての陸地が海によっておおわれてしまう以上、未来は、そのような危機の認識の上に立ったフランケンシュタインの手によってつくりだされた怪物である、水棲人間のものだ、というのが、安部公房の論理なのだ。

　といったようなプロットの紹介は、あるいは、かえって、さらにいっそう読者に、この小説にたいするあやまった先入感をあたえることになるのではあるまいかと、わたしは心配だ。プロットなどは問題ではない。ひとはここから、われわれの周囲に無数に存在するユートピアンのむれにたいする安部公房のはげしい嫌悪を、ただちに読みとり、心をうたれないわけにはいかないであろう。しかし、はたしてかれは、フランケンシュタインであろうか。それとも、フランケンシュタインのつくった怪物であろうか。怪物のイメージを水棲人間のイメージに——というよりも、「ウォーター・ベビイ」のイメージに、といったほうが、わたしには感じが出るが——立派に転化してしまった手腕は高く評価しないわけにはいかないが——しかし、できればその「ウォーター・ベビイ」たちを、外がわからではなく、内がわから、描いて欲しかったとわたしはおもう。

その限界

たとえばつぎのような文章がある。「その大きな楓は、昔から庭の隅にあって、私の少年時代、夢想の対象となっていた樹木である。それが、この春久し振りに郷里の家に帰って暮すようになってからは、どうも、もう昔のような潤いのある姿が、この樹木からさえ汲みとれないのを、つくづく私は奇異に思っていた。不思議なのは、この郷里全体が、やわらかい自然の調子を喪って、何か残酷な無機物の集合のように感じられることであった。私は庭に面した座敷に這入って行くたびに、『アッシャ家の崩壊』という言葉がひとりでに浮んでいた。」

原爆の犠牲者原民喜の『夏の花』の一節である。被爆後、その大きな楓は、ポックリと折れまがってしまう。不幸にして、かれの予感は適中した。そして、その楓の無惨なすがたをみて以来、かれは、かれのいわゆる「夢想の対象」を、ことごとく喪失してしまうのだ。そんなことを考えると、第三次大戦後、オーストラリアだけが被爆をまぬがれた唯一の土地であるという仮定の上に立って、メルボルンの市民たちにおそいかかる放射能による死の恐怖を描いたネヴィル・シュートの未来小説『渚にて』は、多少われわれ日本人にとっては、そらぞらしい気がしないこともない。なぜなら、そのアメリカの作家の眼に未来のすがたとみ

えるものが、われわれにとっては、もはや過去のすがたであり、進行形現在のすがたであるからである。楓でもいい。女の肉体でもいい。スポーツ・カーでもいい。一瞬、青い火が、天の一角でパッとひらめくや否や、われわれの夢を惜しまなかったそれらの対象が、つぎの瞬間、突然、むごたらしく変貌してしまうということを、すでにわれわれは骨身に徹して知っているのである。

それかあらぬか、シュートの第三次大戦にたいする空想力もまた、わたしには、いささか貧弱すぎるような気がしてならない。なんでも最初、どこかの小国の飛行機が——たしかアルバニアだとかいてあったと思うが、いきなり、ナポリあたりにウラニウム爆弾を落し、それがキッカケになって、大国や小国が連鎖反応をおこして、それぞれの仮装敵国に攻撃を加え、あっという間に北半球の人間が、一人残らず死にたえてしまうことになっていたようであるが、このくらい、ばかばかしいはなしはない。アメリカではどうだか知らないが、それほど、現在の国際的平和勢力を過小評価してもいいものであろうか。第二次大戦のばあいと同様、ウラニウム爆弾の投下を命じた人間たちが、その後も、そのままの状態で、支配階級でありつづけることができると考えているとすれば、それは、あまりにも虫がよすぎるというほかはあるまい。かれらは、そくざに自国の人民の手で裁かれてしまうにちがいないのだ。しかるに、シュートには、すこしもそういった革命のイメージがない。したがって、北半球の人間はすべて絶滅しているにもかかわらず、アメリカ海軍の唯一の残存勢力である原子力

潜水艦の乗組員たちは、あくまで艦長の命令にたいして柔順であり、メルボルンの市民たちのあいだにも、不穏な空気は、いささかもみとめられないのである。つまり、一言にしていえば、そこには、やがて南半球に到来するであろう放射能のために、心ならずも人びとの手ばなしてしまわなければならない「愚劣なる日常」にたいする哀惜の念がみなぎっているのだ。

スタンリー・クレイマーの監督した『渚にて』という映画は、以上のような原作の精神を忠実に生かしている。なるほど、放射能を浴びた経験のないアメリカ人にとっては、二、三箇月さきには、否応なしに死ななければならない赤ん坊のために、心をこめてミルクをつくっている、アンソニー・パーキンスの扮した若い父親のすがたが感動的かもしれない。ガソリンの欠乏のため、ポトフォリオをかかえ、自動車のかわりに馬にのって出勤している人びとの多いメルボルンの街頭風景がユーモラスかもしれない。さらにまた、グレゴリー・ペックの扮した潜水艦の艦長につきまとって、束の間の恋愛にわが身を賭けている、エヴァ・ガードナーの扮した年増女のすがたがいたましいかもしれない。いや、それよりも北半球における放射能の量を測定にいった潜水艦の潜望鏡にうつる、死の灰をかぶって、無人の街と化し去ったサンフランシスコやサンディエゴのすがたが、もっともショッキングかもしれない。しかし、われわれ日本人にとっては、こういう映画よりも、『第五福竜丸』のような作品のほうが、はるかに切実なひびきを持つ。なぜなら、くりかえしていうまでもなく、アメリカ

人にとって未来のすがたとみえるものが、われわれにとっては、もはや過去のすがたであり、進行形現在のすがたであるからである。はじめに原爆を落し、その後もそれに関する実験をつづけ、無数の被害者を出しておきながら、いまさら、なにをしらじらしいことをいうか、といったような奇妙な感想さえ、うかんでこないわけではない。

しかし、まあ、それはともかくとして、芸術プロパーの観点からみても、わたしには、右の映画が、あまりにも常識的なような気がしてならなかった。そこでは、日常的な現実が、原民喜のいうような「やわらかい自然の調子を喪った、何か残酷な無機物の集合のようなもの」としてとらえられているわけでもなければ、あるいはまた、サルトルのいうような「ヴェールを剝ぎとられた、怪物じみたやわらかい無秩序のかたまり――おそろしく淫猥な裸形のかたまり」としてとらえられているわけでもないのだ。クレイマーは、ひたすら日常性の軌道を踏みはずすことの恐怖を強調しているだけだ。おもうに、かれは、かつてモンテーニュの簡潔に定義したような市民生活を――「空気を呼吸し、葡萄酒をのみ、女房と眠り、メロンを食う」といったような生活を、この上もなく貴重なものだと信じているのであろう。そこで、空気が汚染された結果、せっかく穴蔵へ貯えておいた葡萄酒をのみつくすことができず、女房との仲に終止符をうたれ、メロンもまた、ほったらかしてしまわなければならなくなることを、なによりもおそれているのにちがいない。むろん、わたしは、平和運動に反対するものではないが――しかし、それをささえているシュート＝クレイマー風の現状維持

的な精神には、しばしば、あきたりないおもいをさせられる。戦争をふせぐためには、現状を変革する精神が不可欠なのだ。

しかし、それにしても『渚にて』の登場人物たちは、なんという凡庸な連中であろう。いや、なんという礼儀正しい連中であろう。もうすぐこの世のおわりがくるというのに、お互いにとりみだしたところをみせまいとつとめながら、せっせと葡萄酒をのんでみたり、退屈な恋愛に精をだしてみたり、スポーツ・カーをすっとばしてみたりしているにすぎない。かれらにくらべると、映画のおわりのほうで、ちらりとすがたをみせる、「兄弟よ、まだ遅くはない」とかいた旗のもとで、熱狂的な態度で説教を試みている救世軍のむれのほうが、まだしも非凡かもしれない。

ガブラ——海は狂っている

香山滋

雲ひとつなく晴れ渡った空の下、海はコバルト色に澄んで、うっとりとするような凪ぎだ。巨大なジンベエザメが、海面すれすれを、ゆうゆうと泳いでいる。

と、突然空がかきくもり、ナマコ色の雲が無気味にちぎれ飛び、波頭がささくれ立つとみるや、ジンベエザメははげしい苦悶の様子を見せはじめ、狂おしげに海面からおどりあがり、もぐり込み、それを繰り返してゆくうち、みるみる醜怪きわまるモンスター（怪物）に変身してゆく。その体表は重なり合う青銅色の鋼鉄張りの鱗に覆われ、眼は炎のように燃えきらめき、頭上の研ぎすまされた青竜刀さながらの双角が、それ自体生きものの如くうごめきまわる。

それは、もはや、魚族という形態をかなぐり捨てたインフェルノ（地獄）の怪獣である。そうしたはげしい変身に伴う苦痛に堪え切れなくなったか、モンスターは、マカイロダス

（剣歯虎）さながらの牙を剝いて天に咆え、逆巻く波濤を、全身から放射する白熱光に煮えたぎらせながら、轟音立てて海底ふかく没し去る。

1

三浦市からほど遠くない太平洋に面した小さな漁村八幡浜の午下り、土地の漁師の一団が、元気な呼び声をかけ合いながら地曳網をひいている。いや元気なのは見せかけだけで、どうやら付け元気らしい。誰も彼もの面は、かくし切れぬゆううつさで重苦しくさえ見えた。

やがてたぐり上げられた網には、みんなが内心おそれていたとおり、獲物はほんのわずかしかない。

「またアジッコばかりかい」

「いってえ、ブリやサバは、どこへ行っちまっただ」

「こりゃ、ひょっとするとゴジラのせいかも知れねえぞ」

「ばかたれ。ゴジラがそんな小っこいものに目をくれるかってよ。食うならもっと大っけえもの狙うだ」

「でっけえといえば、ほれ、さっきから、エベス（ジンベエザメのこのあたりでの方言）が、今日ものんびり泳いでござる」

「どれ、どこに……なあるほど。するてえと、このところの不漁も奴のせいかな」
「ちげえねえ。それにしてもエベスがこの浜にあらわれるたあ、珍しいこったなあ」
もうだいぶ前から、目の前遥かに夢のように浮かんで見える岩だらけの無人島——綾古島の周辺を、巨大なジンベエザメが、見えがくれに泳ぎまわっている。
そうした漁師達の話の間に、まだ歳若い漁師辰造と弟政吉が、目配せして群から離れ、小舟を曳き出しにかかるのを、老漁夫のひとりが目ざとく見つけた。
「おう、辰、政。網の始末も手伝わねえでどこ行く？」
「エベスを見に行くだ。いままで話に聞いていただけだもんな」
「おら、東京のおじきから貰ったカメラでエベスうつしてくるだ」
「阿呆。エベスの尾鰭のひとっぱたきで、そんな小舟、木っ端みじんにぶっこわされてしまうだぞ」
みんなが口を合わせて止めるのも聴かず、辰造と政吉は、綾古島に向けて小舟を漕ぎ出した。
「若え者はまったく怖いもの知らずで手が付けられねえ」
「まあ心配なかろう。そのうちエベスの方で相手にせず何処かへ行っちまうだろうよ」
若気と好奇心から、無謀と知りつつ小舟を漕ぎ出してはみたものの、さすがに二人とも内心はビクビクものだった。

遠ざかり、近づき、どうやらジンベエザメは綾古島の南端に向きを変えるらしい。
「とにかく島へ上ろう。まともに向かってこられちゃ危ねえ」
すきをうかがい、二人は、小舟を島の一角に漕ぎ寄せて這い上った。
岩蔭から様子をうかがう。ジンベエザメは、再び沖に去ろうとする気配を見せたが、直ぐまた頭を返して海に潜り、待つ間もなく、二人のひそんでいる岩の真下に全身を浮かびあがらせた。
その巨大なこと！
太平、大西両洋を棲み家とするジンベエザメは、サメ仲間では最大のもので、しかもこれは、身長三十メートル、体重一万キロに近い超弩級型である。全身青銅色の犀のような皮膚に覆われ、背面いっぱいに鏤められたルリ色の斑点がきらめくようで、むしろ美しい。見かけによらずおとなしい性質なのだが、あまりにも巨大過ぎるのと、外形が獣じみているので、漁師仲間では〝潜航艇〟の綽名で恐れられている。
「すげえなあ。なるほど潜航艇そっくりだあ」
「しっ、しずかにっ」
兄の辰造が政吉を制したとたんだった。
恐ろしい場面が、二人の目の前で展開しはじめられた。
それは、この物語の冒頭にハイライトの形で記したとそっくりの、恐怖を超えたジンベエ

ザメの変身であった。

もはや身動きも出来ない。半ば失神しながらも、政吉は、モンスターと化したジンベエザメが変身の苦しまぎれに海底深く潜り込もうとする一瞬前、気丈にカメラのシャッターを切ったが、そのあとはどうなったか自分でもわからなかった。

渚からつづく小丘に建つ豪壮な白亜の洋館——それは、この土地では誰一人知らぬ者はない、日本海洋科学研究所所長、日米漁業株式会社取締役社長、塚本秀樹博士の邸宅兼研究所であった。

朝食後のひととき、海に面したテラスで朝刊をひろげている博士は、ひどく御機嫌がいい。カリフォルニアに遊学中のひとり娘洋子が、今日午後羽田に着くという電報を受けたばかりだった。

「あなた、いま、面会したいという二人連れの方が見えているのですけれど」

「誰かな、こんな朝早く……」

不審のおももちで、博士は、知らせに来た悠子夫人の面を見返した。

「怪しいものではありませんわ。よく私も浜で見かける兄弟らしい漁師なのですけど、なんだか、放心したみたいで……」

「名前は聞いたか？」

「ええ、辰造と政吉、とか」
「それならわしも知っとる、とにかくここへとおしなさい」
夫人と入れちがいに、二人はテラスに姿をあらわしたが、二人ともその面は、まるで貝殻のように硬ばって見えた。
「どうした？　ひどく顔色が悪いが」
「先生、わしら、たいへんなものを見ましただ」
「ほう、なにか珍しい深海魚でもあがったかね」
黙って、政吉はおののく指先で、一枚の写真を取り出して博士に手渡した。
何気なく目をやった博士の面が、一瞬キュッと引き緊った。はげしいショックを押しころし、しいて平静を装いながら、
「こ、これを、きみたちは見た、というのか？」
「はい。わしら、あんまり恐ろしくて、祟りがあるかも知れねえ、と、いままで誰にも話さずにいましたが、先生にだけは、とおもって……先生、この怪物の正体、何だとおもいますか？」
「見当もつかん、まるっきり海の悪魔だ」
「そいつ、ほんとうは、エベスなんです」
「エベス……たしかジンベエザメのことだな。ばかばかしい、は、は」

空ろな笑いに内心の動揺をつくろいながら、
「どうしてきみたち、こいつの正体をエベスだというのだね？」
「わしらは、目の前で、エベスがこんな怪物になっていくのを逐一見届けましただ」
「それに、死んだ親父がよくいってましただ。エベスは劫を経ると『ガブラ』ちゅう恐ろしい怪物に化ける、と……」
「まあよい。その時のこと、くわしく話してみたまえ」
いくらか落着いたとみえ、しかし半ば吃りながら、兄弟はかわるがわるあの日の模様を語り出した。話が終わって、ほっと溜息をついたのは、むしろ博士の方だった。
「ま、この謎は、きっとわしが解いてみせるよ。それまでは誰にもしゃべってはならんぞ。いたずらに騒ぎを大きくするばかりだからな」
兄弟が去ったあと、博士は、テラスを檻の獣のように歩きまわって落着きがなかった。悠子夫人が、娘洋子の出迎えや晩餐の相談をしかけても、うわのそらの返事ばかり。
「万事任せる。わしをひとりにしておいてくれ。いま、わしは、たいへんな試練に直面させられている。一刻も早く考えをまとめねばならんのだ」
「あ、先生」
別棟研究室の大テーブルに、めりこむような異常な熱心さで顕微鏡と取っ組んでいた研究

所主任花田晃は、気が付いて、背をのばした。
「仕事の邪魔をして済まんが、今日のことで家内の相談役になってやってくれんか」
「はあ……その前に、ちょっとこれを見てください」
いわれるままに、顕微鏡を覗き込んだ博士の眉がピリッとけいれんした。
「こ、これは……？」
シャコともエビともつかぬからだつきで、全身棘だらけの、目が七つもあるという妖怪じみた生きものだった。
「プランクトン（海洋浮遊生物）には違いありませんが、いままで見たこともない奇形——というよりも、むしろ変化です。まるっきり魔物の落し子です。こんな奴が海の表面をうようよしているなんて、恐ろしい悪夢としかいえません。そればかりか……」
「もうよい、もうよしてくれ」
うわずった声で制し、博士はネクタイをゆるめながら、窓をあけた。
海は、今日もおだやかに凪いでいる。
誰にともなく、博士は、ひとりごとにつぶやいた。
——一見何事もないように見えながら、海は、もはやいままでの海ではない。海が、放射能に汚されるかぎり、海は、恐ろしい明日の悪夢を孕んで狂いつづけるだろう。あの漁師兄弟が不幸にも目撃したジンベエザメの変身『ガブラ』だけではなく、こともあろうにこんな

取るに足らぬ小さなプランクトンまでもが……——

2

予定どおり恙なく洋子は帰ってきた。明るく、清潔で、むしろあどけないくらいの娘である。やがて婿となる花田晃を交えた一家団欒の和やかな晩餐の空気を乱すまいと、塚本博士は努めてはいるものの、相次ぐショックによる心の乱れは、にわかには拭い去るべくもない。放心の眼を天井にあそばせたり、スプーンを取り落したり、ソースを取り違えたり、その都度夫人に注意されどおしだった。

頃合いを見計らって、洋子は晃を庭に誘い出した。

「今夜のお父さまったら、すこしどうかなさっているわ」

「心配はいりませんよ、いま、先生は、何か重要なお仕事で疲れていらっしゃるだけでしょう」

「それならいいんですけど……」

気をかえて、

「三年ぶりね、こうして二人きりでこのお庭でお話できるのも……そうだわ、あしたはヨットで海へ出てみません？……懐しいわ、あの綾古島……」

「残念ですが、明日は、いや当分、先生と〝ドルフィン号〟に缶詰、という御命令が出たばかり。何か特別の調査を始めるという先生のお話で……」
「何の調査？」
「まだぼくもうかがっていない。明日、先生から話して下さることになっています」
「じゃ、わたしも一緒にうかがうわ。その上で、わたしも〝ドルフィン号〟に乗り込むことにするわ」
「弱ったな、先生から、ぼくと二人だけの秘密だ、と固く申し渡されているんだから……それに洋子さんはリサイタルの準備もあることだし……」
「いいの、延ばせば。どうせまだ馳け出しなんだもの、うっふ」
可愛くペロッと舌を出してみせ、洋子は、モーメント・ミュージカルのメロディをハミングに乗せながら、晃の胸に頬を押しつけた。

浜では今日も漁師達が網を曳いている。この前よりもひどく、かかったものは小蟹と藻屑ばかりだった。
「おう、塚本先生が来なさる……」
博士、洋子、晃が連れ立って通りかかるのを見て、漁師達はバラバラッと取り囲んだ。
「先生、見て下され。こりゃいってえ、どうなっとるちゅうことだ。ここんとこ、まるっき

り魚が入らねえだ。まるで、海の底に怪物でも巣食ってて魚を追っぱらってるみてえだ。なんとかならねえもんですかい」

「潮の加減ということもある。そう短気を起さず潮待ちすることだね」

「そんな呑気なことといってたら、こちとらあごが干上っちまいまさあな」

あからさまにとげとげしさを面にあらわす漁師達の中に辰造、政吉の顔を見付け、博士は、

——しゃべってはならんぞ——

と目配せして、やや離れた突堤に向けて歩みを早めた。

不意に、博士が立ち止って振り返った。

「洋子、あんたは家に帰りなさい」

「どうして？　嫌よ、嫌よ、そんなの。訳もきかず命令するなんて」

「話そう」

岩陰の、舟虫を追いはらった砂の上に腰をおろし、博士は重い口をひらいた。

「いずれは解ることだし、きみたちに力を貸してもらわねばならぬかと思い切って話す。これはたいへんなことなのだ。ひょっとすると命がけの調査になるかも知れんのだ」

「わあ、スリル満点じゃないの」

「ごらん、海は、いつもと何の変りもなく穏やかにさざ波を立てている。だが、それは見せかけだけで、海は、すでに狂っているのだ。その証拠が、花田くん、きみが見せてくれたプ

ランクトンだ」
「でも、まさか……」
「これを見たまえ」
ポケットをまさぐり、博士は、政吉から預(あず)っている写真を晃の手に押し付けた。
「あっ！」
覗き込む洋子ともども、晃は、おもわず驚きの叫びを挙げずにはいられなかった。
「そうだ。狂った海が産んだ怪物だ。いや、海に罪はない。放射能が、罪もない海を狂わせ、ジンベエザメをこのようなモンスターに変身させたのだ。そうして、これは、ジンベエザメばかりでは済まされない。あらゆる海の生物が次々とこうしたウンゲウェーゼン（在るべからざるもの）に変えさせられてゆく。いま、そのような事態が、海底でどのように進行されつつあるか、どうしたら阻止できるか、その調査に、わしはこれから乗り出そうというところなのだ」
「やりますとも、先生！」
「わたしにもお手伝いさせてっ！」
突堤の端(はず)れに繋留(けいりゅう)されている研究所所属の海底観測調査用小型潜水艇〝ドルフィン号〟には、すでに機関係、通信技師が整備を終えて待機している。
三人は、いくらか興奮した足どりで乗り込む。待つ間もなく〝ドルフィン号〟は規則正し

いエンジンの音をひびかせながら潜航を開始した。

アクリルガラスの観測窓から覗く海底の様子は普段とすこしも変らない。ホンダワラの茂みを縫ってスマートな形のサヨリが泳ぎまわり、洞穴のかげからウツボがのんびり首を出して餌の近寄るのを待っている。

と、不意に軽い呻きをあげて、洋子が顔を覆ってうつ伏した。

「どうしました、洋子さん」

「う、うん、何でもないの、ちょっと目まいがしただけ。時々こうなるのよ、貧血ね、きっと」

間もなく平静に戻り、洋子は、飽くなく窓から目を離さない。

突然、

「あっ、あれを見てっ」

ライトを真っ向うから浴びた数メートル先の、真赤なイソギンチャクが、みるみる巨大なバルーン（気球）のようにふくれあがり、無気味な三角の巨口を開閉し、その無数の触手をメデューサ（ギリシャ神話の女性）の髪さながら十方にまさぐりうごめかしながら〝ドルフィン号〟の進路を遮り塞げにかかった。

どのようなエネルギーが、その大章魚そっちのけの触手にこめられているのであろう、それは絶え間ないキィン、キィーン、という金属音を発しながら、〝ドルフィン号〟を横ざま

にからめ取ろうとするかのように、早くも窓すれすれに迫ってくる。

「非常事態発生！　全速力後退！」

博士の叫びも間に合わない。〝ドルフィン号〟は艇尾を空ざまに逆立てたまま、モンスターのなすがままに振り廻されはじめた。エンジンは空転し、乗員はぶちまけられた胡桃のように転びころがる。

およそ一時間にあまる死闘の脱出――こうして、狂った海は、ようやくその正体を三人の前にさらけはじめたのであった。

八幡浜漁業協同組合では、緊急理事会をひらき、理事長はじめ組合員の漁民達が狭い会議室に集ってはみたものの、この異常ともいうべき不漁の対策には手も足も出ず、みんな頭をかかえ黙りこくっているばかりだった。

と、エベスが三尾、綾古島近くの沖合いにあらわれた、という報告が入った。

憔悴し切ったみんなの面に、喜色がサッと走った。

ジンベエザメの肉は良質のカマボコの材料になり、その一尾の油だけでも、ゆうに一村をうるおすに足りる。いままでならとても歯の立たぬ相手であるが、この際もうそんな弱音を吐いてはいられない。

漁師達は、餓えた獣のように叫びをあげて浜に馳け出した。無謀は承知の上である。彼等

は、焼玉エンジンの小舟数隻に分乗して、次々と綾古島に向けて渚を離れてゆく。

「たいへんです、先生」

政吉の注進に、さすがの塚本博士もうろたえた。が、その狼狽は一瞬のまに消し飛んだ。

「わしも行く。運がよければ、ジンベエザメが『ガブラ』に変身するさまをこの眼で確かめられるかも知れん。そうして、なお運がよければ、あるいはそこからなんらかの打開策のヒントが摑めるかも……」

抱きすがって止める悠子夫人の腕を振り切って、博士は邸を飛び出した。しかし、博士の眼は、水のように静かだった。

ちょうどそのころ、晃と洋子は、気晴らしに町に出て、中華飯店で昼食をとっていた。博士の身を案じた夫人の電話を受けて、二人は、ころげるように店を出、車をぶっ飛ばして浜にかけつけた時は、博士が殿の舟に乗り移ろうとする瞬間だった。

「お父さま、こればかりは思いとどまってっ」

「先生、自殺する気ですかっ」

「きみたちのわしを行かせまいという気持ちは解るが、わしは行く。ジンベエザメが必ずしも『ガブラ』に変身するとは限らん。仮にその恐怖の事態が起ったとしても、それは、わしにとって願ってもない千載一遇のチャンスというものだ」

「そんならわたしも行くっ」
「いかん、絶対に来てはいかん……おい、早く出さんかっ」
渚を離れてゆく舟に向って、服と靴をかなぐり捨てた晃と洋子は、抜き手を切って追いすがり舷にしがみつく。放ってはおけず、漁師が手を差し延べて二人を舟に引き上げた。
綾古島周辺では、早くも先発舟団が三尾のジンベエザメ相手に悪戦苦闘の最中だった。幸いにも内二尾は、何をおもったか間もなく沖合い遥かに泳ぎ去ったが、残る最大の奴は、執拗に抵抗をつづけて暴れ廻る。次々と舟はくつがえされ、漁師達の面にも、ようやく敗戦の色が萌しはじめてきた。
不意に、また、洋子が呻きをあげ、
——痛い、痛いっ、顔が……
と叫んで、舷側にのめり伏した。
どうやら今度は、ただのめまいではないらしい。洋子は苦痛に肩を波打たせ、痙攣する腕に必死の力をこめて晃の腕にしがみつく。
「しっかりするんだ、洋子さん……おい、舟を戻せっ、急病人だ、ぐずぐずしている時ではないぞっ」
博士もさすがに、これぱかりは放っておけず、晃のいうがままに、しかし残念そうに腕を組んだままだった。

と、いきなり、数本の銛を背中に突き刺されたジンベエザメが、

グワオーッ

雷鳴さながらの咆哮を空ざまにひびきあげるとみるや、海面高くおどりあがり、潜り込み、みるみる、あの恐怖の変身を開始しはじめた。

全身からほとばしる白熱光に海水は煮えたぎり、吐き散らす放射炎に、舟は次々と燃えあがる。

すでに博士らの舟危うし、と見えたとたん、突如、海底から浮かびあがって海面におどり出たのは、ジンベエザメの強敵——それは、世界最大のイトマキエイの一種、強力な発電力を誇るモブラ・エレックトリカスである。全身青味を帯びたヤスリのような皮におおわれ、アナコンダ（水棲大蛇）さながらの尾は有刺鉄線を巻き付けたよう。その幅十メートルはたっぷりある鰭のひとはたきは、ゆうに海の王者マッコウクジラを一瞬に屠るという。

モブラは、その巨大な両翼をかっぴろげ、海面をひとはたきして中空高く舞い上り一廻転するとみるや急降下し『ガブラ』めがけて体当りに襲いかかる。『ガブラ』の眼は怒りに燃えきらめき、剣さながらの牙を剝き出したままの口から放射炎を噴きつけたとたん、モブラの両翼がピタリと『ガブラ』の胴中を包み込むように貼り付いた。強力な電流が全身に流れたらしい、『ガブラ』は、それっきり動かなくなってしまった。モブラが凱歌をあげて、再び海中に潜り去ったあと、そこに横たわっているのは、もはや『ガブラ』ではなく、力尽き

腹を上向きにのびているジンベエザメに過ぎなかった。

おもわぬ儲けものをしたのは漁師達であった。半ば恐れ、半ば喜び、力を合わせて銛綱を引き寄せたとたん、感電のショックから甦ったジンベエザメは、必死の尾鰭のひとはたきで水柱を噴きあげるとみるや、次の瞬間、逆立つ形に海中深く姿を消してしまった。

『ガブラ』対モブラの死闘の飛沫を全身に浴びたのが救いであったかどうかは確かではないが、洋子の苦痛は拭ったように解消されていた。だが、その半ば空ろな眼は、たったいまジンベエザメが没し去った海面の一点に、シャツを千切り飛ばされて乳房もあらわな胸もそのまま、しいんと注ぎつづけられて動かなかった。

――これがいったい、現世の、日本の海の上での出来事だ、と信じていいのだろうか？

――

そうして、この時を境に、漁はバッタリと止まってしまった。

八幡浜ばかりではなく、原因不明の不漁の報が矢継ばやに各地の漁村から集り出した。それればかりではない、たまに獲れることはあっても、それは、おもわず目を背けたくなるような醜悪奇怪な魚族ばかりだった。

あきらめて漁村を離れるもの。議会に押しかける全国漁民代表の陳情団。水産関係株の底知れずの暴落。そして、塚本秀樹博士の日米漁業ＫＫも、いつ破産するやも知れぬ苦境に喘ぎはじめつつあった。

3

その日は、三浦市公会堂での、塚本洋子帰朝初めてのピアノ・リサイタルの夕べであった。グリークのピアノ・コンチェルトの第一楽章が終り、一息いれて、静かに第二楽章にうつり進んで間もなく、洋子の指のタッチが、晃の目にもはっきり感じ取れるほど乱れ出してきた。ハッ、となったとたん、突然、両手に顔を覆って、洋子はキイの上にガバとのめり伏した。グオーンというひびきに、聴衆は総立ちになる。晃は、前後も忘れてステージに馳けあがった。

洋子の苦悶は今までになくはげしく、顔面筋が電流を通じられたかのような痙攣に波うっている。

「洋子っ、洋子っ」

言葉にはならず、ただ名を呼びつづけながら、晃は、洋子を抱き支えた。

係の誰かが急を知らせてくれたらしい。間もなく馳けつけた救急車に、洋子は最寄りの病院に運び込まれて行った。

「先生、容態はどうなのでしょうか？」

何度目かの診察を終えて出てくる医師を廊下に待ちかねて、晃はおそるおそる訊ねた。

「精密検査をしたうえでないと決定的な診断は下しかねますが、いまのところたいした心配は無かろうと思います。塚本さんは前にもこのような症状をいくたびか起されたのでは？」
「はあ、何度か。ぼくが知っているだけでも三度ばかり……病室へ入ってもよろしいでしょうか」
「どうぞ。しかしあまり長話はなさらぬように」
洋子は、覚めて、窓硝子越しに雲のたたずまいを眺めていた。顔色はまだ勝れないが、もうあの顔面の痙攣は跡形も見えなかった。
晃の姿をみとめて、洋子は、静かに半身起き上らせた。
「御心配かけて済みません。気分もだいぶいいの。でも退屈だわ。晃さん、済みませんけど今度来るときに、わたしの外遊日記持ってきていただきたいわ」
洋子の部屋の、教えられたロッカーに、その日記はすぐ見付かった。何気なく、晃は立ったままパラパラとページをめくってみた。
随所に、貧血眩暈症状を起したメモが散見する。なにかが思い当てられそうで、もどかしく、いらいらするうち、ハッと胸を衝かれたおもいで、晃は、自分も立ちくらみを覚えて、よろめいた。
——まさか？……しかし……——
新聞社にかけ込み、晃は、ここ一、二年のファイルを漁って、洋子の日記のメモと照合し

てみた。

——やっぱりそうだったのか——

洋子が、めまいにおそわれた直前または近い日には、必ずどこかの国で大掛(おおがか)りな原水爆実験が行われているではないか。

——どうしてこれを、偶然の符合、とだけで済まされようか——

「そう、晃くん。わしは前から薄々感付いてはおった。洋子という娘は、おそらく人一倍放射能に敏感な特異体質に生れついているらしい。これは、よく主治医とも相談して治療に万全を期してもらうことにしよう……ところで……」

博士は半ば瞑目するかのように、

「わしはこれから、ひとりで海に出る。この八幡浜近海の海底には少くとも『ガブラ』に変身可能のジンベエザメが三尾はひそんでいるはずだ。まず、変身洗礼を受けたばかりの先日の一尾が、その後どこでどうしているかを突きとめに」

なんとはない不安が、いきなり晃の胸に黒雲のようにひろがるのを覚えながら、

「思い立ったら、いけませんとおとどめしてもきいて下さらないでしょうけれど、いまは洋子さんが入院中のことでもあるし……もうすこし先に延ばされては……」

「もうおそ過ぎるくらいだよ、晃くん。このまま放っておいたら、どうなるとおもう？　いまさら事あらためてわしの口から説明するまでもなく、『ガブラ』の変身が核爆発実験によ

る放射能の作用によるであろうことは、きみ自身も察しのとおりの事実だ。いまのところ、実際に目撃したのは一尾だけだが、それだけでおしまいだ、と、どうしていい切れよう。どこかの国で原水爆実験が行われるたびに『ガブラ』は増えてゆく。そうして日本沿岸の海底は『ガブラ』だらけになってゆく。いや、『ガブラ』だけではない。直接的にはストロンチウムの放射をうけて巨大化し、間接的にはプルトニウムを吸収して奇形化し、しかもまだまだわしらにはおもいもつかぬ未知の元素に作用されて、あらゆる海の生物が、次々と恐怖のモンスターに変身させられてゆく。海は間もなく魑魅魍魎の世界、悪魔も目をそむけたくなるようなパンデモーニアム（お化け集会所）と化してしまうだろう。それとて、それだけで済んでいるうちは、まだよい。もしもこの変身因子が人間世界に働きかけてきたとしたら……」

いきなり水を浴びせかけられたような悪寒をおぼえ、晃は、ウッと呼吸をつめた。

「現に、軽度ながら洋子の肉体には変化が起りつつある。これとて洋子ひとりにとどまる問題ではない。そして、さらに恐ろしいことは、度重なる放射能の洗礼を繰り返してゆくうち、変貌変身が固定し、二度と元に戻れなくなったとしたら……」

「先生！」

声がうわずって、咽喉がひりひり痛む。

「ぼくも連れていって下さい。そうして徹底的に『ガブラ』の生態を、放射のエネルギーを、

変身の生理を、究明して、そうした世紀の悲劇をいま食い止めなかったら……」

「解ってくれたね、晃くん。無駄かもしれん。わしらの知能の及ぶ限りではないかもしれん。だがやらねばならん。それが科学者の業というものだ」

〝ドルフィン号〟に出航準備命令のため、博士がダイヤルを廻しかけた時だった。

「お父さま、晃さま」

いくぶんおどけた呼び声につづいて、クックッという忍び笑いと一緒にドアがパッとひらかれた。

「あっ、洋子さん！」

「黙って脱け出してきたのよ、病院。だって退屈で退屈でしようがないんですもの……まあ二人とも怖い顔して……やっぱりあのことで対策協議中、ってところでしたのね」

「何のことだ？　洋子」

博士は、あっけにとられて、晃と顔を見合わせた。

「あら、じゃ、さっきの臨時ニュースまだお聞きにならなかったのね」

洋子の話によると、それは、おもいもかけぬニュースだった。

I・S・C（国際水難救済本部）久里浜支所所属の救助船〝グローリア号〟が、相模灘二十カイリの沖で難破船引揚曳航作業中の出来事であった。

突如、何の理由もわからず曳航索がプッツリ切れ、反動を食って救助船は、左舷に傾きか

けたが、何か得体の知れぬ巨大な胴体に触れて危うく転覆を免れた。
——こんなところに暗礁が？　まさか——訝る船長H・ホプキンス大佐の眼の前に、その巨大な物体が、みるみる波間からふくれあがって、その全身を浮かびあがらせた。
——あっ、『ガブラ』だ！——
しかも一尾ではない。船首からも一尾、右舷からもう一尾、合計三尾が、救助船を包囲する形に取りかこんでしまった。
もはや手の下しようもない。
と、何をおもったか、三尾の『ガブラ』は、立ちすくむ救助船を無視するかのように、揃って沖に去りはじめた。
ホプキンス大佐は、賢明にも見て取った。
——奴らは、余りにも近く浮上したため、その巨体のあがきが取れず、いったん離れてから一挙に攻撃をかけてくる魂胆だな——
ホプキンス大佐の思惑通り、『ガブラ』どもは二百メートル程離れたところでくるりとその頭をめぐらすとみるや、まるで逆立つ大瀑布をおもわせる水柱を立てつつ猛スピードで逆襲にかかる。
だが、すでにこの時、大佐の緊急命令は発せられていた。海底洞窟破壊用の新兵器リモコン・トーピドー（遠隔操作魚雷）が、次々と発射される。その一発は、さしもの『ガブラ』

の一尾を木っ端微塵に粉砕してしまった。敵わじと海中深く潜り込む残りの二尾を、リモコン・トーピドーは、その威力を誇るかの如く執拗に追いまくる。

二尾の『ガブラ』が、ぶっ切られた頭を波上に浮きあがらせるまでには、およそ十分も要しなかった、と思われた。そして浮上したその頭は、もはや元のジンベエザメには戻れず、あの恐怖の魔王そのままの『ガブラ』であった。

以上は、ヘリコプターで馳けつけた記者団に、大佐自ら語った概要であるが、最後に、大佐は、蒼ざめるまでの昂奮を努めて押しかくしながら、しかしいくぶん誇らしげに、

――われわれは、今一つの課題を解決することが出来た。これによって、少くとも今後の日本東海沿岸は、『ガブラ』の脅威から解放され、平和と繁栄とを取り戻し得たと確信する――

と、結んだ、という。

「くだらん、実にくだらん」

びっくりするほどの大声を挙げて、博士は叫んだ。

「先生！」

「どうなさったのよ、お父さま」

「おもいあがった愚か者めが」

博士が、しかし心から怒っているのではない様子は、ゆっくり葉巻の口を切る指つきで二

人にはすぐ感じ取れた。
「なにがくだらない、っておっしゃるの？」
「無駄だからさ」
「無駄、って、『ガブラ』を殺したことね」
「そうだ。『ガブラ』の二尾や三尾、殺したって、それがどうだ、というのだ。『ガブラ』が兇悪兇暴なモンスターであることに間違いはない。それだからといって、『ガブラ』を憎み殺すのは、人間の得手勝手というものだ。いうなれば『ガブラ』も気の毒な犠牲者ではないのかね。いまとなって、そんな目先の小細工を弄してみたところで、それで『ガブラ』を根絶やしすることなどとうてい望めん。それよりも……」
　不意に、博士は口をつぐんで、眠ってしまったかのように目を閉じた。
「何をそんなに考え込んでしまったの？　お父さま」
「これから話す」
　再び目をひらいた博士の面には毛筋一本の乱れも認められなかった。
「わしは、やっと、悟ることが出来たよ。もう出来てしまった『ガブラ』を、『ガブラ』のような恐怖のモンスターを追いまわす前に、どうしたら、そのようなモンスターの出現を食い止め得られるか、を」
「解るわ、お父さま。その張本元、核実験を徹底的に禁止すること、でしょう？」

「そうとも。わしはさっきホプキンス大佐を悪しざまにののしった。しかし恥かしながらそれはそのまま、科学者の自負に甘えて、根本的な大切なことをないがしろにしていた自分への警鐘であったことを悟り得た。挑戦相手は、『ガブラ』ではなくて、すべての核保有国だ。わしは、その運動を、身をもって率先実行にうつす。社会的な地位も、私財も、この目的のためには喜んでなげうつ決心を固めた」

「しかし先生が、なにも第一線に立ってまで……」

「わしは海を愛する。わしは愛する海を、みすみす怪物どもの棲み家にゆだねることにはもう堪え切れなくなった。いや、わたくしごとめいた繰り言は止そう。海は、地球の四分の三を占める海は、世界のものだ。われら人類のふるさとだ。そのふるさとを狂うがままに狂わせてしまってはならん。そして、すべての人類が、あしたの世界――二十一世紀に生き継ぐためにも、わしは立たねばならん。

幸いわしは、その説得に必要なデータには、これまでの研究と体験とで欠くるところはない、と信じておる。だが、もし必要とならば……」

慈しみをたたえた、しかしシリアスな眼差しで、博士は、洋子のおもてを顧みた。

「もう仰言らなくてもいいの、お父さま」

つと立って、洋子は、博士のうしろから、静かな腕で、その幅広い肩を抱きしめた。

「その実験台に、わたしがなる、喜んで！」

マグラ！

光瀬龍

第一章

きらめくような風が通り過ぎてゆくと、千古の原始林はいっせいに白い葉裏をひるがえしてごうっとどよめいた。谷あいから尾根へ、幾すじもの幅広い風道を描いて風はわたっていった。

宇曾利湖のまっ青な湖面が鏡のように雲を映していた。《さんずの川》、《しょうずの川》を越えると道はふいに荒涼たる灰色の広場へと出る。

そこはもう名だたる東北第一の霊場、恐山、円通寺の境内であった。

道もとうろうも、道ばたにそそり立つ岩も、すべて火山性の凝灰岩でできており、その乾

いた骨のような灰白色は目のくらむような七月のま昼の陽炎の下に不毛の世界をくりひろげていた。

つつしみ深いもの腰でゆききする参詣人たちの姿さえなかったら、そして今日が巫女の市がたつ七月二十日でなかったら、ここはそのまま、すでに見棄てられて久しい廃墟かとも、また地肌の焼けはがれた死火山の爆裂火口かとも思われた。

その地表を風が捲いてゆくと砂塵が地を這って渦まき目も口も開けていられなかった。

砂塵のむこうに円通寺の壮大な本堂がそびえていた。村上を乗せたジープはそれに向ってゆっくりと近づいていった。ボンネットに結んだ東国新聞の社旗が時おり思い出したようにはげしくはためいていた。

「ここは風の吹かない日というのはないんですよ。円通寺にいったらすぐ風呂に入ってさっぱりしてください。湧かしておいてくれるように云っておきましたから」

ハンドルを握っている大湊通信局の若い青年が村上のほうにわずかに顔を動かして云った。砂ぼこりにまみれた村上に恐縮した目の色だった。

「ありがとう」

村上は煙草をくわえた。手でかこったライターの火がジープの震動にあわせて躍った。

広場のあちこちにはすでにイタコと呼ばれる巫女たちが市を開いていた。

ふだんは下北半島から青森、岩手、秋田などの地方に散って生活を営んでいる巫女たちが、毎年七月二十日から四日間、この円通寺の境内に集って市を開くのだった。客の求めに応じてあの世の人々の消息を伝えるイタコを信ずる者は東北一円に多かった。

イタコたちはそのほとんどが盲人だった。五十歳から七十歳を過ぎたかと思われるような老女たちであった。そまつなブラウスにスカート、麦わら帽や手ぬぐいを頭にのせ、身の回りの世話をするつきそいの家人に守られてゴザや木箱などに腰をおろして客のつくのを待っている。一年に一度とはいえ、毎年ここにもうでる善男善女とはすでに深い顔なじみになっている。それぞれたのむイタコはきまっているのだった。——死んだおじいさんはあの世で今年はどうしているだろうか？　おばあさんの命日にはついいそがしさにまぎれて少し粗末なあつかいをしてしまったがもしや怒ってはいないだろうか？——あれこれをたしかめ、故人の機嫌をうかがうべく、純朴な人々は今年も米や豆を背負ってこの山をおとずれてくるのだった。

「あ、待って！」

「すみません。お願いしたいことがあるんですけど」

とうろうのかげにたむろしていた派手な色彩が走り出てきてジープにむかって叫んだ。

「おい、止めろ」

ジープの上の二人のいぶかしい視線の前に進み出てきたのは数人の若い娘たちだった。
「あの、私たち東都女子大の社会研究班なんです。こんどイタコの生態調査の目的で来たのですが、ここへ来てみると、なんですかちっとも調査が進まないんで困っているんです」
眼鏡をかけた一人が当惑を顔ににじませて云った。
「質問にも全然、答えてくれませんし、わけを話して近づこうとすると逃げるように場所を変えたりするんです。私たちもそんなに何日も腰を落着けてここにいるわけにもゆかないし実は困っていたところなんです」
「で、われわれに何か？」
「東国新聞のかたでしょう。なんとかイタコの一人とでも話ができるようにしていただけませんでしょうかしら」
娘たちの真剣なひとみが村上の顔にそそがれた。
「さあ、ぼくにはどうにも」
村上は運転席の青年を見かえって言葉を濁した。青年はしばらく考えていたが、やがて声を低めて、
「村上さんさえよろしければ今夜のおしん婆さんのクチヨセを見せてやれますが」
「苦情はでないの？　その人から」
「おしん婆さんなら大丈夫です。なにね、去年おしん婆さんの息子が急病で危なかったとき、

通信局のジープで青森の病院まで運んでやったりしたもんですから、彼女だいぶわれわれには恩ぎを感じているようです。いっちょう頼んでみましょう」

「それじゃ、この人たちも同席させてやってくれ」

「承知しました。ね、君たち。それじゃ今夜八時頃に円通寺の書院へ来なさい。われわれも取材のためにイタコを招いてあるんですよ。そのあとで君たちもいろいろ聞いてみたらいいでしょう」

わっとにぎやかなかん声があがった。

「このへんの人々はよそ者にはなかなかうちとけませんからね。特にイタコは駄目なんですよ。まして都会の女の子に取囲まれての質問ぜめでは先ず絶対に口を開かんでしょう。われわれは今朝刊でやっている《生きている伝説》という囲みもののシリーズの取材に来たんですが、われわれでも自由に取材して回るというわけにはいかないんですよ。それで特別に一人を呼んであるんです。こちらのかたはそれでわざわざ東京から来られたんです」

「ああ、あの《生きている伝説》というの私毎日読んでいます。とても面白いわ」

「あなたが書いていらっしゃるんですか？」

「いや、ぼくだけじゃありませんよ」

村上は自分に向けられた好奇な視線を軽くいなした。

「それじゃ、君、行こう」

「はい、じゃ八時頃来なさい。円通寺にはそう云っておくから」

ジープは排気ガスを吐き出すとすべり出した。見送る娘たちの顔に急速に生色がよみがえった。声まではずんでくる。

「地獄に仏というのはこのことね」

「だって、ここは仏様に会うために来る所じゃないの」

その夜、円通寺の奥庭に面した書院に皆の顔が集った。三尺の床の間を背にイタコのおしん婆さんが坐っていた。つきそいの息子の嫁という中年の百姓風の女は部屋へは入らず廊下に坐っていた。

大きなろうそくに火がともされ、電燈が消された。

「それではおしんさん、お願いします」

通信局の青年があらたまって会釈した。

おしん婆さんはうなずいてやおら手にした長い大きなじゅずをしごいた。それを幾重にもまいてささげ、力をこめて押しもみ押しもみ低い声で何ごとかつぶやきはじめた。

ろうそくの火がゆらめいて居並んだ黒い影が動いた。皆は息をつめて石に化したように身動きもしなかった。死のような静寂の中に、おしん婆さんのじゅずをもむ烈しい動きと、早い息づかいの下でのつぶやきだけが地の底からのさそいのように皆の心に妖しい波紋をひろげていった。つぶやきはあるいは高くあるいは低く果しなく続いた。おしん婆さんのひたい

からは玉のような汗が湧き、ほおからのどを伝ってそまつなブラウスやスカートに幾つもの汚点を作った。やがておしん婆さんは何ものかに憑かれたように放心状態に入った。

「どうぞ。どなたか亡くなった方のことでも聞いてごらんなさい」

うながされて村上は体をのり出した。やや照れくさそうに、

「私の祖母はあの世でどうしていますか？」

その言葉も耳に入らないのか、おしん婆さんはなお依然として不動の放心の姿を崩さなかった。

皆の顔にようやく失望の色が動いた。

そのとき、おしん婆さんの唇から弱々しい言葉が洩れはじめた。

「……ずいぶん長いこと会わなかったなあ……この頃は風邪はひかないかね……私もここへ来てからは毎日毎日とても楽しく暮しているよ。お祖父さんもそれは元気だよ……」

村上の目は飛び出さんばかりに見開かれた。娘たちの顔は土気色に変った。

「たしかにお婆さんの口調だ！」

思わず腰を浮かせた村上の口から圧しころした声がはしった。

皆の耳に、おしん婆さんのつぶやきは死者の言葉として陰々とひびいた。

夜風がどっと庭の梢を鳴らして吹き過ぎていった。ろうそくの火が今にも消えるばかりにゆらめいた。

突然、おしん婆さんは上体を斜めに、遠くをすかし見るように背を伸ばした。部屋の一角に向って両手をさしのべて狂気のように叫んだ。

「……あの箱を海に棄てるな！　悪気が凝ってたくさんの人が死ぬぞ。それはやってくる。きっとやってくるんだ……水の底から。棄てるな！　箱を……」

おしん婆さんはいきなり立ち上ろうとして横ざまに畳の上に倒れた。皆が総立ちになって抱き起そうとするより早く、廊下から風のようにつきそいの女がかけこんできておしん婆さんをかかえ起した。

それを見守る皆の顔は凍ったようだった。

おしん婆さんがつきそいの者にかかえられるようにして引揚げていったあと、部屋では皆がまだ覚めやらぬ夢におびやかされているような面もちだった。

「今の、あの箱を棄てるな、というのはなんでしょう？」

娘たちのグループの一人、まだ高校生らしさのぬけきらぬ邦子だった。

「今日はおしんさん、少し様子が変ですよ。皆も知っていると思いますが、イタコというのは質問をした人に関係あることしか云わないものなんですよ。つまり非常にプライベートな、ごくせまい範囲内でしか応答しないものとされています。あの箱を棄てるな、とかたくさんの人が死ぬぞとか、イタコの言葉にしてはおかしいな」

通信局の青年が首をかしげた。邦子の隣に坐っている一人が村上にたずねた。

「あの箱うんぬんに心あたりはございますの？」
「いや、それが全然ないんだ。その前に、この頃、風邪を引かないかってぼくに聞いたが、ぼくは子供の頃、つまりぼくの祖母がまだ生きている頃はとても体が弱くてね、それを祖母がとても心配していたものだ。それを思い出してぼくは一方、ぞっとしたよ」
「あなたに心あたりがないとすると、いったい何なのかしら？」
「ね、あのお婆さんに何か見えたのかしら？　私には何だかあれがいいかげんなことを口走っただけとは思えないんです」
　村上が煙草に火をつけた。薄紫色の煙が電燈にまつわりつくように立ち昇った。
「もし、あの、おしん婆さんの云ったことがほんとうに何かの予知だとしたら？」
「たくさんの人が死ぬ、と云ったわね」
　皆の胸の中を氷のように冷たいものがはしった。それは何か得体の知れぬものの影を結んだ。おそろしく不気味なある何かが、しだいに頭をもたげてくる、そんな異様な不安が皆の顔から一瞬、表情をうばった。
　また木々をどよもして夜風が吹き渡っていった。鳴きすだく虫の声もとだえて、その時、あの、おしん婆さんの、見えぬ目を虚空にすえて両手をさしのべた絶望的な姿態が、凄まじい現実感をともなって皆の脳裡を過ぎた。

第二章

夜のあいだ、陸から吹いていた風が夜明けとともにやむと、朝なぎの海はかすかに薄紅をはいたコバルト・ブルーの鏡になる。寄せてはかえし、かえしては寄せる波の太古からのその呼びかけも、この時ばかりはひとときの休息にはいるのだ。あるいはまだ生物のいなかった太古の頃の清澄と平穏を海はふと想い出すのかもしれない。

その朝、茫洋とひろがる海原には飛ぶ鳥の影一つなく、ただ白い雲がこの息をひそめた海に触れるのをはばかるかのように、はるかに水平線の円弧に沿って浮んでいた。

西南の空と水とを二つに分かって本土の緑の山々が濃淡の翳をおびて連なっていた。それは明るい朝の陽光の下でいやに鮮明に近々と見えるのだった。

その連なる緑の中から湧いて出たように数隻の漁船が姿を現した。それは鏡のような海面に長い長い航跡を曳き、一団になって沖へ針路をとりはじめた。

蹴立てる波は生きもののように、舳におどった。焼玉エンジンの爽快な音がはずむように海原にひびきわたっていった。

漁区を北へ一時間ほど走ったところに設けられている落し網漁場へ向う漁船団であった。

「清吉っあん。そろそろ網場にかかるぞ」

先頭を走る舟の上では舵輪を握っている若い男が甲板の漁労長にむかって叫んだ。
「ようし、さあ、みんな、持場についてくれ」
ゴムの広い前かけ。手袋、手かぎは腰に、ゴム長にはすべり止めの荒なわを結び、身じたくはすでにできていた。
誰かの棄てた煙草が弧を描いて波間に飛んだ。
五隻の舟は速度を殺して左右に分れた。
「おい！　へんだぞ、見ろ」
一人が舳から身をのり出して叫んだ。
「なんだ？」
「どうした」
皆はけげんな面もちで声のしたほうへ伸び上った。
「あれを見ろ！」
朝なぎの海に、吹き散る木の葉のように一面にキラキラと輝いてただよい浮いているものがあった。
「なんだろう？　ガラスのかけらのようなものが光っているぞ」
「馬鹿！　あれは魚だ」
「魚？」

「そうだ。死んだ魚が浮いているんだ」
漁労長の言葉に皆の顔は蒼白になった。
「どうして死んだんだ。あんなにたくさんの魚が」
「わかるもんか」
小さな魚の死体は水中で無数の七色の虹を曳いた。大きな魚の死体は翳をおびて青黒く木片のようにただよっていた。
あとに続く舟の上でも立ち騒いでいるのが見えた。
「舟をとめろ！　後の舟にも合図するんだ」
後進いっぱいをかけたエンジンが裂けるように咆哮した。船尾に白波がもり上った。その船尾波を見て後続船は合図も待たずにつぎつぎと停船した。
ふっ、とエンジンの音がやむと、にわかに深い静寂がやってきた。船腹にあたる波の低く湿った音だけが皆の耳に聞えていた。
ゆっくりと接舷してきた後続船の甲板から船長が体をのり出して叫んでいた。
「清吉っあん。いったいこれはどうしたんだろう？　毒物が流れてきたとしてもこれだけの魚が死んだんだ。相当な量が流れこまなければならないだろうが、この湾の沿岸にはそんな毒物を流すような工場もないしな」
「貨物船かなにかが棄てたんじゃないだろうか」

「だが、それだとしてもたいへんな量を棄てなければならないはずだぞ」
「よし、網場のようすも心配だが、どのくらいの海域で魚が死んでいるか調べてみよう。あんたの舟は網場を見てくれ、おれたちは三手に分れてひとっ走り回ってくる」
一番外側にいた舟がエンジンをかけて舳を回しはじめた。つづいていっせいにはじけるような回転音が交錯して海面をすべった。
風が出はじめていつか白い小さな波頭が立ちはじめた。無数の魚の死体はまるで天から撒かれたもののように限りなく舟の針路にひろがっていた。舟はそれをかき分け、おしのけるようにして進んでいった。朝のまぶしい光の中に、それは魚の模様を織り出した青いプリント布地のように見えた。
ふだんならこんな好餌をみのがすはずのない鷗の群も、なぜか今朝は一羽もその姿を見せていなかった。

遠州灘が駿河湾に移る境に伸びる半島の一角に、この朝おこった一つの事件が、やがて到来する悲惨な破局の最初の兆しであることに気づいた者はむろん誰もいなかった。しかしこの朝、事件を見聞きした者の中に、もし一人でも未来を見通すことができる者があったら、その事の重大さにおそれおののいたことだろう。だが事実はおびただしい魚を浮べたまぶしい朝の海も、まもなく人々の頭からうすれ、誰もが思い出しもしなくなるのだった。

漁師の一人が持ち帰った死魚は土地の水産高校に送られて調査されたが、ただ何かのショックによるものとだけしかわからなかった。解剖しても内臓の破壊は認められなかったし、なんらの毒物も認められなかった。突然の水圧変化と考えるのがもっとも妥当かと思われたが、この朝、海洋気象台ではべつにそれらしい記録も得てはいなかった。

新聞の地方版の片すみに、わずか数行の記事がのせられたが、誰もそれに注意を払う者はいなかった。

ただ海は青く深く、何ごとかを秘めていた。

第三章

コバルト・ブルーの空に、そびえ立つ積乱雲がけわしい峯のようにそそり立っていた。

浜にはビーチ・パラソルが咲き乱れる花園のように原色の熱気を撒き散らしていた。砂浜が海岸道路に接するあたりにはよしず張りの休憩所が立ちならび、そのむこうの駐車場にならんだおびただしい車の列は、鏡のように陽光をきらめかせていた。スピーカーから流れ出るジャズはやたらに騒音を放って、その唄声すら判然としなかった。それらを押し包む人、人、人だった。立ったり坐ったり走ったり、ここ湘南の海水浴場は人と光の渦だった。

昼頃、その砂浜の一角に混乱がおきた。
そこは救難監視員の詰所だった。かけこんで来た男の顔は紙のように青ざめていた。
「友だちが見えなくなったんだ。沖で」
男は息も絶え絶えに喘いだ。
「しっかりしろ！　泳いでいたのか」
「おれだけボートに乗っていたんだ。みんなは飛びこんで泳いでいた。ボートから五百メートルも離れていった。そして急に見えなくなったんだ。いそいでさがしたが見つからなかった」
「友だちは何人？」
「五人だ」
監視員たちはどやどやと立ち上った。一人は電話にとびついて警察を呼び出した。薬品箱やロープの束などがかつぎ出され、三隻のモーターボートは混雑する人々を縫ってすべっていった。波間にたわむれる人々のために、ボートはなかなかスピードをあげることができなかった。サイレンが高々と鳴りひびいた。
十分後、こんどは若い娘の一団が監視所に駆けこんできた。彼女たちの仲間の二、三人が、沖へ泳ぎ出るといってビーチ・パラソルの下から出ていったまま、もう二時間以上ももどらないと云うのだった。

さらに追いかけるように、中年の夫婦があたふたとあらわれた。彼らの息子たちが、沖へボートを出しているのだが、呼びもどしてくれとおろおろ声で告げた。

監視員たちは残っている人数をかり集めた。やがて一隻のボートが沖へ向っていった。

浜のスピーカーはジャズを中断して、人々にあまり沖へ出ないように、という注意をくりかえし放送しはじめた。しかし大部分の人々の耳にはそれはただ風のように素通りしてしまうだけだった。あまり沖へ出ないように、などという注意は、浜では人はあまりにも馴れっこになってしまっているのだった。

救護所はよしず張りの休憩所の立ちならんだ一角のはずれにあった。プレハブ造りのこの四角な建物は、混み合う夏の間だけでなく、シーズンオフにはこの浜を持つ地区の診療所としても、人々に親しまれてきた。

ふいにたくさんの足音が乱れて救護所の入口に人影があふれた。

「先生！　沖で溺死体を収容してきたんですが、それが妙なんです。見てください」

先頭に立った青年が血走った目で叫んだ。

「さあ、邪魔だからどいてどいて！」

警官が人垣を支えて声をふりしぼっていた。

その声を聞きながら裕三は脱ぎ棄ててあった白衣に腕を通しながらサンダルをひっかけ、診察室へ入った。

「あ、三川先生、沖で行方不明になったという届出があったので捜索していたのですが、網にかかった一体があったので運んできました。これがどうも様子がおかしいんです」
「どれ」
監視員たちは運んできたキャンバス包みを床に置いた。包みが開かれ、一個の物体がさらけ出された。三川は思わず息をのんだ。
ねじ曲った肢体はとうてい人間の体とは思えなかった。首も背も、手足の指までもが、奇妙な形に反り曲り、つるのようにねじおれゆがんでいた。そしてその体全体は不思議な薄紫と茶褐色のまだらに被われていた。
「どうしたんだ、これは！」
三川もこんな溺死体は始めてだった。溺死体というよりも、むしろこれは焼死体に近い様相だった。手を触れてみると、死体は完全に硬化しており、さらに力を加えると茶褐色に変色した部分の皮膚はずるずると崩れた。
「君！　これは溺死体ではない。だが、死因はいったい何だろう」
監視員の一人がふらふらと床に崩れおれた。
「いそいで県警を呼んでくれませんか！　それから家族を」
警官はうなずいて部屋のすみの電話にはしった。
その時、開け放された窓の下を通って入口に回ってくるおおぜいの足音と人声が入り乱れ

て聞えてきた。急にそれが一つに重なって入口からどやどやと人の群が入ってきた。

「なんだ？　どうしたんだ」

人々の間から、むしろで包んだ長い物が運びこまれ、布に横たえられた。包みを床に置いて目をあげた人々は、すでに床に置かれているねじ曲った一個の死体に、声をあげて飛びのいた。

「先生！　西の岬近くで流れているのを発見したんだ。それが、それが、ここにあるのと同じように……」

声がうわずってかすれた。

「よし、発見者一人を残して皆ここから出てくれたまえ」

三川の声に押されるように人々は出ていった。あとには警官と監視員だけが残った。三川は看護婦に手伝わせてむしろの包みをほどいた。

手足はもつれるようにそり返り、皮膚は薄紫と淡い赤、そして濃い褐色の縞を浮べていた。水着の残片が海草のように体のあちこちに貼りついていた。もり上った乳房から首、頭は薄く炭化し、頭髪が微細な糸くずのように附着し残っていた。

「先生！　これが溺死でしょうか」

警官が三川の後から震える声でたずねた。

「さあ、くわしく調べてみないと何とも云えないが、溺死とは思えないなあ。以前に落雷に

よる死体を見たことがあるが、こんな感じだった」
入口の外で泣き叫ぶ女の声が聞えていた。家族かもしれなかった。
「君、家族に見せたくない。今は。中へ入れないようにしてくれ」
三川は監視員の男に入口に立つように云った。
海岸道路をサイレンの音が近づいてきた。

ジープで駆けつけてきた県警の監察医も、ただ首をひねるばかりだった。この老練な中年の監察医も、こんな水死体ははじめてだということだった。死体はただちに隣接する市の市立病院で解剖することになった。
「三川さん。私はこれは溺死ではなくて、電撃による焼死ではないかと思うのだが、どうだろう」
監察医は煙草をくわえた。三川はライターの火をさしだしながら、
「実は私もそうじゃないか、と思っていたのです。あの手足の異常な屈曲は電撃による筋肉の興奮によるものでしょう。皮膚の変色といい、炭化といい、電撃と考えれば説明がつきそうです」
「だが、何による電撃だろう。今日は雷雨もなかったし」
二人は顔を見合わせて首をかしげた。

この日、この浜で水死した者は二十二名に達した。そのどれもが、異様な姿態を示し、変色、炭化をおこしていた。沖合遠く泳ぎ出た者たちであった。

市立病院は送られてきた死体のすべてを比較、検討した結果、いずれも、電撃によるショック死と断定した。しかしこの断定はさらに奇妙な謎を生んだ。何による電撃なのか？

医師たちは頭をひねり、県警は捜査を開始したものの、ただ海を前にして手のつけようもなかった。

翌日は何事もなく過ぎた。しかしその次の日、この奇妙な水死事件――県警では一応、これを水死として取扱っていた――は爆発的に発生した。二十九人が行方不明となり、そのうちわずか三体のみが発見、収容された。

この奇妙な事件の発生はこの浜だけではなかった。三キロ東へ寄った海水浴場でも、また西へ岬を回った浜でも、同じような死亡者が出ていた。

だが、夏の日の水の事故には、人々はすっかり不感症になってしまっていた。事故を起した当人の不注意は声高く責められ、また人々は心中、おのれをいましめはしたが、その事故の原因を真に解きほぐすにはまだまだ時間を必要とするようであった。

第四章

海洋調査船《黒潮丸》は高々とホイッスルを鳴らして焼津港をあとにした。舷側を接して碇泊する漁船群の間を縫ってしだいに速度を早めていった。航跡が長く長く伸びる。港外燈浮標を左にかわすと、はや駿河湾のうねりが大きく船体をゆすぶりはじめた。

《黒潮丸》は今、太平洋沿岸の魚群調査におもむこうとしていた。このひと月ばかりの間に、日本の太平洋岸からイワシもマグロもアジも全く姿を消してしまった。理由はかいもく不明だった。それら魚群は西南日本の洋上はるか、黒潮の流れに沿って避けて通ってゆくものと思われた。そのこちら側、本土に沿った海域では、魚類は死滅したものか逃散したものか、小魚一匹、網にかからなかった。

すでに近海漁業は完全に麻痺していた。火の消えたような漁村には、うち棄てられた漁船がさびしく砂にまみれたまま海風にさらされていた。

漁村の人々の生活の灯は今消えようとしていた。その日ましに増大してゆく生活不安は、しだいに社会不安にまで拡大されてゆく危険をはらんでいた。陳情団は相ついで上京した。大学の研究室や水産試験場は日夜をあげてその総力をこの問題の解決に集中した。

海洋調査の一翼をになって《黒潮丸》は長期海流観測のために、その目的地点へ向って針路を定めた。千五百トンの純白の船体は濃紺の海原に美しく映えた。

《黒潮丸》の目指す海域は、南西諸島、石垣島、宮古島よりラサ島を通ってベヨネーズ列岩を結ぶ線の北側であった。はるかな北方を日本本土によってさえぎられるこの広大な四辺形の海域のどこかに、魚群をさえぎり、倒し、遠く逃げはしらせるある何かの原因がひそんでいるはずであった。

三日後、《黒潮丸》はラサ島東方四百キロの海上を東進していた。これまでのところ、どこにも異状は認められなかった。あけ方頃、はるか南方の水平線近く、白い波頭をかすめて群れ鳥のように飛ぶトビウオの群れを発見した。それは船の針路とほぼ平行に、やはり東方へ向っていた。あきらかに日本近海に近づくことを避けて、この海域の南を遠ざかってゆくものであると思われた。望遠鏡をのぞいていた人々は波の上にかすかな点となって消えてゆくトビウオの群れを奇異な思いで見つめていた。そのトビウオの群れは、まるで目に見えない恐ろしい敵から逃れようとするかのように必死に東へ向っていた。トビウオは敵などに襲われてはげしい危険を感じたとき以外には波の上に飛び出さないものだ。何かがあの水平線の下にいるのだ！　トビウオに死の危険が迫るのを感知させた何かの原因があの遠い波の下にある。

「取舵いっぱい！　両舷前進強速（フル・アヘッド）」

《黒潮丸》の船体は大きく右舷に傾いて舳を左にふった。航跡が円弧を描いて白く泡立ち、マストが風を切って悲鳴をあげた。

その時、船橋にある電話がけたたましく鳴り出した。

パイロット・ランプが点滅する。

「なんだ？」

「船橋ですか、こちら機関室。エンジン故障、プラグの焼損らしい。目下調査中」

「こちら、レーダー室。整流機破壊、復旧は困難」

「こちら無電室、重大な事故が発生した。応援をたのむ」

声がおり重なって入り乱れた。

突然、電話機から目もくらむせん光がほとばしった。驚いてとびさがる人々の前で電話機は烈しい焔を噴き出した。消火器を手にするひまもなかった。電路パイプ、配電板、スイッチ・ボードなどがみるみる凄まじい焔の塊になった。

船体のあらゆる所から太い火柱がふき上り、やがて船体を被う火の海となった。甲板は紙のように焼け落ち、船腹はみるみる溶融して亀裂を開いた。天にとどく黒煙の中から破片が流星のように尾を曳いて周囲の海面に飛び散った。

《黒潮丸》はしだいにもとの形を失ない、波間に没していった。

あとには煮えたぎる大波紋と天も海も被いかくしてひろがる黒煙だけが残った。一隻のラ

イフ・ボートも、一個の救命ブイも浮いていなかった。沈没の最後の瞬間に海に身を投じた人たちの姿も見えなかった。

――《黒潮丸》消息を絶つ――

――すでに百四十時間を経過。沈黙せる《黒潮丸》

――ふたたびくりかえされるか、第五海洋丸の悲劇――

新聞、ラジオ、テレビなどは消息を絶った《黒潮丸》の安否を気づかって緊張と憂慮にみちたニュースを流し続けた。

海上保安庁はもとより、水産庁、海洋気象台、海上自衛隊も密接な協力のもとに広範な海域にわたる捜索に懸命であった。

《黒潮丸》の行動海域に台風発生の兆候もなかった。第五海洋丸の悲劇の再来を思わせるような海底火山の活動も全く探知することができなかった。エンジン、あるいは舵機関係の故障による漂流かとも考えられたが、それでは百四十時間にもおよぶ通信杜絶が説明できなかった。海上自衛隊は遂に同海域近傍で訓練中のアメリカ第七艦隊に援助を要請した。空母キティ・ホークは護衛艦をともなって一路、台湾のキールンへ入った。しかし何の成果もあがらぬまま、むなしく日を重ねるのみであった。

その日、館山基地を発したP2V《ネプチューン》対潜哨戒機は、小笠原列島線を東から

西へ大きく切って機首を九州大村基地へ向けた。

高度三百メートル。波また波の海面にくっきりと長大な翼の影を落してゆうゆうと飛び続けていった。レーダーの触手は波の上を這って微小な漂流物も的確にとらえて見逃さなかった。操縦室や各銃座からは幾つもの双眼鏡が、眇々たる視界のどこか一点にあらわれ出るかもしれない何かの手がかりを待って、じっといつまでも動かなかった。

「機長！　針路前方八度に漂流物らしきもの。距離七五〇〇」

レーダー手の奥村二尉が突然、叫んだ。

「なに？　漂流物、どれ」

機長の森田二佐が双眼鏡を手に前部爆撃手席へもぐりこんでいった。それを見ると、村上もカメラと双眼鏡をかかえて機長の後に従った。爆撃手席のある機首前部は広いガラス張りになっていた。村上はかぶりなれない飛行帽をかなぐり棄てると、幅広い機長の肩ごしにゆく手の海面に双眼鏡の目を注いだ。

眼下をかすめてゆく海面は急流のようだった。

紺碧の海面にゴミのように黒いものが点々と浮いていた。さらにその左方、帯のようにそこだけ黒ずんでのびているのはあきらかに油紋であった。

「難破船の残骸らしい。接近してみよう。左旋回」

哨戒機は左の翼端を波頭に触れんばかりに傾けて大きく旋回した。獲物をねらう大鷲のよ

うに風を切る。

「機長！　あれは小型船の船橋構造物の一部らしい。焼損があるようだ」

中央偵察席の機内電話が皆の耳にびんびんと鳴った。

「機長。海流に沿ってさかのぼります。流速三ノット。風は西南　微西。八メートル」

航空士席がデーターを告げた。

「基地ならびにこの海域周辺の全艦船に連絡、漂流物を収容させろ。船名確認だ」

通報は発せられた。

哨戒機はふたたび高度を二百メートルにとった。いったん姿勢をたてなおし、それからぐい、と機首をななめに落して波頭におおいかぶさるようにすべっていった。

村上は肩を肋材に押しつけるようにして体を固定し、両手でカメラをかまえた。ファインダーの中で漂流物はぐんぐん大きくなってきた。

村上はカメラのシャッターを押しつづけた。

一瞬、海面の漂流物は後方へ飛び去った。

「機長！　船橋構造物側面に《黒潮丸》の文字があります」

「機長！　《黒潮丸》です」

偵察席からの声が重なった。

村上は白い歯を見せて笑った。機長が彼の笑いにけげんな目を向けた。

前方に幅広く油紋があらわれてきた。村上はそれにカメラを向けた。

P2Vは旋回を続けた。

大特種（スクープ）だった。完全に他の新聞社を抜くことができた。このまたとない機会に、村上は全身をうちこんだ。

うち続く不漁と、この夏の海水浴場での不思議な変死事件、そして《黒潮丸》の行方不明、と、村上はこれら事件の背後に一連のつながりがひそむことを確信していた。それははっきりとした形で他人に説明できるようなものではなかったが、彼の内部で、ある予感めいたものが恐ろしい疑惑の影を形造っていた。

《黒潮丸》の行方不明が報ぜられるや、彼は異状な熱意をもってデスクに迫り、海上自衛隊の捜索陣に加わった。この海域にこそ、彼の追い求める事件の核心がひそんでいるであろうことをいわば本能的に感知したのだった。それはかみそりのようにとぎすまされた新聞記者特有のカンとも云えた。

その彼の心底にあるものは、あの円通寺の奥まった一室で、おしん婆さんが口走ったひとことだった。いっさいの不条理を信じない彼が、ふと憑かれたように傾いていったのは、ひとつに特種に対する執念だった。

「すまないがもう一度旋回してくれませんか。もう一枚撮りたい」

彼は機内電話にしがみついた。

その時だった。突然、烈しい震動が機体を貫いた。エンジンの音がふっ、と止むと、排気管からもうもうと黒煙を噴きはじめた。

「エンジン故障！」

「機長！　レーダーがショートした」

「機体が帯電しているぞ！　エンジンを切れ」

「消火器！　消火器！」

絶叫が交錯した。機内に白煙が立ちこめた。機体はみるみる大きく傾いた。

「落ちつけ！　山崎は機内の発火場所を発見、炭酸ガスで消火しろ。木谷と田中は重量物投下用意！」

「機長、無電機が故障です。原因不明」

「奥村、救命艇格納位置に待機」

「機長！　本機に落雷したらしい」

「落雷？　外を見ろ、いい天気だ」

「いや、落雷としか思えない。この空域全体がおそろしく帯電している」

「そういえば雷雲につっこんだときとよく似ている。とにかく、全力で脱出しよう」

両方のエンジンの黒煙は間もなく止った。ぶすぶすと白煙を噴いていた機内電路も炭酸ガス消火器によって鎮火した。

機体は巧妙な操縦によって姿勢をとりもどし浅い角度で滑空にうつった。
「全員で重量物を投下するんだ。清水、燃料放出は可能か？」
「大丈夫と思います。ただ重量物投下は燃料放出が終ってからにしてください。金属が触れ合って火花が飛ぶと危険だから」
「ようし、燃料放出はじめ！」
長大な主翼の内部に収められた燃料タンクの栓がぬかれた。高揮発性の燃料はみるみる白い霧となって後方に長い尾を曳いた。
その間にも高度はぐんぐん下っていった。いくらかでも機体を軽くして波の上に浮いている時間を長くしようとする努力ももはや及ばなかった。燃料の白い尾を曳きながら哨戒機はゆっくりと波の上にその太い腹を接していった。高く白波があがり、機体は二度、三度バウンドしてやがて静かに浮いた。その機体の上に搭乗員たちはぞろぞろと這い上った。ゴム製の救命艇がふくらみはじめ、緊急食糧のパックや携帯電話機や信号銃などが積みこまれていった。村上はカメラからぬきとったフィルムを入れたビニールの袋をしっかりと握りしめてゴムボートに飛び移った。
周囲に風の音だけが湧き起った。

第五章

バスを降りた三川は軽い足どりでプラタナスの街路樹の影濃い住宅街の坂道をのぼっていった。時おり高級車がクロームの肌を光らせながら音もなくすべっていった。

坂の途中を左に入ると金網の垣根につるばらをからませた瀟洒な家が邦子の住いだった。低い鉄扉を押して入るとヒマラヤ杉の間から真紅の花が咲き乱れる庭がのぞまれた。

玄関のベルを押すと、家の奥から軽い足音が近づいてきて、開いた窓からふいに顔を出したのは邦子の妹の高校生の久子だった。

「あら！　三川さん、しばらく」

「やあ皆さん、元気ですか。ごぶさたしちゃって。邦子さん、どうしてますか？」

「お姉さん？　ね、三川さん。しっかりしなけりゃ駄目よ」

久子の目が急に大人っぽく機敏に表情を変えた。

「三川さん、まごまごしてるとお姉さんをとられちゃうわよ。いまのところ三川さん、全然、不利な態勢！」

「なんのことですか？　それ」

「のんびりしてるわねえ。なんですか、とは今頃なんですか」

「と云われてもさっぱりぼくには」
「三川さん。三川さんは今ぜったいの苦境に立たされてるのよ。ライバルは東国新聞、社会部記者、村上広治。どう、これでも驚かない」
三川の顔がふと曇った。
そのとき奥から邦子の母親が走り出て来た。
「まあまあ、三川さん。しばらく。さ、どうぞおあがりになって」
「ごぶさたしてました。ちょっと調べることがありましてね、急いで上京してきたんですが、ごあいさつだけでもしてゆこうと思ってまいりました」
久子が二人の間に身をのり出して云った。
「お母さん。今ね、三川さんにしっかりしなけりゃ駄目だって云ってたとこなの。お姉さんをとられちゃうわよね」
「久子！　なんです。子供のくせに。むこうへいってらっしゃい」
「お母さんて人前でもなんでもかまわないのね。すぐ、なんです、子供のくせにだって。へん！　だ」
久子はふくれてその場からいなくなった。
「三川さん。邦子は日立のほうへ行くってちょうどさっき出かけたところなんですのよ。帰ってきたら残念がりますわよ。ほんとの一足違いですもの。お電話でもくだされればよかった

のに」

邦子の母親はこの娘のボーイフレンドに好意的であった。いかにも残念そうに眉をひそめた。

「そうですか、日立へ」

「なんですか五時半の急行に乗るとか云って急いで出てゆきましたのよ。卒論の資料のとてもよいのが見つかったんですって。お友だちから電話がきましてね。邦子はいませんけれどいいじゃございませんか。さ、おあがりになって、ご夕飯でも食べていらっしゃってください。そのうちにお父さんも帰ってくるでしょうから」

三川はためらった。

奥で電話のベルが鳴った。邦子の母親は、そちらをうかがい、三川を重ねてうながして自分が先に奥へ入っていった。三川は靴をぬぎかけた。その三川の鼻先に、久子がするりと立った。ショートパンツのむき出しの白い太腿が三川の目にまぶしかった。

奥で電話機に向っている母親の後姿にちろりと赤い舌を出して三川にささやいた。

「さっき、お母さんが云っていたお友だちっていうのが、実は東国新聞の村上クンなのよ」

三川はいきなり横面に打撃を喰ったように顔を上げた。

「お姉さん、今、何とかを調査するんだって夢中なのよ。卒論の材料なんですって。その村上クンていうのも、新聞記者としてその何とかっていうものを調べているんですって。それ

で意気投合しちゃったのね。村上クンとは恐山の巫女を調べに行った時、向うで知り合ったんですってさ。三川さん、巫女って知ってる？」

「巫女なんかどうでもいいが、その村上クンとかいう人は、邦子さんを日立くんだりまで連れ出すほど親しいのかい？」

久子は深刻そうな顔になって腕を組んだ。

「三川さん。お姉さんに会って直接話してみるべきだと思うなあ。事態はもはや楽観を許さない段階よ」

久子は小生意気なポーズをとって三川を見おろした。

「邦子さんはいつ頃帰ってくるの？」

「さあ、私存じませんわ。もしかしたら、もうお帰りにならないんじゃございませんかしら」

「馬鹿な！」

「こわい顔！　私をにらまなくたっていいじゃないの」

三川はいったんぬいだ靴をまたはいた。電話をかけ終った母親が奥から小走りに出てきた。

「すみません。ちょうど知り合いから電話がかかってくることになっておりましたものですから。あら、まだおあがりになっていないんですか。さあさあ、こちらへ、どうぞ」

三川の顔は暗く変っていた。

「いや、やっぱりぼくはここで失礼します。あがっていると長くなるし、まだこれから書類の整理もあるものですから」

邦子の母親はそれをただの遠慮ととったらしく懸命に引きとめにかかった。しかし三川には、久子の言葉がしこりのように重く心に沈んで、もはや邦子のいないこの家にのんびりとあがりこんでいることなどとうていできそうになかった。三川はひきとめる母親の手を強引にふりきった。邦子の母親はけげんそうに、しかし、仕方なさそうに玄関の外まで送って出た。

「邦子が帰りましたら、すぐ連絡いたさせますから」

「それではまた。失礼します」

三川は砂を噛むように味気ない思いで玄関を離れた。久子が手を振っていたが、三川にはもうそれに応えるだけの気持ちのはずみもなかった。

さっきは足取りも軽く一気にのぼってきた石だたみの坂道が、今は限りなく奈落に続く苦しい道だった。三川は自分がひどくみすぼらしいみじめな姿に思えた。たまらない自己嫌悪がつなみのようにおそってきた。

夕方から日立へ出かければ、当然むこうで一泊しなければならない——そのことが、三川の心を鉄わくのようにしめあげ、不必要な空想にまでふくれあがって三川はひとりあえいだ。

十七時二八分常磐線回り盛岡行急行『なんぶ』あ、これだ！　三川は時刻表の前を離れ、雑踏する階段をかけ上った。ホームにはベージュとエンジの二色に塗り分けられた美しいジーゼルカーの車体が蛍光灯に映えていた。三川は憑かれたような目つきでその窓から窓へと進んでいった。

三川の心を重く押しつぶしていた絶望が、しだいに烈しいたかぶりに変ったのは、三川がふと久子の言葉を思い出したからだった。

そうだ、会うだけ会って話してみよう。それには今ならまだ間にあう。五時半の列車だと云ったっけ。——会って話してみたとて、どうなるものでもないことは三川にもよくわかっていたのだが、それによって邦子の顔をみることができるという無意識な喜びが、彼を衝動的に上野駅へ向けさせたのだった。

発車まであと二分。三川は明るいホームをほとんど走るように車から車へとたずねていった。

「あら！　三川さん」

ふいに、すきとおった明るい声が三川の背後から流れてきた。三川は一瞬、体を硬くして全身でふりかえった。

邦子がこぼれるような笑顔で近づいてきた。純白のワンピースがひどく印象的だった。

「どちらへいらっしゃるの？　この列車にお乗りになるんですか」

邦子はこれも白い小さなスーツケースをさげていた。
「さっきあなたの家へお邪魔したんですよ。そうしたら、今、でかけていったところだというんで、追っかけてきたんですよ」
邦子はすまなさそうに形のよい眉を翳らせた。
「私、卒業論文の資料を集めるのにふうふう云ってますの。そしたら、今日、知っているかたから茨城県の日立の郊外にとてもめずらしい資料があるから調べに行ってみてはどうか、というお電話をいただいたんです。それで急にこれからそこへ行こうと思うんです。あ、こちらがその……」
邦子はわずかに身をひいて、邦子のかたわらの長身の青年を指し示した。三川はそれまでその青年の存在に気づいていなかった。邦子の言葉は三川をさあっとまっこうから立ち割った。
「東国新聞の村上さんです。お電話をくださって、そのうえ私といっしょに行ってくださるんです。村上さん、こちら三川さん。お医者さんですのよ」
村上はぐいと上半身を突き出すように三川に会釈した。眉の迫った精悍な顔が微笑んだ。
「私がシリーズで扱っているネタが、ちょうど邦子さんが集めていらっしゃるという資料とぶつかりましてね。お誘いしてみました」
三川は村上の卒直な態度に、一瞬、出おくれた気もちの無残な崩れをかろうじて支えてさ

りげなく笑った。

「三川です。たいへんですね。ま、邦子さんはこれで相当な我まま娘ですから、噛みつかれないように気をつけてください」

邦子とのつきあいの古さを示すつもりで、三川はおうように笑ったが、

「まあ、せいぜいこらしめてやりますよ」

村上の自信ありげな言葉のひびきがはねかえってきた。そう云って邦子の顔にあてる村上の視線のたくましさと不敵さに、三川の心はまっ黒に硬ばった。

「邦子さん、ちょっとこちらへ来てください」

三川は声の震えをおしかくした。邦子はふと、けげんな顔をしたが、村上に一言、二言ささやくと、三川の後に従った。村上は顔をそむけてデッキに近づいていった。

「なあに？　三川さん」

邦子はわずかに白い顔をかたむけて三川の言葉を待った。

「邦子さん。お母さんに聞いて急いでかけつけてきたんだが、あの男、信用できるんですか？」

「村上さん？　とてもいい人よ。この間、やはり卒論のための調査は、下北半島の恐山へ行ったんですけど、そこで……」

「ええ、それは聞きました。だけど、ぼくもこんなことを云いたくないんだが、これから日

立へ行くとなると、むこうで一泊するわけでしょう。いかんなあ」
「だってしかたないじゃないの。日帰りができないもの」
「それにしても、男の奴なんかと旅行して、しかも……」
三川の言葉はせっぱつまったようにだんだん乱暴になってきた。
「あら、三川さん、へんに気を回さないで！　だいいち村上さんに失礼じゃありませんか。そんなふうに考えては。三川さんらしくもないわ」
邦子の顔にうっすらと怒りの色が浮んだ。
「いや、邦子さん！　ぼくは理由もなしに君にこんなことを云っているんじゃない。君も気をつけなくちゃ。村上とか云ったな、あの男の君を見る目つきにはただの好意だけじゃない。何か、こう、ひどく強引な薄汚いものがあるよ。やめたまえ！　行くの」
邦子は目を丸くして三川のけわしい顔をみつめた。邦子の知っている温厚な三川からはこれまで想像もつかなかったような粘液質の悪意が、邦子を透して村上にむけられているのを知った。
邦子は思わず身をひいて云うべき言葉をさがした。何か思きってひどい言葉をあびせてやりたいと思ったが、邦子は適当な言葉を知らなかった。
その時、発車のベルが鳴りひびいた。ホームはにわかに騒然となった。
「君、それは卒論の資料は大事だろうけれど、君は……」

三川はせきこむように言葉を切った。絶望が心にも肌にも急速にひろがってくるのをどうしようもなかった。

「君、話なら邦子さんが帰ってからにしたらどうですか？　もう発車するが」

「村上さん！　今、行きます」

「まて！　邦子さん」

「帰ったらまたお会いしましょう」

邦子はひらりとデッキに入った。その邦子の体をデッキの村上が、がっしりと支えた。

「三川君、ぼくは薄汚なくもないし、特別な目つきをしているとも思ってないがね。邦子さんは大丈夫、無事におかえしするよ。それじゃ、また」

村上の声も、しだいに速度を早めて三川の立っているホームをすべっていった。

光の帯のようにたくさんの窓の灯が走り過ぎ、最後に尾燈（テール・ランプ）が真紅の目のように飛び去っていった。

三川は蒼ざめた苦笑いを洩らした。その頃になって惨澹たる悔恨が三川の胸にふきあがってきた。

彼の怒りに言葉もなくただ見つめていた邦子の、ぼう然とした顔が、三川には無垢な幼児のように思えた。まるで十代の少年のような衝動的な行為が、明るい照明の下で顔をあげられないほどこたえていた。

第六章

遠く金華山沖はるかに出漁していた青森県の漁船団が思いがけなく魚を満載して東京港に入ってきた。

火の消えたようだった築地の魚市場はたちまち戦場のような騒ぎになった。船団からの連絡によって、それまで閉鎖されていた構内設備は深夜から準備を整えて荷揚開始を待つばかりになっていたが、報を聞いて集ってきたおびただしい数のトラックやオート三輪は魚市場の内外にひしめき、なんとか魚を手に入れようとする業者たちで興奮のるつぼと化した。荷を積んだ車は警笛を鳴らしづめに鳴らして人混みをかき分けるように徐行して続いた。荷箱を山のように積んだオート三輪がゆっくりとすべり出してきた。その左側から、これも荷箱を積み重ねた大型トラックが通路いっぱいにバックしてきた。視界はせまく、必死に合図する声も運転手たちの耳には届かなかった。トラックは後尾からオート三輪にのしかかっていった。荷箱は山崩れのようにコンクリートの床に散乱した。魚や氷塊はキラキラ輝きながら飛び散った。二台の車はがっしりと嚙み合ったままその上をすべっていった。

それから数時間後、魚市場の内部はようやくいつもの午後にみる閑散と静寂をとりもどした。がらんとした構内には空箱やゴムホースやばけつなどが置き忘れられたようにならべら

れているだけであった。朝の戦場のような騒ぎの痕跡はどこにもなかった。

高い屋根を支える鉄柱のむこうに、暗色の海の一部が掘割のように見えていた。その構内を一人の青年が横切っていった。事務所の仕事も、不漁の続くこの頃では、ほとんど休業といってよかった。今も、ちょうど入港している漁船に同郷の者を訪れてみようと思ったのだ。

彼はふと、足を止めた。廃品投棄用のマンホールのかたわらに、うず高く積まれたままの魚の山を見たからであった。それは今日の水揚げの荷の中から出た廃品であった。あまり損傷のひどい品物は売物にはならない。それらはひとまとめにして特殊な業者の手にわたるのであった。

「今日は荷受けの車が来なかったんだな」

青年はつぶやいて顔をしかめた。魚はいたみが早い。長く放置しておくと臭気がひどくなってたちまち保健所から炙をすえられるのだった。

「電話をかけてさいそくしてやらなけりゃ」

青年はつぶやいてそこを離れようとした。

「なんだろう？　あの魚は」

歩み去ろうとした彼の目をとらえたものは、うず高い廃品に混った一匹の大きな魚であった。一メートル半はあろうか。全身輝くような青緑色であり、中央部から後半身へかけて白

い星のように斑紋が散っていた。その部分の皮膚は厚く、筋肉組織の発達がうかがわれた。これまで、ただの一度もこんな魚は見たことがなかった。

彼は体をかがめてのぞきこんだ。

胴体の側面が裂けて、そこから大きな内臓の一部がのぞいていた。それは淡紅色をおびて気泡のようにふくらんでいた。

「これはなんだろう。魚の内臓にこんな物はないが？」

彼は靴の先で魚の体を押しやった。ずるりとすべり落ちた巨体の裂目から、もう一つ同じような物がふくらみ出てきて、これはたちまちしぼんで垂れ下った。

「肺じゃないだろうか？」

まさか！　自分の疑念を自分でうち払って、彼はさらに視線を魚体の上に這わせた。大きな頭部のほぼ頂部が横に裂けて、そこから白い軟らかなものがのぞいていた。彼は落ちていた棒切れをひろうと、その部分の裂目をぐいぐいとこじあけた。薄い半透明な膜に包まれた大きな脳が現れてきた。

もはや疑う余地はなかった。最初に彼の目をとらえた時の、あの異様な何かは、やはりこの魚の持つ奇妙な形態にもとづくものだったのだ。

ある非常にいまわしいものがこの魚にはふくまれているような気がした。おそろしい何かの変化の形態がここにはあった。

彼は事務所へかけもどった。

水産大学の魚類学研究室は異様な興奮に包まれていた。魚市場から持ちこまれた一匹の魚は、これまでの魚類に関する知識を大幅に改変させるようなさまざまのきわ立った特性を示していた。

――ふつうのえらのほかに二個の完全な肺を持っていた。その能力はほとんど両棲類のものと同じだろうと思われた。発達した大脳。哺乳類のものに酷似した肝臓やじん臓。これらはあきらかに哺乳類のものと同等なはたらきを示すものとみられた。

しかし、その体全体の形態、筋肉配置は魚類としてもっとも完成されたものであった。

もっとも驚いたことには、背から後半身にかけて非常に発達した複雑な発電組織を持っていることであった。

そして、その胸びれは、陸上動物の前肢としての機能を示すようになる変化の発達過程をあらわしていた。

これは全く新らしい未知の動物であった。魚類から両棲類、爬虫類をとび越えて、いっきょに哺乳類への爆発的進化の途上にある畸形的産物といえた。

調査が進展するにつれて、これは幼魚ではあるまいか、という疑念が濃くなってきた。脊椎骨、顎骨などあきらかに幼魚としての特性が認められたのだ。

と、すると、親がいるのだ！

どこに？

幼魚でさえ一メートル半もあるのだ。成魚だったら、どのくらいの大きさなのだろうか？

魚体をとり囲んだ人々は黙って顔を見合わせた。不気味な沈黙はすき間風のように、人々の心を吹きぬけていった。

うち続く太平洋岸の魚群全滅事件、今夏頻発した海水浴場での溺死事件。さらには《黒潮丸》の遭難と、その捜索にあたった哨戒機の不時着事故、それら一連のできごとが、この奇妙な魚類の存在とどこかで結びついているのではないだろうか？——それは今や確信となって皆の胸にふくれあがってきた。

これまでたがいに何の関係もないと思われてきた幾つかの事件が、ゆっくりと一本の糸の上につながりはじめた。そしてそこから、もうろうと何かとほうもなく巨大な、おそろしいものの姿が形をなしてきつつあった。

それから一週間後、《綜合対策調査委員会》が九月も終りに近いある夜、あわただしい雰囲気のうちに、その第一回目の会合が日比谷の『漁業クラブ』で開かれた。

その広壮な大会議場の煌々たる照明の下にならんだのは、調査委員会のリーダーとして、世界的魚類学者、稲富伊三郎博士。筋肉生理学の権威、西方秀夫博士。海洋学の新田良夫博士をはじめとする数名の学界の最高頭脳団。そして運輸省の船舶事故調査官として幾多の遭

難事件を扱ってきた斉藤好郎技官。航空自衛隊の航空救難隊司令の山本忠夫二佐。広範囲な災害救助対策研究家として知られた建設省の田中文吉技官等、異色ある顔ぶれがそろっていた。そしてその末席に三川裕三と村上広治が上体をこわばらせてつらなっていた。

三川は、溺死事件について最初から貴重な資料を集め、また彼自身が神経に対する電流刺激の研究者であるところから西方博士のすいせんでオブザーバーとして委員会附を命ぜられたのだった。また村上は特異な経路から、こんちにちの事態を予測し得たごく少数の人々のあることを知ってその追求、調査にかかっているという理由で、やはり委員会特別調査部門の一人として招かれたのだった。

二人はたがいに気まずそうに視線の合うのを避けつづけていた。あの、上野駅での出会いが、二人の胸にまだうっ積したしこりを残していた。しかし、こうしてこの委員会の席に肩をならべてみると、しだいに相手の力量がいやおうなしに認識されてくるのだった。強敵を目の前にしたおそれと不安が、やがて相手に対する尊敬の念に変っているのはどうしようもなかった。

第七章

台風が近いのか、風が強くなってきた。窓から見える夜ふけの海は暗く、白い波頭が牙の

ようにおどっていた。煙草の煙ははげしく乱れて窓の外へ吹きちぎれてゆく。三川は一本の煙草を長いことかかって吸った。

東京からいったんもどった三川は、資料を整理してふたたび、明日の朝早く、診療所を離れなければならなかった。

思いがけなかった村上との出会い。しかも協力し合わなければならないはめになった人間関係の皮肉さ。邦子をめぐる村上との争いの困難さ。そして、あの奇妙な魚の登場によって急転回をみせはじめた多くの事件。三川はようやくよどんできた泥のような疲労に、深い息を吐いた。もう午前一時になろうとしていた。

短かくなった煙草を灰皿に押しつぶし、窓を閉めようとして、暗い夜の海に、ちら、と邦子の白い笑顔を想い浮べたが、彼は頭をふって、それを無理にむこうへ押しやった。

突然、廊下の奥でたまぎる悲鳴がはしった。三川は眉根を寄せてドアを押し開いた。あわい電燈の光の下で、看護婦の礼子が痴呆のように窓にしがみついていた。

「どうした？」

三川はその礼子のかたわらに立って、彼女が顔を向けている暗い窓外に目を向けた。

暗い闇のむこうに真青に光る海が見えた。

うち寄せる波は百千の火花を散らした。

三川は看護婦の体を押しのけ、窓から体をのり出した。

真青な海から、何かおそろしく巨大なものが姿を現わしはじめた。浜に引きあげてあった漁船が、荷雷にあったように一瞬、火柱を噴いて燃え上った。

浜一帯の空気が青く光りはじめた。三川の頭髪は小さな火花を散らしてちりちりとさか立った。

三川は部屋へかけもどると、整理しておいたカルテや、ノートを手早くスーツケースにつめこむとそれをかかえて廊下へ出た。

遠く近く、人々の悲鳴や絶叫が嵐のように聞えていた。

電燈が消えた。電球は火花を発してこなごなにくだけ散った。家のこわれる音と地響きがしだいにはっきりと聞えてきた。窓から暗い空にはためく紅い光が見えた。火災がおきたらしかった。その赤い光の中に、廊下から庭へ走り出してゆく看護婦の礼子の後姿が影画のように浮き出して見えた。

三川は診療室から手術用の大きなゴム布を持ち出した。廊下から庭へおり、木立の間へうずくまった。

ひどく生臭い匂いが、むっと顔を包んだ。三川はゴム布を頭からかぶって大地にしがみついた。診療所の建物がめりめりと崩れはじめ、大きな大きな頭が暗い中空にあらわれてきた。

三川が気づいた時、最初に目を射たのは、つねに変らない明るい朝の光だった。無意識に

身を起しかけて三川はひどい目まいと頭痛にふたたび意識がかすれかかった。
「しっかりしろ！　もう少し横になっていたほうがいい。手当はすんでる。なあに、軽い電撃を受けたらしいんだ。ゆうべ」
聞き覚えのある声が頭の上からふってきた。それで急速に意識がよみがえった。見ると三川の上半身を支えるように抱いている村上の顔があった。
「やあ、君は」
「とうとう奴め、ここを襲った。見ろ！　あのとおりだ」
村上の声につられて、まだ痛む首を回して見ると、崩れ落ちた診療所の残骸のむこうに、一面の真黒な焼跡と、おびただしい材木の破片を浮べた黄褐色の海が見えた。煙が低く波の上を這っていた。その上を何機ものヘリコプターがあわただしく旋回していた。
「ここが襲われているという情報が新聞社のほうに入ったので、すぐヘリコプターで飛んできたんだが、ぼくが来た時はまだ一面の火と煙で、地上の様子もよくわからないほどだった。ようやく着陸してずいぶん君を探したんだが、わからなかったよ。あんな所でゴム布をかぶってねていようとは思わなかったもんでね。でも、無事でよかった」
村上の顔は灰とすすで見るかげもなく汚れ、上衣もズボンもずたずたに裂けていた。その汚れたたくましい手を、三川は黙って握りしめた。
その夜にはじまって、被害はしだいに相模湾から九十九里浜の海岸線一帯にひろがりはじ

めた。城が島、三崎、江の島、馬入川口から反転して、館山、銚子を襲い、犬吠岬の燈台を破壊した。その他、海岸附近の部落、町、小漁港などでは満足な家は一軒も残らないほどの破壊を受けた。山林は燃え、畑は焼土と化し、その煙は積乱雲のように高く高く天にひろがって太平洋上はるかからものぞまれた。夜ともなると、その夜空を焦す火光は、東京からも、関東の奥地からでもはっきりと見ることができた。

目撃者の話を綜合すると、海中からあらわれてくる怪魚の放電力はおそろしい力をもち、電撃を受けた鉄橋でも船舶でも一瞬のうちに焔の塊となって鎔け落ちてしまうということであった。その体の大きさは、魚市場で発見されたものの約百倍におよんでいた。

おそらくこれが成体であろうと思われた。その幼魚の一匹が三陸沖で網にかかったのだ。怪魚は、誰云うともなく《マグラ》と呼ばれた。

今はこの怪物に、東京湾の奥深くにまで入られないようにするのがせいいっぱいだった。臨時国会があわただしく召集され、東京、横浜、千葉を結んで戒厳令がしかれた。東京湾口に幅広く機雷原が設けられ、海上自衛隊の精鋭はその内外に警戒線（ピケット・ライン）を張った。対潜哨戒機は、海鳥の群のように洋上低く哨戒網を張りめぐらせた。関東、信越地区の陸上自衛隊もその全力をもって移動を開始した。地対地ミサイル、大口径砲、大型戦車はすべての道路の優先交通が認められた。

さらに近県からおびただしい数の消防自動車、救急車、レッカー、ブルドーザーなどが動

員された。京浜地区の住民の強制疎開がはじまり、また、食糧、医薬品、建築資材をはじめとするあらゆる物資が、東京の西の郊外に集積された。

京浜、京葉工業地帯から、重要な機材は一時、取外されてこれも関東奥地へと移された。人々の上に不安と焦燥の影はしだいに濃くなっていった。

海上交通は完全に遮断された。

その間にも《マグラ》は大島へ上陸して岡田港を全滅させ、ついで長駆、釜石港を襲った。ふいを襲われた釜石の被害は大きく、市民の半分が火と煙の中で倒れ、約三分の一が行方不明となった。その行方不明となった者は、おそらく《マグラ》に食われたものであろうと思われた。その頃から、《マグラ》は逃げまどう地上の人間を食うことを覚えたらしかった。最初、都市の灯に幻惑されて上陸してくるのであろうと考えられていたが、それが陸上で食物を求めるための上陸へと変ってくるに及んで問題はいよいよ破滅的な深刻さを加えてきたのであった。

伊豆諸島海域から駿河湾、福島県海岸へかけての広大な扇形海域はつねに強力に帯電していた。この海域に不用意に接近したアメリカ巡洋艦は、たちまち弾薬庫の爆発をおこしてわずか数秒で海面から姿を消した。

第八章

《コチラ哨戒機一九一号。城ガ島沖北東七浬ヲ東京湾口ニ向ウ大目標アリ。附近海空域ハ強度ニ帯電シテイル。天候晴。雲量三。月齢十六。風速南十メートル。コチラ哨戒機一九一号。城ガ島沖北東七浬ヲ東京湾口ニ向ウ大目標アリ――》

ひどい空電の中から哨戒機は急を告げていた。その空電のため、レーダーもほとんど用をなさず、洋上遠く張られた警戒網も、ついにこの巨大な目標の接近を許してしまったものとみえた。

艦隊は錨鎖を断ち切って先を争って泊地を出た。夜目にも真白な航跡が乱れた。

早くもつるべうちの砲声が三浦半島の山々にこだました。数十本の魚雷が、扇を開いたように波間を突進していった。艦隊は舷側をぶつけ合うような急激な運動をくりかえしながら突撃を開始した。

そのとき、海も、空も、紫色の閃光に切り裂かれた。海は焔の渦のように輝いた。灼熱した鉄片が流星のように飛び散り、艦橋が、砲塔が、マストが紙のようにちぎれて燃え鎔けた。

勇敢に低空から爆撃針路に入ってきた攻撃機の編隊は爆煙に包まれて吹飛んだ。搭載していた爆弾が誘爆したのだった。

《全速デ離脱セヨ。各艦情況知ラセ。全速デ離脱セヨ》

犠牲の増大を憂えた司令部が必死に艦隊を呼んでいた。

だが火と煙と、そして間断なくはためく紫色の閃光だけがすべてだった。

市街も、海も、タンカーも、岩壁も、見わたすかぎり火に包まれていた。紫色の大閃光が天地を染めるたびに、新たな焔の渦が立ち昇るのだった。消防車も、救急車も戦車も、トラックも、あらゆる物は凄まじい焔をあげて燃えていた。

《マグラ》の通った跡は、燃える市街は圧しつぶされて火も消えた。見わたすかぎりの焔の平原の中に、そこだけ暗い運河のように見えていた。

第九章

その後、《マグラ》は全く消息を絶ってしまった。哨戒機は黒潮の流れに沿って遥かな南方海域にまでその捜索線を伸ばしたが、その所在は杳としてつかめなかった。一部にあるいはこのまま赤道を越えて遠く去ったのではないかという希望的観測も生れてきた。

京浜工業地帯の広大な焼跡もしだいに整理されて早くも復興の活気が動きはじめてきた。人も物も大きく動きはじめた。

もう来ないのだろう。もう二度と現れないのだろう。そんなちまたの声が、かなり確信めいて語られていった。

もう秋も半ばだった。

調査委員会のリーダーである稲富博士は、ふたたび、それもかなり近いうちに《マグラ》が本土を襲いはじめるであろうことを確信していた。

博士は、《マグラ》の行動圏がほとんど東日本の沿岸部に限られていることから、その発生場所を関東、あるいは三陸南方の海域ではないか、と見ていた。そして博士が深く憂えているのは、《マグラ》がかなり強い帰巣性と生活圏に対する防禦本能を持っているということだった。その生活圏に対する防禦本能が、あの強力な放電組織と結びつき、《マグラ》の生活海域への他の動物の侵入を許さない兇暴さとなって現れているのだとの解釈をくだした。

博士は調査委員会の名をもって、なお厳重な監視と警戒を続けるように警告した。

その頃、裏日本のある大工場で、三川の発想になる強力な音響発振器を多量に製造していた。

また、名古屋の航空機会社では、非伝導性の強化プラスチックと合板で造られた大型グライダーが組立列線にならんでいた。

そして、青森県の大湊湾の奥深く、海上自衛隊の原子力潜水艦『はやしお』が、灰色の巨

体を静かな海面に浮べていた。

第十章

「緊急！　緊急！　マグラ、伊豆列島線ニ沿ッテ北上中。伊豆列島線ニ沿ッテ北上中」
「相模湾、東京湾、九十九里浜方面沿岸地区ハ厳重ナ警戒ヲ要ス」

非常警報のサイレンは高く低く鳴り続けた。沿岸の住民たちの避難がはじまった。東京では海沿いの地区から山手へ、人や車がえんえんと続いた。それとは入れ違いに、緑色の戦闘服とヘルメットに身をかためた兵員を満載した陸上自衛隊のトラックが地響きをたてて沿岸地区へ急行した。ガスは止められ、電気も交通関係と病院への配電を除いてすべてストップした。化学消火剤を山のように積んだトラックがあちこちに待機していた。

一時間後、東海道線をはじめ、海岸に沿ったすべての鉄道は緊急業務を除いてすべて運行を停止した。

この頃、急報を受けて大湊湾を抜錨、津軽海峡を通って太平洋へ出ていた原子力潜水艦『はやしお』は、四十ノットの高速で、一路、三陸沖を通過、予想戦場海域へ入った。

村上はカメラを肩に、小型セスナ機の後部座席にもぐりこんだ。東国新聞のマークも鮮やかなセスナ機は爆音も軽やかに多摩川べりの空港を飛び立った。上空から、人間対《マグラ》の死闘をレンズに収めようというのだった。

危険を犯して特種を追う新聞記者の火のような烈しさが、村上の五体を占めていた。

《マグラ》はいよいよまっすぐに、東京を襲うものと判断された。

海上自衛隊の海上兵力は、京浜、京葉工業地帯の沖合に縦陣を作って待機していた。

外殻防衛線は全く新らしい戦法をもって《マグラ》をむかえ撃とうとしていた。

暮色がふかぶかと太平洋の荒波をおおう頃、城が島のレーダーは、大島のはるか西方を高速で移動する大きな目標をとらえた。

ついでそれから五分後、高度一万五千メートルで哨戒中の偵察機は、海面下を高速で東京湾口へ向う《マグラ》を発見した。

「攻撃開始！」

飛電は全軍に飛んだ。

星のない暗い夜がきた。

十八機の大型グライダーは魔鳥のような翼を張って、音もなく《マグラ》の頭上に迫った。

先頭の一機の胴体の下から、黒い小さな物体がばらばらとほうり出された。白いパラシュ

ートが無数のクラゲのように開いて、そのまま海面へ沈んでいった。小さな水煙をあげてつぎつぎと波間に消えてゆく。

二番機がその後を追って、さらにその前方にパラシュートの群を吐き出した。他のグライダーは一団になって、なお旋回を続けた。

突然、海面が小山のように隆起した。つなみのように海水は白く泡立って霧のようにしぶきを散らした。

巨大な頭が、湧き立つ海面を破って高く高く躍り出た。思わず耳をおおうような叫び声が海面にとどろいた。

つぎの瞬間、暗い夜空も、ゆれ動く海面も、紫色の閃光に切り裂かれて灼熱した。それは目にもとまらず縦横に走った。

新らしいパラシュートの群がさらに開いた。

《マグラ》は、周囲から響いてくる異様な音響に、全身の筋肉を緊張させて突進に突進をくりかえした。神経を強烈に刺激するその音は、今や《マグラ》を押し包んで周囲から湧き起っていた。それは恐るべき敵の存在を示していた。一個所を沈黙させれば、もうすでに別な新らしい敵が後方に迫っていた。反転してこれにむかえば、敵は突如として頭上から押しかぶさってきた。

「RuRuRuRuRRRR……」

「ＨＹｕＨＹｕＨＹｕ　ＨｙＨｙＨｙ……」
「Ｐ…ｎ――――ｎ」
《マグラ》は怒りに全身を震わせながら、凄まじい攻撃に攻撃をくりかえした。

海も空もただ紫色だった。空中には数千の電光が走り狂い、水は煮えたぎって、さかまく波は暗い天までとどくばかりだった。

グライダーの編隊は《マグラ》の動きを的確にとらえて、音響発振器の網を張っていった。《マグラ》の強烈な電撃も、非伝導性の物質で造られ、燃料も積んでいないグライダーでは何の危険もなかった。目くらむ電光の中を、グライダー群は純白に輝きながらゆっくりと旋回を続けた。

音響発振器がまた大きな輪を描いて《マグラ》を包んだ。

音響発振器――これこそ三川の苦心の産物であると云えた。魚類のもっとも嫌う音波を探り出し、また、かつて築地の魚市場で発見された《マグラ》の幼魚の大脳や神経を調べて、もっともそれに強い興奮を起させる波長の振動を発見して、その音波を機械的に発振させるようにしたものであった。

それを《マグラ》の周囲にばら撒くと、《マグラ》の神経はこの音波に異状な刺激を受け、興奮して猛烈な電撃をくりかえすのだ。

いたずらに強烈な放電をくりかえした《マグラ》は電力を消耗して、ただの巨大な魚になってしまう。その《マグラ》がまだ体力を回復しないうちに、とどめをさそうという三川の作戦であった。

それは、南米のアマゾン川の流域地方に住む人々は、この大河をわたるさいには電気ウナギの襲撃を恐れて先ず、もう役に立たなくなった馬や牛を川に追いこみ、それに向って放電をくりかえした電気ウナギが疲労して電力を消耗するのを待って川をわたる、という話をヒントにして得たものであった。

ようやく《マグラ》は疲れてきた。皮膚の下の強靭な発電組織の毛細血管は破れて、いたる所に内出血を起していた。

電光もしだいにおとろえていった。

《マグラ》は今は暗黒の波の下を、弾丸のように脱出に移った。

その鼻先へ、発振器は砂利を撒いたように降ってきた。

《マグラ》は急反転してそれを避けながら、残った力をふりしぼって電撃を加えた。弱々しい光が海面を照した。

「《マグラ》犬吠岬東方海面へ離脱中。《マグラ》犬吠岬東方海面へ離脱中」

「発振器ニヨル攻撃ハ成功セリ。発振器ニヨル攻撃ハ成功セリ」

原子力潜水艦『はやしお』は御蔵島の暗い波間をすべり出した。

《マグラ》との接触位置は大島西方の海域であった。水中速力四十ノット。待つほどもなくやがてそのレーダーに遠く巨大な影が映りはじめた。

「魚雷戦用意」

艦長の命令がインターフォンに響きわたった。『はやしお』は《マグラ》の側方から急速に接近していった。

「発射！」

六本の魚雷は《マグラ》めがけて突進した。一瞬、残る力をふりしぼって《マグラ》はこの迫る魚雷群に電撃を加えた。六本の魚雷はひとたまりもなく誘爆した。その衝撃で『はやしお』はぐらぐらとゆれた。

「続けて発射！」

ふたたび六本の魚雷がその針路に散っていった。《マグラ》の周囲の海水が淡く光った。猛烈な震動音がびりびりと『はやしお』の巨大な艦体を震わせた。

「命中！　やったぞ」

思わず全員の口から喜びの叫びが洩れた。

「艦長！《マグラ》ハコチラニ向ッテクル。距離一〇〇〇」

「ちくしょう！　取かじいっぱい、急げ！」

『はやしお』は急速に左へ回りこんだ。
「駄目だ！　艦長」
レーダー室からの絶叫が消えないうちに、
ゴオ――
山が崩れるようなおそろしい衝撃が『はやしお』を貫いた。
艦内の照明が今にも消えんばかりにかぼそく明滅した。衝撃が去ってゆくと、
「原子炉室、異状無し」
「機関室、異状無し」
「潜舵、横舵、異状無し」
「兵員室、異状無し」
健在を告げる報告がはずんだ。巨大な《マグラ》とのすさまじい衝突にも『はやしお』の艦体はリベット一つゆるんでいなかった。
「艦長！　魚雷五発誘爆、一発命中。おそらく致命傷、あるいは相当の重傷と思います。本艦と激突後、運動力を失ない、多量の血液を曳きながら、大島東北方深部に沈下しました」
レーダー室は一瞬の絶望的混乱の中で果した沈着な追跡観測の結果を報じていた。
「よし、調査委員会あてにただちに報告してくれ。特に音響発振器による惑乱戦術は大成功だったということをつけ加えておけ」

『はやしお』は海面に浮上した。

おりから、東の水平線に姿を現した月が青い光を海上に投げた。その月光を受けて、十八機のグライダーの編隊が、怪鳥のように輝きながら遠ざかっていった。

海面はもう何事もなく、茫々たる金波、銀波が幻のようにひろがっているばかりだった。

ようやく戦いは終った。東京も横浜も、海沿いの小都市も村も、焼跡の整理にたいへんだった。見わたすかぎりの焼野原、瓦れきの原には、救急車やダンプカー、レッカーなどが、所せましと停車し、右往左往する人々は足の踏み場もなかった。救援の物資を配給するトラックの周りでは、もう子供たちがはしゃいでいた。

焼け跡の石壁に貼られた新聞の片すみに、行方不明になった新聞記者の記事が小さく載っていたが、それを注意して読む者など誰もいなかった。おびただしい死者と負傷者を見たあとでは、一人の人間の死などに誰も関心を払う者はいなかった。

それは、取材のため、セスナ機で海上に飛び出したまま、ついに帰らなかった一人の男について簡単に記されていた。

あの、東北の恐山、さわやかな風わたる夜にはじまって、一つの特種を追い続けてきた精悍な一人の男の、それがとむらいの記事であった。

崩れ落ちたビルの残骸が岩壁を埋めつくしている焼跡の一角に立って、三川も邦子も黙っ

て汚れた海を見ていた。しばらくして邦子が云った。
「三川さん、どうしてあんなものが現れてきたんでしょう？」
「ぼくは、日本海溝に棄てた原子力発電所の放射能灰のせいだと思う。灰を入れた鉛の箱がこわれるかどうかして、その周囲の海水が汚染され、それが今深海底流でしだいに拡散しているんじゃないかと思う」
「じゃ、また、出てくるかしら？」
「さあ、何とも云えない」
「どうしてあの、おしんさんはこんなことになるのがわかっていたのかしら？」
「世の中にはほんとうに未来を予知できる人がいるんだろうね。おしんさんも、その一人だったんだろう」
「村上さんも、とうとうあのおしんさんのこと、記事にしなかったわね」
「すべてが終ってから、と思ったんだろうね。でも、おしんさんには、その方がよかったかもしれない。また、たくさんの人たちがおしかけて、おしん婆さんにいろいろしつっこく聞いたり、調べたりしようとするだろうからね」
「三川さんはこれからどうなさるの？」
邦子はふいに話題を変えた。
「またあの診療所へもどるよ。もしかしたら一生、あそこにいるかもしれない」

「そう」

二人はそれぞれの気持を抱いて鉛色の汚れた水面を見やった。

貨物船のウインチの音が間断なく響き、焼跡のむこうを黄色のブルドーザーが一列になって動いていった。

日本漂流

——長篇のためのプロット。デテイルを想像してお読み下さい。

小松左京

長野県M町——

この千曲川ぞいの古戦場川中島の近くにある小さな町が、最近かくも日本国中に有名になってしまった原因は——もはやいうまでもあるまい。この町が、最近数年間、毎日ひっきりなしに大小の地震におそわれ、中には震度五をこえる強震までまじっており、町の人々は戦々兢々、小学校では常に退避訓練をおこたらず、いつの日か、千曲川大地震がおこるのではないかと、周辺の上田、長野などの大都市もおびえ、それがやがて、富士火山帯大地震説、関東大地震説ととめどもなく発展していって、日本全体に、漠然たる不安をよどませていったためであった。

これによって、国内に地震に対する関心が急に高まり、その関心を背景に、地震観測予報研究のための国家予算を獲得することができたのは、地震学界にとって、まことに御同慶の

いたりだったが——関心が高まろうが、ニュース種がふえて報道陣がよろこぼうが、地震予報研究の予算がつこうが、肝心のM町の地震そのものはいっこうにおさまらず、原因もわからなければ、先行きどうなるかということもまるでわからなかった。

「とにかく、ボーリングをやって見よう」

という話が、もち上がったのは、それからまもなくだった。

M町の地震は、ごくかぎられた地域内に影響のおよぶ、局地性の浅発地震で、震源はごく浅く、観測の結果からすれば、M町の地下、わずか五キロメートルぐらいの所に震源がある。

ごぞんじだろうが、地震の震源というのは、いっぱんに地下六〇キロメートルより浅い所にある浅発性震源、六〇キロメートルから三〇〇キロメートルぐらいまでに分布する中発性震源、三〇〇キロメートル以下の深い所にある深発性震源とわかれているが、被害の大きいのは浅発性地震で、影響範囲のひろいのは、深発性である。——ちなみに、日本列島は、太平洋側の、いわゆる外側地震帯の地震による被害が大きいのだが、この震源は地下百キロメートルまでの浅い所にプロットされ、日本列島の下をくぐって大陸側にちかづくにしたがって、震源は深くなり、ついに大陸塊の下にもぐりこんで、地下七〇〇キロぐらいの深所にまでおよぶ。

しかし、M町のように、浅い震源で、それもひっきりなしに地震をおこしている例はめずらしかった。——いったい、なぜこんなに、のべつまくなしに震動がおこるのかわからない。

統計してみると、月の満ちかけと震発瀕度とがかなりよく一致している所から、学者の中には、M町の地下五キロメートルぐらいの所にマグマ塊があって、それが月の引力による潮汐作用によって、ふくれたりちぢんだりするのだろう、という説を出すものもいたが、なにさま、地面の下を見たわけではないので、本当かどうかわからなかった。

そこで——

「震源部まで、ボーリングをやって、錐(ビット)を地下五キロまでおろして見よう」というプランがもちあがったわけである。「とにかく、そのマグマとやらが、あるかどうかしらべて見ようじゃないか」

この計画に対して、不安の声もあがった。

「もしほんとうにマグマがあって、そいつが地上にふき出してきたらどうするか？」

という、半可通な意見から、

「いや、そんなことをしたら、きっと何か、たたりがあるにちがいねえ」

という迷信めいた声まで、反応はさまざまながら、地元では何となくこの計画に、気のりしない空気であった。——第一、もしかりに、地震の原因がわかった所で、学者はよろこぶだろうが、それで地震がやむわけでもあるまい。それに、もし万一この計画によって、おかしなことにでもなったら、その被害をうけるのは地元民である。

しかし、学者の方は、探究心にもえて、どしどし計画をすすめていった。——M町の草原

の一角に、ボーリング用の櫓がくまれ、長い鋼管が何本もはこびこまれた。五キロといえば、かなりな距離であり、タクシーでいっても三百円以上かかる。しかし、最近のボーリング技術はかなりすすんでおり、石油井戸などは、地下八キロから十キロ以上におよぶものさえある。——まもなく、作業がはじまり、櫓の上ではモーターがブンブンうなり、粘土と石鹸のまざった掘削泥水は、ゴボゴボ音をたてて穴にあふれ、タングステン・カーバイドの錐（ビット）は、歯をむき出して岩層にかみついた。——百メートル、二百メートル、と、最新式のターボドリルは、M町の地下にくいこんでいった。

——太いパイプは、次々とつぎたされ、その延長はやがて四キロメートルをこえようとしていた。

「もうじき、震源深度だが……」と技師は、掘削泥水の温度をはかりながらいった。「地下の温度は、あまりあがってないな」

「ねえ、いったい、この地下に何があるんでしょうかね？」労務者の一人は、櫓のそばからふりかえっていった。「ほんとうにその、マグマてえやつが……」

そこまでいった時、ふと労務者は口をつぐんだ。

ドリルの回転が、急に上がりはじめた。

「監督さん！」と労務者は叫んだ。「なんだか知らないが、穴の底がぬけたみたいに、やわらかい地層につきあたりましたぜ。ひょっとして、そのマグマとかってやつにぶちあたった

んじゃ……」

次の瞬間、技師も労務者、まっさおになって立ちすくんだ。

——大地の底から、ぐうっとせり上がるような、うす気味の悪い、動揺が湧き上がってきたのだ。

「来た！」と技師は叫んだ。「ロータリーをとめろ！　地震だぞ！　パイプが折れるぞ……」

その声は、作業場附近にまきおこった、大勢の悲鳴にかき消された。「櫓をはなれろ！」と誰かが叫んでいた。「電源を切るんだ！」ビシッと何かが折れる音がした。ひびのはいったパイプから高圧泥水が猛烈な勢いで噴出してきて、横にいた労務者のヘルメットをはじきとばした。配電盤がボンと音をたてて火と煙をふき出し、何かがガラガラと音をたてた。

「危い！　たおれるぞ！」と、誰かが金切り声をあげた。

ボーリング櫓が、人々の上にぐらっとのしかかってきた。——だが、その時は立ってにげられないほど、大地はゆれていた。まるで大波のようにうねり、足下の地面が、蠟のように、とけくずれるかと思われた。ゴオッ！　という地鳴りが天地をみたし、空にわき上がった鉛色の雲と山々との間に、何度もすさまじい電光が走った。——あたりには、声にもならぬ阿鼻叫喚がみち、今までの地震にもちこたえたM町の建物が、紙細工のように次々とたおれ、もうもうたる土ぼこりの中に、うすく火事の煙もたちのぼりはじめた。

「あッ、あれを見ろ！」こんな中に、さらに魂消るような叫びがきこえた。「山が……山が

くずれる」

たしかに——星のような雲が、渦まき乱れとぶ暗い空を背景に、M町の東にそびえる、吾妻、白根の峰々、また西方飛騨山脈、燕、烏帽子、鹿島槍の諸峰の頂きが、スローモーション映画のように、ゆるゆるとこぼたれ、くずれ折れるのがのぞまれた……。

まさにその瞬間——M町のみならず、日本全土は、震度五乃至六の、すさまじい強震烈震におそわれたのである。

この様な事態はまさに有史以来、未曾有のことであった。北は北海道から南は九州のはてまで、長さ二千キロにわたる日本列島は、その全長にわたって、あまねくすさまじい大地の震動とうねりに見まわれ、新幹線はもとより、鉄道はことごとくストップし、ハイウエイはあちこちでくずれおち、各地の空港で、いままさに離陸着陸しようとしていた航空機は、次々に大地にたたきつけられ、火を吹いた。

「危険！——日本列島全土にわたって、大地震がおそいつつあり、接近中の航空機船舶は、ただちにひきかえせ！」

警報はとび、電波は悲鳴をあげた。——しかし、数分間後、日本列島から発せられる一切の電波はとだえた。——大都会では、高層建築が、家屋が、次々に倒壊し、火の手はいたる所にあがった。堤がきれ、山くずれがおき、人々は争ってのがれた。

次に海岸地帯をおそったのは、いうまでもなく大津波だった。

——内湾地帯は破滅状態になり、何万トンという大汽船が陸にうちあげられ、港湾はほとんどつかえなくなった。船舶の日本寄港は、緊急警報によって一時中止された。——この一瞬に、日本は何兆円という被害をこうむり、全人口の一割に近い人々が死んだ。しかもこの後、ひきつづき微震はひっきりなしに日本全土をふるわせ、それに日に何回もの強震がおそいかかった。つまり、日本全体が、あのM町みたいに——いやそれ以上にひどい震動に、のべつまくなしにおそわれることになったのである。——このため災害救助は停滞し、人々は集団ヒステリーをおこしかけた。しかし、機敏な国民のこととて強震の合間をぬって、ようやく一部で事態に対処する動きがおこりはじめた。

そんなころ、本州最北端の、下北半島大間崎、津軽半島竜飛崎附近の山に、津波をおそれて逃げこんでいた連中の一人が、ふと北方の海上を見て、ヒェー！　とたまげるような奇声を発した。

「あ、あ、あ……」その男は、眼を見はり、口をポカンとあけて、紙の様にまっ白になった顔をふるわせながら、かすれた声でさけんだ。

「あ、あれ、あれ見い……ほ、北海道が……」

たしかに——津波の余波か、まだはげしく波立ちさわぐ鉛色の津軽海峡の彼方、水平線に黒々とうかぶ北海道松前半島の山々が——なおもふるえつづける大地に立って、凍りつくように立ちすくんでいる人々の眼前で、見る見るうちに、遠ざかりつつあるのだった。——見

れば、津軽海峡に、天地もとどろく轟音あげて、巨大な渦がいくつもまきおこり、すさまじく泡だち荒れくるう海面の上には、やがて歯をむく白い泡の帯を長くのこす水尾のあとがくっきりあらわれて……。

「ひゃァ、たまげた！」誰かが、キイキイ声でわめいた。「見、見ろ！　日本が、動き出しただ！」

その同じ時刻――九州西南海岸一帯は、天を摩す大津波におそいかかられていた。天草灘にもり上がる、高さ二百メートルの大波は、有明海、八代海沿岸をあっという間にひとのみにし、薩摩半島は水没し、内陸部におそいかかった波は、南は霧島山系にせかれて日向灘へとぬけ、北は筑紫の野をぬって、周防灘へと奔騰した。

さよう――まさにこの時、一九××年×月×日午前×時×分……

北海道をのぞいて本州、四国、九州諸島からなる、長さ千数百キロメートルの日本列島は、全身をビリビリとせん動させ、時折り東北地方を大きくうねらせ、九州で波をかきわけながら、ゆっくりと南方洋上にむかって、泳ぎ出したのであった。――最初は徐々に、やがて次第にスピードをあげ、北緯三〇度の線をこえるころには、時速十五ノットの快速で、一路赤道にむかい、波濤をけたててばく進しつつあった。

「日本漂流開始！」の報は、全世界を茫然自失、抱腹絶倒せしめたことはいうまでもない。時に、その進路にあたる南方諸島、――小笠原、マリアナ、カロリン諸島に、数多くの基地

をもつアメリカの動顚ぶりはひどかった。折しも第七艦隊は、トンキン湾での洋上作戦をおえて、グァム、サイパン方面へ帰投しつつある時であり、ハワイの極東軍司令部は、偵察機によって日本列島の進路を確認するとともに、すでに北緯十一度、東経百三十五度附近に達していた機動部隊に、急遽マニラへ進路変更するよう、緊急指令を発した。

「いったい全体、また何だって……」と太平洋艦隊司令長官は、モリエールの芝居の登場人物のごとく叫んだ。「日本が泳ぎ出したりするんだ？——こんなバカな話があって、たまるものか！」

たしかに、あの巨大な日本列島が、泳ぎ出す、などということは、現代科学の常識では考えられないことだった。——全世界の科学者は、あるいは自失し、あるいは失禁し、あるいは気がちがったようになり、呆然としてなす所を知らず、新聞社のインタビューに答えて「日本のことだから、日本の学者が解明すべきだ。何しろ、日本は地震学については世界で一番進んでいるのだから」といった、お粗末な答えをする始末だった。

——しかし、当の日本国内は、ひきつづく大地の震動と大津波のため、原因をしらべるどころではなく、都市は放棄され、人々は小高い所にむらがり、かろうじて働く無電は、ただひたすらに、ＨＥＬＰ！　ＳＯＳ！　と全世界にむかってよびかけるばかりだった。救出したいと思っても、地震のため航空機は発着できず、全沿岸をあらう津波——つまり、漂流にともなっておこる波浪のため船舶さえもちかづけず、かろうじて、求めに応じて、救援物資

を空中から投下するぐらいだった。

まったくこの事件は、地質学の常識をはるかにこえたものだった。あるものは巨大な地すべりだといい、あるものは、いやちがう、といった。――しかし、次にはいった報告は、単に地学のみならず、科学全般の常識をこえたような真相をもたらした。

すなわち――

日本列島近辺海中で、通常待機の任務についていたアメリカのポラリス原子力潜水艦〝フーリッシュ・パワー〟号は、たまたま水中レーダーおよび水中遠距離テレビでもって、ただよい行く日本列島を、水中数キロの距離で長時間観測した。――その報告によれば、日本列島の下には、はしからはしまでわたる、巨大な黒いものの影があり、それには、四肢ないしはひれらしいものがついていて、それがゆらめきながら水をかくのが目撃されたというのである！

「やっぱり！」そのニュースを無電で傍受した、日本の学者たちは、ヒステリーのように興奮しながら叫んだ。「するとやっぱり！――あの伝説は本当だったのか？　日本の地下には巨大なナマズがいて、それが身をふるわすので地震が起こるといういいつたえは！」

「おそらくM町のあたりには、ナマズの背びれの先か何かがあったんだ」と別の学者はいった。「それを、ボーリングで刺激したから、奴はとうとう眼をさましたんだ」

ふたたび世界中は、ひっくりかえるようなさわぎになった。――そもそも、こんなに巨大

な生物が、存在し得るであろうか？　長さ千数百キロにおよび、地底に何億年と眠りつづけることのできるような生物が……。

しかし、それが現に、眼の前に存在するとなれば、どうしようもなかった。存在しているのだから、存在し得る理由は、大急ぎで別に考えなければならない。

学者たちが、大急ぎで観察し、大急ぎで推論したのは、こうであった。——日本列島は、もともと大地の底からはえていたのではなく、地底に横たわった、この巨大なナマズ様生物の上に、土砂が堆積してできあがったものである。さればこそ、日本列島は、地図に見るように、「竜」にそっくりの恰好をしていたのであろう。頭部は、ほぼ九州中部附近にあり、北海道はどうやらその生物の排泄物であるらしい。

しからば、この生物はいったい何か？

学者は口角泡をとばし、あるいは日本特産大サンショウウオの巨大化したものである、といい、あるものはナマズに類する魚のでっかいのであるといい、またあるものは恐竜のたぐいで、九州阿蘇の噴火口がその呼吸孔にあたり、中部富士火山帯のそれは、きっとオナラを出す穴であろうといった。——けだし、大地の下に、火を噴く竜がいる、という古代の伝説は、おそらく古代人が、この事実を目撃した記憶によるものであろう、云々。

またあるものは、これこそインド古代伝説に出てくる「大地をのせたカメ」——中国にわたって、尻尾が蛇のカメで玄武岩の名のおこりとなった、「玄武」そのものであろうといっ

た。

甲論乙駁するうちに、誰かが勝手にこの怪物に〝アルキウルトラギガントナマザウルス・ニッポニクス〟というもっともらしい名前をつけてしまい、これがいつの間にか通り名になった。――意訳すれば「超超特大日本ナマズ竜」といった所か。そのほか「日本列島ナマズ」という名もよくつかわれた。とにかく、ナマズ類似の形態をもった生物であることはたしからしかった。――移動開始と同時に、奄美、沖縄など南西諸島もいっしょにひきずりはじめた所を見ると、どうやらヒゲもあるらしく、もう一本のヒゲはどうなったか知らないが、ひょっとすると、切れたのかも知れない。それにしても――

ああ！　何と雄大にして怪奇な生物であることか！

ニッポン・ナマズ竜！

はしからはしまで二千キロにおよび、三十万平方キロの国土と、一億の人口をその背にのせたこの怪獣にくらべれば、凡百の怪獣映画に登場する「何とかラ」という名のついた怪獣どもの、いかにスケールが小さく、チャチであることよ！――彼らコッパ怪獣のごとく、あえて人間をおそったりせず、背中にはえたコケのごとき国土や人間や文明は意にも介さず、ただ悠々と大洋を泳ぎ行くさまは、メルヴィルの「白鯨（モウビィ・デイック）」よりはるかに雄大で、はるかにノンシャランであり、まさに「大地のごとく」巨大な器量を感じさせるものがある。

とはいえ、この眠りからさめた日本ナマズ竜の泳ぎ行く、行く手の島々には、一大恐慌が

おこったのはいうまでもない。マーシャル、カロリンはあっという間にのみこまれ、つづいてニューギニアが危険にさらされそうになった。――やがてはオーストラリアがおそわれるであろうという予測から、何とか日本の南進をくいとめようと、英連邦のオーストラリア、イギリス、ニューギニア西アリアンをおさめるオランダ、さらに南方海域に特殊な利害をもつアメリカ、いにしえのよしみと、南方の華僑の権益擁護から顔をつらねた台湾の中華民国の諸国が「新・ＡＢＣＤ包囲陣」を結成してこれをむかえうとうということになった。

しかし、いかにしてこの巨大なナマズ竜の進撃をくいとめるか？

艦砲射撃によっても、ジュウタン爆撃によっても、あるいは本土上陸を敢行しても、表土は焦土となっても、肝心のナマズ竜にはちっともこたえるまい。となれば、メガトン級の水爆をぶちこむよりしかたがあるまいが――

という話をきいた日本国民は、上を下への大さわぎになり、今度ばかりは、政府も人民も一致して、朝野をあげて「原水爆絶対反対！」の大デモンストレーションを開始した。

そのほかヨーロッパでも、反対の声があがり、やむを得ず、今度は「撒き餌作戦」に出て、捕鯨条約に特例をもうけてもらい、南氷洋から大いそぎで、何十頭ものクジラを原子力空母ではこび、日本列島の鼻先におくと、――

今度はきいた。ナマズ竜は、鯨を次々とのみこみ、次第にその進路を南西にかえ、南太平洋の方へ出てきた。――してやったりと、原子力空母が離脱しようとすると、クジラの臭気

がしみついていたのであろう。日本列島は、たちまち波頭をけたて、三十ノットのスピードであとを追っかけてくる。パナマへにげこもうとした空母は悲鳴をあげて、救けをもとめたが、今度は中南米諸国が、一致して大反対をもとめたので、アメリカ大統領は、やむを得ず、空母に南氷洋へ日本列島を誘導するよう指示した。

かくてインド洋を悠々と泳ぎわたった日本列島は、空母のあとをおって、喜望峰に南下し、ここでまんまとまかれてしまい、今度は大西洋側にまわりこんで、ブラブラと北上を開始したので、今度はヨーロッパ、アフリカが大さわぎをはじめた。

ジブラルタルなどに首をつっこまれちゃ大変だというので、大いそぎでここに電流を流し、勢子をやとってさわぎたてると、日本列島ナマズは、うまい具合にビスケー湾沖を北上し、今度はドーバー海峡に九州の一部と南西諸島、をガッチリはめこんでしまった。

あれよあれよという間に、日本列島ナマズは身ぶるいして、ドーバーにはまりこんだヒゲ——沖縄諸島をひきちぎった。

そのままノコノコとフランスにはいのぼり、上を下への大恐慌をきたしているヨーロッパの上で、しばらく腰をおちつけ、それからまた東へむかって行進を開始、モスクワに進軍し、シベリアを横ぎり、ついにまたシベリア東北端に達するころに冬が来た。——日本国民は、気候の激変にたえかねて、途中で逃げ出すものもいたが、それでも三分の一は故郷をすてるにしのびず、しがみついたままはこばれて行った。ついにチュコト半島に達した日本列島が、

そこで北極圏の寒気に冬眠をはじめ、ベーリング海峡にはまりこんだまま、また動かなくなってしまい、日本がついにかつての願いのごとく、「東西のかけ橋」と化したくだりは——またあらためてくわしく語る機会もあろう。まずは、大冒険珍奇談「日本漂流」冒頭のお粗末である。——おかえりはこちら。

レッドキングの復讐

井上雅彦

気がつくと、暗い静かな空間の中に、ぼくはうつぶせになっていた。
体の重みでつぶされそうな鼻は、埃(ほこり)独特の匂いにまみれている。
子供の頃、学校の体育館の隅のひんやりした空間で、跳び箱の横に積んであったマットの上に、うつぶせに寝た時かいだ匂い。
しかし、あの時は、この暑さはなかった。
微熱にも似た、ここちよい暑さ。
ふきだした汗が、からだの柔かいところにたまっていく。
まるで、なにかの胎内にいるようだった。
手足を動かそうとする。なぜか手足が重たい。どうやら、とてもぶ厚いふとんのようなものに、くるまれているようだった。

そして、汗の流れていく様子がわかるのだが、そのふとんのようなものの中にいる自分は裸であるらしかった。

そのまま、ごろごろ転がってみる。べたべたした汗で、埃が裸のからだにまとわりつくようだ。ふとんのようなものだと思ったが、もしかすると堆積した埃の層なのかもしれない。だいぶ転がったところで、ぼくは、ふと動きを止めた。

誰かが、ぼくをみつめているような気がしたのだ。

ぼくは目を凝らした。気のせいか……。誰もいなかったが、暗さに慣れてきたぼくの網膜に、この静かな空間の様子が見えてきた。

高い天井といい、埃だらけの床といい、そして畏ろしいほどがらんとした広い空間といい、はからずも最初に思ったのと同じように、学校の体育館と極めて類似していた。

バスケット・ボールのゴールが無いところを見ると、体育館ではなく、講堂なのかも知れない。独特の匂いが、この静けさによくマッチしていた。

ぼくが寝ていたのは、やはり隅の用具置き場らしかった。

ところで……ぼくは、どうしてこんなところにいるのだろう。

ここに来てから、どれだけの時間が経過したのだろうか。

この全身を被っているものが、ふとんほどの厚さに堆積した塵芥の層だとすると……。

近くの壁に、鏡が嵌めこまれていた。

ぼくは、なかなか決心がつかなかった。
見るべきだろうか。
自分が誰なのか。今のぼくは、思い出したくないのに、違いなかった。
いつまでも、この懐かしい微熱のまどろみの中に、どろりと澱んでいたかった。
しかし……。奇妙な予感もする。
昔の自分など、思い出さなくてすむのかも知れない。
鏡の中には、今までの自分とは、違う役割が待っているかもしれないではないか。
ぼくは、重たいからだを、起こした。
今の自分を見ることにしたのだ。
大量の汗が、全身の柔かい場所を、通過していく。
鏡の前に立ち、目を凝らしてその姿を見た時、汗はかなり急激に冷えていき、粟のような鳥肌が、ぞろぞろぞろと立っていくのを、ぼくは感じた。
鏡の中には、醜い、しかしみごとな均整を持った獣が、映っていたのだ。
石段のような皮膚。ゴリラに似た全身の骨格と筋肉。だが逞しい肩の上からは馬のように長い首が伸びている。男根を連想させる造形の頸部の先端には亀頭のごとき頭部が連結し、どこか人間の髑髏を思わせる不気味な表情をたたえているのである。
見紛うはずはなかった。あれは……鏡に映っている獣は、レッドキングだ。

すると、ぼくは……。

奇怪な想像が、脳裏を駆けめぐる。

事故の後、いつの間にか自分の脳をゴリラの肉体に移植されてしまった映画評論家。外国の短編小説でそんな話を読んだことがある。

まさか、それと同じように……。

レッドキング。あの悪名高い怪力の「どくろ怪獣」……。

レッドキング。昭和四十一年の特撮テレビ映画『ウルトラマン』に初めて登場して以来他の怪獣たちとともに、ぼくの心の奥底に棲みついてしまった国産のモンスター……。

いや、今となっては、逆なのか。

ぼくの心の中にレッドキングが棲んでいるのではなく、レッドキングの心の中に、ぼくが棲みついてしまったのか。

流れていたのは、ぼくの汗ではなかったのだ。あれは、たぶんレッドキングの血液だったのだ。そして重たく絡みついていた埃の層は、レッドキングの肉の内壁の、おそらく海綿体状の組織か。

ぼくは、愕きの声をあげた。

もちろん人間の声ではない。

昔、『ウルトラマン』の怪獣の鳴き声がB面にはいっているソノシートで、繰り返し聞い

たレッドキングの吼え声だ。

レッドキング……。ぼくは、レッドキングを、ひき受けてしまったのだ。

しかし、ぼくはこの新しい役割を演じられるだろうか。この新しい肉体のことを、どれだけ知ってるというのか。

レッドキング……。ぼくらの世代なら、その名を知らないやつはいない。だが、怪獣マニアの間でも、意外と謎の部分の多い怪獣ではなかっただろうか。

そもそも、その名の由来はどこにあるのか。ＲＥＤ・ＫＩＮＧ？　帝王（キング）のイメージはあるが、ボディの色はにぶい金色で、赤とはほど遠いではないか。血まみれの怪獣王というような意味だろうか。

どういう種族の怪獣なのだろう。

既成の動物の突然変異？　でもなさそうだ。

宇宙怪獣？　にしては、芸がない。

では恐竜の一種か。結局、そういうことで落ちつくのだろうか。ゴモラザウルスのように明確な血統書を持っていないのは残念だが。

何を食べるのか。レッドキングの肉体を持ったぼくにとっては、いささか切実な質問事項だ。発達した牙など、機能的には肉食獣だ。しかし過去のフィルムでは、ひき裂いたチャンドラーの片腕をはじめ、ドラコやピグモンなど殺した怪獣の死体を食べるシーンは無かった

はずだ。そのかわり水爆を呑み込むエピソードがあった。これとて、ウラン怪獣ガボラのように常食にしているわけではなく、たんに悪食なだけなのだろう。

……まあ、いいさ。

食欲など、本能にねざしたものは、そのうちにわかる時がくるはずだ。肉体の衝動にまかせてふるまえばいい。

——と、考えていた、その時。

ふと、また気配を感じた。誰かが、見ている……。

今度は、まちがいない。何物かが、この空間にいる。

怪獣のからだが、野性の血が、それを教えてくれている。

全身を被っている環状の筋肉が、戦いに備えて、みしみしと縮みだす。蛇腹のような頸部の筋肉をのべつ動かしながら、獲物に全神経を集中させていく。

自信のない役者のような、人間としてのぼくの意識は、一滴のこらず怪獣の内部の襞に吸いとられ、ぼくは、力と自信に満ちあふれたレッドキングになっていく。

獲物の気配は、さっきまでぼくが眠っていた場所の近く、隅の物置きのようなところから放射されていた。ぼくは敏捷に行動していた。頭をふりたて前進していったぼくは、頸部をスウィングさせ、からだを回転させると長くて強い尾の先で、気配の方向をひと打ちした。

折りたたみ椅子のバリケードが、がらがらと崩れおちた。

だが、獲物はうまく身を翻し、暗闇の中に消えていく。
なかなか、やるじゃないか。
だが今度は、逃げきれるかな。
全身の蛇腹を動かしながら、ぼくは、今の肉体のここちよさを感じていた。そう……有史以前から、自分が自分であったという、存在感。祖先の呼び声。そうだ……ぼくの祖先は、この獣なのだ。レッドキングは、ブラウン管という水鏡に映し出された祖先の霊。そうなのだ。レッドキングは闘うためだけに生まれてきた軍神なのだ。
複数の怪獣が同時に出現し、三十分の放送時間が、個々の怪獣の特長の説明よりも、その対決シーンにほとんどが費やされるというバトルロイヤル的設定の中にのみ、レッドキングは登場した。常に最後まで生き残る闘いの神として。
地底怪獣だの電気怪獣だのという、生物分類学風の名称など、持ちあわせているはずがない。
「どくろ怪獣レッドキング」というのは、軍神のリングネームなのだ。
どくろの覆面をした血まみれの帝王……。
相手を摑まえ、いたぶり、倒すことだけが軍神の目的であり、機能であり、快楽なのだ。
ぼくの肉体、レッドキングの本能は、今、自分の獲物を見つけだした。
そいつは、ぶるぶる震えている。だが、それは、見せかけだけだ。

ぼくは吼え声をあびせた。そいつは、はげしい悲鳴をあげて、壁にはりついた。なにか哀願するように、わめいている。

そんなポーズにだまされるぼくではない。

そいつの正体はわかっている。ウルトラマンだ。正義の超人ウルトラマン。もちろん、ここに来た目的は……。

ぼくは、まだ悲鳴をあげ続けているそいつの脚を摑んで、ひきずりだした。

まだウルトラマンに変身してはいない。

ウルトラマンの姿にしてやらねばならない。

ほのかに明るい空間の中央までひきずりだして、そいつの偽りのコスチュームを引き裂いてやる。

ドラコの皮膜をむしりとった時よりも手間どったが、相手がもがけばもがくほど、ぼくの狙いを助ける結果になる。体を包んでいた無愛想なコスチュームがはじけると、ぼくの獲物はまぎれもなくスポーティなウルトラマンの姿になった。

バトルロイヤルで最後まで生き残るのも、すべてこの時のためなのだ。有史以前からの定められていたことなのだ。

長い首をふりたて、ぼくは力のかぎりウルトラマンをいためつけた。力では、ウルトラマンが、ぼくにかなうはずはなかった。

おそらく、ウルトラマンも自分をこのように荒々しくあつかってもらいたいのに違いなかった。でなければ、最初からスペシウム光線を使えばいいのだから。

壁に嵌めこまれた鏡がぼくらを映している。

……やがて、ウルトラマンのカラー・タイマーが点滅をはじめた。点滅のインターバルが速くなるにつれ、ぼくの興奮と歓喜もエスカレートしていく。

カラー・タイマーが危険な色を示し、ぼくの悦びの意識も、最後の沸騰点に達していこうとする瞬間。

ぼくの腕の中で、はげしい痙攣がおこった。

ぼくとウルトラマンと、どちらの痙攣なのか、わからなかった。

カラー・タイマーは消えている。

手を離すと、ウルトラマンは、ぐったりと鏡にもたれながら、そのまま、ずるっ……ずるっ……と、崩おれていった。

ぼくも、立ってはいられなかった。

全身が、塩の染みた眼球になったような気持ちがした。波が引いたように、悦びの意識は去っていき、妙に現実的な幻滅感が、嗅覚までも、変えていく。

……ぼくがウルトラマンをいためつけたのではなく、ウルトラマンがぼくを玩んでいたのだろうか……レッドキングが軍神なのならウルトラマンは何だったのだろう……いや……あ

れは、誰だったのか……。

頭の底のほうからは、なにやらいやなものが、わらわらわらと浮かんできそうになった。

ぼくは、あわてて、一声、吼える。

そうだ。レッドキングの雄叫びだ。レッドキングの血液は、まだ熱っぽく流れているのだ。

たとえ、全身の蛇腹が萎えていき、このままゆっくりと崩れていったとしても……。

鏡に浮かんでいた髑髏の顔が霞んでいく。

今は……軍神の眠りが必要なのだ。

眠りに目覚めたそのあとで、次の獲物を探しに行こう。

だが今だけは……こうして、ドロリと澱んでいたいのだ。

この懐かしい、微熱のまどろみの中で。

ゴジラの来迎

もうひとつの科学史

中沢新一

胎生的天使

一九世紀の後半から二〇世紀にかけて、イギリスを中心に数多く出生例の報告された精薄児が「ダウン症」とも「モンゴル児」とも呼ばれたのは、それをひとつの医学症例として確定した医師ラングドン＝ダウンが、これら精薄児のしめすきわだった特徴のうちに、モンゴル民族のそれとのいちじるしい類似をかぎ取ったからである。細くつりあがった目、つき出たほお骨、太いまゆ毛をしたこの精薄児の存在は、まもなく全ヨーロッパで、ロシアで、アメリカで、そして日本や中国でも確認されるようになり、いわゆる文明国の人々に、少なからぬ衝撃を与えることとなった。およそ外見の異なる民族の間に、モンゴル民族そっくりの容貌をした子供が、精薄児という共通の運命を背負って産まれてくるという事実の不気味さがおののきを与えたためである。

その後の研究によって明らかにされたのは、ダウン症児の出生が、妊娠三ヵ月目にはいった母体に起こるショックや感染病などによる異変と、深いつながりを持っているという事実である。妊娠三ヵ月といえば、器官の組織を備えた胎児の身体がかたち作られ始める時期に当たっている。ダウン症はこの器官形成の過程に起こる異変とかかわりがあるというのだ。つまり、器官の萌芽のようなものが寄せ集まったゼラチン状のかたまりである「胚」から、器官組織を備えた胎児ができてくる通常のプロセスに停滞が起こり、民族的特徴や個性の違いをまったく持たないダウン症の子供が産まれてくるのである。

モンゴル児は脳に障害があるわけでもないのに、歩いたり、言葉をしゃべったりできるようになるまでには、正常児の何倍もの時間がかかる。けっして成熟することなく、自我や性欲を獲得することのないままに、たちまちにして老いていくのだ。この愛らしい未熟なからだつきをした「永遠に成熟しない未完成の幼児」たちに、西欧人の多くは恐れをなし、嫌悪を感じたことと思われる。しかしこの時期に、ルドルフ・シュタイナーはモンゴル児こそ「天使性」をたたえた真の人間にもっとも近い存在なのだ、と表明したのである。彼のこの考え方には、たんなる福祉論の枠を大きく越え出ていく、すぐれて現代的な深い思想的意味が込められている。

モンゴル児は、人間が諸民族に分化する以前の元型的な姿をしめしている。しかも彼らは性の相異も自我の観念も知らず、すべての人々にわけへだてなく愛らしい微笑を投げかけて

いく。シュタイナーはそこに「元型人」としての天使のイメージを見出していったのである。器官に分化し組織化されない身体を持ち、自分と他者や男と女を分離させるあらゆる二元論的な意識の働きから自由であるようなモンゴル児こそ、いっさいの存在のくびきから自由である天使にもっとも近しい存在である。彼はそこに生物進化の理想像すら見出そうとしていた。

ダウン症の子供を天使のメタファーで捉えようとするシュタイナーの考えには、彼のいわゆる「オカルト科学」の特徴がはっきりと現われている。彼はそこで、キリスト教の天使論の本質を、ダウン症児問題という現実のなかで捉えなおし、天使論に新しい進化論的な表現を与えようとしていたのである。

確かに、天使論がキリスト教神学のなかで占めている位置はきわめて特異なものである。天使がいるおかげで、キリスト教はかたくなな超越論に陥らずにすんでいるのだ、とさえ言える。それほどに天使は、絶妙の存在様式をしめしている。天使は男でも女でもない。両性具有者である。だがそれは、天使のなかにふたつの性が融合合体しているということを意味しない。天使はふたつの性をともどもに抜き去ってしまうのだ。けれど天使は身体を持ってこの世界に現われてくるのだから、その存在様式はとても奇妙なものになる。つまり天使は存在しているのでも非-存在でもない、存在と非-存在の「間（あわい）」にすべり込んでいくような、精神の運動性のメタファーであると考えられるのだ。キリスト教神学がその天使論から活力

を得ることができるのは、天使の持つこの絶妙の運動性によっている。なぜなら、超越論というのは存在と意味世界の秩序や構造について語ることはできても、天使でもいなければそのような構造を脱出していく運動、つまりは「自由」について明確なイメージを与えることができないからである。

天使は根源的な「自由」のメタファーなのである。したがってこの天使論を進化論的に読みかえたシュタイナーが、性の区別も知らず、自我の意識も持たないダウン症児のなかに、完全な「自由」の実現をめざす生物進化の究極像を投影していった道筋も、充分に納得できるのである。ダウン症児は生物としてけっして劣った未熟児ではなく、もっとも自由な真の人間に近い存在である。この子供たちは、天使と同じように存在と非-存在の「間」のようなところに逃れ出て、この世でもっとも自由な「空-間」をそのプレイ・グラウンドとすることができるからだ。そして自己と他者を区別する意識が少しも浮かんでこないこの「空-間」からは、無限定的な愛の波動が放射されてくる。愛らしいダウン症児の微笑が投げかけられているのは、この博愛のバイブレーションなのである。

こうして彼の「オカルト科学」は、進化論の言葉に翻訳されたキリスト教の天使論をとおして、存在や意味の構造にしばられた意識のあり方からの脱出口や逃走線を探り当てようとしていたのである。

だが、ここで私たちにとって興味があるのは、天使＝ダウン症児のたたえる「自由」とい

うものの本性を、進化論の語彙ではなく（進化論的な表現はシュタイナーの思想を近代思想の枠内に閉じ込めかねない）、もういちど胎生学の言葉で表現してみることの方にある。ダウン症児の出生が、妊娠三ヵ月目にはいった母体における異変によって、器官組織の形成プロセスにさし込まれた停滞に関係があることは、すでに述べた。するとこの医学的事実から、ダウン症児の「天使性」のなかに保存されているものは、胚に内蔵されていた「器官組織にしばられない運動性」につながりがあるのではないか、と考えをすすめてみることもできるだろう。

事実、現代の胎生科学は母親の胎内にあってまだゼラチン状のかたまりにすぎない胚の全体域において、神経組織も器官もまだできていないうちから、活発な運動プロセスがくりかえされていることを明らかにしている。器官が形をなし、ニューロンの神経組織がそれらを相互に結び合わせて「器官的身体」のできる以前から、胚のなかでは、いっさいの器官的結合のエネルギーから解き放たれた自由な運動性が、軽やかで柔らかな律動をたえまなくくりかえしている。しかもこのかそけき運動性は、神経系と器官の組織が整ったのちも、私たちの身体の全領域でたえまのない蠢動をつづけているのだけれど、「器官的身体」にはもうその精妙な律動を聴き取ることができなくなってしまう。ノーマルな身体がかたち作られる過程で、「器官を持たない運動性」は分節化や構造化を受け、それによって自我意識や性欲を持って行為する主体の身体ができあがる。そこではもはや胚の全域で活発にうごめいていた

運動性の自由は束縛され、歪められてしまうのだ。

したがって、ルドルフ・シュタイナーがダウン症児の内に見出した「天使性」や「究極の自由」というものを、「器官的身体」の形成過程からの逃走線として捉えかえして見ることもできるだろう。ダウン症児という胎生学的天使たちは、胚に内蔵されていたあの微細で軽やかな運動性のなかに逃れ去っていくことによって、専門的機能を持つ器官に分化し、組織だてられたノーマルな身体にたどりつくことがない。そのおかげでこの子供たちは、意識の自由な流れを歪め、拘束し、言痛き秩序に変えていく存在や意味の世界の手から、すり抜けていくことができるのだ。ダウン症児が「究極の自由」にもっとも近いところにいるのは、そのためである。彼らは粗大な意識が捉えられない、微細な胎生的運動性、バイオ・コスミックな「気」に包まれながら、私たちの方に微笑を投げかけている。シュタイナーの「オカルト科学」はこのような「気」にたどりつこうとしていた。それを実現するために、人間的活動の全領域を巻込みながら、たえず自由な逃走線を描きつづけようとしていた。「オカルト科学」はつねに、この軽やかな逃走線を描いていく（神学的、進化論的、胎生学的）天使のメタファーとともにある。

スキゾ科学／オカルト科学

しかし歴史的なことを問題にすれば、科学者が胚に内蔵された運動性の「天使」ぶりに着

目するようになるのは、彼らが同じ胚のなかにそれとは別のさらに恐ろしい性格を見出し始めるのよりものちのことに属する。科学者はまず胚の持つ「怪物性」の方に注目したのである。

ダーウィンの時代の生物学者は、解剖学的実験をつうじてこの「怪物性」を確認しようとしていた。彼らは実験をつうじて、人間も含めてあらゆる動物の胚には、最終的な生体のかたちに発現してくるもの以外に、多様な形態を発現させ得る萌芽が宿っていることを示そうとした。たとえば発生中の人間の胚の構造変化を調べていくと、その過程に人間の胚は人間以外の動物の形態をつぎつぎに体験していることがわかった。この事実から科学者はただちに「個体発生は系統発生をくりかえす」という進化論的命題をひき出そうとした。だがここで私たちにとって興味深いのは、もっと別のことだ。つまり胚というものが構造体であるよりも、潜在的な多数多様体であるという事実の方が重要である。

胚は多様性への萌芽を潜在力として自らの内に宿している。胚の構造分化の過程に、複雑きわまりない禁止のメカニズムが働いて、多様性の発現をつねに制限し、阻止しつづけることがなかったとしたら、そこにはノーマルな成体形態の代りに、恐るべき多様体の怪物が出現するはずである。個体発生の過程で胚がさまざまな動物の形態を体験するプロセスも、このような禁止のメカニズムのひとつにほかならない。多様性への萌芽を時間軸にそって秩序だてることによって、多様性の同時的発現をはばんでいるからである。

この複雑な禁止のメカニズムに異変が生ずるとき「畸型」が産まれてくる。畸型とは、言うならば、形態分化のプロセスを秩序だてるために、胎児の体内で作動している複雑な方向づけや禁止のメカニズムを逸脱して、多様体の方へ逃れ去っていこうとする脱出線の軌跡を示していることになる。したがって、多くの人々が畸型に対していだくアンビヴァレントな恐れの感情には、方向を定めない突発的な遊走や多様性そのものに対する深い恐れが映し出されている、と考えることができる。

だが、近代自然科学の黎明期にフランシス・ベーコンがいだいていたのは、もっと大胆な思想だった。ベーコンは『学問の進歩』において、怪物と畸型の組織的な研究を提唱した。それは彼が、怪物や畸型をとおして自然がしめす多様体への逸脱のなかに、科学的な発見や技術の発明を可能にする「創造性」の秘密との共通性を見とおしていたためであった。

ベーコンは、自然が天才的職人であると語っている。彼は自然の作品と技術による作品とを同一視し、それによって、それまでたがいに対立するものと考えられてきた自然と技術を横断的に結びつけようとしたが、自然が天才的職人であるという言葉にはもっとおもしろい思想が込められている。つまり、自然と技術の「和解」が実現されるためには、自然は創意あふれる職人のような驚異にみちた産物を作り出し、技術の側はこの自然の驚異をしっかり学び取って、つねに現在の束縛から逃れようとしなければならない、と考えたのだ。技術が自然化され、自然が技術化・職人化しなければならない。双方の側からする逸脱と逃走への

ベクトルがたがいに鼓舞し合うとき、自然と技術の「和解」が実現する。だが、技術的になった自然が造り出すもの、それは怪物であり畸型であり奇跡にほかならない。K・パークとL・J・ダストンは『反-自然の概念――一六・七世紀イギリス・フランスにおける畸型の研究』のなかで、このベーコン流の技術思想の特質について次のように書いている。

自然の作品がより「技術的」になれば、怪物や奇跡は人間による発明を鼓舞するであろう。というのも、「自然のなした驚異から技術における驚異へと移行することはたやすい。なぜならば、ひとたび自然の多様性が捉えられて原因が明らかになれば、まず偶然によって自然が導かれた逸脱に技術を持って自然を導くことは容易だから」(『ノーヴム・オルガノン』)。驚異の歴史と技術の歴史はともに、自然をその極限においてあらわにした。……自然が物質の抵抗や技術の束縛から逃れようと闘うように、自然は技術の新しいモデルとして措定された「超発性」(Pretergeneration) つまり畸型の新形態を身にまとった。

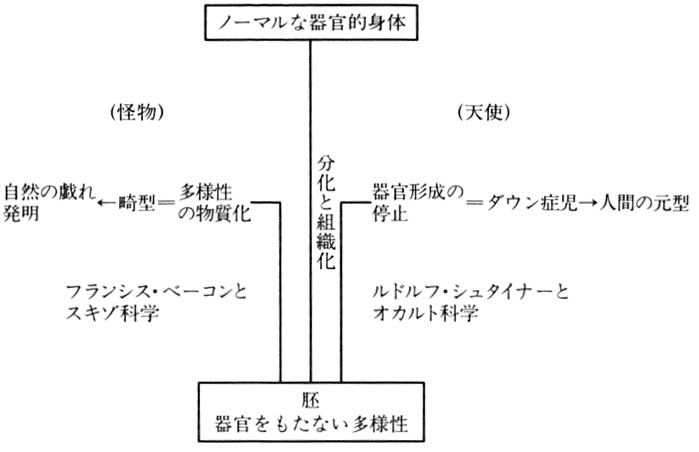
ベーコンは、自然の逸脱はその法則性と同様に自然を露わにするものであるという大衆の考えを認め、怪物やアノマリー(異例)として発現する自然の驚異が内包するものをもかかえ込んだ自然科学を構想していた。その意味では、ベーコン流の科学はドゥルーズ＝ガタリの言う「マイナー科学」としての条件を備えている。ベーコン流の科学もまた、規則正しい

構造的反復ばかりをあつかうのではなく、気まぐれな逸脱、多様性の発現、反復ではない差異の方にたえず関心をむけ、そこから創造へのインスピレーションを得ようとしていたからである。そのため、彼の考えたような科学のあり方は、大衆性を持った「マイナー科学」の否定をめざした一八世紀のアカデミー・フランセーズの主流によって、時代遅れのものとして棄却されたのである。彼らは逸脱よりも統一性の方へ、多様性よりも均質性の方へむかった。そこでは逸脱さえもが分類の対象にされ、知の秩序の方へ回収された。

自然哲学者は、気まぐれな創造力とアノマリーにおける無限の変容よりも、自然の設計の総合的な調和と構造的な反復と自然の過程の規則性に驚嘆した。この一層秩序立った自然の概念は、自然科学への違ったアプローチ――明らかな異常にさえ規則性を見出そうと試みるもの――を命じた。解剖学者と発生学者は、個々の事例をより普遍的なカテゴリーに吸収する、畸型の分類に乗り出した。

（『反-自然の概念』）

畸型を研究したり、雑種交配によって新しい畸型やアノマリーを作り出そうとする実験は、「マイナー科学」の否定とともに旗色が悪くなっていった。パリの国立博物館などは、設立まもない最初の一〇年間、雑種交配実験室を設けて、その成果を楽しげに一般公開していた



天使と怪物＝ふたつの逃走線

のに、当時の館長A・ミルヌエドワールは命令を出し、動物園内に保管されていたすべての混交種動物を破却させ、交配実験室を閉鎖したのである。それ以後、畸型とアノマリーをつうじて「自然の驚異」を研究していこうとするベーコン流「マイナー科学」の理想は、旅興行のサーカスに付属しているサイドショウや移動動物園（メナジェリー）に、細々とその命脈を保つことになる。

しかし、創造的な科学はつねにベーコンとともにある。それはベーコンが「スキゾ（分裂）的」な科学をめざしていたからである。畸型や怪物をめぐる彼の思想をもういちどたどってみよう。怪物やアノマリーは非常に数が少ない。構造的な反復のしめす法則性を逸脱した非日常的なものであり、それは構造的反復ではなく、たえざる差異（ズレ）の生成の方にむかってい

る。だが自然は、こういった差異のジョークや遊びをとおして、多様体としての自らの豊かさをあらわにするのだ。技術的な発明もそれを模倣しなければいけない。たんなる思考の積み重ねや反復によっては、新たな創造が産み出されることはあり得ない。方向を定めずに疾走していく思考、突発的な事故、思いがけない出会い、直感のひらめき、カタストロフ、これらの出来事の持つ畸型性が、技術を多様性の領域に踏み込ませていくのだ。

ベーコンの科学が「スキゾ的」な側面を持っているのは、それが統一性よりも逸脱の方に、構造的反復よりも、自由で気まぐれな差異の方に、一般性よりもアノマリーの方に、より創造的な価値をおこうとしていたためである。その科学はいつでも、怪物的な多様性の領域に踏み込んでいこうとしている。そして、その多様性の領域に統一性をもたらそうとするのではなく、自由な差異がたえまなく産み出されてくる生産の空間に身をまかせていられるだけの怪物的器量を備えた科学。ベーコン流の科学が、今日に至るまで、つねに創造的な科学と技術のかたわらにあるのはそのためだ。

さてここから私たちはもう一度あの「胚」の方に、ノーマルな形態とともに怪物と天使をも産み出す「胚」の方に立ちもどっていくことになる。

胚は「天使性」と「怪物性」をともどもに内蔵している。胚はまずなによりも、さまざまな強度がたえまなく貫いていく柔らかい宇宙卵のようなものである。そこにはいっさいの器官組織による束縛をまぬがれた自由な差異の運動体が、たえまのない律動をくりかえしてい

る。バイオ・コスミックな「気」を呼吸する卵として、胚は天使の持つ軽やかさと自由と霊妙さを備えている。しかし同時に胚は、多数多様な形態の発現を押しあげていくような無数の萌芽を宿している。ここでは胚は潜在的な怪物なのだ。怪物であり天使でもあるようなこの胚から、いっさいの器官的身体の形成が始まる。

宇宙卵のような胚に構造分化や器官の組織化が始まると、それまで自由にそこを貫き流れていたバイオ・コスミックな強度・運動性は拘束され、分節化されたうえで、構造的な組織体のうえに配分されていく。同時にそこでは、複雑な禁止のメカニズムが作動し始め、多様性の発現をめざす無数の萌芽はつみ取られ、発現をおしとどめられる。このような分化や組織化をとおして、ノーマルな「器官的身体」がかたち作られてくる。

したがって、器官形成途上に停滞をさしはさみ永遠の幼形を保つダウン症児と、禁止のメカニズムに生じた異変をついて多様性への萌芽に物質的なかたちを与える畸型は、ちょうど対極的な方向にむかって、この「器官的身体」の形成から逸脱し、逃走していこうとしているのだということがわかる。ダウン症児は、胚の内蔵する天使的な「気」の方に逃走線を描いていく。これに対して畸型は胚に備わった怪物的な「多様性」の方に逃れ去っていこうとしているのだ。

「器官を持たない運動性」であるバイオ・コスミックな「気」にたどりつこうとする「オカルト科学」と、巨大な多様性の領域に踏み込んでいこうとする「スキゾ科学」はこの点で、

興味深い共通点をしめしている。一方が「天使性」の追求にむかい、一方が「怪物性」をめざしているという違いはあっても、両者ともに、不完全で有限化された意識の作り出す存在や意味の世界の束縛をすり抜けて、根源的な自由というものを捉えようとしているからだ。怪物のなかに天使のような純粋さを見たり、天使がどこか捉えどころのない怪物のように思えたりするのも、また創造的な「スキゾ科学」がその創造の核心にオカルティックな要素を備え、「オカルト科学」とドゥルーズの思想などがときとして見分けがつかないように思えるのは、すべてそのことに原因がある。

ランドスケープとしてのゴジラ

ゴジラは昭和二九年にスクリーンに産まれた怪獣である。うち続く太平洋上の水爆実験によって海底の長い眠りをさまされた怪獣が、東京湾奥深く侵入し、首都の中枢部を跡かたもなく破壊していくというゴジラの造型は、当時の人々に新鮮な驚きを与えた。だが、このゴジラはそれから二〇数年もたったというのに私たちをなお魅了しつづけ、何やら不思議な波動を送りつづけている。その秘密を探っていくとき、私たちはゴジラという怪獣のなかに「スキゾ科学」と「オカルト科学」のたぐいまれな結合を見出すことになる。もっとも現代的な可能性を持った知のかたちであるこのふたつの「科学」が結びついていることによって、ゴジラは現代という黙示録的時代の聖獣として不思議な予見にみちた波動を送りつづけてい

る、と思われるのだ。

ゴジラは、巨大な猿でもなければ、たくさんの首をつけたアンゲラスのようなバケモノじみた怪獣でもない。ごくありふれた（古生物学的にみれば）巨大爬虫類であるにすぎない。しかし、ただの巨大爬虫類であるということに、ゴジラの可能性がひそんでいる。

中生代に栄え、信じられないほど巨大な体軀に成長したあげく、その巨大さをもてあましたまま絶滅していったイグアノドンやティラノサウルスをはじめとする巨大爬虫類をめぐる古生物学的研究が、進化論的な近代の博物学に大きな影響を与えたことは、よく知られている。博物学者が見知らぬ生物種を求めて地球の反対側にまで旅をしていくまでもなく、自分の立っている大地の下に無尽蔵の記憶が眠ったままでいるという地質学的考古学的想像力に、巨大爬虫類は実に鮮明なイメージを与えることができた。だがそれ以上に、この絶滅した巨大爬虫類のイメージは大衆的想像力の大脳を、しかもその大脳の古皮質をいたく刺激したのである。

その理由のひとつというのが、巨大爬虫類が怪物や畸型やアノマリーを求めて遊走していこうと身がまえている人間の「スキゾ的想像力」に科学によるリアリティを与えた点にあるのは、言うまでもない。畸型やアノマリーな動物の登場する見世物小屋やサーカスのサイドショウなんかに出入りしてはいけません、と親や先生に言いふくめられている子供たちが、科学の教科書を開きさえすれば、そこにぞくぞくするような巨大爬虫類の怪物的な姿をいく

らでも見ることができるのである。巨大爬虫類たちは、水棲動物のように分厚くゴツゴツとした岩のような皮膚を持ち（まるでコケでも生えてきそうな湿り気さえ感じる）、陸上動物のしるしである「気」の律動音をたてながら、あたりの植物をなぎたおしては進んでいく、怪物の新しい「科学的な」イメージを創り出したわけである。

巨大さというのは多様性の一形態である。巨大さはそれを前にした言葉の力を圧倒してしまう。言語的意識が息を飲んだその一瞬を捉えて、多様性の領域に踏み込んでいこうと身がまえている「スキゾ的」な意識の遊走性が浮上してくるのである。巨大爬虫類は、まさに巨大な爬虫類であることにおいて（爬虫類は大衆的な動物分類学のなかで、もともとアノマリーな位置にある）、怪物をめざす「スキゾ的」精神運動に、確かな「よりまし」を与えてきたのである。

けれど、巨大爬虫類には、もうひとつ別の重要な性質がひそんでいる。つまり巨大爬虫類は巨大な「未熟性」「幼児性」を感じさせるのだ。彼らは前肢が未発達なために、立ちあがったときのその姿は、歩き始めたばかりの幼児を連想させる。おまけに腰のあたりの曲線のなんと愛らしいことか。彼らがしずしずと不器用に進んでいくさまは、私たちの内になんともいえないおいしい感情を呼びさますのである。その感情は未熟なダウン症児の体つきに、嫌悪どころかいとおしい感情を呼びさまされると語ったシュタイナー的感受性と、ごく近しいところにある（ほかの動物のなかでは、とくに熊がこういうイメージをかきたてる。民話やサーカスで、

熊はもっとも愛らしい動物のひとつとなっている。熊の立ちあがった姿がどこか「幼児性」を感じさせることがなかったとしたら、あの荒々しい性質の熊がこんな人気物にはならなかったはずである)。

おまけに、巨大爬虫類の無表情ぶりは、彼らの知能の低さを物語っている。けれど逆に言えば、その無表情には、彼らが知能とか自我意識とかを超出した、バイオ・コスミックな「気」のようなものさえ感知できるのである。ようするに巨大爬虫類はつねに、シュタイナーの言う「天使的な幼児性」や「永遠の未成熟性」を背負っているのだ。

巨大爬虫類には、怪物と天使にそれぞれむかおうとする意識のふたつの逃走線をひとつに収斂させていくところがある。巨大爬虫類は一方で意識が禁止しようとする巨大な多様体へ踏み込んでいこうとする怪物への逃走線をしめし、一方では無垢の輝きをたたえながら、存在と意味と自我意識の世界からすり抜けていこうとする天使への逃走線を内蔵している。

しかもこの怪物＝天使はすでに地球上から絶滅した生物種である。ネバーランドの住人のように巨大爬虫類はそれだけですでに存在世界からの永遠の逃走者でいることができるのだ。巨大爬虫類が大脳の古皮質を刺激するのは、そのためである。意識の運動の速度における差異を大脳内のトポロジーとして空間化したい人は、したがって巨大爬虫類の棲み家を、自我意識のトポスであると考えられた大脳表層部に考えることはできないことになる。事実、ポール・マクリーンのようなヴィジョナリーな生物学者などは、人間の大脳古皮質の一部に

「爬虫類脳」の一部が残存しているという魅力的な仮説をたてている。

ゴジラが「スキゾ科学」と「オカルト科学」を結びつけるようなすぐれて現代的な怪獣として創造されたのは、ゴジラがただの巨大爬虫類であったことと深く関係している。ゴジラは巨大な多様体であることによって、破壊性を持った怪物である。けれど、今日のぬいぐるみ怪獣すべての原型でもあるゴジラには、未成熟な幼児性も充分に備わっている。禁止のメカニズムを突破って多様体の方に逃れ去っていこうとする「スキゾ的」衝動と、自我の意識も性の区別も持たないままに（ゴジラにはミニラという子供がいるが、果して、映画のゴジラはオスなのだろうかメスなのだろうか）自由で軽やかで天使的なバイオ・コスミックの「気」にひたっているような「オカルト性」とが、ゴジラのなかではたくみに同居しているのである。

ゴジラは、けっして社会とか文化とか秩序とかいうものにたどりつくことのないたえざる逃走の運動線をしめしている。そのため、ゴジラによる東京の大破壊はニューヨークにおけるキング・コングのひと暴れとはまったく趣きを異にする黙示録的な荘厳さ、暗さを備えることになっている。

南海のネバーランドに住む原住民から聖獣としてあがめられていたキング・コングは、最初から自然の力のメタファーとして描かれていた。知能が高くて、女好きでもある。キング・コングのニューヨークへの登場は、地理的な「周縁」から連れてこられた「自然」の力の、文化的秩序に対する侵犯を意味していた。キング・コングは文化／自然、秩序／暴力、

中心／周縁のような説話的二元論の構図を前提にし、その構図のなかで大騒ぎをひき起こす大猿なのだ。そのため不思議なことに、コングの侵入によってニューヨークの住人たちがいくら恐れおののくふりをして見せようと、背景にあるニューヨークの都市自体は、少しも動揺していないように感じられる。あわれな大猿は摩天楼に追いつめられ、空軍の銃撃によって地上に落下していく。キング・コングの物語には、攪乱分子を取り込みながら、たえず「ツリー状」の都市の想像的秩序を更新していこうとする、古典的都市論が反映されている。

だがゴジラの東京破壊には、このような二元論的構図を感じ取ることができないのだ。ゴジラはその巨大な体と、口から吐き出す放射熱線によって防衛網をつぎつぎと突破して荘厳に（ほとんど音もなくと言った方がよいだろう。最近では大友克洋の『童夢』がこういう荘厳な都市破壊のイメージをあざやかにしめしてくれた）破壊し尽くしていくのである。そこでは、何か異質な力が都市に侵入し、それによって都市の秩序が重大な攪乱を受けていく、という感じがあまりない。都市が何物かによって破壊されていくというより、都市自らがゴジラを「よりまし」にしながら自分の本性をあらわにしめしているようにさえ思える。文化と自然、秩序と暴力、法と欲望の二元論的構図を背景にする「ツリー状」の都市ではなく、たえざる流動性や自己解体を原動力にする都市のメタファーが、ゴジラによるその破壊にほかならない。いやゴジラそのものが、明治以来なん回も根こそぎにされ、たえざる生成と変化をとげる抽象空間として、けっして永続する都市という構造感覚を与えることのなかった東京とい

う都市そのもののメタファーであるようにさえ思えるのである。

キング・コングは明らかに都市に対する異物の侵入を象徴していた。しかし、ゴジラに関するかぎり、その荘厳な都市破壊をつかまえて「ゴジラの来襲」と呼ぶのはあまりふさわしくないように思える。ゴジラは都市の異物ではなく、都市の潜在的な「ランドスケープ（景観）」なのだ。だからゴジラは来襲するのではなく、黙示録的な暗さを背負いながら都市に来迎すると言った方が、ふさわしい。

黙示録時代の聖獣

ゴジラは海底からよみがえった太古の巨大爬虫類である。そのめざめは核爆発によって誘発された。このことはゴジラをたんなる巨大爬虫類以上のものにする大きな意味をはらんでいる。

それは核兵器がすぐれて「スキゾ的」な現代科学のもたらした成果にほかならないからである。言うまでもなく、核兵器は巨大加速器（シンクロトロン）による原子核破壊の実験と深い結びつきを持つ核物理学を理論的な背景にしている。巨大加速器は原子核を破壊し、核をまとめあげている結合エネルギーを解き放つ。そのとき結合エネルギーから解き放たれた素粒子の自由で軽やかで「スキゾ的」な運動を観察すれば量子力学が産まれてくるし、原子核の解体によって放出された莫大な結合エネルギーを利用するとき、核兵器が産まれる。し

たがって核兵器がすぐれて「スキゾ的」なのは、それが対象の解体をめざす大規模な戦争機械であるためばかりではなく、まったく「スキゾ的」な科学思考から産まれてきたものでもあるからだ。

海底に眠るゴジラをめざめさせたのが核爆発ならば、それによって莫大な放射エネルギーを吸収したゴジラ自身、きわめて「スキゾ科学」的生物となって、地上に出現するのである。そればかりではない。科学のマッドネスの産出とも言えるゴジラを破壊できる唯一の兵器が、マッド・サイエンティストの風貌を持つ芹沢博士の発明になる「オキシジェンデストロイヤー」である、という点もすこぶる興味深いことなのだ。「オキシジェンデストロイヤー」は一瞬にして水中の酸素を破壊する兵器であり、ゴジラはこの兵器によって芹沢博士ともども海底に没していくのである。

ゴジラのめざめ、東京上陸、大破壊、そして「オキシジェンデストロイヤー」によるゴジラ自身の破壊。映画『ゴジラ』は全編にわたって救いのない解体のテーマに貫かれているわけだ。巨大爬虫類の持つ怪物性、オカルト性に合わせて、ゴジラは現実の「スキゾ科学」のはらむ解体性を飲み込みながら、いっそう現代的な存在となっている。核兵器による世界の全面解体という黙示録的ビジョンとゴジラの存在自体が、ここでは重なり合っている。東京の破壊でさえ、その黙示録的ビジョンのひとつのメタファーにすぎないのかも知れない。

だが、ほんとうに重要なことはそこにはないのかも知れない。私たちの感性のすみずみま

でこの黙示録的ビジョンをしのび込ませ、ゴジラの気息にするどく感応していくような現代の感受性をもたらしているのは、ことによると核兵器などではないかも知れないのである。おそらくは、私たちが日々そのなかを生き、それに合わせて自分たちの感性と思考のあり方をかたち作っている現代の資本主義こそ、このような黙示録的ビジョンをささえているシステムなのである。

現代の資本主義は、ドゥルーズとガタリが『アンチ・エディプス』などのなかでしめしてみせたように、きわめて「スキゾ的」な特性を持つシステムである。それは一口で言えば、統一とか構造とかコスモロジーとかに基づいてこの世界を完成させようとすることを永遠に不可能にする。資本主義は根源的な「構造批判」のシステムなのだ。そこには世界をささえる安定したメタ・レヴェルを認めない。このシステムをささえているのは、統一や構造的反復や静的秩序などではなく、たえざる循環運動、たえざる前進にほかならない。資本主義は永久に成熟ということを否定しようとしている。したがって、このような時代に的確に感応し、その運動に自ら同調し得る言説のスタイルは、無矛盾的な形式論理に基づく命題の体系ではなく、不均衡な運動性を自らのうちに内蔵した「スキゾ科学」的なものでなければならない。

資本主義システム自体が、統一された世界の身体とか、構造的秩序に基づく安定を否定し、世界そのものを「スキゾ的」な未成熟性、怪物性において捉えることを要求しているのであ

る。そのためこの熱いシステムのなかを生きている私たち自身、たえざる不均衡、たえざる循環運動、たえざる解体をかかえ、全面解体への予感をひめながら、永遠の未成熟のままに前進しなければならないという黙示録的ビジョンを、多かれ少なかれ身につけている。だから、核兵器は私たちの存在様式そのもののメタファーにほかならない。

「スキゾ科学」と「オカルト科学」こそがこのような時代を捉え得るためのもっともふさわしい知のあり方であり、ひょっとしたらこの悪夢のような循環運動からも逃れ出ていくことを可能にするかも知れないもっとも尖鋭な現代知の意識を反映しているのは、そのためである。「スキゾ科学」と「オカルト科学」もまた、言説の秩序による世界の全体的な把握、主体の統一性、形式化の完成、自我意識の安定などといったものから、たえず逃れ去っていこうとしている。しかもそれだけではなく、資本主義システムがかい間見せるだけで、自らはけっしてそれにたどりついていくことのできない、巨大な多様性（ニーチェ）や微細に律動するバイオ・コスミックな「気」に踏み込んでいく可能性さえひめている。

こんにちゴジラが、子供たちばかりでなく（子供はその存在自体が「スキゾ的」だ）、多くのミュージシャンやアーティストたちに不思議なインスピレーションの波動を送り始めているのは、そのためである。「スキゾ科学」と「オカルト科学」にむかう精神の運動をひとつに収斂させるたくみさを持ったゴジラ。

ゴジラは救いようのない「暗さ」をたたえた怪獣であるが、その「暗さ」はひょっとした

ら、たえまなく律動をつづけ、無限の多様性を内蔵したこの「宇宙の胚」にぎっしりとつまったまばゆい光へとつながっている闇をしめしているのかも知れない。

参考文献

荒俣宏編『世界神秘学辞典』（平河出版社）の「シュタイナーとダウン症候群」の項
K・パークとL・J・ダストン「反-自然の概念」（『思想』一九八二年一一月号）
ブーイサック『サーカス』（せりか書房）

巻末エッセイ　思い出の「マグラ！」

光瀬　龍

ＳＦマガジンの編集長の福島正実さんに「東宝では『ゴジラ』の成功に気をよくし、『ゴジラ』のあとをつぐ新しいＳＦ映画を模索している。ついては、ＳＦマガジンにその原作ともなるべき作品を掲載したいから、光瀬さん、ぜひ考えてほしい」と言われて、私は頭をかかえた。

『ゴジラ』という映画はたしかに面白かったし、画期的ではあったが、私の頭の中では、しょせんこの手の映画は『キングコング』の二番煎じであり、Ｂ級どころかＣ級スペクタクルに過ぎないという評価を下していたから、その後塵を拝する映画の原作を書くということに、少なからぬ抵抗を感じたのであった。もう一つ、その頃、私は宇宙を舞台にした短篇の連作のようなものをほとんど毎月書いていたから、怪獣小説というのは心理的にも異和感が強かった。

だが、福島さんの要請は執拗であり、強硬だった。何か理由がありそうだった。

ま、しょうがねえ。書くか。

で、始めてはみたものの、これが意外と難物だった。何しろ『ゴジラ』のあとを受けるのだから主人公は『ゴジラ』と同じように、あるいはそれ以上に巨大でなければならないだろう。それを考えると今さらゾウやカバでもないし、大蛇や大ミミズでもないだろう。巨大なカエルやカタツムリ（候補ではあった）も今一つ迫力を欠く。意表を衝くにはどうしたらよいだろうか？　この場合、とんでもないものであることが最大の条件だ。つまり存在するはずのないものや、あらわれるはずのないものだ。

そこで巨大な魚が陸上へ上って来たらどうなるだろうか？　という発想がわいた。と言うとまともだが、実はその時、目に入ったのが、築地の魚河岸にマグロが大量に入荷したというテレビのニュースだった。

うん。これこれ。そうときまればストーリーはたちどころに出来た。

注文通り百二十枚に仕上った。題名はまことに素直に「マグラ！」。

これはそもそも『ゴジラ』というネーミングが、ゴリラよりも強く、クジラよりも大きいという意味を持つといわれていたので、こちらもそれに従ったというわけだ。

この「マグラ！」はＳＦマガジンの一九六三年八月の臨時増刊号に掲載された。

東宝の新しいSF映画として、福島さんの原作になる『マタンゴ』が封切られた。『ゴジラ』とは路線を異にした、怪奇映画に近いものだったが、これはこれで面白かった。

私の「マグラ！」は〝第二席〟だったということで、原稿料とは別に賞金五万円をもらった。コンテストそのものの内容、応募数が何十本だったかとか、選考委員は誰々とか、二次、三次の選考に残った作品にはどのようなものがあったかとか、そのようなことはいっさい伝ってこなかった。もしかしたら、そんなコンテストなどなかったのかもしれない、とあとになっては思うほどだった。

私の作品を好んで読んで下さる読者からは、思った通り悪評さくさくだった。何でこんなものを書いたのか、とおおいに顰蹙を買った。

当時、SFに求められたものは文学性であり、哲学性だった。キノコやマグロなどのグルメ性ではなかったのだ。今度、河出書房新社の《怪獣文学大全》に収録の話があった時、一瞬、ためらいの思いが胸をよぎった。若い頃同人誌に書いた習作を発見されたような気分だった。出来の悪い子は可愛いという親心が、何となく分るようなこの一作ではあります。

収録作品解説

東　雅夫

ハリウッド版ゴジラは、予想どおり、われわれの慣れ親しんだ「ゴジラ」とは、似て非なる代物だった。

別にそのことを非難しているわけでも、貶しているわけでもない。

生物感あふれる造形といい、ことさらに俊敏さを強調した挙動といい、これはこれで、CG特撮時代のありうべき巨大生物映画の姿ではあろう。

だが、しかし――

これは「怪獣」ではない。

高度経済成長期へと向かう日本の山河を揺るがし、夜の大都会を紅蓮の炎で彩った、あの幻想的で、ときには黙示録的でさえある巨大な存在とは、似て非なるものなのだ。

ここにひとつの証言がある。

「こっちもその時『向こうのやつはどんなのか見ようよ』って見たの。その時の感想は、『勝った』と。なぜかと言うと、あの『原子怪獣』というのは全部コマ撮りでしょ。だから動きは非常にいい。ところが、怪獣そのものの全体の動きが、犬なんですよ。チョコチョコと動いて、腰はヘッと降ろして尻尾まいてね。犬がオスワリするのと同じなの。だから、本当の怪獣という感じじゃないのね。この怪獣はゴジラの方が勝ったと思ったね。東宝はぬいぐるみだから動きがそういう点でね。それと下手に動物のマネをしなかったのがよかった」（『東宝特撮映画全史』より）

これは、東宝の「ゴジラ」第一作に操演担当スタッフとして参加した中代文雄氏の言葉である。

昭和二十九年、「ゴジラ」公開に先だって米国産の怪獣映画「原子怪獣現わる」が封切られた。右はそれを観ての感想なのだが、文中の「コマ撮り」を「CG」に、「犬」を「イグアナ」に差し替えれば、これはそのままハリウッド版ゴジラにも当てはまる評言なのではなかろうか。いっけん何気ない指摘に思えるが、ここには極めて重大な「怪獣」をめぐる彼我の認識の差異が認められるのである。

「本当の怪獣という感じじゃない」「下手に動物のマネをしなかったのがよかった」……そ

う、東宝版「ゴジラ」のスタッフにとって、怪獣とは、実在する動物とは根本的に異なる存在であると認識されていたフシがあるのだ！

これは「ジュラシック・パーク」等でもおなじみの、リアルな生物感を最重要視するハリウッド流演出とは、おそらく対極に立つ発想だろう。

そう思って、改めて「ゴジラ」第一作を観なおしてみると、意外なことに気づく。

品川沖から上陸して都心を蹂躙するゴジラの挙動に、リアルな生物感など、実は欠片もなかったのではあるまいか!?

炎上する銀座界隈を悠然と移動する、その荘厳とも形容すべき姿を見て、私はゆくりなくも能楽におけるシテ（能役者）の動き――橋掛かりから舞台正面へしずしずと進み出る、様式的でシンボリックな所作を思い浮かべてしまった。

これはあながち突飛な連想ではなかろう。

神霊や妖怪、亡霊や異人――要するに異界からのマレビトがつかのま人の形をとって舞台上に顕現し、舞い納めた後に立ち去る……呪術的芸能としての能の構造は、数多の怪獣ドラマのそれと酷似しているのであるから。

「怪獣」という言葉を辞書で引くと、「正体不明の不思議な獣」などといった説明がなされている場合が多い。要するに、たんなる「ＵＭＡ」（未確認動物）である。

昭和二十九年十一月三日、水界より到来した巨獣が「神の火」を放射して帝都を火の海と

化した瞬間から、われわれ日本人にとって「怪獣」とは、言葉本来の意味を超えた、超越的・神話的存在に変貌を遂げたのではなかろうか。

本書は、右に述べたような意味での「怪獣」――英語であれば大文字で表記されるべき存在としての「怪獣」と日本文学との遭遇の跡をたどるアンソロジーである。

以下、個々の収録作品について手短かに触れておきたい。

「ゴジラ」の来る夜　武田泰淳

当時の知識人が、ゴジラ映画に何を幻視(み)ていたのかを如実に示す、本書の巻頭になにより相応しい一篇。

本篇を「『黙示録』を漫画に書いたとでもいうような趣きのある小説」と評した江藤淳は、続けて「この作品にあらわれているような巨大な幻想は、作者が近代日本文学の小説をしばりつけているリアリズムの枠を踏みやぶっていなければ生まれるものではない」とも述べている。

戦後文学の巨人・泰淳には、キング・コング、ゴジラ、アンギラスといった映画の怪獣のネーミングに感心する無邪気な一面があったらしい。もっともこれは作者だけに限ったことではなく、この時期たとえば、あの三島由紀夫と日本画壇の大御所・東山魁夷が、往復書簡

形式のエッセイ（『美術手帖』昭和三十三年十一月号掲載）で、互いの「怪獣嗜好」を大真面目で礼讃するような微笑ましい光景が繰り広げられたりもしていたのである。

発光妖精とモスラ　中村真一郎・福永武彦・堀田善衛

昭和三十六年、映画「モスラ」原作として発表されたリレー形式の珍品。

ゴジラと並ぶ東宝怪獣スターの大看板であり、しばしば「夢の怪獣」などとも形容される巨蛾モスラが、マチネ・ポエティクの詩的夢想によって育まれた存在であるとは、それ自体がいたってファンタスティックな出来事であるといえよう。

「モスラ」第一作における幼虫の渋谷進撃シーンの悪夢めいた迫力や、「モスラ対ゴジラ」冒頭の巨大卵出現シーンに、シュルレアリスム絵画に通じるセンス・オヴ・ワンダーを見いだして面白がっていた編者など、本篇が横田順彌氏の手で初復刻（徳間書店版『戦後初期日本ＳＦベスト集成』）されたとき、さてこそ、と膝を打ったものだ。

なお、筑摩書房版『発光妖精とモスラ』所収の中村真一郎による「あとがき――回想「モスラ」」によれば、「変形譚（メタモルフォーズ）」という着想は中村の、ロマンスの味つけは福永の、ヒューマニズムの主題は堀田の、それぞれ発案になるものとか。

闇の声　Ｗ・Ｈ・ホジスン（大門一男訳）

十九世紀英国生まれの怪奇小説家ウィリアム・ホープ・ホジスンの作品が本書に紛れ込んでいることを、あるいは不審に思われる向きもあろう。

昭和三十六年八月、『SFマガジン』の夏期臨時増刊〈怪奇・恐怖特集号〉に訳載された本篇（原題は The Voice in the Night で、一九〇七年、米国の「ブルー・ブック・マガジン」に発表）は二年後、同誌編集長であった福島正実の手で巧みに翻案され、次に掲げる「マタンゴ」に生まれ変わったのである！

なお、海洋ホラーの名手として鳴らしたホジスンには、本篇の他にも、水棲怪獣の恐怖を描いた多くの名作佳品がある。

マタンゴ　福島正実

ゴジラやモスラが東宝怪獣映画の表の顔とすれば、「ガス人間第1号」をはじめとする初期の「変身人間」シリーズや「フランケンシュタイン」連作などは、さしずめ裏の顔――怪獣映画のダークサイドを体現する作品群といえよう。その極北として、今なおカルト的な人気を誇るのが「マタンゴ」である。本篇は、星新一と共に同映画の原案提供者となった作者の手になるもの。

小松崎茂によるデザイン決定稿を見ると、マタンゴの原イメージが、原爆のキノコ雲（！）だったことが窺われる。なるほど、それを摂取したものを否応なく異形と変ずる茸妖

の怪異には、放射能汚染の恐怖を想起せしめるものがあろう。

ちなみに、ゴジラの初期デザインにも、やはり原子雲をモチーフにしたものがあった。ゴジラとマタンゴ――東宝モンスターの中でも最も対照的な両者は、「核の恐怖」に懐胎された異貌の双生児なのかも知れない。

『SFマガジン』の初代編集長として日本SFの確立に尽力した福島正実は、無限反復する悪夢を思わせる現実崩壊感覚に満ちたSFホラーの名手でもあった。その特質は本篇にも十全に活かされており、たんなる翻案を越えたオリジナリティを随所に感じさせる。

マタンゴを喰ったな／更にマタンゴを喰ったな　橋本治

目からウロコ落ちまくりの抱腹絶倒なファルスである。とりわけ冒頭――「マタンゴを喰った人間はマタンゴになるという。誰が名付けたのかは知らないが、これは史上最強の生き物である」という書き出しなど、島崎藤村『夜明け前』のそれに勝るとも劣らない名文ではあるまいか!?

「放射能」から「エイズ」へ。

マタンゴ幻想は、同時代の強迫観念を貪欲に摂り込みつつ、これからも密かに増殖を続けてゆくのだろう。

マタンゴ　大槻ケンヂ

恐怖のマタンゴ四連発。トドメを刺すのは、幻想と怪奇のロックバンド「筋肉少女帯」の吟遊詩人がタパタパタパと謳いあげるマタンゴ讃歌だ。

楳図かずおの恐怖キャラ、タマミちゃんとマタンゴ――六〇年代キッズに夜ごとの悪夢をもたらした二大モンスター（!?）、夢の競演！

科学小説　花田清輝

最初に触れた「原子怪獣現わる」と「ゴジラ」について、本篇の作者が物騒なことを言っている。

「怪物の動作は、さすがにアメリカ映画のほうが日本映画よりも迫真的であったが、その被害の描写の部分は、かえってこちらのほうがすぐれていた。ハリウッド付近に一発水爆でも落せば、アメリカでも、もっと優秀な『原子怪獣現わる』ができるかもしれない」（「空想科学映画」より）

絢爛たるレトリックと逆説の論理で、戦後文学に孤高の地歩を占めた名エッセイストの面目躍如、といえようか。本篇もまた、「怪獣」草創期の時代&思潮の空気を如実に伝える好エッセイである。

「その文体」と「その思想」は、昭和三十四年、探偵小説雑誌『宝石』の七月号と九月号に

「S・F時評」として掲載された（「その限界」のみ『キネマ旬報』掲載）。『SFマガジン』の創刊が同年十二月。してみると、本篇は日本で最初期に書かれたSF時評といえるかも知れない。その口開けに「「ゴジラ」の来る夜」が選ばれたのは、偶然とはいえ「怪獣」と日本SFの浅からぬ関係を暗示しているかのようで興味深い。

なお作者は、原水爆の脅威をテーマとする絵画や文学、映画を論じた「原子時代の芸術」の中でも、ゴジラ映画に言及している。

ガブラ――海は狂っている　香山滋

竹内博氏の執念の編集による三一書房版『香山滋全集』全十五巻が堂々完結した現在、この稀代の幻想博物誌作家を、「ゴジラの原作者」という一語で括るがごとき荒っぽい認識は、さすがに薄れつつあるのではないか。

作者が愛着をこめて描く怪生物たちは、「怪獣」というよりは、UMAに近い存在なのである。

もっとも、だからこそ、恐竜から怪獣へ――という出自を負った「ゴジラ」を物語的に膨らませるにあたり、これほど適任の人物も、またとなかったわけだが……。

白鳥の歌というべき本篇は、放射能汚染によって「パンデモーニアム（お化け集会所）」と化す海洋の恐怖を描いて、いかにも香山流の怪獣小説たりえていたように思われる。

マグラ！　光瀬龍

昭和三十八年八月、『SFマガジン』誌上に発表されて以来、実に四半世紀を経て、今回初めて単行本収録のはこびとなった、本格怪獣小説の隠れた逸品。

恐山のイタコの口寄せなど土俗的雰囲気を濃厚に漂わせながら、大怪獣と人間の白熱の攻防戦をストレートに描く東宝怪獣映画のスタイルに忠実に則った力作である。

それかあらぬか、初出時の扉に「東宝映画化」の文字が躍っていることを、筆者は長らく訝しく思っていたのだが、本書収録にあたり、作者御自身から執筆の経緯を記した書き下ろしエッセイを頂戴して、疑問氷解した。格別の御配慮に謝意を表する次第。

それにしても、当時のSF人脈が東宝怪獣映画にこれほど関わっていたとは、ちょっとした驚きである。

日本漂流　小松左京

『日本沈没』の作者による、これは究極の（!?）怪獣小説。

銀幕からブラウン管へと怪獣たちの棲息地が拡がり、空前の怪獣ブームに列島が湧いた昭和四十二年発表のエッセイ「怪獣ウワキンの登場」で、作者は次のように述べていた。

「怪獣が単なる荒唐無稽、グロテスクにして非現実的な見世物ではなく、――そう思ってい

るのは、凡百の映画評論家、テレビ批評担当者、映像評論家、文芸評論家にすぎません――それは本来、非現実的ではなくて、超現実的な存在であり、抑圧された深い――ある場合はグロテスクな――願望、現実の閉塞状況に対し、人間の下意識の深みからなされるはげしい生命の抗議の叫び、この現実からの脱出、破壊の願望などのシンボルである」

至言といえよう。

レッドキングの復讐　井上雅彦

少年時代、第一次怪獣ブームの洗礼を満身に浴びた世代の先陣を切って、この分野に手を染めたひとりが作者である。代表作品集『異形博覧会』には、本篇の他にも「海魔の吼える夜」というクラーケン・テーマの力作が収められていたし、雑誌『ホラーウェイヴ』の「大怪獣スペシャル」に寄せた最新作「パノラマ」も「ウルQ」テイストあふれる好篇だった。

ちなみに、同誌掲載の津原泰水「幻獣たち」などもそうなのだが、新世代の怪獣小説には、共通して「怪獣変身願望」とでも称すべきものが顕著に認められるように思う。面白い傾向である。

ゴジラの来迎　もうひとつの科学史　中沢新一

昭和五十九年の「ゴジラ」生誕三十周年にあたって、東宝が新作「ゴジラ」制作を発表し

た際の異様な盛り上がりは、おりからの「ニュー・アカデミズム」ブームとあいまって、いま思うと妙に懐かしく、いささか気恥ずかしい。

ニュー・アカの一方の旗手として、論壇に颯爽と登場した作者による本篇は、以後のゴジラ論フィーヴァーの方向性をある意味で決定づけたともいえる洞察に満ちた、イマジナティヴな里程標的エッセイであった。

一九九八年六月

初出一覧

「ゴジラ」の来る夜（武田泰淳）「日本」一九五九年七月号
発光妖精とモスラ（中村真一郎・福永武彦・堀田善衛）「別冊週刊朝日」一九六一年一月号
闇の声（W・H・ホジスン）「SFマガジン」一九六一年夏期臨時増刊号
マタンゴ（福島正実）「笑の泉」一九六三年八月号
マタンゴを喰ったな（橋本治）「EDI」一九八四年九月号
更にマタンゴを喰ったな（橋本治）「EDI」一九八四年十二月号
マタンゴ（大槻ケンヂ）『リンウッド・テラスの心霊フィルム』思潮社　一九九〇年十一月
科学小説（花田清輝）「宝石」一九五九年七月号、九月号、「キネマ旬報」一九五九年十二月一日号
ガブラ――海は狂っている（香山滋）「別冊小説宝石」一九七一年九月号
マグラ！（光瀬龍）「SFマガジン」一九六三年八月臨時増刊号
日本漂流（小松左京）「話の特集」一九六六年八月号
レッドキングの復讐（井上雅彦）「せる」一九八六年夏季号
ゴジラの来迎　もうひとつの科学史（中沢新一）「中央公論」一九八三年十二月号

日本音楽著作権協会(出)許諾第9807330-801号

怪獣文学大全

編者　東　雅夫

一九九八年　七　月二五日　初版印刷
一九九八年　八　月　四　日　初版発行

発行者　清水勝
発行所　河出書房新社
東京都渋谷区千駄ヶ谷二-三二-二
☎〇三-三四〇四-八六一一（編集）
〇三-三四〇四-一二〇一（営業）
振替口座　〇〇一〇〇-七-一〇八〇二

デザイン　粟津潔

印刷・製本　中央精版印刷株式会社

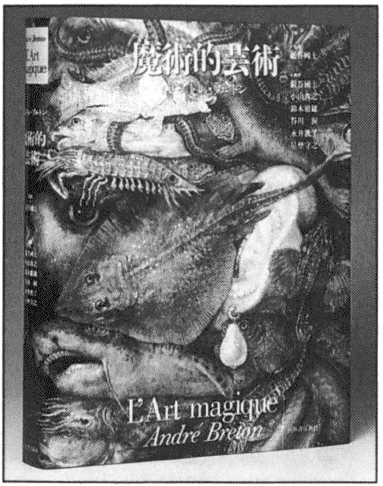
定価はカバーに表示してあります。
落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。
©1998　Printed in Japan
ISBN4-309-40545-2

魔術的芸術

アンドレ・ブルトン

監修◆巌谷國士

翻訳◆巌谷國士・小山尚之・鈴木雅雄
谷川　渥・永井敦子・星埜守之



未知の領域をひらく美術史の革命的転換
シュルレアリスム思想・美学の集大成
今世紀最大の《幻の書物》、待望の完訳
ハイデッカー、バタイユ、レヴィ＝ストロース、マグリットなど総勢76名に及ぶ
驚異の巻末アンケート、完全収録

定価＝本体 28,000 円（税別）
A4 変型判（306 × 238 mm）
392 頁（内カラー 256 頁）
ISBN4-309-25507-8